鹿児島国際大学
社会福祉学会誌

ゆうかり 第11号

社会福祉学科創設30周年記念シンポ特集号

鹿児島国際大学社会福祉学会編集

2012（平成24）年３月17日発行

目　　次

巻頭言　社会福祉学会会長　天羽　浩一……3

2011年度社会福祉学会・自主研究助成による研究報告
高齢者の社会的孤立に関する一考察―鹿児島県枕崎市の高齢者生活実態調査から―
大学院福祉社会学研究科　鄧　俊……4
現代中国の医療保障制度に関する一考察
大学院福祉社会学研究科博士後期課程３年　陳　琨……7
“幸福”について考える
３年　○米良信吾，赤坂和紀，八郷有輝，七田竣介，大當剛史，
河原橋央嗣，安田賢明，西園浩郎，山下大樹……10
社会福祉士国家試験共通科目問題・解説研究　３年　田畑ゼミ……12

2011年度社会福祉学会自主研究助成成果報告会・レポート　１年　川路　隆太……17

社会福祉学科創設30周年記念シンポジウム・案内……19
社会福祉学科創設30周年に寄せて　鹿児島国際大学学長　瀬地山　敏……20
コーディネーター報告　社会福祉学科　崎原　秀樹……21
基調講演社会福祉学科創設の意義と期待　神戸山手大学学長　山本　賢治……23
報告　“自分を振り返る”ことで見えてくるもの
鹿児島国際大学学生課　池田　明広……28
報告　体験を通して学んだことや課題
特別養護老人ホームことぶき園　新川眞由美……33
シンポジウム参加記　３年　堂領　智美……38
当日の資料を読みながら，考えたこと
２年　福重沙也香，久保田里美，内村　翔，吉村亘平　３年　西牟田直人……39

2011年度鹿児島国際大学社会福祉学会主催シンポジウム
＜社会福祉学科に求められるものは何か―卒業生と，仕事や学生時代を語る―＞・案内
コーディネーター報告「人」―関わる，つながる―
社会福祉学科　鹿児島国際大学入試室　田平　和樹……41
報告　まわり道の先に見えるもの　studio HAMAYA　小村　真美……43
報告　手話通訳とつかず離れず　朝日生命姶良営業所　横溝　和恵……48
社会福祉学会シンポジウム参加記　３年　里山　衣純，上野　恵実……51

ソーシャルワーカーデー企画
東日本大震災をまえにソーシャルワークに問われること　天羽　浩一……54
シンポジウム参加記　３年　山下　正子……57
暗い。そして星がきれいだった―私の東日本大震災日乗　及川　和之……59
及川日乗の途中稿を聞きながら―新入生ゼミでの試み―……63

介護福祉コース創設10周年企画シンポジウム
『介護の魅力を発信する』に参加して～大学で介護を学ぶ意味と有効性を考える～
医療法人恒心会　おぐらリハビリテーション病院　川崎　信也……66

研究ノート　ソーシャルワーク・リサーチを学ぶ意味
福祉社会学研究科博士前期課程１年　長崎　徳子……68

レポート　ソーシャルワーク演習Ⅲ：雑談：実習で見えてきたことと課題
３年　富山　円，久保愛美，福留詩織　社会福祉学科　崎原秀樹……72

合格体験記（第６回）
やるっきゃない―私の福祉への道―　特別養護老人ホーム以和貴苑　堀田　真紀……81
見えない者の挑戦　南　明志……84

先輩たちは，今・ここで（第７回）
種子島で子どもたちと共に　鹿児島県立中種子養護学校　古田　友也……87
原点に立ち戻り，今を生きる　社会福祉法人たちばな会　福山学園　中馬　吉美……90
だからどういう考えなの？－思いつくまま筆を走らせて　ピア錦江湾　内木場　学……92
入学して初めて，将来のことを真剣に考えた
鹿児島国際大学総合企画室　大里　和博……96

鹿児島からの福祉・最前線（第４回）
視点が変われば…
社会福祉法人常緑会都城地域活動支援センター　オリオン　山元　克也……98

エッセイ
矛盾した不思議な感覚に魅了されて　１年　松木田智美……101
単位が足りない！！　１年　安楽　暢……103
無限の可能性を秘めた皆さんへ！　１年　新田　博之……105
濃く鮮やかに　２年　弓場　ちほ……110
ただいま息抜き模索中！　２年　古賀ひかり……111
そんなのを勉強して仕事につける？　２年　周　静……114
過去が変わった日，そして始まった大学生活　２年　向井　周一……118
通りがけに家を見たとき　２年　穂満　千草……121
同窓会で私の心の中に感じたもの！！　３年　浜田　武……122
事件は試験を受けている最中に起こった！！　３年　吉岡　正浩……125
ゼミで書かされたもんだから　３年　西牟田直人……127
ゼミは個性の集合体！！　３年　秦　明香音……129
市役所行くから，準備して！　３年　松永　拓也……131
日本年金機構での学外研修を通して　３年　前迫　美紀……132
日本と韓国の歴史をもっと知り肌で感じた９泊10日　４年　加治佐悠衣……134
国家試験旅行体験記　４年　川路　美紗……137

2011年度演習論文テーマ……141
社会福祉学会自主研究助成の募集……143
自主研究助成成果報告会・要項……144
社会福祉学会誌「ゆうかり」への寄稿のお願い……145
鹿児島国際大学社会福祉学会会則……146
2010年度鹿児島国際大学社会福祉学会・決算報告……148
編集後記……149

イラスト……三棹（鳥丸）みなみ　11p・47p・77p・80p・91p・97p・109p・117p・裏表紙
川路　美紗　83p・126p・130p・136p
写　真……中村　知見　86p・100p・102p・104p
題　字……栄田麻衣子

巻頭言

『ゆうかり』第11号発刊によせて

社会福祉学会長　天　羽　浩　一

卒業生のみなさんへ

2011年，３月11日午後２時46分，東北地方を襲った大地震，直後に発生した大津波そして福島原子力発電所で発生した大事故から１年が経ちました。まだこの災害（自然災害／人為災害）の全貌を把握することはできません。また被害の実態を受けとめられる状況にもありません。一方で昨年も自殺者が３万人を超えました。21世紀に入って以後毎年３万人を切ったことがありません。東日本大震災で亡くなった方々は２万人弱と推定されていますが，亡くなった人の数からいえば，毎年東日本大震災規模の被害が発生しているということになります。「かごしま路上生活者を支える会」の堀之内さんは「社会福祉特講Ⅲ」の講義の中で自殺を「小さな災害」と表現し，その小さな災害が折り重なり大きな災害となって現出していると語られていました。自殺は毎年発生している「大きな災害」であるというのです。

自殺は個人の心の問題に集約できるものではありません。このことはすでに19世紀の末，社会学者のデュルケームが「自殺論」で展開しているところです。ソーシャルワークの視点から観れば，自殺問題は社会の中で発生する人為災害と考えることが妥当でしょう。日本社会は抱えきれない大きな課題をいくつも背負いながら，明確な指標を持てずに迷走し続けています。

翻って，皆さんひとりひとりの個人状況はいかがでしょうか。すでに進路が決定し，福祉機関や企業での研修に入っているひと，まだ思うような進路先に出会えず求職中のひと，なお専門学校や大学院での学業を続けようというひと，それに何よりも国家試験に合格したひと，残念ながら届かなかったひと，希望に胸弾んでいるひと，不安が胸いっぱいのひと，悲喜こもごも，不安と希望が交錯しているというのが現状でしょう。

しかしどのような進路をとるにしろ「ソーシャルワークの精神」は皆さん方に生きる指針を用意してくれるものだと確信しています。「ソーシャルワーカーとしての人間力」を磨き続けていかれることを願っています。

『ゆうかり』11号について

本号で11号をむかえた『ゆうかり』をまず卒業生の皆様にお届けします。例年本誌は卒業式直前に刊行され，本誌をまず手に取るのは卒業生です。『ゆうかり』は社会福祉学会案内をとおして社会福祉学科をよく知ってもらう適切なパンフレットという領域から社会福祉学科年鑑の役割を持つようなボリュームへと質量ともにパワーアップしてきました。掲載原稿の内容は豊富化され，また本誌の執筆者も飛躍的に増加しており，社会福祉学科及び研究科の教員，学生が共に読み込んでいける親しみのある内容，それでいて本学会の目的である「学術研究を推進し，会員相互の学問的交流を促進する（社会福祉学会会則第２条)」という趣旨に沿った編集となってきました。

この間の『ゆうかり』パワーアップは社会福祉学会の運営委員を担われた学生・教員の皆さんの労によるところが多く，実りある収穫となったことに敬意を表したいと思います。

本誌の特集に社会福祉学科30周年記念講演とシンポジウムの記事が掲載されています。社会福祉学科の創設に中心的に関わってこられた山本賢治さん（現神戸山手大学学長）から創設にあたっての意義を踏まえた歴史的経緯，さらにその歴史を基盤に今後の社会福祉学科への期待が述べられました。本学科創設の意義は今もなお失われていません。また進みゆく超少子高齢社会を迎えるにあたって本学科の役割はさらに重要なものとなってくるでしょう。

最後に皆さんと一緒に卒業するはずであった熊谷晋さんの死を悼んで巻頭言の結びといたします。ご承知のように熊谷さんは2010年１月10日，交通事故により不慮の死に遭遇しました。３周忌となります。黙して冥福を祈りたいと思います。

研 究 報 告

高齢者の社会的孤立に関する一考察
－鹿児島県枕崎市の高齢者生活実態調査から－

鹿児島国際大学大学院福祉社会学研究科
鄧　俊

1. 研究目的

昨今，誰にも看取られず一定期間放置されるような悲惨な「孤立死（孤独死）」がマスコミで頻繁に取り上げられ，これまでになく社会的関心が寄せられている。少子高齢化の進展とともに，高齢者夫婦世帯と高齢者ひとり暮らし世帯が増加し，ひとりでの老後生活期間が長くなり，社会的孤立に陥る可能性が高くなると考えられる。こうしたなか，高齢者の日常的な生活実態の解明は，高齢者福祉の分野だけではなく，現代社会と福祉を考えるうえで避けて通れない，重要な研究課題の一つになっているように思われる。

社会的孤立とは何かについて，未だ明確に定義されていない。なお，孤独という関連概念をどのようにとらえるのかについても，様々な議論されている。河合（2009：14）は孤立問題を議論するにあたって，「本人が孤立状態を自覚しているか否か，また寂しさや孤独を感じているかどうかにかかわらず，客観的に孤立状態にあること，そしてその客観的生活実態を的確に把握すること」を重視すべきであると強調し，孤独と社会的孤立をさらに厳密に区別し，孤立状態を社会的孤立と定義した。河合は，孤独は個人の感覚であるとすれば，孤立は社会的ないしは制度的に作られたものであるとしている。ここでは，河合の定義に基づき，高齢者を取り巻く社会的ネットワークが客観的に欠如している状態を社会的孤立とする。

本研究では，配偶者や子どもや親戚などを含む家族ネットワーク，友人や近隣関係などを含む地域ネットワークの実態を検討したいと思う。これを手がかりとし，孤立問題の対応策，孤立高齢者への支援策に向けた若干の考察を行いたいと考える。

2. 研究の視点および方法

鹿児島県枕崎市在住の高齢者に対する個別インタビューをもとに調査票を作成し，枕崎市社会福祉協議会と共同でアンケート調査を実施した。アンケート調査は，民生委員が作成した高齢者のひとり暮らし世帯と夫婦世帯の名簿（合計4347人）から無作為に289人を抽出し，訪問面接を行ったものである。

調査日時は平成22年６月12日から14日および30日，回収数は155，回収率は53.6％であった。調査集計には，統計ソフト SPSS の Version16.0を使用した。

調査項目は，基本的属性のほか９項目を設定した。本研究では，社会的ネットワークに検討するために①家族，近隣とのつきあい，②孤立と信頼を取り上げ，分析を行った。分析の際，孤立に陥りかけていると想定される者も含めて検討するため，社会的ネットワークに関わる項目に対する回答を表１のように整理した。

表１　社会的孤立指標のカテゴリー

社会的ネットワーク	ある	なし
別居家族との連絡	よくとっている	よくとっていないがとっている＋ほとんどとっていない
近所付合い	親しく付き合っている	挨拶程度　＋ほとんど付合いはない
日常会話	誰かと話されない日は週３日以下	誰かと話されない日は週４日以上
近所に友人	２人以上	１人以下
緊急時頼れる人	２人以上	１人以下
家族援助	１つ以上	０
地域援助	１つ以上	０

また社会に対する信頼度では，以下の５項目をそれぞれ５件法で評定させ，その合計（25点）を算出して低信頼（16点以下），中信頼（17点－24点），高信頼（25点以上）の３群に分けた（表２）。

表２　社会に対する信頼度を測る５つの項目

１．ほとんどの人は基本的に信用できる。
２．私は人を信頼するほうである。
３．ほとんどの人は基本的に善良である。
４．ほとんどの人は他人を信用している。
５．ほとんどの人は信用できる。

３．研究結果および考察

平成22年６月30日現在，枕崎市の高齢化率は31.2％である（枕崎市市役所企画調整課）。本調査の対象者は男性59人（38.1％），女性96人（61.9％），平均年齢は76.1歳である。家族形態では「ひとり暮らし」65人（41.9％），「夫婦」83人（53.5％），「その他」７人（4.6％）となっている。

①緊密な社会的ネットワーク

全体としては，枕崎市において家族間の交流が多く，近所付合いも親しく行われており，家族や地域の相互扶助が盛んであるように見える。

具体的にみれば，別居家族との連絡においては「よくとっている」が77.0％となっている。これは，2010年に内閣府が実施した「平成22年度第７回高齢者の生活と意識に関する国際比較調査」での52％より２割以上高くなっている。近所付合いでは「親しく付き合っている」は74.3％だが，内閣府による「平成21年度高齢者の地域におけるライフスタイルに関する調査」での38.9％を２倍近く上回っている。なお，近くに友人がいるという者は88.2％，頼れる人がいるという者は85.7％であることから，多数の人とつながりを持っている者は少なくはないと推測できるだろう。

このように地域における緊密な社会的ネットワークは，家族の強い絆，多くの頼れる人や友人，低い孤独感という生活環境を作り出しているのではないかと考えられる。

②社会的孤立におちりやすい男性ひとり暮らし高齢者

男性ひとり暮らし高齢者では「別居家族と連絡なし」40.0％（女性25.5％），「近所付合いなし」73.3％（女性22.4％），「日常会話なし」31.3％（女性14.3％），「近くに友人なし」12.5％（女性10.2％），「頼れる人なし」31.3％（女性14.3％），「家族援助なし」「地域援助なし」同様に43.8％（女性それぞれ16.7％，14.6％）である。

このような地域のつながりが強い環境のなかで，男性ひとり暮らし高齢者世帯に限定してみると，地域とのかかわりが薄く，援助の手が差し伸べられず社会的孤立状態に置かれやすいことが浮かび上がってきた。

河合（2009：303）は，大都市における高齢者の社会的孤立問題は女性の問題と捉えていたが，男性の問題もみえてきたと指摘した。今回，枕崎のような地方中小都市の調査においても同様な傾向が示唆された。改めて，ADL および IADL いずれも自立度が低い傾向にある男性ひとり暮らし高齢者の社会的ネットワークづくりは，重要な課題であると考えられる。

③社会に対する信頼度と社会的ネットワーク

社会に対する信頼度と社会的ネットワークについては，高信頼群において「別居家族と連絡あり」85.5％（中信頼群82.5％，低信頼群60.5％），「近所付合いあり」92.9％（中信頼度73.4％，低信頼群59.1％），「日常会話あり」97.6％（中信頼群96.9％，低信頼群80.0％），「頼れる人がいる」90.5％（中信頼群90.8％，低信頼群75.6％），「家族援助あり」71.8％（中信頼群64.1％，低信頼群55.60％），「地域援助あり」76.9％（中信頼群65.6％，低信頼群40.0％）となっている。

すなわち，社会に対する信頼度が高いほど社会的ネットワークも広くなる傾向が窺われ，社会に対する高い信頼度は社会的ネットワークを形成する要因の一つになるのではないかと考えられる。

４．まとめと今後の課題

地域社会のつながりが脆弱化しているなかで，枕崎市の高齢者はある程度緊密な社会的ネットワークのなかで暮らしているように思われる。反面，男女別にかなり大きな差があり，とくに男性のひとり暮らし高齢者では社会的ネットワークへのつながりが希薄，すなわち社会的孤立状態が際

立っている。

これまで，地域において行政や地域住民による声かけや見守り活動などが行われてきている。しかし，これらの活動効果に性差があるとすれば，とくに男性ひとり暮らし高齢者に特化した支援策が，これまで以上に必要になってくるのではないだろう。

参考文献

河合（2009）『大都市のひとり暮らし高齢者と社会的孤立』法律文化社

内閣府（2010）「平成22年度第７回高齢者の生活と意識に関する国際比較調査」

内閣府（2009）「平成21年度高齢者の地域におけるライフスタイルに関する調査」

枕崎市（2009）「枕崎市老人保健福祉計画書＆介護保険事業計画書」

Townsent.p.（1957）The family life of old People: An inquiry in East London.Routeledge and Kegan Paul（=1974，山室周平監訳 『居宅老人の生活と親族網：戦後東ロンドンにおける実証的研究』垣内出版）

研 究 報 告

現代中国の医療保障制度に関する一考察

鹿児島国際大学大学院　福祉社会学研究科
博士後期課程３年　田畑ゼミ　陳　琨

１．研究の目的

近年，現行の医療制度にみられる医療費の伸び率は所得の伸び率を大幅に上回っており，「診療を受けることが難しく・医療費が高い」問題（以下,「看病難・看病貴」問題と略す）が深刻となった今日，中国では医療保障の水準の向上と共に，実効のある医療保障制度の整備が喫緊の課題となっている。

中国政府はこれまでの財政支出の中で医療支出の抑制と政府負担の軽減を主眼とした医療保険制度の失敗を認め，2009年４月に「医薬衛生体制改革の深化に関する意見」(中発［2009］６号）と「医薬衛生体制改革を重点に実施する方案（2009－2011年)」（国発［2009］12号）（以下,「新医改」と略す）をスタートさせた。今回の「新医改」は「以人為本（人間本位)」という政治理念の下で，医療衛生事業の公益性を取り戻すことと，都市部と農村部を問わず，すべての国民に基本的な医療サービスを受けられるようにすることを目標に行われた。

現代中国においては，都市部と農村部の二元社会構造が存在しており，都市住民と農村住民の間に医療保障格差が顕在化している。今後，全国民が公平に医療サービスを受けられるようにするには，都市部と農村部の経済格差，医療資源の不公平および各地域政府の財源調達のアンバランスを解消し，社会的セーフティネットの基盤を強化したうえで，公的医療保険を拡充すべきである。そのため，経済発展およびそれに伴う価値観の変化などの社会変動にあわせ，医療保険と医療機関をどのように組み合わせて実施するのか，その制度をどう改革するのかが重要な課題となっている。そこで，従来の医療保障制度はなぜ「看病難・看病貴」問題を解消できなかったのか，現政権が目指している「全民医療保障」体制は「看病難・看病貴」問題の解決にどのような役割を果たすのかという視点から，中国医療保障制度について考察してみたい。

２．中国医療保障制度における課題

現在中国は深刻な「格差社会」時代を迎えているが，これを医療保障の観点からみれば，貧困への転落リスクと医療格差の拡大という両面でクローズアップされている。現在中国は医療保障制度改革，それに続く医療機関体制改革，医薬分業に関する議論が行われている。しかし，経済発展重点モデルは社会に大きな矛盾を生み出しており，それは医療保障格差となって表出し，貧困層と社会的弱者が社会から排除されているのである。

計画経済期の中国において，政府は重工業の発展や資源不足の対応，都市部の社会安定等のために戸籍制度を作り上げ，政府のコントロールにより計画経済が推進された。このような戸籍制度は計画経済の産物として，都市部と農村部を分断させた「二元社会構造」を形成した。中国医療保障制度は戸籍制度による異なる機能を果たし，またその内容からいえば，戸籍制度の展開を前提として，それを政府が強制的に編成したものと捉えることができる。都市部と農村部の医療保障制度においても戸籍制度に相応しているため，都市部と農村部の住民間に多大な社会不平等を人為的に作り上げ，中国社会に広範かつ深刻な影響を与えていた。

2002年に開催した中国共産党第16期党大会で，胡錦濤が総書記に就任した。胡錦濤政権は，量的な経済発展から質的な経済発展へと戦略を転換し，「科学的発展観（調和のとれた科学的，持続可能な発展を促進することである)」の下での「和諧社会（「和諧」とは「和睦協調」を意味する)」を目標に掲げた。その背景には，鄧小平理論に基づく所得格差の拡大を容認する形での成長優先の経済発展政策の展開があった。とくに，中国は

2008年の国際金融危機下に，安定的な経済成長を促進させるため，国内需要とりわけ消費需要を拡大し，積極的な財政政策を実施している。しかし，中国における取り組みとその効果への評価・分析は，充分とはいえない。中央政府の役割や政府間関係の在り方，財政制度改革など，改めて問われるであろう。とくに，中国の国家財政は独特の構造を持っており，政治や経済等と深くかかわっている。

新中国の成立当初は，長期に及ぶ戦争の爪あとが色濃く残っていたため，インフレ状況や財政管理の分散，財政収支の不均衡などといった厳しい財政状況であった。当時の中央政府が財政の権限と分配に絶対的権力を持っていた時期には，中央政府の財政収支に対して厳格に管理され，各地方政府のすべての収入も中央政府に上納した。改革開放後，従来のように，中央政府と地方政府との間に独特の従属・支配関係が持続する反面，地方政府の財政支出の自主権の拡大により，地域間の財政の不均衡をもたらした。近年，中国の財政体制は従来の「国家分配」から「租税国家」に移行してき，財政収入と支出の構造においても大きな変化が見られる。しかし，中国政府は財政支出の中で医療衛生分野に対しての支出を抑制していた。

他方，1985年以降，中国政府は財政負担軽減と病院経営の立て直しを図るため，公立病院に対する財政予算を次第に減少させた。これにしたがって，公立病院は，改革開放以前の国家財政に依存する非営利的な組織から，企業のように利益を追求する営利組織へと変わった。ここで特に注目に値するのは，医療機関が診療価格や医薬品価格を決められることと，医師の所得と処方医薬品価格とを結びつけることが政府に認められたことである。それに加えて，中国では病院・薬局が一体となっているため，「過剰処方」や「過剰検査」が氾濫し，医療費高騰の一因となった。

こうした状況の下で，中国政府は「新医改」促進のため，2009年からの３年間で8,500億元の財政資金を投入することとなった。ところが，「新医改」では，公立病院を中心とする医療サービス供給体制を強化する一方，公立病院に対する補助金をどこまで投入するかが明らかになっていない。したがって，中国の医療サービス提供体制においては，医療保険制度改革を推進すると同時に，医療機関の役割分担を明確にし，公益性のある再構築を迫られている。

３．公平かつ効率的な医療システムの展望

中国医療保障制度は，ここ数年の改革により，ある程度の成果を収めたが，依然多くの課題が残っており，「全民医療保障」体制への構築が国内の緊急課題となった。とくに，2009年から政府は「看病難・看病貴」問題を重視し，「新医改」，「公立病院改革」および「社会保険法」の成立が次々に浮上してきた。しかし，依然として戸籍制度，強制加入形態，中央と地域の財源格差などから派生する問題点が克服されていない。

中国は，急速な経済発展に伴い生じた医療保障問題に対応する医療保障制度が如何にあるべきなのか，また，社会変動に如何に対応し制度の改革を行うべきか，などの重要な課題に対し，成熟した議論がないままに改革が推し進められてきた。また，その一連の改革の中には，衛生部，人力資源・社会保障部，財政部などの関連部門が改革の進行により，日本のように頻繁な法律の改正や制度の修正を何回も繰り返して行っていくことが何より大事である。さらに，その過程においては，政府の役割を十分に果たさなければならない。具体的には，医療保障の一元化の実現，医療分野への財源の確保，医療機関の内部管理・監督監査の強化，医薬分業の実施などである。また，低所得者や生活困窮者といった弱者の医療救助問題や，農村部の医療資源などのインフラ整備が急務であり，特に広大な農村住民の医療保障問題は，中央政府の財政投入や制度の整備など早急にしなければならない。つまり，現在の中国医療保障制度が，現実的には富裕層あるいは都市部しか機能しない選択的医療システムであるならば，真に国民の命と健康を守るための医療保障システムの再構築が急務である。

主要参考文献：

陳琨（2009）「中国社会保障素描－『戸籍制度』と医療制度－」『鹿児島国際大学大学院学術論集』Vol.1，109-112頁。

陳琨（2011）「中国医療制度における財源構造

と給付水準」『鹿児島国際大学大学院学術論集』Vol.2，37-46頁。
陳琨（2011）「『全面的小康』社会の構築と医療保障制度」『鹿児島国際大学大学院学術論集』Vol.3，53-57頁。
中華人民共和国衛生部ホームページ：
http://www.moh.gov.cn/publicfiles//business/htmlfiles/wsb/index.htm

研究報告

“幸福”について考える

３年　○米良信吾，赤坂和紀，八郷有輝，七田竣介，大當剛史
河原橋央嗣，安田賢明，西園浩郎，山下大樹

１．はじめに ～研究の目的～

われわれは“幸福”をどんな場合に感じるのか，そもそも“幸福”とはいったい何なのか等について，文献資料を収集，整理して考えてみることにした。

「福祉」について学びつつあるわれわれにとって，“幸福”は卑近な言葉である。「福祉」という用語が，「広義にとらえれば，幸福，しあわせと同義である」とされているからである。しかし，福祉の分野では「福祉ニーズ論」として，“幸福”，“しあわせ”の具体像を部分的に論じたり，生活保護基準と絡めて生活水準（金銭給付）レベルでの検討はされても，それ以上の論議はほとんどされてこなかった。また，社会福祉学の近接領域の心理学においても，“幸福”や“しあわせ”という問題は，「つい30年ほど前まで，研究に値するような現象とは見做されていなかった」（大石：2009）といわれる。さらに経済学の分野でも，「2002年に幸福の経済学の展望論文が発表され」（大竹他：2010），日本でもそれ以降，幸福についての研究が散見されるようになったとあるように最近の動きの中でのことである。

以上のような状況のため，“幸福”や“しあわせ”を正面切って学問的に論じることは意外と難しく思われたのであるが，ともかく，われわれは前年度のゼミの先輩（現４年次生）の取り組みを引き継ぎながら，“幸福”について広く，深く学んでいくことを自主研究のテーマとした。

２．研究方法

①幸福・不幸に関する文献資料を収集し，それらを分担して調べ，考えをまとめる。
②ゼミ・テキスト（大石繁宏（2009）『幸せを科学する』新曜社）をくり返し読み，基礎概念の学習を積む。
③メンバーで分担し，概要の紹介，批評を行う。
④検索，検討結果を報告書にまとめる。

３．結果

（１）“幸福”を考えるヒント／「文献書き抜き」の 作成

入手した“幸福”に関する文献９種（冊・編）をメンバーで手分けして読み，福祉の学習にとって「役立ちそうな箇所」，「気になる箇所」を適宜選択し，カードに転記していく作業を行った。その結果，第一次作業によって書き抜きカード120枚を作成し，その中からさらに40枚を選び，以下のような９つのカテゴリーに分類した。

①人はどんな場合に“幸せ”と感じるのか～“幸福”を規定する要因
②“幸福”になるための努力・営み
③“幸福”度に影響を及ぼす要因（ファクター）
④“幸福”と人生
⑤“幸福のパラドックス”とは
⑥不幸論～“不幸”に関する認識あれこれ
⑦日本人と“幸福”感
⑧きびしい社会・生活環境が似通う日本と韓国
⑨国や地域の“豊かさ”の評価方法・特徴

（２）作成レポート

［レポートＡ］米良信吾「幸福の考え方・論じられ方」

このレポートでは，“幸福”“しあわせ”になるための考え方や方法について，
・過去と現在との論じられ方の比較，
・「とらえ方を変える」ことで見つける，
・「しあわせ」の語源を探る，
などの視角から検討し，興味深く論じた。

［レポートＢ］大當剛史・八郷有輝「幸福につ

いて」

本レポートでは，“幸福”のパラドック，「幸福の経済学」など，近年急速に研究のすすんだテーマについて，つぎのような実証分析結果を丁寧に紹介をしている（「所得や富といった生活の客観的状況を良くすることは個人に何も影響していない」，「絶対的な所得よりもむしろ他人との所得との相対関係が幸福度に影響している」など）。

また，「都道府県別幸福度ランキング」では，トップが北陸３県（福井，富山，石川）であり，東京や大阪などの都心部は軒並み下位におさまったという結果であったこと，また「世界幸福度ランキング」ではデンマークなどの北欧諸国が最も幸せな国とされ，日本は中国，韓国とともに中位にランクされていることなども紹介されている。

４．まとめ

文献資料をもとに，「幸福・不幸」の見方，とらえ方について考察した。“幸福”“しあわせ”に関する実証的研究によって，近年，従来考えられてきたこと（予想・推論）とは異なる結果が得られていることを理解できた。

研 究 報 告

社会福祉士国家試験共通科目問題・解説研究

社会福祉学科３年　田畑ゼミ

１．研究目的

田畑ゼミは，「社会保障制度研究―所得・医療・介護」をテーマに，社会保障制度の基本テキストを読み，先進諸国の社会保障の動向を学びながら，わが国の社会保障制度の全体像の理解を努めるとともに，社会福祉士国家試験の過去問題の分析・検討を行っている。本年度はその一環として，社会福祉士国家試験の過去問を収集・検討し，国家試験の共通科目である「現代社会と福祉」「社会保障」「低所得者に対する支援と生活保護制度」の合計150問の解答・解説を行い，『社会福祉士国家試験共通科目模擬問題集』として発行することにした。

自主研究助成の申請はＡグループ（ゼミ生９名，代表山下正子），Ｂグループ（ゼミ生９名，代表村田ゆかり）の２つのグループで行ったが，その活動は下記の科目ごとの３班により進めた。本報告書ではそれらを全体にまとめることにした。

２．研究の流れ

１）目標の確認　２）資料収集　３）問題作成
４）解説　５）問題の見直し　６）解説の見直し
７）印刷・製本

◇各自の関心により各班に分かれ，それぞれが工夫しながら研究を進めることにした。

Ａ班「現代社会と福祉」
　　中島あかね・岩元孝次郎・松崎滉太・
　　宮薗真崇・朝日友望・江口希望
Ｂ班「社会保障」
　　村田ゆかり・内山恵吾・下園歩・
　　前迫美紀・町屋敷優子・川畑賢史
Ｃ班「低所得者に対する支援と生活保護制度」
　　汾陽沙里衣・二之宮有華・向井壽・
　　山下正子・中釜美紀・堂領智美

３．学んだこと

Ａ班「現代社会と福祉」

１）社会福祉に係る人物と事項

①日本

大林宗嗣……セツルメント研究者……『セツルメントの研究』
浅賀ふさ……わが国のＭＳＷの草分け……聖路加国際病院に社会事業部設置
賀川豊彦……キリスト教社会事業家……神戸新川のスラムでのセツルメント運動
岩崎武夫……身体障害者福祉法制定に尽力……日本盲人協会を設立
竹内愛二……アメリカの社会福祉方法論の導入……『ケース・ウォークの理論と実際』
大河内一男……社会政策学者……『わが国に於ける社会事業の現在及び将来』
糸賀一雄……戦後の知的障害児福祉・教育の実践者……「近江学園」創設
孝橋正一……社会事業（社会福祉）を理論化（孝橋理論）……『社会事業の基本問題』
岡村重夫……社会福祉の対象・機能・方法論を明らかにした……『社会福祉原論』
嶋田啓一郎……社会福祉研究者……『社会福祉体系論』

②外国

G.エスピン・アンデンセン……福祉国家の３類型論を提起……『福祉国家資本主義世界』
N.ジョンソン……福祉多元主義の研究者……『グローバリゼーシャンと福祉国家の変容』
Ｊ.ロールズ……アメリカの政治哲学者……『正義論』
D.ベル……アメリカの社会学者……『脱工業化社会の到来―社会予測の一つの試み』
Ｊ.ケインズ……イギリスの経済学者……『雇用・利子及び貨幣の一般論』
H.L.ウィレンスキー……福祉国家収斂説を

唱えた社会学者……『福祉国家と平等』
ムハマド・ユヌス……グラミン銀行総裁，経済学者……ノーベル平和賞受賞
A.ギデンス……イギリスの社会学者……『第３の道』
V.ペストフ……スウェーデンの政治経済学者……『福祉社会と市民民主主義』
U.ベック……ドイツの社会学者……『危険社会』

２）社会福祉法の構成

社会福祉法（1951年３月29日法律第45号）は，社会福祉について規定している法律である。旧法名は，社会福祉事業法（平成12年（2000年）法律第111号にて法名を改正）。

社会福祉に関するあらゆる事項の共通基礎概念を定めた法律で福祉六法に影響を与えることから1990年代に抜本的改革を迫られた。当時，福祉八法の一つとして数えられ，社会福祉学においては非常に重要な意味を持つ法律である。

・社会福祉の推進を目的とする法律
・社会福祉を目的とする事業・活動における共通項目を定めた法律
・社会福祉における日本政府及び地方公共団体の義務を定めた法律
・社会福祉に関わる事業（社会福祉事業）の種別や事業主体の制限（社会福祉法人）を定めた法律

３）社会福祉事業

①第一種社会福祉事業（原則として国や地方公共団体あるいは社会福祉法人が経営）

例＝生活保護法に規定する救護施設，更生施設その他生計困難者を無料又は定額は料金で入所させて生活の扶助を行うことを目的とする施設を経営する事業及び生計困難者に対して助葬を行う事業。

②第二種社会福祉事業（第一種社会福祉事業以外の社会福祉事業。経営主体は特に制限されていない）

例＝生活困難者に対して，その住居で衣食その他日常の生活必需品若しくはこれに要する金銭を与え，又は生活に関する相談に応ずる事業。

ただし，下記の事業は社会福祉事業ではない。

・更生保護事業
・実施期間が６月を超えない事業
・社団又は組合の行う事業であって，社員又は組合員のためにするもの
・常時保護を受ける者が，入所にあっては５人，その他にあっては20人に満たないもの
・社会福祉事業の助成を行うものであって，助成の金額が毎年度500万円に満たないもの又は助成を受ける事業数が毎年度50に満たないもの

Ｂ班「社会保障」

１）ドイツの社会保障

ドイツの社会保障制度は，1883年のビスマルクの疾病保険法に端を発するが，現在では年金保険，医療保険，労働災害保険，失業保険および介護保険の５つの社会保険制度と児童手当，社会扶助などがある。

社会保障制度とは社会全般の「連帯の原則」（Solidaritätsprinzip）に基づく連帯共同体（Solidargemeinschaft）を構成する法定義務保険の総体をさす。社会保険の法的根拠となるのは社会法典（Sozialgesetzbuch）である。

ドイツでは同業組合の相互扶助（特に鉱山業がその始まり）から発展した社会保障制度が非常に早い時期に導入されている。

◇医療保険（Krankenversicherung）1883年
◇業務災害保険（Unfallversichrung）1884年
◇老齢・障害保険
（Invaliden-und Altersversicherung）1889年
◇失業保険（Arbeitslosenversicherung）1927年

これら社会保険は労働，職務，訓練を行っている者，またしばしばその親族者を対象とするものである。恩給制度（Versorgung）のある官吏（Beamte）扱いの公務員および自営業者は原則的にその対象ではない。しかし，農家等経済的危険性の高い自営業者は社会保険の対象となる。

なお，わが国における最初の社会保険立法である健康保険法（1922年制定）は，上記医療保険（1883年制定）をモデルにしたもので，業務上・外を問わず，保険給付の対象とした。

２）年金のあらましと日本年金機構

①年金

国民年金の給付は，全国民を対象とする老齢基礎年金，障害基礎年金および遺族基礎年金と，第１号被保険者の独自給付である付加年金・寡婦年金・死亡一時金，そして短期在留の外国人を対象とする脱退一時金から構成されている。

老齢基礎年金は，1926（大正15）年４月２日以後生まれの者で，受給資格期間（保険料納付済期間と保険料免除期間の合算）が25年以上の者が65歳になったときに支給される（法26条）。老齢基礎年金は保険料納付済期間と保険料免除期間を合算して25年に満たない場合は支給されないが，さらに合算対象期間を合算して25年以上ある場合には支給される。

老齢厚生年金は，老齢基礎年金の受給資格期間（25年以上）を満たしている者が，65歳に達したときに老齢基礎年金に上乗せして支給される（法42条）。従って，老齢厚生年金には，独自の資格期間はない。老齢基礎年金の受給権があれば，厚生年金保険の被保険者期間がたとえ１ヵ月であっても，老齢厚生年金が支給されるのである。65歳支給の老齢厚生年金額は，報酬比例の年金額に加給年金額を加えた額である。

②日本年金機構

本ゼミが学外研修した日本年金機構は，公的年金業務の適正な運営と国民の信頼の確保を図るため，社会保険庁を廃止し，公的年金業務の運営を担う組織として2010年（平成22年）１月１日に発足した（実際の業務開始は同年１月４日）特殊法人である。同機構は役員及び職員の身分は公務員としないが，役職員は刑法その他の罰則については，「みなし公務員」規定が適用される。また，役員には兼職禁止義務が役職員には秘密保持義務が課される。 同機構は，日本年金機構法（平成19年法律第109号）の理念に基づき，お客様目線の業務運営をするために，運営方針及び人事方針を次のように定めている。

- お客様の立場に立った親切・迅速・正確で効率的なサービスの提供。
- お客様のご意見を業務に反映していくとともに，業務の成果などについて，わかりやすい情報公開の取組みを進める。
- 1,000人規模の民間会社経験者を採用するとともに，能力・実績本位の新たな人事方針を確立し，組織風土を変える。
- コンプライアンスの徹底，リスク管理の仕組みの構築など組織ガバナンスを確立する。

３）医療保険の給付

①健康保険の保険給付（法第52条）

健康保険の給付には，疾病または負傷に対する「療養の給付」として医療サービスそのものを給付する現物給付と，所得の保障として傷病手当金，出産手当金，出産育児一時金，療養費などの現金給付がある。これらの保険給付は，支給要件，給付の額が法律で定められており法定給付という。また，これに上乗せして，自らの裁量によって行う附加給付がある。附加給付を実施している医療保険としては，組合管掌健康保険，共済組合，国民健康保険組合がある。

②国民健康保険の給付

国民健康保険は，被用者保険の加入者以外の地域住民を対象とした医療保険制度である。被保険者の疾病，負傷，出産または死亡に関して必要な保険給付を行うことで，国民の保健の向上に寄与することを目的としている（法第１条，2条）。

保険給付は健康保険に準じており，健康保険制度の改正によって国民健康保険の給付内容も改正されている

保険給付の内容は，療養の給付，入院時食事療養費，入院時生活療養費，保険外併用療養費，療養費，訪問看護療養費，特別療養費，移送費，高額療養費および高額介護合算療養費等であり，特別療養費を除き健康保険と同様である。

特別療養費については，保険料滞納者に対する制裁措置に関連する給付である。すなわち，災害などの特別な事情がないにもかかわらず，長期にわたって保険料を滞納している世帯主に対して，被保険者証の返還を求めた上で，被保険者資格証明書が交付されることがあり，資格証明書が交付されると，医療費の全額をいったん負担し，後に支払った額のうち一部負担金を除いた額について，保険者から特別療養費の支給を受けることに

なる（法第54条の３）。また，出産育児一時金の支給および葬祭費（葬祭の給付）の支給について保険者は，「特別な理由がない限り」実施しなければならないとされ法定給付ではあるが，その内容は保険者が条例で定める。傷病手当金の支給は，条例又は規約の定めにより行うことができる任意給付である。国民健康保険組合の半数以上が実施しているが，市町村国民健康保険では全く行われていない。

Ｃ班「低所得者に対する支援と生活保護制度」

１）生活保護の原理・原則

生活保護の基本原理は，「生存権保障・国家責任の原理」「無差別平等の原理」「最低生活保障の原理」「補足性の原理」の４つである。このうちの補足性の原理は，公的扶助に特有の原理である。保護は生活に困窮する者が，その利用し得る資産，能力その他あらゆるものを，その最低限度の生活の維持のために活用することを要件として行われる。また，民法に定める扶養義務者の扶養及び他の法律に定める扶助は，すべてこの法律による保護に優先して行われなければならない。ただし，急迫した事由がある場合に，必要な保護を行うことを妨げるものではない。

生活保護の原則には，「申請保護の原則」「基準及び程度の原則」「必要即応の原則」「世帯単位の原則」がある。なお，申請については，旧生活保護法までは職権保護の建前をとってきたが，現行生活保護法では申請保護主義を採用し，「保護は，要保護者，その扶養義務者又はその他の同居の親族の申請に基づいて開始するものとする」とした。ただし，要保護者が急迫した状況にあるときは，保護の申請がなくても実施機関の職権により，必要な保護を行うことができる。なお，保護請求権は一身専属権とされているが，要保護者以外にも保護の請求権を認めているのは，要保護者の中には保護請求権を行使することのできない者が事実上少なくないので，申請権を要保護者だけに限定すると，この目的が達成されないおそれがあるからである。

２）実施体制

1997（平成９）年７月の第２次勧告では，福祉事務所をはじめとする社会福祉行政関連の措置機関，相談・判定機関の位置づけ，職員の配置などについてふれ，福祉事務所に関して法律による設置規制を廃止し，標準を定めるといった提言がなされた。

この線に沿って，1999（平成11）年７月，「地方分権の推進を図るための関係法律の整備等に関する法律」が制定され，2000（平成12）年４月より施行されている。

すなわち，従来の生活保護事務は，国の事務を地方公共団体に執行させる仕組みである機関委任事務であったが，それまで機関委任事務として実施されてきた生活保護の業務は，法定受託事務と自治事務にわけられることになった。生活保護に関わる業務のうち，主に保護の開始・廃止・停止の決定など主として最低生活保障にかかわる事務（生活保護法第84条の４別表）は，本来国が果たすべき役割であるが，地方公共団体が処理する，「法定受託事務（地方自治法第２条９項）」となった。そして，被保護者に対する指導・指示や相談，助言といった自立助長に関わる事務は，地方公共団体が処理する事務のうち，法定受託事務以外の「自治事務（地方自治法第２条８項）」となったのである。

したがって，この時の生活保護法の一部改正のポイントは，次の３点であった。

①保護の実施機関が要保護者の自立助長のための相談及び助言を行うことができる旨を規定した。

②国の普通地方公共団体に対する，または都道府県の市町村に対する指揮監督を廃止した。

③保護の実施機関が行う保護の決定及び実施に関わる事務を保護の実施機関が処理する法定受託事務とした。

３）生活福祉資金

生活福祉資金貸付制度は，低所得世帯などに対して，低利または無利子での資金の貸付を行うことにより，経済的自立や生活意欲の助長促進，在宅福祉や社会参加の促進を図り，その世帯の安定した生活を保障することを目的とした制度である。

貸付対象は，低所得世帯，高齢者世帯，障害者

世帯，失業者世帯であり，貸し付けを受けようとする者は，その世帯の居住地を担当する民生委員また市町村社会福祉協議会から（民生委員に申し込みを行った場合には市町村社会福祉協議会を経由して）都道府県社会福祉協議会に提出され，都道府県社会福祉協議会において貸し付けの決定を行うこととなる。生活福祉資金の種類は，総合支援資金，福祉資金，教育支援資金，不動産担保型生活資金がある。

まとめ

本年度の「社会福祉士国家試験共通科目問題・解説研究」は，十分な知識がないため難しい取り組みであった。しかし，これまで経験したことのない深い学びをすることができた。たとえば，日本年金機構の学外研修は年金問題の理解に役立ち，問題作成と解説は，これまで以上に共通科目の基礎的理解が深まった。本年１月，開催の研究報告「ポスターセッション」では，ピントはずれの解説をしてしまったところもあったので，最終的には各自が分担を決め，責任を持って改めて取り組むことにした。そのため『社会福祉士国家試験共通科目模擬問題集』の発行が大幅の遅れてしまったが，２月末には刊行する予定である。

参考文献

清水教恵ほか編著（2011）『よくわかる社会福祉の歴史』ミネルヴァ書房
厚生労働統計協会（2011）『国民の福祉の動向』
田畑洋一ほか編著（2011）『新社会福祉・社会保障』学文社

自主研究助成成果報告会・レポート

安眠を妨げられて，福祉の見方をかえる

１年　川　路　隆　太

１．はじめに

１月７日（土）

電話が鳴った。安眠が妨げられた昼下がり。ディスプレイを覗く。

「着信　崎原先生」…はっ！眠気が飛び電話に出る。

「もしもし！」やべぇ…俺何かしたかな？

「もしもし，国際大学の崎原です」知ってる。

「今回川路さんには自主研究助成成果報告会に参加して，ユーカリに載せるにレポートを書いていただきたいのですが」なんだ…そんなことか…

「あーはい。いつですか？」

「１月21日です」予定なし

「大丈夫ですよ？」

「では，お願いします」さぁ寝るか…

「はい。では失礼します。」

……ん？……しまった！断っておけばよかった！！！

１月21日（土）

501教室にて行われる。この報告会は今年で３回目であり，昨年は参加者30人程度と多くの参加があったらしい。私はあまり乗らない気持ちを引きずりながら参加した。

今年の参加人数は教員・学生・発表者すべて合わせて26人。前回に比べて少なすぎる…

事前に，ポスターセッションと呼ばれる壁に報告用のポスターを張り，説明を聞く側が聞きたい報告の所へ移動するというスタイルだということを聞いていた。しかし人数が少ないためか，各研究ごと順番に発表していくスタイルへ急遽変更がされた。

２．研究内容

報告を行う研究成果は全部で６件。田畑ゼミで３件，高木ゼミが１件，残り２件は大学院生の発表であった。田畑ゼミはＡ班が「現代社会と福祉」，Ｂ班が「社会保障」Ｃ班「低所得者に対する支援，生活保障制度」という３つのテーマについて調べ，社会福祉国家試験の独自問題を各50問制作するということを目標にしていた。高木ゼミの発表は「“幸福”について考える」というテーマで，幸せについて，９種の文献を用いてレポートＡ，Ｂを作成した。大学院生の発表は「中国の医療制度」と「高齢者の社会的孤立」についてだった。

各発表者は緊張と照れもあっただろうが，自分たちの報告内容を一生懸命伝えようとしており，質問に対しても，しっかりと答え，先生方の補足を交えながら発表は進んで行った。

私が印象に残った発表は幸せについての発表と中国の医療費制度についてだった。

「“幸福”について考える」では，昨年も研究が行われたテーマで，引き続き研究が行われた。幸福については，1980年頃から盛んに考えられるようになっており，それまで抽象的だった考え方を法律のように具体化させるようになってきた。

福祉の見方をかえるでは，幸福に関する９種の文献からメンバーが必要な部分をカードに転記し，それをカテゴリー別に分類するという作業が行われており，その時使用された文献が会場に用意されており，哲学や心理学，経済，地域や家族など様々な著書が置かれてあった。私も発表を聞きながら，幸せってなんだろうか考えたが，うまくまとまらなかった。

大学院の方の中国の医療費制度に関する発表では，日本以外の制度を勉強する機会はほとんどなく，勉強しても社会福祉の歴史で少しかじる程度でしかない。そのため，このような日本以外の制度についての発表はとても新鮮で興味深かった。国土は日本より大きく，人口は世界トップ。そんな中国の医療費制度は一定額は国が公費として出すが，それ以上は自己負担となり，また農村部と

都市部での病院の量，患者の受け入れの問題など経済発展をしても，様々な問題が残ると発表され，私は国の条件が違うため解決方法は違い，異なるニーズの問題があるが，根本の問題として福祉と金の問題には必ずぶつかるのだと思った。

３．感想

今回の研究成果を聞いて，幸福とは人々によって感じ方が違い，国によっても違う。そのため国独自の法律があり，それが枝分かれして様々な保障がなされているのだと思った。その保証も福祉の偉人たちやそれを支えた人々の歴史があったからで，福祉は人の歴史でこれからも人に合わせて変化していき，住みやすい暮らしを求めていくのだと，当たり前のことながら報告会全発表を通して再認識させられた。

４．おわりに

夜勤が控える土曜日。大切な休息時間を減らされてまでして，報告会への参加…服装は皆さまスーツ…浮いてるよ自分…ユーカリの写真と雰囲気違うし…気分は下がる一方のなか，始まる報告会。断ればよかったとつぶやいても時間は戻せない。聞いてみると，発表の内容は自分の知らないこと，知っていることが入り混じっており，知っていることにもプラス事項があり，さすが先輩と思う部分があった。各テーマの人たちが本気で調べたということが伝わってきて，臨んだ時のだらしない気持ちが恥ずかしくなった。

この報告会は発表者も含めて26人という少ない人数で聞くべきではないと思った。普通，報告会や講義では一つのテーマについて一人の講師が発表するというものが多い。しかし，この報告会は，一つの会場で多くのテーマがあり，多様な報告，様々な角度からの質問があり，多様な考え方が生まれる。そのため，もっと参加人数を増やし，多くの人に聞いてもらってこそ価値のあるものだと思った。

この場を借りて今回発表していただいた学生，大学院の方がた。報告会では大変ためになる発表ありがとうございました。この発表で考えたこと，発見したこと，学んだことすべてを大切にして今後の生活を幸せで充実したものにしていくにはどうしたらいいか考えていこうと思いました。本当にありがとうございました。

鹿児島国際大学
社会福祉学科創設30周年記念シンポジウムのご案内

鹿児島国際大学社会福祉学科は，1982年に創設されて以来，本年で30周年を迎えることになります。この間，4,000名余の多くの卒業生を輩出してまいりました。そして今，卒業生の多くは南九州の社会福祉の現場で利用者支援の専門的リーダーとして活躍しています。しかし，激動の連続であった30年の間の時代状況のもとで，社会福祉を専攻する学生も多様化し，往時の学生とは多くの点で異なります。このようななかで，社会福祉学科に何が求められているのでしょうか。

基調講演では社会福祉学科の創設の中心メンバーであられた元鹿児島経済大学社会学部長の山本賢治先生（現：神戸山手大学学長）をお招きし，社会福祉学科創設の意義と役割等をご講演いただき，シンポジウムでは活躍中の卒業生に，社会福祉学科の課題と可能性について語っていただき，大学としての社会福祉学科を展望したいと思います。

社会福祉学科学生・福祉社会学研究科の大学院生を主な対象としておりますが，鹿児島国際大学社会福祉学科卒業生のご参加も歓迎いたします。ぜひとも，お誘い合わせのうえ，おこしください。

日時　12月3日（土）　13：00～16：30
会場　鹿児島国際大学4号館411教室
内容
　あいさつ　天羽浩一（鹿児島国際大学教授・社会福祉学会会長）
　　黒木俊行（鹿児島国際大学福祉社会学部長）
　基調講演　13：10～14：20
　「社会福祉学科の創設の意義と期待」
　　山本賢治（神戸山手大学学長）
　シンポジウム14：30～16：30）
　「社会福祉学科に求められているもの」
　　池田明広（鹿児島国際大学学生課係長）
　　崎原秀樹（鹿児島国際大学准教授・学会機関誌「ゆうかり」編集担当）
　　新川眞由美（ことぶき園統括部長）
　　山本賢治（神戸山手大学学長）
◇交流会18：00（シンポジウム参加は無料。交流会参加は事務局に事前に申し込む。締切11月30日）
　会費　学生・院生・卒業生：1,000円，教員：3,000円
　場所　未定

主催　鹿児島国際大学社会福祉学会

〈事務局・問い合わせ先〉
〒891－0197　鹿児島市坂之上8－34－1　鹿児島国際大学内
田畑研究室 Tel：099－263－0618（直通）E-mail：ytabata@soc.iuk.ac.jp

社会福祉学科創設30周年記念シンポジウム

社会福祉学科創設30周年に寄せて

鹿児島国際大学学長　瀬地山　敏

社会福祉学科創設30周年おめでとうございます。昨年秋開かれた30周年記念シンポジウムに，わたくしも出席しました。30年前つまり1982年，経済学部だけの単科大学だったこの大学（鹿児島経済大学）に，社会福祉学科と産業社会学科（現在の現代社会学科）の２学科よりなる社会学部ができるのですが，その創設の具体的な経過を学びたかったからです。大学の70年史にそのときのことが記述されていても，経過を知るには簡略化された表現です。シンポジウムの基調講演をなさるのが，新学部創立の中心として活躍された山本賢治教授（神戸山手大学学長）ですから，聴き逃すわけにはいきません。神戸から足をお運びいただいた教授に，この場を借りて，お礼を申し上げます。

基調講演で学んだ重要なことのひとつは，新学部設置の基本的な理念です。高齢化・情報化・国際化の趨勢が鹿児島でも見られ，これに対応する人材育成が必要であり，経済学部だけでは地域の要請に応えられないという認識です。その頃鹿児島にいなかったせいもあり，わたくしは高齢化の趨勢については認知していませんでした。情報化・国際化の趨勢はさておくとして，地域の課題として高齢化を早くから認知されていたのは，すばらしい見通しであった，と考えます。この地域を知るようになり，高齢化の深刻さを理解したからです。

元旦の南日本新聞に，３面にわたって鹿児島県の一人暮らし高齢者の調査結果が掲載されました。この調査は，鹿児島市，南さつま市，南大隅町，喜界町の65歳以上の一人暮らし男女を対象に，南日本新聞と本学の高橋信行教授（地域福祉論）が共同して行われたものです。一人暮らし高齢者の49.6％が「孤独死」を身近に感じるという結果が出ています。この調査は暗い側面だけを明らかにしたのではありません。一人暮らし男女の社会的交流の調査です。 ふれあいサロン，お達者クラブへの参加は女性が多く，男性は奉仕活動・ボランティア活動に女性より関心を持っている。収入の少ない高齢者は孤独死を身近く感じているとはいえ，交流あるいはボランティア，つまり「共同」という形で社会性を取り戻していく可能性が示されています。

山本賢治教授は講演の中で，「異質性をのりこえた新しい共同性」，「共同性を媒介にした新しい公共性，その場所としての地域社会」を，崩壊する伝統的共同体（ゲマインシャフト）に代替するものとして考えておられるようです。高橋教授の調査からうかがえる「共同」も，それに相似な姿があるといえるのではないでしょうか。それだけではありません。経済学部地域創生学科の研究者たちの志向にも，同じように形成的な地域論があると考えます。こうしてわたくしにとっても，示唆に富んだシンポジウムでした。

着任して「社会福祉学会」という文字を初めて見たとき，この学会が教員と学生が共同で運営する機構であるとは知りませんでした。講演でこの機構が立命館大学の遺伝子を持つことを教わりました。学会の発展を祈念します。

コーディネーター報告

身体の内側から体験を辿り直す試みとして
―「雑談」の効用―

社会福祉学科　崎　原　秀　樹

１．はじめに：司会進行の自己紹介

社会福祉学科創設30周年記念シンポジウムの企画進行を仰せつかった崎原と申します。本学に入職して12年目になります。根っからの現場人間ですので，社会福祉学科という疑似コミュニティ（組織）に，構成員が重なる社会福祉学会というアソシエーション組織の機関誌「ゆうかり」編集の方向から関われないかと模索を始めて７年目の新参者です。学会運営委員会で他に適任の方がいるのではないかと異議を申し立てたところ，田畑先生から「何かあったら私が責任を取るからとにかくやりなさい」と言われました。

２．方法と内容

というわけで，社会福祉学科創設30周年記念シンポジウムといっても，その歴史を年表にして，それに関する蘊蓄をどうとかしたくありません。社会福祉学科の歴史について，体験者がその身体の内側から辿り直す作業を，皆さんにも耳を傾けて頂く中で，これから先の社会福祉学科の方向性やその方法の手がかりを得たいと企画しました。

２つの企画を用意しました。研修会や講座ではないので，講演や話題提供の後，テーマについての質疑や掘り下げた討論を行い，その上で会場の皆さんにも討論に参加できるようにゆったりとした時間構成にしました。

３．基調講演

前半13時10分～２時20分では山本先生から今後の社会福祉学科のかたちについて，社会福祉学科はかつてどのような状況や条件の中で誕生し，その営みを重ねてきたかとの関係で，方向付ける基調講演「社会福祉学科創設の意義と期待」をお願いしました。10分位は質疑応答に時間を割けるとよいかなと思っています。

４．シンポジウム

10分の休憩をはさんで後半は14時30分から16時20分まで「社会福祉学科にもとめられているものは何か」と題したシンポジウムを用意しました。本学卒業と同時に本学に入職した池田さんには，「カウンターの向こうからみた社会福祉学科」すなわち，学生時代と職員としての学生との関わりをふまえ，教員と共に学生とどのように関わり，先輩達とのつながりを含め学生に何を期待しているかについて，仕事と人生の方向性を見直そうと社会人入学した新川さんには，学生時代，新たな職場や家族との経験，それらが自らの仕事や実習生指導にどのようにつながり，今後の学生やその実習に何を期待するかについて各25～30分の話題提供をしてもらいます。話題提供を受けて山本先生にはシンポジウムのテーマの視点から指定討論をお願いします。崎原は３人のやりとりがテーマを浮き彫りにするような討論になるよう努力します。残り時間を見ながら会場にマイクを回し質疑応答や意見交換の時間にしたいと思います。

５．改めて，全体の構成と方法として

「社会福祉学科創設の意義と期待」という舞台の上で，各自の立ち位置から社会福祉学科の歴史の一部を担ってきた２人の話題提供，すなわち大学のある地域との関係でどのように学生時代を体験し，後輩との関わりを築き，社会福祉学科のかたちを描いてきたかを手がかりにして，社会福祉学科の今と今後について語り合える場になるように努力したいと思っています。16時20分過ぎには学会副会長の堂領智美さんにマイクを回したいのでご協力をお願いします。

それでは，山本先生，お願いします。‥‥

という感じで司会進行の挨拶は，用意した読み原稿を読み終えてひとまず壇を降りました。

６．当日の打ち合わせから－「雑談」の効用

11時からの423教室での打ち合わせには堂領さんも参加しました。山本先生の学科創設に向けての裏嘶では，紀伊国屋書店新宿本店の倉庫で棚から社会福祉系の専門書を片端から台車に載せるというか落としていく風景が目に浮かんできました。池田さんが山本先生の生活構造論の授業を受けていた話は，シンポジウムの際の挨拶，「僕の授業を受けていたと言うから何か話しづらいな」と冗談交じりの口調につながりました。

新川さんが社会人学生として入学する中で，現役で入った学生の輪に入る時や彼らと個人的に親しくなる時の話も最高でした。「何浪したんですか？大変でしたよね」に対する応答から一気に砕けたやりとりになった場面は笑い声まで聞こえてきそうでした。これも最近だと相手を傷つけてはいけないという空気の中で，互いに一歩踏み込んだ間柄になるのが難しくなっていると考えられます。

社会人学生が現役学生とキャンパスで肩を並べて話しながら歩くことから生まれる双方の体験の意味は，シンポジウムでの教育と労働の視点からの山本先生の指定討論につながっていきました。今でも授業２コマとゼミを持ち，学生と直接関わる立ち位置から考えるから，このような展開になるのでしょう。池田さんの学生との付き合いの中で，見えてきた学生気質の変遷と，新川さんの福祉現場での職場教育における先輩から後輩への伝え方などにも話題は広がっていきました。

神戸山手大学は街の中にあって，学生とそこをフィールドに社会調査をやれる半面，バイト先に困らない。そのためか４，５時間目が終わると学生があっという間にいなくなり，この時間帯に講座や講演会などの企画をやっても人が集まらなくて困っていると苦笑されていました。何やらこの後の基調講演やシンポジウムの参加者数にあたふたしている，こちらの気分を察した何気ない気遣いに嬉しいような悲しいような気持ちでした。

７．基調講演とシンポジウムの様子から

基調講演に対しては，学科創設後，数年して社会福祉士の養成が始まり，カリキュラムが盛り沢山になる中で，現場で働く人間に求められていることとのズレについて，どのように考えたらよいかという天羽先生の質問には，内容や項目について細かい縛りがあり，どこの大学の内容も似たり寄ったりになっている。しかし，方法に対する縛りはないので，そこでの工夫が一つの可能性として残されていると話されました。学生気質の変遷とコミュニティの視点から，学科開設当時の学生との関わりがどうであったかとの安達先生からも質問もありました。

シンポジウムでは，教育と労働の視点から指定討論があり，立ち位置が違うと同じ風景が違って見えること，そして違和感を大切にして体験を振り返ることの意味につながっていきました。蓑毛先生の関わった学生の話，鱒渕先生の教養教育と教養のあり方の質問についても，この論点の延長で話が広がり，時に深められる展開となりました。

学会副会長・堂領さんの最後の挨拶も，用意した原稿を読み上げる調子が，途中からシンポジウム後半のやりとりの中で，彼女が気になることばを織り込む内容に変化していきました。その論旨は，筆者が前述した内容と微妙に異なりながら，大きな意味では似ており，今回の企画のおおよその文脈の展開を感じることができました。411教室から廊下に出ると，ホッとひと息つけました。

８．おわりに：本特集のねらい

一昔前，UI（ユニバーシティ・アイデンティティ）ということばが流行りました。本学社会福祉学科とは何か，その創設の意義と期待を問い直す講演を舞台に，そこで学び遊び，各自の立ち位置で活躍する先輩と共に，今そして今後の鹿児島国際大学社会福祉学科と自分のかたちを考える題材にできないかと本特集を企画しました。

当日の雰囲気を感じることができるように，山本先生，池田さん，新川さん，堂領さんには読み原稿に当日のやりとりの内容や感じたことを含めて加筆して頂きました。また補講でこれらの資料の輪読を行い，その感想も掲載しました。皆さんにとっての「鹿児島国際大学社会福祉学科と私」を雑談する時のきっかけになれれば幸いです。

社会福祉学科創設30周年記念シンポ・基調講演

社会福祉学科創設の意義と期待

神戸山手大学学長　山　本　賢　治

１．講師と鹿児島経済大学との関わり

社会福祉学科創設30周年おめでとうございます。またこのような記念すべきときに講師としてお招きいただきありがとうございます。昨日九州新幹線で鹿児島中央駅に着きましたが，いきなり桜島の降灰の洗礼をうけました。今日は会場に懐かしい顔が拝見できますので，大変うれしく思います。

本題に入る前に私と鹿児島経済大学（現鹿児島国際大学）との関わりをお話しておきたいと思います。私が本学にお世話になりましたのは，1980年（昭和55年）４月から1999年（平成11年）３月までの19年間であります。当初本学に赴任したときは経済学部のみの単科大学で，私は一般教育の「社会学」を担当しながら，新学部設置準備委員として，文部科学省への申請書類の作成，カリキュラム，教員構成，図書整備，学生募集広報等の作業に従事しました。当時の大学設置基準では，学部新設の際図書の蔵書リストもチェックされましたので，社会学・社会福祉学関連図書を東京の紀伊国屋書店の倉庫まで行って，棚から次々とカートに本を放り込んでいったという，懐かしい思い出もあります。そして本学の退職時は社会学部長をつとめていました。現在小さな大学の学長をつとめておりますが，現在全国的に大学はたいへん厳しい状況にあると痛感しております。そんなわけで社会福祉学科が開設されたときと現在では，大学を取り巻く環境もずい分変化しており，またわが国の社会福祉の状況も大きな転換期にあると思います。

きょう私がお話しする中で，皆様とともに過去を振り返りつつ，鹿児島国際大学社会福祉学科とその卒業生の明日が輝かしいものになることを期待したいと思います。

２．鹿児島経済大学社会学部設置の経緯

ではまず社会学部（現福祉社会学部）設置の経緯からお話したいと思います。社会学部が設置されたのは1982年（昭和57年）ですが，設置の取り組みは1979年（昭和54年）から始まっています。まずなによりもこの年に学長として着任された野久尾徳美先生の果たされた貢献が大きかったことをあげねばなりません。野久尾先生は社会学と社会福祉がご専門で，前任校の立命館大学や，さらにその前任校である日本福祉大学などで学部や大学院の新増設に携わられたご経験を生かして，この鹿児島経済大学でも社会学・社会福祉に関わる学部設置の構想を計画されました。

そのさいの設置の理由として以下の三点があげられます。

一つは，高齢化・情報化・国際化という変化が，鹿児島県も含めてわが国の社会変動の趨勢となり，これに対応する人材育成が求められるという点であります。換言すれば経済学部だけでは地域の要請に応えきれないということです。ちなみに1979年というのは，わが国の65歳以上人口が１千万人をこえた年です。

二つは，当時経済学部の学生数が定員の２倍をこえており，国の高等教育計画および文部省の指導により，これを1.3倍までに下げなければならないという状況があったということです。これにそって新学部の増設が必要不可欠であったわけです。

三つは，本学創立50周年記念事業の柱として一層本学の発展を期すために新学部の設置が検討されたということです。

しかし新学部設置よりも既存学部の整備充実を優先すべきであるという意見が当時の経済学部教授会では多く，学内の意見を調整するのに相当な努力が必要でした。それでも粘り強い説明を重ねるうちに，何とか学内の合意も形成されることになりました。

さてどのような新学部を設置するのかという構想についてですが，おおむね次の三点を中心に検

討されました。第一に，地方大学の生き残る道として特色ある教育内容をもつ学科を考えること。第二に，既存の学部の基礎の上に立ち将来性のあるもの，第三に，地域における大学の専門分野を考慮すること。その結果として，当時中国・四国以西では社会学部がなかったこと，経済学部と関連性がある学科として産業社会学科が適切であるということ，地域のニーズと将来性から社会福祉学科が期待できることなどという考えにたどりつきました。そこで社会福祉学科と産業社会学科の各入学定員が120名ずつの社会学部が計画されたわけです。

こうして文部科学省に対して設置認可申請の作業に入ったわけですが，これに伴って，５号館の建設も始まりました。そして1982年（昭和57年）１月13日に第１回の入学式があり，社会学部１期生294名が入学しました。初年度の入試の状況を見ますと，志願者は推薦・一般を合わせてのべ700名を超え，うち県外からは約４分の１，また女子の志願者は1割程度と少なかったと記憶しています。当時鹿児島経済大学はまだまだ男子大学のイメージが強かったと思います。学科別では，当初７～８年志願者数はつねに社会福祉学科が産業社会学科を上回っていました。その後1989年から７～８年今度は産業社会学科が社会福祉学科を上回るようになりました。

なお社会学部開設時の設置理由としては，①社会的要請に適合する専門分野，②福祉の増進，③地域適正，の三点があげられ，とくに社会福祉学科においては，鹿児島県を中心とする南九州の社会福祉の現状，目標，及び広く西日本における社会福祉の分野で貢献しうる人材の養成を行い，地域社会の発展に寄与するとなっていました。またカリキュラムの特色としては，教育・医療・保健などの公共的サービスや社会保障・社会福祉事業，あるいはコミュニティづくりに従事する人材を養成するとともに，福祉の観点から経済活動に従事する産業人の育成も考慮するとなっていました。

教員構成についても，設置当初の社会福祉関係の専門教員についてみると，ＩＬＯ東京支局長を勤められた高橋武先生，国民生活センターにおられた小林節夫先生，厚生労働省におられた小林みちお先生など錚々たるメンバーがそろっていました。

私自身は地域社会学が専門なものですから，産業社会学科に属しつつも，地域福祉や高齢者福祉に関わって，当時の染谷先生，郷地先生，小窪先生，豊田先生，田畑先生，丸谷先生などと共同研究をしたことが，なつかしく思い出されます。地域調査で鹿児島県内もずい分あちこちと回りました。地域福祉では現在高橋信行先生がひじょうにご活躍とうかがっています。また鹿児島大学や鹿児島女子大学の先生とも共同研究をしました。あとでもふれますが，鹿児島には福祉研究の素材がごろごろところがっていましたので，研究課題はいくらでもあったわけです。鹿児島県は福祉研究には非常に適した地域であると思います。

３．福祉教育の転換期と卒業生の就職

さて学部設置後順調に社会福祉学科は発展していったわけですが，途中で一つの転機を迎えることになります。学部設立時に社会福祉学科に関わって取得できる資格といえば「社会福祉主事」という任用資格に限られていたのですが，1988年（学科開設後６年目）に「社会福祉士及び介護福祉士法」が施行され，社会福祉士国家試験の受験資格が付与できるように，カリキュラムを大幅に変え，かつ教員も増員することになりました。この社会福祉士対応の作業では高木先生などがずいぶんご尽力されました。また学部発足の翌年には養護学校教員養成課程が設置され，これについては蓑毛先生が中心になってご努力されました。

ところで学科はスタートしたものの，次に問題になるのが福祉の実習先の確保と，就職問題でした。幸い実習先の確保については，多くの福祉系の大学が困っていたにもかかわらず，本学では県の協力を全面的に得て，地域の各施設もひじょうに協力的で比較的スムーズにことが運びました。このことから福祉系の大学はやはり地域社会に支えられることがまず大事であると感じました。

就職問題については，1984～1987年度にかけて就職対策特別委員会を設けて，県内だけでなく九州の福祉施設を訪問し，求人開拓に努めました。その結果，社会福祉関係の求人件数も1986年度は39件だったのが，1992年度には126件にまで増加

しました。ただ困ったのは学生の地元志向が強く（約半数が県内希望），せっかく県外から求人があっても学生が応募しないという状況がありました。このため社会福祉関係の就職は当初数年間20～50名前後という状況でした。もっとも全体の就職率はほぼ100％に近い数字を得ることができました。

４．1982年10月発足の社会学会（現・社会福祉学会）と豊富な福祉に関する課題

開設時の話題としてもう一つ忘れてならないのは，学内学会としての社会学会（現在の社会福祉学会）のことであります。学部教員と学生の全員から構成される，全国でも特色のある組織をつくったということであります。これは立命館大学での先例に倣ったものですが，教員と学生を対等の立場として考え，会員相互の学問的交流と学生の主体的学習活動の進展を目的としており，各クラス・ゼミから学会学生委員を選出し，会報「ゆうかり」の発行，機関誌「ＹＡＭ」の発行，学会手帳の作成，新入生歓迎会，卒業パーティ，講演会等多彩な企画事業を行い，学内学会のなかった経済学部からもずい分とうらやましがられたものです。学会設立当初の委員長をつとめられたのは小林節夫先生でした。

ちなみにＹＡＭというのは英語でさつまいもという意味だそうですが，その1985年の創刊号に有名な阿部志郎先生の「新しい社会福祉を求めて」という講演記録が掲載されています。その中で阿部先生は，なぜ私たちにコミュニティはないのでしょうか，コミュニティを目指さない限り，新しい福祉をそこに見出すことはできない，という非常に示唆にとんだ指摘をしていらっしゃいます。

さて研究という面から見ますと，鹿児島というのは，さきほども申し上げたように，福祉の課題がいっぱい存在している地域です。全国有数の高齢化率であり，人口対の独居老人数や障害者数などは全国一です。そんな地域にある社会福祉学科ですから，周りの期待が，福祉の従事者養成だけでなく，地域の生活問題・福祉問題に目を向け，解決の方向を探ってゆくという地道な取り組みにも学科メンバーが力を入れてゆくことが求められていると思います。

５．福祉国家から福祉社会へ

次に昨今の社会福祉をめぐる状況に少しふれておきたいと思います。この大学の社会福祉学科は1982年４月にスタートしましたが，その前後からわが国の社会福祉施策のあり方に大きな変化が現れます。たとえばイギリスのサッチャー政権，アメリカのレーガン政権，日本の中曽根政権といった頃から新自由主義の潮流が大きくなり，福祉の大幅な見直し，効率のよい政府・小さな政府がうたわれ，福祉国家の危機がはじまります。わが国では1979年に「新経済社会７カ年計画」が発表され，「新しい福祉社会への道」を追求することになります。ここでいう「福祉社会」とは，「個人の自助努力と家庭及び社会の連帯の基礎の上に適正な公的福祉を形成するもの」とされています。つまり自助努力や民間活力が基礎とされ，その上に公的福祉が形成されるというもので，福祉国家の解体ともいうべき方向です。

本来市場原理の経済システムは，人間や自然を排除する傾向にありますが，国家という政治システムがこれを是正してきたわけであります。つまり市場原理によって生じる格差を所得再分配するのが国家の重要な役割の一つです。その機能を維持するためには当然租税の徴収が不可欠です。しかしグローバル化の進行は，租税負担の少ない国への資本移動をすすめ，租税負担の高い福祉国家は機能不全におちいることになります。

そこで福祉社会を考える際のキーワードとして，「公―私」の問題あるいは「公共性」という問題があります。

まず国家領域では，国民国家の衰退という現象が見られます。日本でも公共事業の破たんに見られるように，「日本型ケインズ主義」ともいえる土建福祉国家が限界に来ています。

次に市場領域では，グローバル化に伴って，ローカルな差異が失われ，その差異を市場メカニズムによる差異化的消費によってすりかえようとしていますが，市場から得られる満足を意味する「効用」がストレートに幸福に結びつくという信念はくずれつつあります。

そして市民社会領域では，コミュニティとアソシエーションとの連携，都市と農村の連携，異質性をのりこえた新しい共同性，共同性を媒介にし

た新しい公共性，その場所としての「地域社会」のクローズアップという状況が見られます。

そしてもう一つ，リスク社会への対応について述べておきます。これまでは富の生産と分配によって「富＞リスク」という対応をしてきましたが，生態系の破壊や核の脅威はこの方法では解決できないことをしめしています。そして何らかの「共同性」によってリスクに対応しようという方法については，家族・企業・地域社会等の伝統的共同体（ゲマインシャフト）的枠組みが解体してきています。そこで人は個人としてリスクに対応することになります。つまりリスク社会は人間の「個人化」という重大な変化をもたらします。こうした自己決定的な生き方は，一見自由に見えますが，同時に失敗は個人の選択の失敗として処理されます。自己決定は「しんどい生き方」であり，それゆえ市場への過度な依存を修正する必要があります。そうした時代にどんな社会福祉の在り方がもとめられるでしょうか。

６．福祉逆風の時代における地域社会と福祉系大学の役割

最後に「福祉逆風の時代」についてお話しておきたいと思います。福祉全体が「逆風」ともいえる環境下におかれ，福祉行政や福祉の現場に困難を作り出している昨今，それらの諸困難を解明しながら，福祉の現場にかかわっている人たちにエールを送るのが福祉系大学の責務であります。

しかし，平成19年コムスンが介護から撤退したように，訪問介護サービス事業に逆風が吹いています。経済不況も当分続きそうです。アメリカは「福祉から就労へ」の改革の名のもとに生活保護を５年で打ち切ろうとしています。日本でも全国知事会・市長会で同様なことが議論されています。

全国の福祉系学部の入学定員充足率も，2004年118％だったのが，2009年には90％と，30％近くも減少しました。また福祉労働には，いわゆる３Ｋのマイナスイメージがつきまとっています。たしかに労働の厳しさ，賃金の低さなど，処遇の改善が必要です。

そのためには，社会全体として福祉に対する価値観やイメージを転換する必要があります。現在福祉は，高齢化や年金問題に見られるように，どうも「コスト」の問題ばかりが議論され，共同性や公共性の問題が軽視されているように思えます。本来福祉は，人と人とが支えあう仕組みのことです。たとえば福祉意識の改革といった問題ですが，このことについて大学が果たす役割の大きさはいうまでもありません。また社会人教育として，シニア層の大学入学をもっとすすめるべきであると思います。さらには福祉関連領域である医療や教育との有機的連携を強化すべきであるとも思います。文部科学省と厚生労働省との連携も必要で，福祉系大学はこの両者にらみで苦労されていると思います。

そして最後に，さきほども申しあげたように，福祉系大学は地域社会に支えられるというのが基礎であると考えます。皆さんも鹿児島とともに，九州とともに，鹿児島国際大学社会福祉学科の仲間の輪を広げていっていただきたいと思います。

７．質疑応答

Ｑ．大学の教養教育の意義について

Ａ．高校時代の受け身的型枠教育ではなくて，大学では当たり前のことを当たり前と思わない「日常性批判」が大切です。そのことによって潜在能力が開花し，社会を生き抜くたくましい力に結びつきます。その日常性批判の力が教養教育の柱だと思います。そしてもう一つは，卒業後も「学ぶ姿勢」を持ち続けることであり，その姿勢の涵養において教養教育の果たす役割は大きいと思います。あえて言えば「市民教育」というのか，「市民」を育てることだと思います。

８．シンポジウムにおける指定討論

まず池田さん，新川さんのような立派な卒業生が社会福祉学科から育っていることをうれしく思うと同時に，後輩の今日会場に見えている学生さんたちにも，ぜひ池田さんや新川さんのような社会人になっていただくことを期待したいと思います。

さてお二人の話をあえてまとめてみますと，ポイントは二つあるように思います。一つは，福祉労働の在り方についてであり，二つは福祉教育の在り方についてです。

新川さんの話の中には，「学ぶ喜び」という言葉が何度も出てきました。鹿児島国際大学に社会人入学をして「学ぶ喜び」を知ったこと，そして職場ではさまざまな人との出会いの中から，「経験を通して学びとること」の大切さを強調されました。そのためには，福祉労働者が，日常の職場において，専門能力の向上や自らの充実感の向上といった，いわゆる福祉労働者自身の「発達」の保障が可能であることが大切になります。同じ経験をしても，そこから何かを学びとれる人とそうでない人がいます。そこに学びの力の差があります。学生のみなさんも今のうちにその学びの力をぜひ身につけておいてください。

池田さんの話は，現代学生気質が語られていると同時に，福祉教育は専門性だけでなく，人間教育でもあることを示唆されています。福祉教育は，社会福祉士取得のような資格教育が中心に語られる傾向にありますが，授業以外での人間教育も大切です。池田さんも授業以外で大切なものをたくさん学びとられたと思います。大学は，様々な異質性を持った学生や教員が出会うコミュニティであり，学生指導や学生支援もヒューマン・スケールでなければならないと思います。

そして池田さんが話された「大学生から社会人になった時の違和感」を大切にしてほしいと思います。

９．シンポジウムを終えて

まず30周年という社会福祉学科の歴史の中で，着実に有為の人材が育ってきていることをうれしく思いました。そしてこれからの社会福祉学科を展望すると，多くの困難もあるでしょうが，人と人とのネットワークを生かしながら，地域社会とともに歩みをすすめていってほしいと思います。そのネットワークというとき，学生・教員・卒業生を結びつける社会福祉学会の役割も大切だと思います。30年前，「今，南から新しい教育と研究の波を！」という清新の気風によって設立されたこの社会福祉学科がますます発展されることを祈念しています。

社会福祉学科創設30周年記念シンポジウム・シンポジスト報告

“自分を振り返る”ことで見えてくるもの

～「社会福祉学科に求められている（求めたい）もの」～

鹿児島国際大学学生課　池　田　明　広
1999（平成11）年３月卒業

１．はじめに

本日は，社会福祉学科創設30周年記念のシンポジウムにお招きいただきありがとうございます。話題提供をさせていただきます，本学学生課の池田です。

一応学科 OB なのですが，学生時代は一生懸命に福祉の勉強をしていたとは言い難い状況でした。そんな私が，このような記念すべき回に，ましてやシンポジストとして壇上でお話ししてよいものか若干の躊躇はありますが，稚拙ながらできる限りのお話をさせていただきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

まずは自己紹介を踏まえて，学生時代から就職後の今に至るまで，私が何をしてきたかをお話しさせていただきます。

２．自己紹介

平成11年３月に鹿児島経済大学社会学部社会福祉学科を卒業しました。ちなみに，経済大学は平成12年４月に国際大学へ，社会学部は平成13年４月に福祉社会学部へ改称されました。卒業後すぐに学校法人津曲学園職員に採用され，経済大学教務課に配属となりました。その後，総務課・学生課と異動し，今に至ります。現在社会人13年目です。

学生時代を振り返ってみますと，①中学校教諭になることを目標に教員免許取得（中学校社会・高校公民）に専念，②ゼミ担の蓑毛先生によくしていただき，多方面でたいへんお世話になる，③現在の合唱部の前身であるグリークラブ（男声合唱団）に所属し，指揮者を務める，④個人経営の小さな塾でアルバイト。中学校国語・社会を中心に担当，⑤先輩や後輩，アルバイト先の塾長などとよく飲みに繰り出すといった感じでした。

就職後，今に至るまでを振り返りますと，①教務課に８年在籍。実習センター開設前（開設は平成15年度）の４年間は実習業務を中心に担当。その後の４年間は，授業編成・計画業務を中心に教務業務を担当，②総務課に２年在籍。主に教授会関係の業務，学内の備品・リース物件の管理，私立大学等経常費補助金関係の業務，科学研究費補助金の経理事務を担当，③学生課は現在３年目。学生係長として学生係の業務〔学籍異動（休・退学等）・学友会関係・各種学生相談など〕を担当，④平成19年度から学友会混声合唱団（合唱部）の部長，⑤中学時代に合唱部に所属し，以後コーラスを続け，平成14年１月に気の合う仲間とついに自前の合唱団を立ち上げる，⑥現在は妻と息子（小１）の３人家族。妻は大学卒業後，主に宝飾関係・アパレル関係の仕事に就く。息子は小学校に通う傍ら，３つの習い事をこなすといった状況になります。

少々前置きが長くなりましたが，私が自身の過去を振り返った中で整理したことをお話しさせていただきました。前置きにこれだけの時間を割こうと思ったことには理由があります。タイトルにありますとおり，「自分を振り返る」ことで見えてくるものがみなさんそれぞれに必ずあるということをお伝えするのが私の今日の使命だと考えたからです。今，私の学生時代と就職後に何をしてきたかを紹介しましたが，みなさんもぜひ同様に振り返ってみてください。結構おもしろいものです。あの時の，あの出来事があって今の自分があるんだなぁと実感することがひとつやふたつ，必ずあるはずです。自分の過去を振り返ることは今からの自分を展望する大きな手掛かりになると考えています。そういう思いがあったからこそ，次

にお話しする，私が勝手に捏造した「話題提供者の使命」に行きつくわけです。

３．話題提供者としての使命

当初，私に与えられた使命は『カウンターの向こうから見た鹿国大社会福祉学科と学生について語る』でした。そうなのですが，先ほどお話ししたとおり，このお題をかなり歪曲させ，もはや捏造に近いのですが，『就職後の体験・知見から“自分を振り返ること”について語る』―このことを今回の使命と解釈しました。要は，私はみなさんに語れるようなことがこの程度のことしかなく，また，自分を振り返ることのおもしろさが，ちょっとした「マイブーム」なのです。その中で，次のようなことを考えるようになりました。

①学生時代の４年間は社会に飛び出す前のウォーミングアップ期間。学生は「原石」。いくらでも輝ける可能性を秘めている。輝くためにまずは自分を知ることから始めては⁉

②それに対し，われわれ教職員はどのような支援ができるのか？

以上の２点を手掛かりにしつつ，今から紹介する３つの項目（職員として学生に関わる中で，職員として教員に関わる中で，卒業生として社会福祉学科に関わる中で）を切り口に「カウンターの向こうから見た気付き」と括って持論を展開したいと思います。

４．カウンターの向こうから見た気付き

職員として学生に関わる中で振り返ってみますと，入職当初の戸惑いとして，①３月まで学生だったにも関わらず，４月には職員としての対応を迫られる。後輩（時には留年生の先輩・留年した同級生，浪人して入学してきた高校の同級生）に職員として対応しなければならない「違和感」，②大学に私服ではなく毎日スーツで来なければならない「不思議な感覚」，③無知がゆえに，学生や先生等からの質問や問い合わせに十分対応できない，④カウンターを挟んで外にいるのか，中にいるのかの目線の違いはたいへん大きく，学生の様子が良く見える。同じキャンパス内で過ごしていても，立場が異なればまるで「別世界」ということになりましょうか？

学生の多様化という視点からは，①これまで比較的「とおり一遍の対応」（全学生に対し共通の対応）で済んでいたが，「個々への対応」を考えなければならない機会が増えたように感じる，②学生対応に関し，総務課へ異動していた２年間のブランクは絶大，対応の「勘」が鈍り，たった２年間でも学生の気質は変化したと実感。たとえば，自らの義務を果たしていない「権利主義」の思想に偏った学生，「逆ギレ」する学生の存在，③個々への対応により「よい学生」と「悪い学生」の意識的顕在化が挙げられます。

よい学生というのは，明るい・素直・真面目・礼儀正しい・人なつこい等，悪い学生というのは無責任・軽率・高圧的な態度・注意力欠如等が俗に言う一般論ですが…学生に対して「よい」「悪い」のレッテルを貼り，分別をすること自体が学生と真剣に向き合っていないあらわれかもしれません。その上で「学生支援」と「学生指導」の垣根はどこなのか，ジレンマが生じてきます。このような問い自体が入職後，現在に至るまで解決できないテーマになります。おそらく今後も答えは出ないと思いますが…。

このような入職当初の戸惑いや学生の多様化を目の当たりにしたことで，学生が何を伝えたいのか把握し，可能な限り的確な返しをする技量が必要ではないかと感じるようになりました。その中で，私が学んだ参考になる基本の「かきくけこ」を紹介します。か→顔を見て，き→共感・うなずき，く→繰り返し，け→傾聴してから，こ→攻守交替（平成21年度　日本私立大学協会「学生生活指導主務者研修会」常磐会学園大学学生部長・准教授　佐谷力氏の講演より）。これは，私のような大学で学生対応をすることを職務にしている者だけに限らず，全ての人が日常生活で円滑な人間関係を気付くために有益であると自信を持ってお勧めできます。そして，学生時代に福祉の基本として学んだ，「受容・共感・傾聴」が「ラポール」に繋がるという概念を学び直す機会になりました。

次に職員として教員に関わる中で振り返ってみますと，教務課では教務部長つまり上司として蓑毛先生・高橋先生と，総務課では福祉社会学部長として高木先生と，学生課では学生委員として小窪先生，学生相談員として岡田先生と，全ての課では歴代の社会福祉学科長（野田先生・堀田先生・天羽先生…）と，社会福祉学会関係では平成19年頃から崎原先生と仕事上で関わりを持たせてもらってきました。

このような社会福祉学科教員との関わりを通じて見えてきたのは，まず“Tight and Loose”（厳しく・緩く）な関係により導かれる何かがあるような気がするということです。教員・職員それぞれがやるべき基本的な仕事の役割分担はありますが，その枠にとらわれず，気軽に話せる関係が必要なのかもしれません。時には冗談を言いながら，しかし真剣に議論する時もある…ケジメのある，メリハリのある関係性が理想であるような気がしています。一本気で仕事をするのではなく，「遊び」も必要だと考えます。

次に，野田現首相は組閣の際，自らの内閣を「ドジョウ内閣」と表現し，話題になりましたが，本学も「ドジョウ大学」でいいのではないかと思うようになりました。仕組みや制度，いわゆる「箱物」は他の先駆的な取り組みなどを模倣すれば素晴らしいものができます。しかし，その「箱物」が果たして本学の実情に即したもので，活性剤になるか否か，検討段階から十分に検証することが必要です。また，学生も含めた教員・職員との素晴らしい関わりはすぐには成し得ないと思っていますので，草の根的に個々と接する中で，時間をかけて信頼を築くことが，活気に満ちた大学を実現する道標になるのではないでしょうか。自治体においては，21世紀は「地方の時代」とも言われます。今の時代だからこそ，地方の小回りの利く大学だからこそできる「人間臭い」環境作りに取り組み，スケールの大きなことを言えば，人間味あふれる「地方大学の時代」の実現に本学が寄与してもいいような気がします。

最後に卒業生として，社会福祉学科との関わりを振り返りますと，本誌第８号（平成21年３月発行）に平成20年度社会福祉学会シンポジウムでコーディネーターを務めた際の報告と，「先輩たちは，今・ここで」に“随想～過去の私，今の私～”を寄稿させていただきました。その中で，『ゆうかり』は広義で「リベラル・アーツ」（教養）となり，「キャリアデザイン」（生活・人生の設計）に寄与するのではないかと考えるようになりました。

冒頭でも少し触れましたが，自分を振り返り，自分のルーツを見つめることは案外おもしろいものです。みなさんは自分のことは自分が良く知っているつもりでしょうが，知らないこと，むしろ気付いていないことも多いものです。何となくでもこれまでの自分を振り返ることに大きな意味があると感じています。このことは今からの自分を展望するヒントになるのではないかと思うようになりました。昨今有名になった言葉「キャリアデザイン」への第一歩だと感じます。私にこの気付きを与えてくれたのが社会福祉学会誌『ゆうかり』への寄稿でした。この部分については後のまとめで触れたいと思います。

また，『ゆうかり』の中身を眺めることで，「環境視点」に関心を持ち，大事にすることの重要さを考えるようになりました。「環境視点」とは，自分が身を置いている場の状況・雰囲気，周囲にいる人々の気質・特性などを指します。「環境視点への気付き」とまとめてしまうと，『ゆうかり』から直接私が感じ取った内容を随分と拡大解釈してしまうことにはなるのですが，この媒体は，その部分に気付くためのよいテキストになると思うのです。中身を眺めると，みなさんご存知のとおり，さまざま立場の方々が，それぞれの思いを文章でぶつけています。これらの文章を読むだけでも，異なる価値観を持った人々と交流することになるのではないかと感じます。私は，他者の意見や考え方を知ることが「環境視点」へ配慮できる人間へ成長する第一歩になると，勝手な自己完結の感は否めませんが，そう結論付けることにしました。端的に言えば，実社会で必要とされる「協調性」を鍛える一手段になると感じているということです。他者の意見・考えを自分なりにアレンジして，取り組むこともいいと思います。その中

での成功や挫折・葛藤も含めて，それらを繰り返すうちに，自身の志向や適性を知り，自分が将来輝ける場所を認知することになるのかもしれません。

５．結びに

これまで，とりとめのない話をしてきましたが，無理やりまとめてみたいと思います。

私の話を総括する中で，やはり「自分を振り返る」というキーワードは外せません。ここでは僭越ながら，本誌第８号に寄稿した私の文章を基に提案させてください。

１つめは自分を振り返ることはキャリアデザインの動機づけになるということです。つまり『過去を顧みた時，どのようにして今の自分があるのか分かってくる。そして，必ず「転機」がある。日々の出来事やその時の自分の思いが，たとえほんの一瞬のことであっても，その後の自分に大きな影響を与える要因になり得るかもしれない。そう考えれば，人生はドラマチックであり，面白みを感じる。私はこれまで平々凡々と過ごしてきたつもりだったが，原稿を書きながら過去を振り返ることにより，自身の意外な側面に気付くことができた。たまには，ボーッとしながら，自らの過去に思いを巡らすのも悪くはなさそうだ。』（ゆうかり第８号．45p）

２つめは「明日は明日の風が吹く」。これは１つめの振り返りを進める上での私の“座右の銘”です。『最後に蛇足。「明日は明日の風が吹く」―いい加減な人間の代名詞ともとれるが，私はこの言葉が大好きである。未来に何が起こるかなんて知る由もない，それならいっそ明日の風に身を任せればいい。悩みがあっても，遅かれ早かれ必ず解決への風が吹く。何かに行き詰った時，「明日の風」を信じ，吹かれてみてはどうだろうか。それが後々，己の「自信」へと導いてくれるような気がする。』（ゆうかり第８号．45p）

この２つのことから何を言いたいのか…簡単にお話しさせていただきます。

これまで散々述べてきましたとおり，自分を振り返ることによって思い出される自分の「経歴」があり，その中で「見えてくるもの」があります。それは，経験した「事実」もあるでしょうし，「知見」もあります。着目したいのは「見えてきた知見」です。知見は「自分に気付くこと」「自分を知ること」と言い換えることができると思います。これは自己分析への大きな足掛かりです。自分を知った上で，いろんなことにチャレンジしてみてはどうでしょうか。成功と失敗を繰り返しながら，自分に磨きをかけられると思います。その成功と失敗が後々の自信につながるような気がします。

そして，「明日は明日の風が吹く」―これはまさに蛇足です。しかし，実は今日みなさんに一番伝えたいことかもしれません。過去を振り返ることで，私の座右の銘「明日は明日の風が吹く」という精神が，幸か不幸か自分の中で正当化されてしまいました。振り返ってみると，これまた幸か不幸か，これまでの人生何とかなってしまっているのです。悩みがあっても，遅かれ早かれ解決への風が吹きます。特に学生時代は，勉強のこと，サークルのこと，アルバイトのこと，恋愛のこと…多くの面で楽しい半面，悩みを抱える機会も多いと思います。そんな時，即刻解決しようと無駄にもがくのを止めて，どっしり構えて「明日の風」が吹くのを待ってみるのもいいかもしれません。

最後に，社会福祉学科に求められていること，求めたいこととして，私に多くの気付きを与えた，社会福祉学会誌『ゆうかり』の存分な活用をお願いしたいと思います。同級生や先輩，卒業生あるいは教職員の報告やエッセイなどを読む中で，学生のみなさんは大なり小なり必ず何かを発見できるはずです。社会福祉学科におけるキャリア教育の一助となる媒体であると感じています。

学生のみなさんは『ゆうかり』を一読するだけでも経験できることではありますが，自身の知見にとらわれず，他者の意見・考えをたくさん聞く経験をしてください。そして，それらをよく吟味し，自分なりに消化してみてください。そのような，いわゆる他者との交流は，自身への刺激になりますし，将来を展望することに有益だと思っています。

もうひとつ，人から聞いたこと，言われたことを実践するだけでは力にならないということを念頭に置くべきであると思います。自分なりに考えてからの実践，つまり先にお話しした「吟味し，消化する」過程が欠落してしまうと，自分の今後の糧にはなり得ないということです。失敗も大いに結構ですが，必ず反省することを忘れないようにしてください。反省があって初めて，「失敗は成功の素」という言葉に繋がると思います。成功も失敗も，自分自身の経験値アップになることは間違いありません。

まとまりのない話で，十分な話題提供ができたかどうか不安は残っておりますが，以上で私に与えられた時間を終えることにします。山本先生のご講演にもありましたとおり，本学社会福祉学科は社会福祉の学府として，西日本有数の伝統を誇ります。23年９月現在で卒業生は4,193名です。ご承知のとおり，社会福祉現場を中心に多くのOB・OGが活躍されています。ちなみに本学には職員として15名弱の卒業生が勤務しています。今後の卒業生が社会福祉学科を巣立ち，卒業生に続いて各方面で活躍すること，また，社会福祉学科がますます発展することを祈念して結びといたします。ご清聴，ありがとうございました。

６．指定討論の中で

山本先生より，新川さんと私からの話題提供後に「労働」と「教育」の２つにポイントを絞った指定討論をいただきました。崎原先生のコーディネートのもと，フロアとやり取りをさせていただく中で，以下の点が見えてきました。

「労働」の観点からは，職場における「人と人との相互作用」や「協働」がキーワードとなり，労働をすることで否が応でも積極的に経験を積むことになる。しかし，同じ経験をしても，それを自分のものとしてつかみ取れる人とそうでない人がいる。これが「学びの力」の差として現れること，また，「教育」の観点からは，大学４年間は授業だけが学びの場ではない。授業以外の経験も生涯記憶に残るものである。広義で学び続けること，その中で生じた違和感を大切にし，日常的に疑問を持ちながら考えること―日常性批判が「生きる力」に繋がることが示唆されました。

これらの示唆は，日常における他者との交流やひとりよがりではない経験値アップなど，つまり，たとえ小規模でもコミュニティーの中で，ヒューマン・スケールで物事を捉えることの重要性に言及したものであったと感じています。

７．シンポジウムを終えて

社会福祉学科創設30周年，おめでとうございます。僭越ながら，今回シンポジストとして登壇させていただきました。私の話題提供がどの程度お役に立てたのか未知数ですが，またとないよい経験となりました。

シンポジウムに入る前，423教室で食事をしながら関係者で打ち合わせをしました。山本先生は本学にお勤めの頃とお変わりなく，終始にこやかに話をされ，その口調にかつて受講した生活構造論の光景が重なりました。新川さんは，現在お勤めの施設で責任ある立場にあっても現場主義を貫く，素晴らしい先輩であると感じました。崎原先生とは普段どおり“Tight and Loose”にお話させていただきました。このように，よい雰囲気のままシンポジウムへ臨ませていただけたことに感謝しております。

シンポジウムの内容については，関係された各々がお書きになっているとおりです。この『ゆうかり』の読み手のみなさんはどのような思いを抱かれるでしょうか？『ゆうかり』には自分の知見を広げるネタが満載です。自分を展望することに繋がる，心に響くような一節がきっとあると思います。面倒がらずに，感受性というアンテナを張り，ぜひ隅から隅まで読み込んではいかがでしょうか？

今回，シンポジウム全般の企画・運営に尽力された関係の先生方，および社会福祉学会副会長の堂領さん以下学生のみなさん，当日の音響設備を工面していただいた放送部のみなさん，その他の関係のみなさんへこの場をお借りし，お礼申しあげます。

社会福祉の学府として歴史と伝統ある本学社会福祉学科が，今後ますます発展されますことを切に願っております。この歴史と伝統のリレーの主軸になるのは在学生と教職員です！みなさんで学科を支え，盛り上げていきましょう！！

社会福祉学科創設30周年記念シンポジウム・シンポジスト報告

体験を通して学んだことや課題

―社会福祉学科に求められるもの―

特別養護老人ホーム　ことぶき園　新　川　眞由美
1997（平成９）年３月卒業

１．はじめに

社会人入学した新川と申します。私は卒業して14年になります。先日，田畑先生から学生に話しをして欲しいと連絡を受け，「できません」と即答したものの，先生や大学に恩返しできるチャンスでもあると考え，お話させていただくことにしました。

今日は，私の14年間を振り返り，体験を通して学んだことや課題を皆さんにお伝えすることで，福祉現場の現状を知り，考えるきっかけにしていただければと思います。

２．入学の動機

まず，本学社会福祉学科に進学した動機からお話しさせていただきます。

私は，35歳で社会人入学しました。それまでは，国立病院で看護師をしていました。自分で選んだ看護師の仕事を好きだと思っていましたが，ICU勤務が長く，命と向き合う日々は緊張の連続で，夢の中でも一生懸命働き，朝疲れ果てて起きる自分に気づきました。燃え尽き症候群になってしまう前に，周囲に心配をかけずに休養できる方法はないものかと考え，大学進学がベストだと判断し，看護婦の経験も活かせる社会福祉学科を選びました。

３．学生生活を振り返って

学生生活を振り返って見ますと，周囲からは「頑張っている人」と思われていたようですが，私にとって大学生としての４年間は，有意義な充電期間であり，「人生はやり直せる」ということを実感した穏やかな至福の時間でした。社会福祉士の資格取得を目指していたので，講義は楽しく，知識が増えていくことは喜びでもありました。しかし，講義の中には，大学生ではなく幼稚園生の集団ではないかと思えるほど私語が聞こえたり，学生の出入りが多いものがありました。居眠りする学生はじゃまにはなりませんが，私語は迷惑行為でした。学びの機会を自分で無駄にしている愚かな行為だと感じる反面，現役世代は勉強だけが学びではないし，今しか経験できないこともあるだろう，悪いことも経験してみなくてはわからないのだろうと，自分自身を納得させていました。

４年間の中で私が一番努力し，学んだと感じるのはゼミです。「対人援助の人間学」というテーマのゼミで，仲間との意見交換と先生のご指導により学べた事が援助者として生きる私の基盤づくりとなり，大変感謝しています。ゼミでの学びが，ややもすれば揺らぎそうな私の倫理観を修正し，今も頑張るよりどころとなっています。看護師の頃から，終末期を生きるということについて考える事が多かったので，実習は特別養護老人ホームを選び，就職はゼミの先生に紹介していただいた伊佐市大口の特別養護老人ホームに決め現在に至っています。

４．帰宅願望のある入所者への支援を通しての学び

生活相談員として働く中で，入所者から教えられてことや励まされたこと，癒されたこと，忘れられない出来事がたくさんあります。その中に，認知症がまだ痴呆と呼ばれ，行動障害を問題行動といっていた頃に出会った，帰宅願望のあるＭさんとの関わりがあります。

まだ大口の地理にも慣れない私の業務に，帰宅願望者への同行がありました。Ｍさんが「家に帰るよ」と言われたとき，「この方の家を知らない・・」と躊躇する私に，先輩は「この方が知っ

ているから，ついて行けば大丈夫」と送り出しました。Ｍさんの準備した荷物を持ち，２人で歩道のない道路を歩きます。怪我をさせないように緊張しながら歩いているうちに，Ｍさんは疲れたと道路に座り込んでしまいました。座って話しをしながら「誰か車に乗せてくれたらいいのにねー」と二人であたりを見回すと，見覚えのある車が近づいて来ました。私達を送り出した先輩が「どうしました？ことぶき園に帰りますけど，乗りますか？」と素知らぬ顔で話しかけました。Ｍさんは「うん。ありがたいねえ。一緒に帰るよ。」と喜んで乗り込まれ，到着すると「ただいま」と居室に戻って行かれました。

それから，晴れた日は毎日自宅へ帰るというＭさんと行動を共にするのが私の日課になりました。Ｍさんの「帰るよ，帰るよ」という声が聞こえると，私は準備した２人分の水筒とタオルをかかえ後を追いました。その行動は帰宅訓練となり，歩ける距離は徐々に伸び，とうとう自宅に到着する日が来ました。自宅に着くと玄関の鍵のありかを私に教え，家に上がると仏壇に線香を供え，家の中を一通り見回ります。その行動は，とても認知症とは思えませんでした。施設に帰ることに同意してくださるかなという不安を感じながら「帰りましょうか？」とたずねると案の定「僕はここに泊まるから，帰りなさい」と言われました。食事の支度が整わないことなどを一生懸命説明すると「そうだね。腹も減ったし，飯を食べに行くか」と同意して下さり，無事に迎えの車に乗ることができました。

その後も，Ｍさんが在籍されている間，自宅までの散歩は繰り返されました。Ｍさんは，私の名前を呼んでは下さいませんが，顔を覚えて「嬢ちゃん，今日も帰るよ」と声をかけて下さり，私が隣にいることを笑顔で受け入れて下さいました。自宅に向かう途中で出会う地域の方達は，「まー，帰ってこれたのね」「元気だった」「また帰っておいで」とＭさんに声かけしてくださり，同行している私に「ご苦労様，よろしくお願いしますね」と言ってくださいました。中には「もう少ししたら，私達もお世話になるからよろしく」といわれる方もいらっしゃいました。

現在も認知症の行動障害への対応に苦慮することは多いのですが，Ｍさんとの経験が私の対応の基準になっています。ご本人の思いを受容し，ごまかすのではなく，できることを考え，共にいる時間を大切にする。利用者の行動に振り回され右往左往しながらも，楽しく過ごされる笑顔に私自身も癒され，その方のためにできることを探す。認知症のために忘れてくださることがあることをありがたいと思うこともありました。援助関係は相互関係だといわれていますが，本当にそうだと実感しました。利用者は，援助者をよくみておられます。使う言葉一つで関係性は良くも悪くも変わり，言葉の奥にある思いさえも伝わります。利用者の言動は，援助者の働きかけへの結果であり，援助者の姿を現す鏡であると感じました。利用者の笑顔が欲しければ，自分自身が笑顔で接すること，信頼して欲しければ，自分が相手を信じて接すること，そんな当たり前のことが大切です。

Ｍさんを含め数名の方の帰宅支援を経験して，「自分の居場所」としての自宅への思いの深さ，家族への思いと共に過した大切な想い出，自分の思い通りに生きられないはがゆさ，あきらめ，それでも生き続ける強さなど様々なことを感じ，考えさせられました。生活の場とはいっても，多くの制限がある施設の生活で少しでも楽しく・笑顔になれる瞬間を支えたい，施設の中だけの援助で完結しなければ，地域の方にも施設を理解していただけると知りました。全ての入所者に対応できていない現実の中でも，できることを増やしていきたいと考えるようになったＭさんとの出会いは偶然ではなく，私が学ばせていただくための必然だったのだと思います。

５．家族の看取りを振り返って

職場での経験に限らず，私生活での体験も私にとっては援助者としての貴重な経験です。胃癌で６ヶ月間の在宅介護をした伯父と，心筋梗塞で１年間の在宅介護をした父の２人を看取りました。２人とも看護婦である私が医療行為を行ったので，利用した在宅サービスは福祉用具の貸与とホームヘルプサービスの入浴介助でした。この二人の介護と看取りの体験で，私は援助を受ける側である家族の立場や思いを理解し，職場で出会う

ご家族様たちの思いをよりイメージしやすくなり，容易に相手の立場になって考えることができるようになりました。そして，高齢者が在宅生活を続けるためには，キーパーソンとなる介護者を支える支援と夜間対応のサービスが欠かせないと思いました。実際に，平成18年度から地域密着型サービスの「夜間対応型訪問介護」も始まっています。しかし，職場のある伊佐市では，夜間対応型訪問介護を継続的に実施している実績はありません。夜間の利用を希望する利用者がいない，夜間勤務をするヘルパーさんがいないだけでなく，家の鍵を預けて夜間出入りしていただく為には信頼関係の確立も欠かせません。採算がとれない事業は組織としては動き出せない側面もあります。制度を上手く活用する地域と制度はあっても様々な理由により活用できない地域との地域間格差があります。特に田舎は，都会に比べると職員の確保も難しい現状があります。

平成12年に介護保険サービスが始まり，特養は在宅復帰を目指す介護保険施設となりました。しかし，実際には入所者が在宅復帰できるケースはほとんどありません。在宅サービスを使いながら自宅で生活を続けている方も，介護者が高齢になり在宅介護を支えられない，あるいは要介護者の要介護度が重度化し，最終的には施設入所を望まれるケースもあります。施設は，高齢者福祉の重要な役割を担っています。

６．利用者の権利を守る援助者の姿勢

つぎに，利用者の権利を守る援助者の姿勢として，施設における権利擁護と援助者自身の自己覚知についてお話させていただきます。

施設では多くの職種が協働して，一人一人の生活を支えています。それぞれの職種が自分の役割を果たすだけでなく，時には自分の役割を超えて求められる役割を果たさなければならないこともあります。生活相談員の業務は多岐にわたり，業務以外の様々な雑用もこなさなければならないし，職員の資質向上のためにリーダーシップを発揮することも期待されています。社会福祉士資格は，名称独占ではありますが，卒業時に資格を得たことは，私が専門職であると認めて意見を受け入れていただけた要因になったと思います。それが，私の役割を生活相談員から統括部長に変え，職員教育を担うことにも繋がりました。

人を援助する仕事を選ぶ人の多くが「誰かの役に立ちたい」という思いをもっています。援助して「ありがとう」という言葉をかけていただくだけで「よし，また頑張ろう」と思う方がたくさんいます。しかし，そう思う反面，業務が忙しくて自分に余裕がなくなると援助を受けている人の思いやつらさ，年長者に対する尊敬の念や人としての尊厳を保つこともどこかに忘れて子供扱いしたり，認知症だとわかっているのに叱ったりする人もいます。利用者のためという理由をつけて，実際は職員本位のケアをしていることもあります。そんな時は，多くの場合，職員本位のケアになっていることさえ気づいていません。そういう行動，つまり不適切なケアが「虐待」にも繋がる可能性があります。虐待をした事例が報道されると，特別悪い人のように受けとめがちですが，社会福祉の基本的な考え方を学んでいる私達も同じ過ちを犯す可能性があります。介護職員としての経験から始めた後輩が，理想と現実のギャップの中で業務を優先すると利用者の思いに寄り添えない，不適切な対応をしてしまう自分に悩んでいました。いけないとわかっているのに正しいと思うことができない自分を責めていました。自分の行動に気づくことができれば，改善することができます。しかし，これが「当たり前」と思い込むと不適切なケアが続きます。平成18年に「高齢者虐待防止法」が施行されましたが，未だに高齢者の尊厳は守られていない現実があり，福祉の現場では，プロであるはずの職員が，利用者の尊厳を侵している現状があるため権利擁護の研修が続けられています。

私は，利用者の権利を守ること・利用者本位のサービスを提供することを最優先に考えて行動してきたつもりでした。利用者の代弁者としての役割を果たすことは，信頼関係を確立することや職員の質の向上にもつながると考えているからです。介護保険が始まり，選ばれる施設になるためには，まず職員の意識を変えなければならないと考えていたので，施設の中で圧倒的多数を占める介護職員，特に「経験主義」だけでものをいう方に，私が大学で学んだ知識や価値観をきちんと伝

えることができれば，ケアは変わると思っていました。確かに，変わって来ました。同じ目標に向かって努力してくれる仲間も増えました。しかし，「正しいと信じることを言い続けよう」という強い思いがあったはずなのに，施設サービスの限界の中で私自身が妥協を繰り返し入所者に我慢を強いていることもあります。

未だに目標が達成できない一番大きな理由は，私がきちんと自己覚知できていなかったからです。私は利用者に対しては，受容・傾聴できるのですが，職員に対しては，お金をもらって働いているのだからもっと努力すべきでしょうと批判的な態度をとりがちで，相手の言葉を聴くことを怠っていました。しかも，良いところを褒めるのが苦手です。「飴とムチ」を上手に使えず，ムチばかりを使う傾向にありました。以前から，この傾向に気づいてはいましたが，変わることができませんでした。学ぶということは，行動が変わることであり，知っているだけでは何の意味もなく，行動が変わらなければ学んだことにならない。そう教えられ，他者にはそう伝えていたのに，自分はできていませんでした。

それを変えるきっかけになったのは，自分の病気と入院体験でした。痛みを我慢できなくてナースコールを鳴らしました。来てくださったのは，私の担当ではない看護師でした。痛み止めを要求する私に「わかりました」と病室を出ましたが，つぎに担当看護師が来たのは30分後でした。その30分間は私にとって地獄のような時間でした。やっと部屋に来た担当看護師に訴えながら，自分が泣いているのに気づきました。この時が援助を受ける人の気持ちが本当にわかったと同時に援助する側の思いも受容できた瞬間でした。自分の思いや弱さを他者に伝えることは大切なことです。援助を受ける人が自己主張することは，単なる我儘ではありません。本人にはきちんと理由があるのです。そして，援助者にもすぐに対応できなかった理由があります。私は，ひっきりなしにナースコールが鳴り看護師が一つ一つに対応をしていることを知っていました。援助を受ける人にも援助を提供する人にもそれぞれ「思い」があります。援助者にも思いを理解し，大変さを受けて止め，頑張りを支えてくれる存在が必要です。両者の思いを良く聞いて，改善できる方法を探すのが職場における私の役割だと納得しました。それから，職員に頭ごなしに要求して自分の考えを押しつけるのではなく，話しを聴き，一緒に考えて現場職員に決定してもらうことを心がけるようになりました。毎回きちんとできているとは言えませんが，専門職としての学びを続けることと他者との関わりを考え続け「認め上手」になることが，仕事を続ける私の課題です。対人援助の対象者は利用者だけではありません。ご家族，同僚等，あなたの周りの全ての人が対象となり得ます。

７．学生への希望と期待

つぎに，学生の皆さんへの希望と期待をお話させていただきます。

実習指導を担当していて，学生の皆さんには，何事もなく無事に過ごす実習ではなく，その人の世界に巻き込まれて一緒に悩み・苦しみ・共に喜ぶ体験をたくさんする実習時間であって欲しいと願っています。そして，その中で疑問を持ちながら感じ・考えて欲しい。さらに，失敗を恐れずに経験して欲しい。失敗から学ぶことはたくさんあります。心に残る失敗は，同じ失敗を繰り替えさない動機付けになると同時に，失敗して落ち込んでいる人の思いを共有して，励ますことのできる体験にもなります。私も失敗を経験してきました。そして，他者に助けてもらい，教えられてきました。日常生活の中で自分が人に助けられる・援助される経験をすることは，援助を必要とする人がいたとき，自分がどう関われば良いかを教えてくれる経験になります。全ての経験や人との関わりが自分を自分らしく成長させてくれます。無駄な経験はありません。経験が足りない分は，本を読むことでも補えます。本は，人の体験を自分の経験とすることのできる貴重な媒体です。自分を成長させるために，キーワードを探しながら読むこと，感じることが大切です。私は，学生時代より就職してからの方が本を読んで確認する行動が増えました。経験を通してしか学べないこともありますが，学生時代に学べることはしっかり学んで身につけておくほうが楽です。社会福祉士の資格も現役で取る方が楽です。働きながら資格取得するのは大変だったと後輩が教えてくれまし

た。

私の所属する組織には，私を含めて９名の卒業生がいます。後輩たちが増えてありがたいと思うことは，同じ考え方で意見交換ができ，進むべき方向が間違っていないことを確認できる仲間がいることです。１年目は指示されながら行動していますが，２年目には自分で動くことができ，３年目以降はそれぞれの職場の中心で，他職種と連携・協働しながら業務を担っています。自分で判断して動ける自律した存在として，皆それぞれに頼もしく成長していきます。仕事に対するおもしろみや楽しみ，つまりモチベーションは，自分で努力し一人一人が手に入れるものであり，悩み・苦しみながら問題や課題を解決したという達成感が人を成長させることに繋がっていると思います。

８．おわりに

私達社会福祉学科で学び卒業する者は，どんな現場であっても利用者の幸せな生活を目指して正しい判断のできる専門性と，時代と共に変わっていくニーズに対応して変化を支えきる役割があるのではないでしょうか。福祉の現場は，援助者を成長させてくれる場所でもあります。どんな職場も完璧ではないと思いますが，どのような状態にあっても，その職場に属する限り，よりよいケアの実現に向けて全力を尽くす姿勢を持ち続けることが大切です。皆さんが専門職として，謙虚な気持ちで，成長を目指して努力し続ける人になられることを期待しています。

９．シンポジウムを体験して

打ち合わせの時から，崎原先生のリードと関係者の皆様，山本先生・池田さんの和やかな雰囲気のおかげで，スムーズに参加でき緊張が薄れていきました。シンポジウム会場に入り役割を持ち準備している学生さんの姿を見て，自分の時間が学生時代に戻った感覚で山本先生の基調講演を聴かせていただきながら，まだ周囲が田んぼだった頃の鹿児島経済大学を思い出していました。

教育と労働の視点から指定討論を始められた山本先生の言葉を聞きながら「このように整理し，他者に問いかけるとわかりやすいのか。」と実感しました。池田さんの話された「違和感」を大切にして体験を振り返ることを考えたとき，私の頭に浮かんだのは実習生の姿でした。実習生の日常とは異なる施設という生活の場に身をおくことで，様々な疑問や違和感を持つはずだと想像しているのですが，実際には疑問や違和感が表現されることは少なく，当たり前のことのように全てを受け入れている様子に，私はもどかしさを感じていました。しかし，それは学ぶきっかけを与えられない私の問題でもあったのだと気づきました。

また，大学生にとっての教養を考えると，新しい知識に出会ったときに当然のことと思わないことが大切だというお話から，看護学校の教育主事が三歳児の「なぜ？」を例にしながら，疑問や好奇心を持ちながら学びなさいと話されたことがいつも私の頭にあったことを思い出しました。学びは生きる力の栄養を吸収していくことであり一生続くものであるということや自分と向き合うことの大切さを再確認しました。

社会福祉学科30周年という節目に参加させていただき，貴重な体験をさせていただいたことに感謝いたしますと共に，社会福祉学科のますますの発展をお祈りいたします。

社会福祉学科創設30周年記念シンジウム・参加記

シンポジウムを聞いて

３年　堂　領　智　美

社会福祉学科の歴史に触れて

社会福祉学科が創設されて30周年になるということを知り，ある種の感動を覚えました。当時，社会福祉学科の創設にご尽力いただいた山本先生の基調講演，先輩たちによるシンポジウムでのお話を聞き，多くのことを学びました。

正直なところ，私は社会福祉学科の創設の歴史等を考えたことはなく，社会福祉学科があるのが当たり前なのだという考えを持っていました。しかし，山本先生のお話を聞き，多くの先生方や地域の方々の協力があって創設されたこと，また大きな希望と期待を持って創設されたということを知り，「今私たちが学ぶことができていることに感謝しなくてはいけない」と強く感じました。同時に，30年という長い歴史のある社会福祉学科の一員として学べることをとても誇りに思いました。鹿児島国際大学社会福祉学科の社会福祉士国家試験合格率は，全国的にも高いと言われています。この先輩方がつくってこられた功績を引き継ぎ，現役で合格するためにも日々の講義や学習を大切に，仲間と協力し合って頑張っていきたいと思います。

違和感や疑問などの『気づき』を持つこと

私は今までの自分自身を振り返り，高校時代に勉強してきたことが今あまり生かせていないことや，アルバイトをしていた頃，その日につかれが取れず次の日の講義にあまり集中して取り組めなかったことなどを思い出しました。「意味のないことをしていたのかなぁ」「時間がもったいなかったのかなぁ」とマイナス面ばかりを考え，落ち込んでしまうことが多くありました。しかし講師の先生方の「なんでもないような日々の出来事がその後の自分に影響を与えるきっかけになる」「すべての経験や人との関わりは自分を成長させてくれるものであり，無駄な経験はないのだ」というお話を聞き，とても励まされました。

アルバイトをすることにより自分のなかでどこかで甘えが生まれ，学習をおろそかにしていたこともあるかもしれません。しかし，アルバイトによりお金を頂くということがどれほど大変なことなのか知ることができ，また学校とは違う新たな人々との出会いのなかで学ぶことや知ることも多く，自分自身成長できたと感じる出会いになりました。失敗したことばかりではなく，それによって得たことについて知ることで自分自身について知ること，またどのような環境や状況でも違和感や疑問などの『気づき』を持つことを忘れずに，これからにつなげていくということがとても大事なのだと感じました。

社会福祉学会という財産の継承に向けて

現在，私は副会長として社会福祉学会に関わりを持つようになりましたが，この学会は1982年10月に学内学会としての社会学会（現社会福祉学科）として誕生しました。学部教員と学生の全員から構成される「教員と学生が対等の立場である組織」というのは設立当初は全国でも特色のある組織であったようです。確かにいつもは教えて頂いている立場である私たちが，先生たちと「対等の立場」に立ち，学会の運営や社会福祉についての学びを深めていくことのできるこの学会はとても画期的で先進的な会だと思います。社会福祉学科に関わるすべての方々により築かれてきたこの学会は，社会福祉学科の一つの財産であると感じました。これからも今まで築かれてきたこの社会福祉学会をより発展していけるよう学生の皆さんと協力して頑張っていきたいと思います。

最後に山本先生をはじめ講師の先生方，参加された皆様に感謝申し上げます。とても有意義なシンポジウムになったと思います。ありがとうございました。

当日の資料を読みながら，考えたことなど

２年 福重沙也香　久保田里美　内村　翔　吉村亘平　３年 西牟田直人

２年　福重　沙也佳

鹿児島国際大学に社会福祉学科が設置されるまで，どのような歴史があったのか，またいろんな先生方の力で出来上がった学科だということがわかった。今回の資料を読んで，印象に残った文があった。それは，新川さんの帰宅願望のある入所者への支援を通しての学びについてである。相手が認知症，または他の障害をもっていても本人の気持ちを受容し，相手の障害に対する理解を深めるのもとても大事だが，まずは一緒に同じ時間を過ごしその時間を大切にすることに納得させられた。いくら障害に対する知識をもっていても，相手とのコミュニケーションは知識だけでは得ることができない。新川さんの「利用者への笑顔が欲しければ，自分自身が笑顔で接すること，信頼して欲しければ，自分が相手を信じて接すること」という言葉を忘れずに，これからも社会福祉の勉強を進めたいと思う。

２年　久保田　里美

今回の講義で一番頭に残った内容は，新川さんの入所者への支援を通しての学びというものだった。「受容」という言葉の意味をやっと理解できた。本人の希望にそえないからそこで終わりではなく，希望にそえるように援助者がそれなりに努力していくこと。苦労もたくさんするかもしれないが，その分，クライエントさんの笑顔がみることができた時，ほんとうに嬉しいと思う。まずは，相手を信じること。それが大切なんだなぁと思った。まずは，普段の生活から人を信じること。努力していこうと思った。

２年　内村　翔

今回の授業で読んだ「自分の病気と入院体験」の話で実際に自分が入院してみて初めて援助を「受ける」立場の思いを自ら感じることができたと書いてありました。その文を読んで，普段自分が誰かを援助しようと思い，行動する際に相手の援助される側の気持ちや思いもちゃんと頭に入れながら行動できているのか不安になりました。援助される人と全く同じような状態になることはできないので，そのように利用者の内面的な部分にもしっかりと目を向け，想像することが大切なのだと思いました。

２年　吉村　亘平

シンポジウムの資料を読み，様々な先生方がかかわっていた社会福祉学科創設の経緯を知った。事例も聞き，認知症の利用者の援助の仕方，信頼関係の大切さを知ることができた。利用者の言動は，援助者の働きかけへの結果であり，援助者の姿を現す鏡であるという言葉は，すごくいいものだと思った。自分が笑顔でいたら相手も笑顔でいてくれて，信頼関係ができるのかと思った。まだ社会福祉というものを詳しく知らない自分にとって新たな発見や見方ができるようになったと思う。

３年　西牟田　直人

率直な感想は，「生の話」を聞けたこと。学生課勤務の池田さんはカウンターの向こうから見た社会福祉学科と学生について話した。３月までの学生が４月から職員として学生に対応する「違和感」から始まり，学生の気質が変化し，自分に与えられた義務は果たさずに権利だけを主張する学生や「逆ギレ」する学生が出てきたことなどを例に挙げ，これまでの自分を振り返ることにより見えてくるものや「ゆうかり」を読んで得ることのできる他者の意見・考えの有益性などを話した。

大学やその他で何をどのように取り込み，どう活かしていくか。それをプラスにするかマイナスにするかは自分次第なんだと考える良い機会になった。

2011年鹿児島国際大学社会福祉学会シンポジウム

□主催　鹿児島国際大学社会福祉学会

□テーマ：社会福祉学科に求められるものは何か？

―先輩と、仕事と学生時代を語る

□日時　2011年７月16日（土）13：30～17：00

（15：50～17：00は茶話会）

□場所　＊510教室＊

○コーディネータ　田平和樹（鹿児島国際大学入試室）

○シンポジスト　横溝和恵（朝日生命始良営業所）
小村真美（*studio HAMAYA*）

１年９組　川野　美佐子

コーディネーター報告

「人」－関わる，つながる－社会福祉学科

鹿児島国際大学入試室
田　平　和　樹
1992（平成４）年３月卒業

１．はじめに

2011年７月16日(土)に社会福祉学会シンポジウムが開催された。テーマは「社会福祉学科に求められるものは何か？―先輩と，仕事と学生時代を語る」であった。この壮大なテーマのもと，コーディネーターがうまく務まるかなどと逡巡しつつも，そこはそれ，シンポジストも自分自身も社会福祉学科の卒業生。「先輩・後輩」でどうにかなるだろうなどと思いながらの担当引き受けでもあった。そこに社会福祉学科崎原先生の熱意と見事な交渉術があったのはいうまでもない。

そんな中，徐々にシンポジウムが近付いてきた頃，２人の原稿にふれる機会があった。そこで感じたのは，２人が「似ている」部分を持っているということ。どこが「似ている」かというと，人や世間との関わりの中で，時に強く，時に悩んで過ごされてきたということ，それが今を支えているということ。実は，この時期になっても大役をうまくこなせるか？などと考えたりもしていた自分にとって，２人の言葉を読み進める中で，どうにか「つながっていける（…かも）」と感触を得たところであった。

２．２人の卒業生

シンポジウム当日は，まさしく夏，会場は５号館510教室。社会福祉学科の講義が多く行われてきた教室でもあり，いざ会場に入ると20年ほど前にも似た何かが甦ってきたりもした。

１）横溝和恵さん

横溝さんは，平成４年卒。ひまわり同好会への入部が手話と関わるきっかけ。手話の講習会に参加されたりしながら，人との交わりが増え，徐々に活動の範囲が拡大。学生時代から手話通訳を担うほどに。そして就職。鹿児島県身体障害者福祉協会。仕事上の関わりや，仕事以外でも手話講習会，手話サークル，研修会や大会などを通じて，さらに世間や地域の広さを実感。手話の学習方法が確立されていない時代，本の購入や研修に行く費用までを換算すると相当なお金に。でもそれは，全て自分の財産として力にもなっているとのこと。この後，結婚を機に一旦，県外に出られるも再び鹿児島へ。

鹿児島に戻られてからのラーメン店開業や社会保険事務所の臨時職員，県職員の産休代替等の話。ご本人からも説明があったように「マグロ体質」。どの場面でも休んでいる絵が浮かんでこない。その後，手話活動で生計を試みたりするが，そんな中，現在の勤め先へ。人生の選択肢にはないはずだった営業職。でもそれが，手話との関わりには，ありがたい職場であること。横溝さんは，やってみて初めてわかること，いろんな見方ができるようになること，高い勉強代を払ったと思うことなど…，そのどれも人とのつながりが大切だということ。自分に合う人ばかりではないが，たくさん人がいれば，それが当たり前。

福祉の仕事に携わるにせよ，他の仕事に携わるにせよ，生きていくには人との関わり・交わりが大事。面倒なこと，嫌なこともたくさんあるが，人と関わることは楽しいこともたくさんある。「人との関わりを面倒くさいと思わなくなって欲しい。」というメッセージであった。

２）小村真美さん

小村さんは，平成15年卒。大学入学前に障害者とのふれあいキャンプに参加。その縁あって，そよかぜへ入部。大学時代はサークル活動に一生懸命。しかし，人間関係や自分の思い描いた大学生活とのギャップに悩む時も。卒業後は，学生時代からのアルバイトを続けるも，フルタイムでの雑

貨屋へ転職。しかしながら，頑張り過ぎてリタイヤ。数ヵ月後，再び派遣の営業や短期のアルバイト。その後，洋服屋等の職を経て動物病院に勤めますが，ここでも無理がたたり体調を崩して，実家（鹿島村）に帰省。話の中で，何度か体調を崩して帰省する件があったが，この時，いかに自分が恵まれた環境で育ったかを実感されたとのこと。

その後再び鹿児島に戻り仕事探し。そして，今の職場へ。写真スタジオでの業務，カメラマンとしての仕事，達成感までを活き活きと。何故か，一番辞めたかった職場が，一番長く勤めている職場。仕事が楽しく思えることも増えたとのこと。小村さんは，「まわり道のように思えても，それは決して無駄な時間ではない。まわり道をした分，たくさんの経験を積み，何度も泣いて，苦しい想いをした分，人の痛みが解るようになった。そして，まず自分を自分が受け入れてあげないといけない。」「経験と出会いは私自身の大事な宝」「いろんなことにチャレンジして欲しい，人との出会いを大事にしていって欲しい」そして「自分は１人ではない」というメッセージであった。

２人の話は，誰にでもないことの連続でもあった。めまぐるしく変化してきた道のりをサラッと語られる２人には，経験してきたことへの「自信」を感じた方も多かったと思う。なお，ここで紹介した部分はほんのさわりの部分。今回，これまでの経験や出会いを日常のことのよう伝えるに至ったことなど，この短い文面では伝えきれないので，詳しくは本「ゆうかり」に寄稿されている先輩・横溝さん，小村さんの頁を参照されたい。

３．おわりに　―「人」と関わる，つながる

社会福祉学科に求められるものは何か―この話が決まってから，どんな答えなのか？何か答えを見つけ出そうともしていた。

シンポジウム直前の打合せ時，大学時代の印象等を質問すると「ゼミ」や「サークル」との答え。ついつい自分もその輪に入って，定期試験やあの先生の単位が……等の思い出話に拡がっていった。難しい話なんて少しも出てこない。こんな事あったよね……みたいな話ばかりであった。やはり，同じ卒業生，年代が違っても共通の話題はこれなんだなぁと思いつつ，これを伝統ともいうのかなと妙に安心したりもした。

シンポジウムでも，当初，壇上に緊張の３人であったはずが，横溝さんから会場の皆さんに「今何が楽しいですか？」の問いや，〆の部分では小村さんから写真スタジオの案内（営業）があるなど，２人の語りの力と，先輩・後輩のなせる業か，いつしか会場とも一体となり，あっという間に時間が過ぎていった。

この２人の隣に座りながら，伝わってきたのが，何かに関わっていくことが大好きで，きっと，その時その時に真正面に向かい合っているんだなということ。社会福祉学科で何を学ぶとか，どんな学問であるかより，「人」と関わって，出会って，経験をして。学生としても社会人としても大事なのは「人」であるということ。

コーディネーターとしての役目は果たせたかどうか，答えは見つけ出せたかどうかは判らないが，人との関わりや出会いや経験，この繰り返しの中から，何かが見つかる。つながろうとするから，何かが始まる。見つけるのは自分自身。その部分は，少しでもつなげられたのではと思っている。

おわりに，今回この様な機会を与えていただいた皆さん，シンポジストの横溝さん，小村さん，会場の皆さん，社会福祉学科の先輩・後輩の皆さんに感謝しますとともに，30周年を迎える社会福祉学科の益々の発展を祈念いたします。

そして，あらためて，「貴重な時間をいただきました。」感謝いたします。ありがとうございました。

シンポジスト報告

まわり道の先に見えるもの

小　村　真　美（studio HAMAYA）
2003（平成15）年３月卒業

１．はじめに

今回のシンポジウムへの参加は私にとって思いもよらないものでした。きっかけはサークルの同級生からのメール。内容は『今度のシンポジウムでお前に話をしてもらいたいんだけど。』というもの。すぐに送り相手を間違えたのではないかと思いました。社会福祉学科を卒業したが，福祉関係の仕事をしていない私には無関係だと思ったからです。

しかし，詳しく話を聞くと，間違いなく私への依頼でした。というのも「変わった経歴の持ち主」を探していたというのです。悩むこともなくすぐにOKの返事をしていました。このシンポジウム参加に限らず，いつも勢いで決断すること多かった私。今思うと大学の入学もほんの小さな勢いがきっかけでした。

２．大学入学前

２.１．中学までの離島生活

中学３年の頃までは私は甑島の鹿島村（現在の薩摩川内市鹿島町）という小さな田舎で生活をしていました。同級生はわずか７人という小さな環境の中でのびのびと過ごしてきました。今考えると，当時は自分らしさだとか人間関係だとかの悩みはほとんどなかったように思います。

２.２．慣れない高校生活

高校のない甑島では進学と同時に島を離れなければなりません。鹿児島市内の公立高校へ進学した私は今までとはまったく違う環境での生活を送らなければいけなかったのです。表向きはうまくやっているようにしていました。でも本当は寂しくて仕方なかった。学校でも友達はいましたが，いまひとつ自分を出し切れていませんでした。誰にも本音でぶつかることのないまま，次第に自分らしさが分からなくなっていきました。

でも，そんな自分を変えたい。そう思えたきっかけは高校２年の夏のことでした。天文館で募金活動をしていた経済大の学生さんから貰った障害者とのふれあいキャンプの案内のビラを見て，今の大人しくなってしまった自分の殻を破るチャンスかもしれないと思い参加をしました。そこで知り合ったのが当時のそよかぜの先輩たちでした。

２.３．進学への悩みと大学入試

進学校だったこともあり，私は高校３年まで国公立の大学へ進学を希望していました。しかし，何かしたい事や目指す夢があったわけではなく，人もそうしているから，進学校だから国公立を目指さなければならない，というだけの理由でした。でも何か違う。本当にそれでいいのかずっと悩んでいました。答えの出ないまま，体調を崩してしまい，入院をし，下宿を出て母とアパートで２人暮らしをすることにまでなりました。思えばこれが最初のオーバーヒートでした。

入院中も，退院してからも悩み続け，たくさん両親とも話し合ううちに，経済大学に入って『そよかぜに入りたい』という想いがはっきりしていったのです。もともとボランティアには興味もありましたし，福祉系の大学に行きたいとは思ってはいましたが，それよりも，一緒に何かに取り組み，楽しめる仲間が欲しいという想いのほうが強かったと思います。

３．予定通り『そよかぜ』に入る

経済大以外行く予定もないということで，一本に絞って受験勉強を始めました。高校２年までは皆勤するくらい健康だったのですが，体調を崩してからは休みがちになりました。授業を受けては点滴をして，または点滴をして登校。そんな日々を繰り返していました。仕舞いにはセンター試験でインフルエンザになったり，本試験２日前に救急車で運ばれたり波乱万丈な受験生活は今でも笑い話にしちゃうくらい，貴重な思い出になりました。そして晴れ

て経済大の門をくぐることができました。

サークル勧誘で早速，そよかぜを探していたら，偶然先輩から声をかけられました。

「そよかぜっていうボランティアをしているサークルなんだけど…。」

「入るつもりだったんです。」

と即入部を決めました。

高校時代と違い，あまり人見知りすることもなく最初からワイワイと楽しく過ごしていました。こんなにスムーズに行くのは，高校時代に頑張ったご褒美だとまで思っていました。授業もそれなりに頑張り，卒業に支障がないよう単位も取得していたが，一番力を入れていたのはサークル活動でした。「将来どうしたいか」よりも「今度の学祭はどうしよう？」「次の活動はどうしよう？」ということばかり考えていたと思います。サークル活動で帰りが遅くなることも多く，親に心配をかけてしまうほど一生懸命でした。

４．一生懸命になりすぎて…

４.１．楽しかったはずなのに

順調そうに思えた大学生活も，やはりつまずくこともありました。もともと人との関わりが欲しくて入ったサークルだったのに，人間関係でつまずき，大学自体を休むことも多くなりました。自分が思い描いた大学生活を送っていたつもりが，だんだんそうじゃなくなっていったのです。人が急に怖くなり家に篭ってみたり，人にどう思われているかが気になってしょうがない，人の視線が怖い，そんな臆病な自分になっていました。

高校の頃に少しお世話になった心療内科に再び通い始めたのはこの頃からでした。ここで知り合った担当の先生は２年前までお世話になった程，信頼できる素敵な先生でした。もちろん，その先生だけではなく家族の支えが本当に有難かったです。一緒に暮らしていた当時高校生の弟にまでたくさん心配をかけました。そのお陰で，さらに家族の絆は深まったと思います。

心療内科に通うことで，自分を客観的に見つめるきっかけができました。「怖い」という感情は間違いではない。怖がっている自分から逃げずに素直に受け止めればいいんだと…。そう考え方を変えることで気持ちも楽になり，人に対してもちょっとずつですが，素直になれるようになっていきました。家族の絆だけでなく，改めて心配してくれる友人やサークル仲間との時間の大切さを実感しました。

４.２．将来への不安

大学を休みながらもバイトにだけは行っていました。当時のバイト先である雑貨屋での接客は不思議と苦にならなかったのです。当時の私には居心地のいい空間でした。そのまま卒業後も今のバイトを続けたいとまで思うようになりました。雑貨に囲まれた空間が好きだから。「雑貨を買う」ということはドキドキ・ワクワクすること。それに自分が関わるということが楽しいから。やりたいという理由もありましたが，「福祉」という深く人と関わる仕事に就く自信がないという「逃げ」もありました。

一方で，大学に行かせてもらったのに福祉関係に就職しないことが親に申し訳ないという気持ちもありました。そんな私に両親は「どんな分野であれ，何か一生懸命になれることが大事だから」ということで，そのままバイトを続けることを承諾してくれました。せっかくなので，国家試験は受けましたが，やはりそれなりな勉強だったため不合格。「残念」というより「やっぱり」といった結果でした。

５．卒業後の転職の日々

５.１．実家への帰省

しばらくはバイトを続けていましたが，短時間労働だったためフルタイムで働ける雑貨屋へ転職をしました。学生の頃のバイト経験を活かしながら，若いバイトの女の子の教育係までしていました。しかし，頑張り過ぎがたたりリタイアしてしまいました。心の不安が一気に押し寄せ，バイトの頃は大丈夫だったはずのお店の空間やお客さまとのやりとりまで怖くなってしまったのです。そんな自分に自己嫌悪になり，だから無理して頑張ろうとする。しかしそのせいで無理がきてダウンしてしまう。結局，また自己嫌悪に陥ってしまう…。そんな悪循環の繰り返しでした。

これでは何も良くならないということで，実家へ一度帰りました。久しぶりに両親と過ごす地元でののんびりとした時間。その期間，たくさん泣

きました。たくさん叫びました。今まで感じたストレスや不安を吐き出しまくりました。自分でも知らないうちに，たくさんのことを抱え，押し殺してきていたのです。数ヶ月して再び市内に戻り，派遣の営業や短期のアルバイトなど始めました。中でも飛び込みの営業は興味深いもので，体力と度胸をつけることができました。

５.２．路上でアクセサリー作り

営業で度胸をつけ過ぎてしまったのか，気が付いたら天文館で知り合ったヒッチハイカーや路上ミュージシャンと仲良くなり，勢いで自分も天文館路上でアクセサリーを売り始めていました。元々，何か作ったりするのは好きなほうでしたが，特技としていたわけではありませんでした。でも思いつくままにいろいろ作ってみたら意外と好評で，路上ミュージシャンとの交流や独特なお客さんとのやりとりが徐々に癖になっていきました。しかし，両親にはかなり心配をかけました。深夜に父親が様子を見に来たこともあります。それでも半年ほど続けられたのは，周りの温かいムードと，深すぎる家族の理解のお陰だと思います。今でも路上時代の仲間で交流のある友人もいます。

改めて，ほとんどの方が驚く話だと思います。そでもあの頃過ごした時間は本当に貴重な宝物です。

５.３．接客の仕事から，まったく違う仕事へ

路上での出会いがきっかけで一度，洋服屋へ就職をしました。雑貨屋とは違う接客に最初は戸惑いながらも，自分らしい接客で店長まで勤めることができました。しかし，所得が厳しいこととお店の経営が厳しいこともあり１年半ほどで辞め，再び仕事を探すことになりました。

次の就職先はなぜか動物病院でした。

最初は「動物が好きだから」という軽い気持ちで面接を受けました。受付業務や雑用が主だろうと思っていたら，仕事内容がかなり幅広く，自分に勤まるかどうか不安になりました。面接後に小論文提出があって採用決定だったので，辞退しようとも思いました。しかし，「受かってもないのに辞めるのはもったいない！もしかしたらすごく自分に合う仕事かもしれない。」そう挑戦してみることにしたのです。その後，採用が決まり，勤務初日からハードな日々が始まりました。

動物看護師は人間の看護師と違い，国家資格ではありません。だから無資格でも学びさえすれば看護師として働けます（病院によっては有資格者を希望するところもあるようですが…）。ただ，専門の勉強をしたことのない私にとっては働きながら毎日が勉強でした。獣医師は院長１人しかいない病院だったため，手術の助手もしなければなりません。そのため，心電図の見方や麻酔について，医療器具から薬剤のことまで覚えることはたくさん，やることもたくさんでした。

もともと理系は好きだったので，覚えて為になるというのが楽しく感じました。何より，幼いころから動物と一緒に過ごすことが多かったので，動物を助けるという仕事に魅力を感じていました。しかし，好きだけでは働けない。でも好きじゃないと働けない仕事だったと今でも思います。

しかし雑貨屋の時同様，無理がたたり体調を崩してしまい，辞めることになりました。

「どうして自分は仕事が続かないんだろう…。」「やっと人に自慢できる仕事に就けたと思ったのに。」と再び自己嫌悪に陥ってしまいました。別に今までやってきたことを後悔しているわけではないのですが，人に堂々と伝えることのできる仕事はこれが初めてでした。周りの同級生たちは働き始めて４，５年経ち，ベテランになっている中，自分の今の状況と比べどこかで劣等感を持っていたのです。

またしても地元へ帰ることになり，半年ほど実家の家業の手伝いや臨時の図書館整理のパートなどをしていました。実は中学の頃までは田舎すぎる島の環境が時々疎ましく感じていました。また，漁師である我が家の魚ばかりの食生活もあまり好きではありませんでした。でも，この半年間で改めて帰るところがあることの幸せさを痛感しました。また父の仕事を手伝うことで，どれだけ両親が苦労をしていたか，毎日食べていた魚がどれだけ美味しいものだったのか，そしてどんなに自分が恵まれた環境で育ってきたのかを実感しました。

６．実家から再び市内，今の職場へ

６.１．慣れないままでの新店舗オープン

その後，心身ともに落ち着いてきたので，また市内に戻り仕事を探し始めました。そこで今の職

場であるカメラのハマヤの面接を受けました。最初は雑貨屋で再び働こうと思っていたのですがうまくいかず，たまたま買った求人案内で受けてみようと思っただけでした。もともと写真は好きでしたし，実家に帰っている間に一眼レフカメラを購入してよく写真を撮っていたので，丁度いいなと思った程度で，本格的な知識も技術もないまま採用となりました。カメラのハマヤというと，プリントショップのイメージの方が強かったため，まさか自分がカメラマンになるとは考えてもいませんでした。当初はプリントショップのスタッフとして採用で，フィルムの現像やデジカメプリントの仕事をしながら，時々入るスタジオでの補助をする程度でした。

新しい職場に慣れ始めたちょうど３ヶ月後に今のスタジオがオープンし，ほとんどが新人スタッフという中でスタートしました。たまたま自分が一番最初に採用されたこともあり，気が付いたらリーダー的存在になっていました。スタジオがオープンして暫くの間，ほとんど昼食休憩もとれず，帰りも12時過ぎということも少なくはありませんでした。自分も新人だというのに，上からのプレッシャー。心療内科にはその頃も月１で通っていたし，ストレスで体調を崩すこともありました。また，この仕事も続かないんだろうな…とどこかで覚悟をしていました。

６.２．スタジオ業務について

写真スタジオというと，「楽しそう」とか「華やか」なイメージを持つ人もいると思います。主に子供メインの写真撮影が多く，お宮参りや百日祝い，誕生日など子供の成長の節目に合わせて写真を撮られる方がほとんどです。中でも一番力をいれているのが七五三で，着物レンタルや前撮り撮影での売り上げが年間のほとんどを占めています。私たちの行うことは子供の着付けやヘアメイク，撮影と写真選び（プレゼン），さらにその写真の編集や商品の仕上げまでのすべてをこなさなければなりません。全国チェーンのスタジオではほとんどが担当制となっており，自店でのスタッフ１人１人の業務内容はお客様の驚かれるくらい幅広いです。特に子供は着物を嫌がったり，なかなか笑ってくれなかったり，中には元気が良すぎて走り回ったりと，スムーズにいかないことのほうが多いのが現状です。

撮影ではカメラマンとその補助が２～３人で担当をし，ぬいぐるみやおもちゃなどを使いながら子供のいい表情を写していきます。そうやって，たくさんのカット数を残していきますが，お客様が少ししか購入しないということも多いです。どれだけ時間と人数を費やしても，結果が少ししか残らない…。忙しさと売り上げが必ずしも比例するわけではないのです。そのため売り上げを残すためのプレゼンは当時嫌々していました。プレッシャーでしかなかったのです。

６.３．「今何してるの？まだ続けてるんだね」

スタジオオープンから１年足らずの昨年の春，一緒にオープニングを経験したスタッフたちが次々と辞めていきました。

「自分も○ヵ月後には辞めよう」「もって○月までだな」「○○さんの次は私が辞めますね！」なんてことばかり言っていました。周りの友人からも「今何してるんだっけ？」とか「まだ写真館で働いてるの？」と言われることも多く，次はどんな仕事しようかなと自分の中でも辞めることを前提に先のことを考えていました。

その頃，主任に昇格となりました。長居するつもりはなかったのですが，誰もやる人がいないし，業務的には当時やっていたことと変わらなかったからというのが理由です。年齢的に何か役職が欲しいというのもありました。

７．なんでまだ自分はこんなに頑張れるのだろう？

気が付いたら新店舗オープンから丁度２年が経ちました。今まで勤めてきた職場の中で，一番辞めてやろうという想いが強かった職場。それなのに，一番長く勤めている職場でもあります。

今までは全部１人で背負い込み，力が入りすぎていました。いつでも辞めていいんだと，少し自分に甘くなってしまうと，いい意味で肩の力が抜け逆に仕事が楽しく思えることも増えてきました。自分の技術が上がってきて，いいショットが撮れたり，面白い表情やポーズが撮れるようにもなってきました。すると自分の中でテンションが上がってくるのが分かります。それをそのまま素直にお客様（ご両親）に伝えると不思議と写真も売れるようになってきました。もちろんそれが伝わ

りきれないことや伝わったとしても思うようにいかないこともまだまだ多いです。そんなときは「次！次！！」と切り替えていきます。家族や友人に愚痴ることも多くなってきました。そのおかげで自分の中で溜め込んで爆発することがなくなりました。今までの自分だったら弱音や愚痴をぶつけることは恥ずかしいことだと感じていたはずです。上手に他人を頼ることもできなかった為，職場でも１人で仕事をしているような気になっていたと思います。

今では主任という立場でも，自分の至らない部分を素直に認め他のスタッフがフォローをしてくれる。そんな状況だから昔の自分の至らなさに気付けました。逆に言うと，昔の挫折があったから今は同じことを繰り返さないのだと思います。自店のキャッチコピーである『思い出づくりのお手伝い』。本当にそういう仕事をしているんだと最近やっと実感できました。「売り上げのために写真をとるのではなく，その子供のために，自分が撮りたいからという想いのために撮影をする。」「この写真を使って，こんなアルバムを作って欲しい！」「子供が大人になったときに見返したくなるような思い出の一冊を作ってもらいたい！」どんどん仕事に対して欲が出るようになりました。と同時にお客様やその子供たちとの会話を楽しめるようになってきました。そして出来上がったアルバムを見たときの達成感は今の仕事でしか味わえなかったことです。

８．自分はまわり道とは思わない

人に話せば，大学卒業からだいぶまわり道をして来たと思われるでしょう。しかし，自分の中ではそれが正しい道だったと思えます。確かに，何度も立ち止まり，何度も泣いて，心配や迷惑もかけてきました。でもそれは決して無駄な時間ではなかったと今だから胸を張って言えます。まわり道をした分，たくさんの人との繋がりが持てました。まわり道をした分，たくさんの経験を積みました。何度も泣いて，苦しい想いもした分，人の痛みが解るようになりました。家族や友人に心配かけた分，絆が生まれました。

私は私が嫌いでした。臆病で意地を張ってばかりで，そして不器用で…。でもそんな自分もまず自分が受け入れてあげないといけない。まわり道をした結果，一番痛感したことはそのことでした。

今は写真の仕事をしていますが，来年結婚を予定しているので，相手の勤務地次第では今の仕事を辞めて宮崎に引っ越すかもしれません。そこでまったく違う仕事をしているかもしれないし，もしかしたら今の仕事を続けているかもしれません。どういう形であれ，今の仕事や今までの経験で得たことはどこかで役に立つはずです。これまでの「経験」と「出会い」は私自身の大事な宝だと思います。人との関わりが自分を苦しめたこともありましたが，結局そこから立ち上がることができたのも人との関わりがあったからです。学業はもちろん大事です。学んだこともすべて自分の糧になります。それと同じようにいろんなことに皆さんにはチャレンジして欲しいと思います。そして人との出会いを大事にしていって欲しいと思います。これからも沢山の困難が待っていると思います。中には泣きたくなったり，逃げ出したくなることもあると思います。それでも忘れてはいけないことは「自分は１人ではない」ということです。今回の私の話が参考になると思いませんが，少しでも勇気付ける何かになれれば幸いです。

最後にこのような機会を与えてくださった友人と先生方に深くお礼を申し上げたいと思います。

シンポジスト報告

手話通訳とつかず離れず

横　溝　和　恵（朝日生命姶良営業所）
1992（平成４）年３月卒業

１．きっかけ

大学入学時は，友達も知り合いもほぼいませんでした。同じ高校からきた男子も，話をしたこともあまりなく，大学生活を送るのに，少々不安を感じていました。そんな時，同じ新入生で，先にひまわり同好会に入っていた女子に，「入らない？」と誘ってもらったのがきっかけで，ひまわり同好会に籍を置くことになりました。

同好会の活動は，手話を学んだり，施設訪問をすると聞いていました。当時同好会には，聴覚障害学生の先輩が２名いました。当時４年生だった先輩が入学したことを機に作られた同好会であること。サークルにするとしばりがあって，同好会のままでいることなど教えてもらいました。この同好会に入ったところから，現在に繋がる手話との出会いが始まっていたのです。同好会の中では，十分手話を学ぶことはできないので，近くの手話講習会に通うように，先輩から言われ，早速近くの講習会に通うことになりました。

手話を覚えたい！というような，強い気持ちがあったわけではないので，講習会も半ば義務のような感じで通っていました。しかし時が経つにつれ，自分の手話で伝えたことに返事がき，相手の言うことも少しづつわかるようになると，手話が楽しくなりました。もともと，外国の人でも誰でも，自分で伝えられた方がいいと思っていたせいもあるでしょう。でも，講習会を担っている講師の方から，いろいろな活動があることや行事を紹介され，一緒に行こうなど，いろいろな誘いを受けましたが，この一線を越えるとはまってしまい，抜けられなくなるとの思いがあり，しばらくの間は講師の方々とは一線を置くようになりました。どこでその一線を越えたのか，もう覚えてはいません。その後次々と誘いを受け，とうとう気づいた時には手話の世界にどっぷりつかっていたのです。でもそれは，気づかぬうちのことですが，私にとって居心地がよく，楽しかったことは間違いありません。そうでなければ，とっくに身を引いているはずですから。

若さが武器だった当時は，いろいろなところに出かけて行きました。時間とお金を手話の世界に相当つぎ込みました。耳の聞こえない人も，手話学習中の人も，手話通訳をしている人も，とにかく幅広い年齢層の人たちとの出会いがありました。ほとんどが私よりは年長者であり，かわいがってもらいました。学生の時から手話通訳を担うようになりました。まだ若造で，人生経験も未熟な私が，手話通訳を行うのは大変なことです。人の人生に入り込むわけですから。耳が聞こえていれば，他人がプライバシーに入り込むことはあるはずもなく，それだけ手話通訳というのは大変な業務であることを，知る事になるのです。

２．就職もサークルでの経験を活かして

学生時代から，ボランティアやアルバイトで出入りしていた，鹿児島県身体障害者福祉協会へ入職することになりました。採用される前日の３月31日もアルバイトで入っていたのですが，５時が過ぎてから私の辞令を作っていなかったことに気づき，慌てて起案された辞令を，私がワープロで打ったという忘れがたき事もありました。

当時手話通訳者として雇用されていた先輩がおり，私が直接手話通訳に関する業務を持つことはありません。が，関わりがないわけでもなく，情報もたくさん得ることができ，私にとっては充実した職場でした。身体障害者関連の事業を県から委託されており，県との関わり，市町村の身体障害者協会，視覚障害者団体，聴覚障害者団体などとも関わりを持つことができました。

仕事以外では，夜は手話講習会を担当したり，手話サークルへ行ったり，日曜日は研修会や行事への参加。時には全国や九州の大会や研修会等へ

も行きました。鹿児島では学生時代から積極的に手話への関わりを持つ人は少なかったのですが，全国の様子を見てみると，学生時代からバリバリ通訳活動をしたり，大学内で聴覚障害学生への情報保障をしていたりと，鹿児島とは比べものにならないくらいの学生パワーを知ることができました。そして20代の若い人たちもいっぱい関わっている人がいることを知り，世間はなんて広いんだ…と実感しました。鹿児島ではそこそこがんばっていると自負がありましたが，そんなのは本当に井の中の蛙に過ぎませんでした。手話は外国語を学ぶのと同じですが，まだ学習方法が確立されていない時でした。手話関係・手話通訳関係の本は，出版されると同時に購入し，福祉関係の本，日本語関係の本もよく買っていました。そして研修に行く費用まで換算すると，相当のお金をつぎ込んでいたことは間違いありません。でもそれは全て自分の見えない財産として，力になっています。

３．色んな事情の中で人生は進む

居心地のいい職場でしたが，途中波風が立たなかったわけでもありません。まあ，イロイロなことがありました。が，毛頭仕事を辞めるなんて気持ちはありませんでした。それが何の因果か，今の旦那と結婚することになり，仕事を辞めることになったのです。といっても，県内在住であれば，辞めるなんて選択はありませんでした。県外に移住するため，止むを得ない選択だったのです。

結婚して？すぐに子供にも恵まれ，仕事を辞めただけではなく，社会活動からも距離を置くこととなりました。しかし，こんな私がすっぱり切れるはずもなく，なんとか細い糸のようなつながりをと，県外でも手話通訳の関わりを手繰り寄せていたのです。県が違えば，やり方も違い，鹿児島で即戦力であっても，郷に入れば郷に従えで，１年間の研修を受けることになりました。妊娠中は動けても，乳飲み子を抱えていくこともできず，泣きわめくわが子を預けて行った事も数回ありました。それと同時期に，ママ友との関わりも持ったので，普通の生活も体験しています。

子どもも２人になった時，旦那が失業。私は元来鹿児島に帰るぞという野望を持って県外へ行ったので，これ幸いと，鹿児島へ帰るべく算段をしたのでした。旦那も鹿児島へ行く事に反対はなかったので，あっさり鹿児島へ帰ることとなりました。県外生活わずか３年ほど。普通の生活？にピリオドを打ち，また嵐の待ち受ける鹿児島へ帰ってきたのです。こちらへ帰って，ラーメン店を開くことにしていたので，引っ越してきたと同時に，その準備にもかかりました。まだ子どもが小さかったので，とにかく保育園に預かってもらわないと，どうしても入れてくれと役場の担当に話に行ったりもしました。開店して，土日休めるわけもなく，子ども達は日曜日も保育園へ預けることになりました。先生曰く，私たちよりも保育園に来ているね。思っても言うなよ，親が一番わかってると心で思ったり，子ども達に申し訳なかったりで時を過ごしてきました。そのラーメン店も２年半で廃業。ここに至るに，親には本当に感謝しきれないくらいお世話になりました。資金面だったり，子どもの世話だったり。下の子どもは特に，祖父母と保育園に育ててもらったようなものです。

４．手話活動の夢を捨てきれず

その後生計を立てるために，すぐに就職しました。社会保険事務所の臨時職員，県職員の産休代替で一年。この間は仕事に時間拘束されていていため，手話活動は土日限定でした。

その翌年から，何とか手話活動で得た収入でやっていけないものかと，フリーでいろんな仕事を請けていきました。みなさん，手話で生計がたたないのかと思う方もあるかもしれませんが，まず手話での求人などありません。派遣職員のような感じを想像していただければいいかと思います。手話で生計が立たないことは百も承知でありながら，それでも，自分のやりたい事でなんとか生計を立てたいとの思いでやってみました。でも，それも長くは続きません。もう諦めなきゃと思ったときに声をかけていただいたのが，現在お世話になっている朝日生命の営業職員でした。

私の人生の選択肢にはないはずだった営業職。入社前にやっぱり無理だと断りをいれたりもしましたが，そう簡単に引かせてくれないものです。営業成績はさっぱりですが，お客様との関わりでは勉強させてもらっています。保険の営業と聞く

だけでシャッターを閉めておろしてしまう人，表面的な付き合いしかしなくなる人，電話にもでない人，居留守を使う人。私は何も悪いことはしていないのに，と思うこともしばしば。営業の世界は厳しいので，続けたいと思っても会社から首切りされてしまうこともあります。でも，自由が利くのも営業の仕事。手話との関わりを持つのには，本当にありがたい職場なのです。だから，続けられるだけ長く籍を置きたいと思っています。

５．人との関わりを面倒くさいと思わなくなってほしい

本当にいろいろな経験をしてきたと思います。自分の事，手話通訳を通しての他人の人生。それらは全てが楽しいことばかりではありません。嫌なこと，悲しいこと，腹の立つことなど多々ありますが，後悔していることはありません。やってみて初めてわかること，いろんな見方ができるようになること，次へのステップになること，高い勉強代を払ったと思うことなど。

そのどれも共通しているのは，人とのつながりです。自分に合う人ばかりではないですが，それはたくさん人がいれば，たくさん人と関われば当たり前のこと。その中でどう関わっていくか，自分を持っているかそんなことに気づけるようになると思うのです。

私は他人に厳しく自分に甘い，そして我が強いので，周りが大変な思いをしていると思います。でも，気づいたことを言ってくれる人もいるので，それには感謝しています。

最近は相手の反応がよくわからない事も増えてきました。相手の反応がわからないということは，こちらがどう対処していいかわからないということになります。それではコミュニケーションもとれない。双方困るわけです。自分の気持ちは相手に伝えること，これはとても大事なことだと思います。

自分が福祉の仕事に携わるにせよ，他の仕事に携わるにせよ，生きていくには人との関わり・交わりが大事なことだと私は思います。人との関わりを面倒くさいと思わない人が増えて欲しいです。そりゃもちろん，面倒なこと，嫌な事もたくさんあるとは思いますが，人と関わることは，楽しいこともたくさんある，そういう思いをみんなで共有できればいいなと私は思います。

社会福祉学会シンポジウム参加記

自分の道を見つけるために

３年　里　山　衣　純

１．はじめに

７月16日に，社会福祉学会によるシンポジウムが行われた。「社会福祉学科に求められるものは何か」というテーマで，社会福祉学科を卒業された先輩方の話を聞いた。今回は，コーディネーターの田平さん進行のもと，シンポジストの横溝さんと小村さんがお話をしてくださった。

２．先輩達の話を振り返ることから

まず，現在，生命保険の営業所に勤めている横溝さんのお話を聞いた。大学で手話サークルに所属し，学生の頃から手話通訳なども行っていた。その後，就職や結婚など転機を迎えるが，現在も手話に携わり続けている。大学で，興味を持ったことに取り組み，時間が許す限りいろんな体験をすることが大切だとおっしゃっていた。

次に，写真店に勤める小村さんの話である。高校生の時に参加した障害者とのキャンプをきっかけに，本学に入学し，ボランティアサークルに所属した。サークル中心の生活を送り，障害者の方の介助やキャンプを通して，多くの人と関わりさまざまな体験をしていた。卒業後は，自分のペースを大切に仕事に取り組んでいるようである。

お二人とも「自分に向いているのかどうかは，やってみないとわからない」つまり，挑戦することが大切だとおっしゃっていた。社会福祉学科の卒業生であるが，現在の職業も含めてさまざまな職歴を持っていた。大学生活では，手話とボランティアサークルにそれぞれ所属し，福祉に大きく関わっているようだったので少し驚いた。しかし，今でも手話を続けていたり，人と接する仕事で傾聴や第三者的な視点でものを見たりと，社会福祉学科で学んだことは活かされているようだった。

社会福祉学科に所属し，福祉を学んでいるからといって，私たちの進む道がひとつであるわけではないということに気付いた。社会的には，施設での介護業務などのイメージが強いと思う。しかし，私たちの生活には福祉が必要な場所が多くあるのではないだろうか。横溝さんの話の中で，現在働いている生命保険会社での営業の際，手話が役立ったことがあったそうだ。サービス業の顧客には，障害の有無にかかわらず誰もがなりうる。そう考えると，人と接する職業はどこにでも福祉の視点を広げることが求められているのだろう。

３．人とのつながりの中でみえてくること

お二人共，「人との関わり」の大切さを何度も強調していた。私はこれから社会に出ていくが，どのような仕事にも就くにしても何らかのかたちで人との関わりがある。人とつながることで悩むことは多いが，その悩みから抜け出す力を与えてくれるのも，また人である。

自分の将来について，例えば卒業後のことを考え始め，自分の道を模索してみる。友達の意見や家族の意見に，翻弄されてしまうこともあるだろう。しかし，違う角度から見れば，自分の可能性を第三者的にはあるいは身近に捉え，様々な選択肢を与えられる機会とも言えよう。多くの人とかかわることで，自分の可能性をどんどん広げたり絞り込んだりすることができるのだろう。

シンポジウム終了後の茶話会では，先輩方とお話しすることができた。話をしてみると，多くの共通点があり，ここからひとつのつながりが始まることもあるのではないかと思った。私たちの周りには，家族や友人，先輩など多くの人がいる。そのタイミングによって関わっている人は違うが，何かに取り組む際には多くの人が支えてくれ，助けてくれているのだということを知った。

４．おわりに

今，私たちができることは，時間の許す限りさまざまな体験をすること，そこでの人との関わりを大切にすることだと感じた。すべての経験と出会いが，次につながるステップであり，これからの人生に必要な道となるのだろう。

社会福祉学会シンポジウム参加記

卒業生の軌跡を通して残りの大学生活について考えてみる

３年　上　野　恵　実

１．はじめに

今回のシンポジウムでは，２人のシンポジストの話題提供の後，本学の入試室に勤務されている田平さん（社会福祉学科卒業生）がコーディネーターとなって討論が開始された。

ここでは，２人の話題を振り返り，それに関わりながら考えさせられたことを整理したい。

２．手話通訳を始めたきっかけ

まずは，現在朝日生命に勤めていらっしゃる横溝さんの話から始まった。横溝さんは，本学でのサークル活動がきっかけで手話を習い始めたそうだ。当初は，手話活動を大学生活の中心に置いていたわけではないので，手話に関する外部からの依頼を断っていたが，次第に手話を通じて喜びを感じるようになり，手話通訳を行うようになったということだった。

手話通訳は，人が言っていることを伝えなければならないなど，人の人生に入っていくような仕事だとおっしゃっていた。現在でも，仕事の合間に手話の仕事を行っているということだった。人の人生に入っていくような仕事だとおっしゃっていたが，確かにそうなのかもしれない。本来ならば，自分が関わる事のない人と関わりをもち，聞くはずのない話を聞く。そして，自分の伝え方次第で，相手にどう伝わるのかがかかっているのだ。そう考えると，その人の人生の一部を共に過ごしているのと同じなのではないだろうか。

３．手話の役割とは何か

最近では，小学校などでも手話を取り入れた歌をみんなの前で披露するなど，手話を身近に体験することも増えてきている。それは，手話を通して障害者の方々を身近に感じ，偏見や差別をなくそうという目的もあるのだろうが，本来の手話の役割やその意味をしっかりと理解したうえで使用しなければ意味がないのではないだろうか。

手話は，聴覚障害者の方にとっては，生活していくうえで，コミュニケーションを計るための重要なものである。その大事なものを良く理解しないまま使われてもいい気はしない。後天性の聴覚障害であれば，音楽を聞いたこともあるだろうから，手話を通してなんとなく音楽を楽しめるかもしれないが，先天性の聴覚障害の場合であれば，音楽を手話で表現されても楽しむことはできないのである。そうであれば，手話以外の方法で音楽を楽しんでもらったほうがよほど聴覚障害者のことを考えているように思う。

自分はいいことをしている気でいても，相手がそう思っていなければ意味がないのだ。むしろ，自分では気づかないうちにそのようなことになっていることが多いのではないだろうか。横溝さんは手話の本来の役割やその意味を理解し，聴覚障害者の方々に役立ちたいと思っているのだと感じた。人と関わりをもつことで，自分の人間の幅や価値観，視野も広げることができ，様々な考えをすることができるのだと思う。

４．弱いところを見せる事はかっこ悪い？

次に，小村さんの話が始まった。本学では，サークルを通して脳性マヒの方々の生活介護をおこなっていた。人づきあいで悩むこともあったが，自分の中にため込んでしまう癖があったようで，しだいに引きこもりがちになってしまった。大学は卒業したが，すぐには定職につけず，天文館で路上販売をしている方々と仲良くなり，自分でもやってみようと販売に挑戦した。そんな時に，友人からアパレル関係の仕事を紹介してもらい店長にまでなったが，勧誘的な販売方法に違和感を覚え退職。

現在は写真館で働いている。色々とまわり道をしたが，そのなかで，悩んでいることなど弱いところを見せる事はかっこ悪いことではない，一生懸命でいいのだということだった。悩みや，弱さを他人にさらけ出すことは，とても難しいことであると思う。弱さを隠しているからこそ，自分も

強くなれる場合もあるのではないだろうか。自分は弱いからといっていつも他人に助けを求めてばかりいても，いつまでたっても自分で解決する事が出来ずに強くなることはできない。自分自身がどこまで弱さと向き合い戦っていくことができるか。

しかし，自分自身で抱え込みすぎてしまい自分がダメになってしまっては意味がない。自分の弱さを知り，その弱さとどう向き合っていくのかが大事なのではないだろうか。時には自分の弱さをさらけ出し，理解してもらう。そして，自分だけでは乗り越えられない壁にぶつかった時，周りの人々の知識や力を借りながら越えていくことができれば，今までの自分より一歩成長できるのではないだろうか。

５．おわりに

おふたりの先輩方の大学生活から卒業後の社会人としての生活に至る軌跡を通し，私が感じたことは以下のことである。

現在横溝さん，小村さんとも福祉の仕事に就いているわけではない。社会福祉学科だからといって，福祉に関わる仕事をしなければならないということではない。どのような仕事であれ，これからの人生を生きていくなかで，人との繋がりは大事にしていかなければならないと感じた。

仕事としては福祉に関係するところでなくても，現在の学校生活や実習はこれから先の人生の中で大事な時期なのだと思う。横溝さん，小村さんも大学生活で得たことが現在につながっている。私は卒業するまでの後一年半の時間を，どんな時間であっても大事に有意義に過ごしていきたいと感じた。

ソーシャルワーカーデー企画

東日本大震災をまえにソーシャルワークに問われること

社会福祉学科　天　羽　浩　一

１．ソーシャルワーカデー企画に関わって

ソーシャルワーカーデーは2010年から始まった。世間にはよく「○○の日」と名付けられた日があり，その日に○○にちなんだ企画がなされるのを常としているが，まあその類（たぐい）の事業だと考えてもらっていい。言いだしっぺは，社会福祉士養成校協会の会長（当時）大橋謙策さんという話である。「ソーシャルワーカーの日」だから，ソーシャルワーク，ソーシャルワーカーの認知度を上げたいということになる。その日は海の日（７月の第３月曜＝祝日）にあてよう，なぜなら「海は限りなく広い」，「海は境目がない」，「海は波が繰り返し寄せエネルギーに満ちている」，これはソーシャルワークにぴったりだということだそうだ。ということでこの企画は２度目である。社会福祉士会，精神保健福祉士協会，医療ソーシャルワーカー協会，ソーシャルワーカー協会（通称ソーシャルワーカー４団体）という舌をかみそうな名前の団体が顔を揃えて社会福祉士を養成している大学（鹿児島県内では鹿児島国際大学）と一緒にソーシャルワークの宣伝をしようということなのだ。概してこのような企画は一過性のもので終わってしまうのだが，まあ年に１度でも継続できれば意義ありということだと考えた。そして2011年7月2日のソーシャルワーカーデーは「東日本大震災をまえにソーシャルワークに問われること」というタイトルでリレートークと講演を企画した。

現地に直接支援に入ったソーシャルワーカー，現地出身の本学学生，そして原発問題は外せないと，その話が出来る人を選定しお願いした。震災から４ヶ月近くがたっていた。事態の深刻さに比し，単純に東北からの距離感だけからなのか鹿児島の中では大きな危機感が感じられない。しかし，この震災が持つ意味は距離が離れているから影響がないということでは済まない，社会のありようが根底から問われているという思いもあり，シャワーのような映像洪水の中を出来るだけ地道な形で出来事に向かい合うというスタンスで企画を実施した。当日の企画については山下さんの報告を参照してください。

２．大震災・大津波・原発事故から１年が経つ

当日の企画でもあった及川さんの体験記と新入生ゼミの学生の感想を読ませていただいたが，他人事（ひとごと）と我が事（わがごと）ということについて考えさせられた。究極の出来事は体験したものでなければ分からないということがある。体験しなかった者はどうすればいいのだろうか？追体験や感情移入という言葉があるが，所詮イメージの中で疑似体験をするにすぎない。どこまでも他人事（ひとごと）なのだ。しかし，だから体験しなかった私には分かりようがない，あるいは体験しなかった貴方には分からないと断絶させることでいいのだろうか。確かに我が事として感じ取ることができたなどと簡単に言えるわけはないけれど，少しでも近寄っていくという作業は大切なことだろうと思う。少なくとも，やたら「頑張れ東北」とか「東北は負けない」とか，「激励」や「絆」を大きな声で叫ぶことでは近づくことのできない暗い闇の広がりがあることに気づく必要がある。

深く記憶に刻み込み，今後も長く続いていく震災と原発の苦しみに対して鹿児島に住む私たちにどのようなことが可能か考え続けることが大切だと思う。社会福祉士／精神保健福祉士／介護福祉士養成課程を持つ社会福祉学科としてはそれぞれの専門職がどのような支援活動をしているか気になるところだが，社会福祉士会は今も福島，岩手，宮城の３県に地域包括支援センターの後方支援を支援内容とした専門職ボランティアを派遣している。また精神保健福祉士会は心のケア活動の後方支援員を派遣している。介護福祉士会は高齢者／障害者介護の後方支援員を派遣している。それぞれ派手な活動ではないが，地道な後方支援活動を

継続している。また現地に行かずとも鹿児島に住みながら，出来ることもたくさんあるはずだ。ひとつひとつは微々たるものであるが，しかし注意深く探していけばこれだと思える支援活動に出会うことは可能だ。

昨年「社会福祉特講Ⅲ」のなかで，東日本大震災と原発に関して特別講義をおこなった。今年も同一科目のなかで４回程度のシリーズ講義を予定している。講義の中でさらに震災・津波・原発問題にアプローチしていきたい。第１回は「現地支援（社会福祉士として／臨床心理士として)」，第２回は「震災復興と経済そして福祉」，第３回は「福島第一原発事故をめぐって」，第４回はまとめとして「東日本大震災・大津波・原発事故から学ぶ」という内容で，外部講師にもお願いしながら展開したいと考えている。

３．学生の皆さんに問いかけたこと

昨年の卒業式（2011年３月18日）／入学式（2011年４月４日）の日に卒業生／新入生に向けて呼びかけた文章で本稿を締めくくらせていただきたい。

未曾有の大危機に見舞われた日本
― 試される日本 ―

東日本大震災マグニチュード9.0　津波と原発による破壊

2011年３月11日午後２時46分，この日は日本史の中に永久に記憶されるだろう

鹿児島に住む私たちのなかで，東北地方の方々との繋がりを持っている人は多くないと思う。しかし，今回の出来事は，単に東北地方に発生した大地震ということにとどまらず，日本全体に波及する非常事態であることはまちがない。この大震災は間違いなく戦後66年間の政治経済文化社会のすべてを含みいれたなかで最大の出来事である。

この大災害に私たちがどう向きあい，犠牲者を悼み，被災者に心をよせ，復興を支援していくことができるのか，そのことに日本の将来がかかっているといって過言でない。

この大災害への対応に失敗すれば，犠牲者は無駄死にとなり，被災者は救われず，復興はかなわず，日本経済は沈下し，私たちは長い暗いトンネルの中に閉じ込められてしまうだろう。その意味で私たちにとって大震災に対する支援は被災者の為ばかりではない。むしろ私たち自身のためでもあるということを確信しなければならない。私たちは犠牲に対して応分の負担をそれぞれがしなければならない。復興税があっていい。国債発行もあっていい。またそれぞれ寄付が出来る人は寄付を，労力を出せる人は労力を，企業や組織は人と金と物を提供していかなければならない。

皆さんの中には今，私たちは何ができるのかともどかしく思っている人も多いと思う。

医師や，看護師，あるいはレスキューやヘリ操縦士などの特殊な技術を持たない私たちに何ができるのか・・・①今すぐ，②そしてあと少ししてから，③さらに長期にわたって・・・

これから被災者の苦しみは数十年にわたって続いていく。

①今すぐできることは

この出来事の一部始終をしっかりと見つめ，確実な情報を集め，考え，犠牲者を悼み，被災者に心を寄せ，私たちが応えられる具体的なニーズが明確になるまで待つことである。

かつてマザーテレサはマザーを慕ってやってきたイギリス女性が活動中に重い病に陥った時，「帰国したくない」と抵抗する彼女を押しきり，母国であるイギリスに帰国させた。「イギリスで私にいったい何ができるのですか」という彼女の問に，マザーは「祈りです。私たちの活動のために祈ってください。」と答える。マザーが活動の中で金銭上追い詰められ，危機的状況に陥ったとき，マザーはその女性に電話をかける。「祈るのよ。強く祈って。お願い。一緒に祈るのよ。」と。その女性は「祈ります。命がけで祈ります」と応える。それは形にはならないものだが，支えあう気持ちが伝わるということが極めて大きな力になることを示している。特別な技術のない私たちに出来ることは，この祈りである。すべての人々が犠牲者を悼み，被災者に心寄せているのだということを伝えることであり，そのことが人々の支えになっていくのだ。

その祈りを伝える具体的手段として今できることは，たとえば地元の新聞社に投書したり，地元のTV局ラジオ局のHP宛てにメールを出したり，信頼できる機関を通して寄付（少なくともアルバイトの日当の丸３日分以上）をすることなどが考えられる。

②そしてあと少ししてから出来ることは

私たちに具体的などのような支援ができるのか，またどのようなニーズが被災地にあるのか，それらの事柄について今後多くの公的な機関，あるいはNPO団体が情報を提供してくれるだろう。私たちの場合であれば，社会福祉協議会や社会福祉士会をとおして，具体的な支援要請がはいってくるだろう。その時に自分でできることをしていけばいいと思う。ボランティア元年といわれた15年前の阪神淡路大震災の経験があり，そのあたりの対応は結構はやく組み立てられると思う。

時間がある人はその段階で被災地に入って支援することも可能となるだろう。そこまでの活動は無理であっても，被災地から入る様々なニーズに私たちが応えられることは必ずあるだろう。

③さらに長期にわたって出来ることは

直接支援に入った自衛隊，消防隊，医者や看護師などの救援隊，救命隊が去った後，復興に向けた長期の闘いが待ち受けている。仮設住宅が建設され，一部の人は避難所から仮設に移ることができる。しかし仮設住宅に移った人にも，避難所で長期の生活を強いられる人にも継続的な支援がいる。障害を持っている人，高齢者，病気の人，乳幼児・・・日常の支援が必要な人がいる。介護出来る人や相談できる人，そういう人材が長期にわたって，また多数必要である。

繰り返して言う。この大震災に向かいあう私たち一人一人が問われている。この大震災だけでは日本は沈没しない。むしろこの震災に対する私たちの対応次第で日本は沈没する。

経済の悪化は覚悟しなければならない。すべての国民が応分の負担をしなければならない。すべての企業，組織は復興支援に貢献しなければならない。政治は権力闘争の矛をおさめて，目前の事態を打開していくために協力していかなければならない。復興への道筋をつけることができれば，「人間とは見捨てたものではない」という人間賛歌を聞くことができるだろう。

＜補足＞

福島原発の事故について

震災が直接要因とはいえ，人災とういう側面が極めて強いと感じます。

正確な情報が開示されているとはいいがたい。

事故当初から東電と原子力安全保安院の組織防衛が優先されていると私は感じる。

東京電力や原子力安全保安院の幹部からは命をかけて対応しなければならない事態であるにもかかわらず，記者会見を見る限り緊張感，責任感が伝わってこない。今，被曝しながら現場で命がけで作業をしている人は誰なんだろうか？官僚答弁しかできない幹部からではなく，現場で作業している人たちからの実体報告を聞きたいと思う。

過去にも現場の作業員が被曝したにもかかわらず，真相が明らかにされなかったことがある。隠されてきた多くの事故があったともいわれている。原子力発電の最前線で多くの作業員，それも多くが東電の正社員ではなく，下請会社の作業員であるが，いくばくかの危険手当をもらってもっとも危険な部署で，さしたる専門知識もないまま働かされているのではないかという疑念がある。幹部職員は命をかけて破損箇所修理の最先頭に立って仕事をすべきではないか・・・原子力は命に関わる危険なエネルギーであることは広島長崎の経験者である日本人には身にしみて分かっているはずのことである。

外国の報道ではすでにスリーマイル島事件を上回る被害が出ることは確実と報道している。世界各国が注目している中で，この事故対応を誤れば，日本経済に大きな損傷を与えることになるだろう。

経済的損傷は直接震災被害より原発事故対応の失敗の方が大きくなる可能性がある。ごまかしを許さず，注目をしていく必要がある。

ソーシャルワーカーデー企画に参加して

現実を知ること

３年　山　下　正　子

１．はじめに

平成23年７月２日（土）に「東日本大震災をまえにソーシャルワークに問われること―災害時のソーシャルワーク―」というテーマで講演会が行われた。この講演会は７月18日（海の日）のソーシャルワーカーデーを前に，鹿児島国際大学，鹿児島県社会福祉士会，鹿児島県精神保健福祉士協会，鹿児島県医療ソーシャルワーカー協会，鹿児島県ソーシャルワーカー協会の共催により開催された。講演会当日の天気は晴れで，蒸し暑かった。会場となった教室は学生だけではなく一般の方もいらっしゃっており，聴衆でいっぱいとなっていた。

講演会は県ソーシャルワーカー協会会員の岩井浩英さんの司会により進行された。始めに主催の挨拶や支援近況報告が行われ，その後，各講演者より講演が行われた。

２．原発問題と被災地支援活動

まず，鹿児島国際大学短期大学部情報文化学科の八木正先生により「原発問題の現状と今後の課題」というテーマでミニ講演が行われた。原子力発電に利用される資源の採掘によって環境破壊が進んでおり，枯渇性エネルギー資源はこのままいくと数十年（石油，天然ガス，ウラン）から百数十年（石炭）で枯渇することが説明された。八木先生は「原子力発電以外で日本の電力は賄えるのか。」という質問に対して，「原子力発電以外の火力発電・水力発電のみで日本の電力は賄える。」と回答されていた。

次に，鹿児島県社会福祉協議会の神薗隆志さんが，被災地支援をとおして「被災地支援活動をとおして」というテーマで講演された。神薗さんは鹿児島県社協における東日本大震災派遣第５陣として福島県相馬郡新地町という町に派遣された。新地町は今回の震災で津波被害にあっていた。神薗さんたちのような派遣職員は災害ボランティアセンターの立ち上げ，マニュアル作成・書類整備等，役場との連絡調整などを行ったそうだ。災害におけるソーシャルワーカーとしての視点のお話の中で，「ソーシャルワーカーとしては，理想を掲げることも大事だが，緊急なその場の状況で，被災者のニーズに応じていくためには，その限られた環境の中で最善を尽くす。ベストよりベターの精神で。」とおっしゃっていた。

３．被災地出身学生の体験談と心のケア

神薗さんの講演が終わり，休憩の時間が設けられた。私はこの休憩により，新たな気持ちで次のお話を聞くことができた。

被災地出身学生からということで，鹿児島国際大学短期大学部音楽演奏専攻科１年の及川和之さんが「暗い。そして星がきれいだった―私の東日本大震災日乗―」として震災前後の及川さん自身の行動や，鹿児島に戻ってから聞いた，家族や友人の話を淡々と語られた。

３月11日（金）に及川さんは演奏会の練習のため，仙台へ向かい，そこで地震が発生した。それから，３月16日（木）に鹿児島の自宅に帰宅するまで，電気・水道が使えず食料も十分にない状況だったということだ。及川さんは「自分で言うのもなんだが，辛い体験だったと思う。しかし，私よりも辛い体験をして，現在も改善していない状況の中，生きている人々が生活していることを考えた。少しの差でこんなにも簡単になくなるものなんだと思った。」と語られた。

最後に，鹿児島県職員で鹿児島県精神保健福祉士協会会員の笹川純子さんが「東日本際が支援派遣心のケアチームに参加して」というテーマで講演された。笹川さんは鹿児島県心のケアチームとして宮城県牡鹿郡女川町に第９班として派遣（５月１～７日）されたそうだ。今後の心のケアの在り方についての話し合いや，心の健康相談，避難所巡回相談などの活動の中で，地元の人に迷惑を

かけない・傾聴・ニーズに沿った支援を心がけたということだった。

４．おわりに：現実を知ること

私がこの講演会で特に印象に残ったのは，神薗隆志さんの「緊急的な状況での支援は，ベストよりベターで。」という言葉だった。社会福祉を学ぶときには理想としての社会福祉専門職の役割や援助方法について学ぶが，実際に現場で求められるのは臨機応変な支援だと思った。これは災害時のみに求められる考えではなく，人を支援するすべての場面で求められると思った。理想論を語るだけでは支援に結びつけることはできないが，臨機応変に対応するためには，緊急時に対応できるような十分な知識と技術が必要だと思った。

講演会全体をとおして考えたことは，現在の自分を知り，確かな情報を得ることの重要性だった。自分に出来ることと出来ないことを区別することで，今，自分が何をすべきかが見えてくるのだろうと思った。自分の技術や能力を過信してしまうと，支援を必要としている人への支援は中身のないものになってしまう。そのようなことが起きないために支援者同士や地域住民，ボランティアとの連携が必要だと思った。そして，震災について毎日のようにテレビや新聞などで取り上げられているが，実際に私が知っていることはほんの一部に過ぎないことが分かった。被災地に派遣されていた方のお話などを直接聞かせていただいたことによって，現地の状況を感じることができた。多くの確かな情報を得ることで，物事をみる視野も広がり，行動に移すという原動力になると思った。

今回の講演会は，現在の自分を見つめ，将来の自分について考える良いきっかけとなった。

ソーシャルワーカーデー企画に参加して

暗い。そして星がきれいだった　―私の東日本大震災日乗―

及　川　和　之（短期大学部専攻科１年）

１．はじめに

児童学科の岩井先生から５月の連休明け８号館の事務室脇で突然声をかけられた。「７月２日に地震のお話をしていただけませんか」と。私は「構いません」と即答した。

Gaya Café でよく話す，体格の似た崎原先生に，５月28日の夕方，社会福祉学科長の天羽先生に紹介された。直後に日付が入っただけのパソコン画面を見せられ「説明しないでいいから思い出した順に打て」と言われた。日記を書くように，最初から書き始め，思い出したことがあれば前に戻りながら書いていった。その他に鹿児島に戻ってから友人や親から聞いた話題の見出しとして11項目書き出した。永井荷風の「断腸亭日乗」の中で東京大空襲の折，彼が偏奇館を焼き出される前後を紹介された。空襲警報が地震速報に重なった。

６月20日の夕方，見出しの内容を書き出して，６月26日に親と確認して修正した。後半の７項目を加えた。この日，覚えていたが書いていなかったことを加えて「震災前後の私の行動」を仕上げた。

２．震災前後の私の行動

３月９日（水）

夜，鹿児島から東京へ飛行機で移動。
同日夜，夜行バスで仙台へ。

３月10日（木）

公開レッスンが無くなったため，実家（宮城県登米市：宮城県北で東は南三陸町，北は岩手県一関市）に帰って休む。

３月11日（金）

演奏会の練習のため，仙台へ。
地震発生。
叫び声やガラスの割れる音が聞こえた。
ビルの２階にいた。
向かいのビルが左右にぐにゃぐにゃと揺れていた。
外に集まり情報収集。
鹿児島の方と連絡を取り，「震度７，仙台津波到達予想６メートル」と大声で周りに伝達。
周りの人々はワンセグやラジオをつけ始める。
ハイルマン先生を迎えに仙台駅向かう。
仙台駅が立ち入り禁止になっている。
ビルへ戻る。
仙台の声楽の先生の車で喫茶店へ向かう。途中吹雪。ラジオでは津波到達の情報。
喫茶店で長居をすると迷惑がかかるため移動。
片平町小学校へ向かう。
途中，小さな公園で炊き出しをしているところがあった。救急テントもあった。
近くの家の窓が完全に割れ，ビニールシートで覆われていた。
小学校の体育館に到着。体育館はもうほとんど人は入らない。石油ストーブが通路に５つだけあった。
小学校にいると迷惑になるため移動。
喫茶店へ向かう。
親との待ち合わせに向かう旨を喫茶店の亭主に伝えると，夕飯を食べてから行きなさい。と言われたので，その喫茶店でご飯の準備ができるのを待つことにした。
ラジオをつけている人がいた。ワンセグでテレビを見ている人もいた。
急に地震速報が鳴り，外へ出た。が，何もなかったこともあった。
地震が起きてから地震速報が鳴ることもあった。
食事をいただく。
先生の自宅へ向かおうとしたところ，集まっていた方々が持っていた食料を分けていただいた。
先生の自宅へ向かう。
母，妹と合流。喫茶店でいただいた食料を二人に分ける。

知り合いの待つ銀行へ向かう。
七十七銀行へ向かう。知り合いを探したが，見つからない。
別の七十七銀行の小さな支店で，知り合いを見つける。
実家へ向かう。途中，静岡ナンバーの車が放置されていた。吹雪いていた。

３月12日（土）

実家に着く。
この日は空が晴れ渡っていて，星空がきれいだった。
妹を実家に置いて知り合いを岩手まで送る。
自分で運転しながら帰ってくる。
信号も止まり，道路は地割れだらけ。注意して走行するが，よく急ブレーキをかけた。
朝になると祖父母が動じず，いろいろ指示を出したりしていた。
給水車が２台来たので，妹と二人で並ぶ。その最中，体育館のほうで，食料を配給しているとのことで，私だけ食事を取りに行く。
食事をもらおうとして並んでいると，前にいたおばさんが後ろに一歩下がった。そしてその時私の足を踏まれた。爪をはがすような感じで踏まれ，血が出て痛みで意識がもうろうとした。妹に並ばせたまま家まで帰った。その後，母が迎えに行った。
家の近くの十字路の角にあるガソリンスタンドの列が，３方向数キロ続いていた。自衛隊の車も巻き込まれる。その日ガソリンの販売は行われなかった。
毎日ラジオで戦後の「訪ね人の時間」のようなものが流れている。夕食時などはそれを聞きながら食べる。ラジオでは毎日同じ CD しか流さず，１時間もすると最初に戻り曲が再生される。
水道は止まっていた。電気も止まっていた。プロパンだったので，ガスは使えた。
ガスの瞬間湯沸かし器も家にあり，使えた。でも水が流れている間だけ。
ご飯を炊くときは，土鍋を出して（カセットコンロで），ご飯を炊いた。
１日片付け。ガラスを撤去し，食器棚を戻す。土を捨て，壁を捨てる。数メートル動いていたピアノは元の位置に戻せなかった。テレビは無事だった。楽器もほとんどは無事だった。食器類も割れたのはあるが，半分近くは割れずに済んだ。
夕食は少し早目。暗くなる前に食べ始め，食べながら電気をつける。電池が心配。ろうそくも点ける。
夜はろうそく生活。電気もある分は使った。でも暗い。そして星がきれいだった。

３月13日（日）

演奏会当日。仙台へ向かい情報を収集する。途中車の中で携帯とパソコンを充電。車は少ない。
ガソリンを１リットル180円で売っているところがあった。やはり渋滞。
携帯電話の充電サービスを行っている携帯ショップがあった。一人15分。
仙台へ着く。メールが届く（36通）。仙台にいる間一斉送信で「生きていました」とメールする。
公衆電話で演奏会の責任者の方に連絡を取る。が，一向につながらず，あきらめ帰る。
夜，やはり星がきれい。電気がない生活。

３月14日（月）

実家付近の公衆電話を使う。が，電気が通っていないため使えない。
自転車に乗って町中の写真を撮る。
片付けの続きをする。
ガソリンを売り始めた。10リットルまで，もしくは1000円までの制限があった。自衛隊の車がいつ動き出すか分からないガソリンスタンドの列に巻き込まれている。他県ナンバーの車がかなり多く混じっていた。
時間制限で水道が復活した。使えるのは朝６時から９時，夕方５時から９時まで。久々にシャンプーをする。
鹿児島へ向け出発するため，荷物の整理をする。
夜，雲がかかっていたため，わずかしか星は見えない。

３月15日（火）

朝，東京に向け出発。ガソリンは片道分。都心でガソリンを入れる予定。
仙台に向かう最中，車の中からガソリンスタンド

に並ぶ車の列とスーパーに並んでいる人の列の動画を撮る。
仙台で知り合いから東京に行くのを止められる。このとき原発避難区域が30キロに広がる。
インターネットを使い，羽田に飛ぶ飛行機を調べ，いちばん近い山形へ向けて出発。
気温は氷点下。雪が降っていた。ノーマルタイヤを装着していたため運転は母が行う。
たくさんの雪が積もっていた。
山形空港近くのコンビニに入り道を尋ねた。棚には飲み物以外何一つない。
山形空港につき，お金を払い，チケットを購入。この時点で乗れることは確定していない。
名取から来たという方と知り合った。話を聞くと地震の直後マンションの部屋を出て扉を閉めると，ゆがんでいて扉が開かなくなったそうだ。その方の知り合いの家へ行き数日泊まったそうだ。夜は石油コンビナートが炎上しているため，真昼のように明るかったそうだ。
待っている間テレビを見たりした。久々のテレビ。バラエティー番組が放送されていた。
夜，無事チケットを取ることができ，東京へ向かう。
羽田につき，ロビーで一晩明かす。東京も微弱ながら揺れを感じた。周りは外国人ばかり。

３月16日（水）

キャンセル待ちで飛行機を予約し，朝一番の便で戻る。
Gaya Café で，久し振りにおこげのないご飯をお昼に食べる。そして写真と動画を見せた。
帰宅後，約１週間ぶりにシャワーを浴びる。
次の日電気が点き，その次の日，家族と連絡が取れるようになった。
地震の被害としては４月７日の余震のほうが大きかった。

３．鹿児島に戻ってから聞いた，家族や友人からの話。

「入場制限」（スーパー）

人々がたくさん並んでいる。一度に入店できるのは数グループ。店員の人数のみ。買い物の最中店員がずっとついてまわる。

「物々交換」

祖母が卵屋さんへ行って卵を買ってきた。それを近所の人々に分けたところ，農家なら野菜を。肉がたくさんある家なら肉を分けてもらった。

「同級生の話（石巻専修大学）」

５月24日同級生の学校が始まった。夏休みは4日だそうだ。彼の大学の被害状況。最大収容時に避難民が４号館に1000人。本館に200人。更にボランティアが1000人。色々徴収みたいな形で自衛隊にヘリポート貸し，現在でも体育館を市の合同庁舎に貸している。ウェイトルームを救護センターにした。現在でも５号館の１階をボランティアの事務所になっている。２号館を崩壊した看護学校に貸している。そんなに大学の被害はなかった。地震では学生が６人死亡。入学予定の新入生１人死亡だった。大学はけっこう備蓄あるから食料とか水とかけっこう分けたらしい。どのくらい備蓄があったかは分からないとのことだった。彼の父親の職場がつぶれた。彼の家族は全員無事だったらしい。石巻にいた親戚も無事だった。

「棺桶」（避難民の生活）

避難所で生活している人々は現在も何もすることが無い。だが，それでも体を動かさないと気が狂いそう。ということで仕事が与えられた。それは棺桶の作成。

「スーパーの店長」

母の知り合いのスーパーの店長さんのお話。地震の直後自分はどうなってもかまわないから人々をとりあえず逃がそうとして，外へ誘導した。すると，外へ逃げた人々が津波に飲み込まれたそうだ。自分はスーパーの中にいたから助かった。スーパーも無事だった。途中，水の中を水死体を手でかき分けながら歩いて帰った。自宅にたどり着いた。両隣の家は跡形もなくなっていた。真ん中にあった自宅には少しも水が入っていなかった。６月26日に母親に確認したところ，「水死体の事実は無いよ。嘘をつくのは止めなさい。」といわれた。裏の国道は寸断されていたことを教えられた。

「現在の死体」

五体不満足，腐敗が進んでいる，白骨化している。

「お墓」

山崩れで墓地の一部が流れた。４月７日の余震でさらに崩れた。

「気仙沼」

気仙沼の小学校などは電気も水道も復旧しないまま学校が始まった。６月に入り一部が復旧した。携帯も繋がるようになったが，固定電話は電話線が断線しているため使用不可。魚市場が６月16日から再開した。そこだけ電気が復旧した。

「避難民」

南三陸町から避難してきた人々は大体が西側に位置する登米市に来ていた。体育館にはたくさんのひとが詰め掛けていた。

「ガソリン」

聞いた話によるとガソリンを200円で売っているところもあった。ガソリンスタンドに朝４時に並び始めて車をその場に放置。10時から購入可能で，買えたのは10時半だった。１日１回タンクローリーがガソリンを運んでくる。電気復旧以前は手動でタンクから汲み上げて販売していた。現在142円。

「買い物」

ヨーグルト１つ，納豆なし，牛乳なし，卵なし，肉（種類，量は問わず）１パック500円，個数の制限あり。値段の制限もあり。

「親父」

牡鹿半島にある親父の家が跡形も無く流された。

「一人暮らしの部落のおばあさん」

６月12日に亡くなったことを確認した。遺体は見つかっていたらしいが，火葬していたためDNA 鑑定で判明した。

「祖母の知り合いのお米屋さん」

石巻の寿司屋さんにお米を届けて，寿司屋の店の人に「もう一軒配達してから帰る」と言い残して店を出てそのまま津波に飲み込まれ亡くなった。

「橋」

７月20日前後を目途に完成予定。

「ジャスコ跡地」

仮設住宅200戸完成。スーパーの駐車場や橋の近辺が常に渋滞するようになった。

「被災証明書」

母と祖母が被災証明書を役場発行してもらった。東北６県高速道路が無料となった。

「家」

南三陸町の町中の電気はほぼ復旧していない。人も家もないため。

４．記憶を整理する中で

地震の直後，自転車で自宅の近所の写真を撮りに出かけた。凄く興奮して撮影していた。鹿児島に来て，その写真をいろいろな人に見せる時も変な興奮があった。私は元々これを書き残そうとは思っていなかった。今回，機会を頂いて震災前後の私と周囲の状況を書いているうちに，とても冷静になって書いていた自分がいた。自分で言うのもなんだが，辛い体験だったと思う。が，私よりも辛い体験をして，現在も改善していない状況の中，生きている人々が生活していることを考えた。少しの差で命がこんなにも簡単に無くなるものなんだと思った。

少しでもリアルに伝わるように書いたつもりです。このお話で少しでも考えて欲しいと思いながら書きました。

シンポジウムに向けての楽屋裏

及川日乗の途中稿を聞きながら－新入生ゼミでの試み－

はじめに

ソーシャルワーカーデー企画として「東日本大震災をまえにソーシャルワークに問われること―災害時のソーシャルワーク―」が本学で開催された。この企画に児童学科の岩井先生の声かけで被災地出身学生として短大音楽科の及川さんが話題提供することになった。Gaya Café でよく雑談をする仲だったので，震災直後にも「久しぶりにお焦げでない御飯が食べられた」と言い，パソコン上の数十枚かの写真と動画を見せられたのを覚えている。自然とその話題提供の原稿をまとめる作業をつきあうことになった。学生にも感想を聞きたいと思い，新入生ゼミの一部を使い，途中稿を音読した内容について感想を書いてもらった。その後，及川さんに，学生たちの感想を読んだ感想に加えて現在の心境を寄せてもらった。なお，学生の強い希望により名前を出さなかった（崎原）。

学生の感想から

Ａ：東日本大震災の体験談を聞いて，自分が情けなくなった。しかしこれは自分と比べるものでもないと思うから，今日聞いた話を自分の中に生かしていきたい。これからなにが出来るのかを考えて，せっかくＳＷやＰＳＷを目指すのだから，そういう体験談を無駄にしたくない。

また，記憶についてだがどうしても忘れられなくて，もしくは不意に蘇って苦しむ人が大勢いる。絶対に自分を責めないで欲しいと思った。

Ｂ：聞いていくうちに深刻な気持ちになっていった。状況が現実的で，怖いという感情が僕をおそった。当たり前にあるものの大切さや身の回りにいる人々の暖かさが伝わった。その後は「恐怖」と「この話に恐怖した後悔」が大半だった。

Ｃ：東日本大震災の後の被災した人たちの生活は戦争があっている時の生活みたいだなと思いました。私は福岡西方沖地震を体験した時に地震の恐ろしさは理解しているつもりだったけど津波がなかったことや水が止まったりすることがなかった分マシだったのかと思えます。

文章の書き方が事実を包み隠すことなくそのまま書かれていたので前よりも地震が恐いと感じるようになりました。

Ｄ：今日は，実際に東日本大震災に遭った人の話（日記）を聞きました。３月11日，私は地元の自動車学校にいて，テレビを見て友達とおどろいたのを今でも覚えています。その時から何日かずっとテレビの報道を見ていて，毎回津波の映像などで，心が痛かった記憶もあります。でも，このように被災者の話を実際に聞くことで，映像とはまた違った感じ方がありました。その人がその時どう感じたのか，また自分だったら…と考えたりもしました。震災から３ヶ月たった今も，不自由な生活をしている人がいることを忘れてはならないと思いました。

Ｅ：短く区切られた文で書かれていた。

町の明かりがないと普段は気がつかないような「星がきれいだった」というようなことにも気付くのだなと思った。「五体不満足，腐敗が進んでいる，白骨化している」などの表現がリアルだった。伝わってきた。

Ｆ：今回の震災の悲惨さを改めて実感した。水道ガスも止まったり，ガソリンなど必要なものが不足して，被災者の方々は，本当に嫌な思いをしただろう。３ヶ月たった今でも被災者の方々の心の傷はまだいえていないだろう。そして，この震災は，きっと記憶に残ってしまうだろう。

私のできることは，募金や節電ぐらいしかないが，これからも小さなことでもコツコツと続けていきたいと思った。

Ｇ：東日本大震災で被災された人の記録を聞い

て震災の生々しさに驚いた。簡単な文章でつづってあったが，個人が体験した記録が淡々と示されていて，自分の頭の中でイメージができた。本人がどれほど大きなダメージを受けたのかを考えると自分もつらくなった。この震災で失くしたものは多いけれど，この出来事を忘れないように後に伝えていかなければならないと思った。

Ｈ：今日は東日本の地震の話だった。遅刻して途中から聞いていたけど，３か月前の出来事なのにしっかりと覚えている。鹿児島の人が東北に行って体験した話で，ニュースなどでは聞いていない事や，住民の苦しい生活などとてもリアルな話だった。世界中が日本がんばれとか，東日本がんばれなどと言っているけど，津波や大地震を体験してがんばれない人も多いと思う。
言うだけなら無責任だと思う。

Ｉ：淡々とした文章だったけど，逆にリアルに感じた。改めて震災の恐しさを考えることができた。ＮＥＷＳみたいに映像で見てるわけじゃないから自分の中で想像した光景が思い浮かんできた。日常の生活の中で，普段とは違うことが起こったら，それはいつでも思い出すことができると思うけど，こういう怖い体験は，私だったらもう思い出したくないだろうなと思いました。

Ｊ：人に聴かせる為の書き方じゃなくて，事実をメモする感じの書き方でも伝わることがあるんだなと思った。テレビとかの映像よりもリアルに思い描けることに驚いた。実際に本人の声で聴いてみたいと思った。テレビでは知ることのできない一面を見ることができた気がした。

Ｋ：被災地の様子がすごくリアルに思い浮かぶような文章だったと思う。避難した人たちの仕事がかんおけ作りだというのはとても残酷だと感じた。また，自分が思っているよりもつらく，苦しい現状だったということを思うと，とてもつらい。

Ｌ：なんでもないつい最近のことは忘れてしまうのに，地震という大きな出来事は一生忘れられないものになるのだと思った。記憶は良いことだけでなく悪いこともずっと覚えてしまっているので悪いことはすぐ忘れることができないものかと思う部分もあるが，地震という大きな出来事は同じ人間として大切に覚えておかなければならないものだと思った。

Ｍ：今，聞いた文の中で印象的だったのは，「星がきれいだった」という言葉。私には，この言葉が，全てを壊し，うばわれてゼロになってしまったことを強調してると同時に，きれいな星が，これからの小さな希望を意味しているように思えた。また，この文章には，一つ一つの事柄に対して，あまり自分の感情を書いていないように思えた。どのような意図なのかはわからないけど，そのことによって，聞く１人１人が作者の立場に立って様々なことを考えることができると思った。

Ｎ：文章の中に日付が入っていると，その文章がよりリアルに感じられたように思いました。また，１つ１つの文を聴いて，３月11日に起きた東北大震災のニュースで見た映像や，その時に思った感情を思い出しました。
もし，自分がこの震災の被災者だったら…と時々考えることがある。震災で受けた，耐えられない程の苦しみや悲しみは，きっと私たちの想像をはるかに超えるものなのだろう。

Ｏ：文章だけだったが，聞いたことを想像するだけでちょっと恐いと感じた。地震発生からの日々の大変さがリアルに感じられて，その日記を書いた人が無事で良かったとも思った。テレビなどで地震があった場所のことは見れても，実際に地震を体験した話を聞けたのは，貴重で考えさせられる面もあった。自分も３月11日に地震があったことは一生忘れないでおこうと思った。これから被災地が復旧していくところをちゃんと見て知っておきたいと思った。

Ｐ：細かいことから，大まかなことまで書かれていました。また，他の人から聞いた話も，想像ができるように書かれていました。細かいところ

までは想像できなかったけれど，だいたいは想像することができました。しかし，今，私が想像をしているのよりも，実際に現地にいる人たちは，身近な出来事であるので，実際は想像を絶するものだったと思いました。

及川和之さん：学生の感想を読んで，現在の心境

一体東日本大震災のことはどれだけ伝わっているのだろうか。

リアル，頭の中でイメージ，一生忘れない，恐ろしさ，日常と非日常。

感想のなかに沢山出てきた，あるいは私が少し考える部分があり引っ掛かった単語です。

正月に宮城の同級生に「新年明けましておめでとう！」メールをしたら「震災のこともあり，知り合いの身内の安否を把握していなかったので送るべきか迷い，失礼があってはならないと今年度は誰にも送らないことにしておりました。」と返ってきました。ほかの宮城の同級生にこのメールの前に何通か送ったりしましたが，返ってきませんでした。私も鹿児島に住んでいるせいか，東日本大震災が遠くの出来事のように感じてなりません。

メールが返ってきた同級生と数度にわたりメールをやり取りする中「『ひと思いに殺してくれればよかったのに』」と身内を亡くした方は言っていたそうだ。」と書いてありました。

感想を読み，感じたことはやはり「他人事」だということです。テレビで見た，ニュースを見た，東北に行った人の話を聞いた，これから出来ることをしていきたいと思う。実際に経験していないから他人事なのは当たり前です。

私は声楽を専攻しています。歌に自分勝手な気持ちやイメージを乗せて届けています。だから押し付けがましく言います。この震災をもっと知ってください。今でも宮城，福島，岩手ではたくさんの人々が生活しています。生きています。

私は今これを書きながらも津波の被害に遭った市町村の風景，震災当時のことを思い出しています。そして自ら問い直しています。新年の挨拶メールを送れる位の気持ちがあるなら，地元で生活できるかと。

介護福祉コース創設10周年企画シンポジウム

『介護の魅力を発信する』に参加して

～大学で介護福祉を学ぶ意味と有効性を考える～

医療法人恒心会　おぐらリハビリテーション病院
川　崎　信　也
2007（平成19）年卒業

１．自己紹介

久しぶりに会う友人や親戚に，「仕事何してるの？」と聞かれることがあります。“ソーシャルワーカー”と答えても，ほとんどの人はピンと来ないものです。その度に私は「じゃあもし明日，あなたの身体が動かなくなったらどうする？」と不謹慎な質問をぶつけ，「治療は？」「お金は？」「食事は？」「家は？」「仕事は？」と不安を煽り，「そういう困った状況にある人たちの問題をひとつずつ解決していく仕事をしております」と答えることにしています。ヒーローのような大げさな表現かもしれませんが，それほど間違ってもいないかなと思っています。私は病院でソーシャルワーカーの仕事をしています。

そんな私に実習センターから電話がありました。「シンポジストとして，高校生と在学生に仕事の話をして欲しい」と。実は介護福祉士養成大学連絡協議会「高校生向けイベント」を，介護福祉コース創設10周年の今年10月22日に行うことになり，当日のシンポジウムの話題提供者になってほしいという依頼でした。当日は午後13時20分から田中安平先生による模擬授業「介護の不思議・楽しさ」，高齢者模擬体験と続き，岩崎房子先生がコーディネーターをするシンポジウム「介護の魅力を発信する～大学で介護福祉を学ぶ意義と有効性～」が決まっていました。私以外にも同期の中元さん，２期後輩の山内さん，前下さんも話をすることが分かりました。

２．引き受けたのは良いものの…

私は平成15年に本学へ入学し，介護福祉コースに所属しました。最終的には社会福祉士と介護福祉士の２つの国家資格を取得しています。当時の介護福祉コースは創設されて間もなく，私はその２期生でしたが，今や10期生を迎える歴史を重ねたことを知り，嬉しさを感じています。その古巣である介護福祉コースの後輩たちを前に，シンポジストとして参加するチャンスを頂き，誇らしく思いました。

しかし頭を悩ませたのは，「介護の魅力を発信する」というシンポジウムのテーマでした。前述の通り，私の仕事は病院のソーシャルワーカーであり，介護福祉ではありません。確かに介護福祉士の資格を持っているのは事実ですが，果たして私に「介護の魅力」なるものを発信できるのか，不安がありました。

３．準備

さて，この大役を果たすにはどうすべきか。前途有望な高校生や在学生に向けて話すのですから，先輩として恥をかくわけにもいかない。そもそも自分がなぜ介護福祉コースに所属し，どんな大学生活を送っていたのか？そして，今自分がしている仕事はどんな仕事で，具体的にはどんな役割を担っているのか？そもそも，医療ソーシャルワーカーとは何なのか？？こうして自問自答しながら自分自身について振り返ってみると，いろいろと気づかされることがあります。原稿をまとめながら，「これなら少しは介護の魅力を発信できるかな」と思えるようになりました。

そして当日。数年ぶりに足を踏み入れるキャンパスはどこか懐かしく，学生時代の様々な思い出がよみがえります。教室に入り，聴講に訪れた高校生や在学生を前にすると，それなりに緊張感が漂ってきました。そんな中で，シンポジウムが始まりました。

４．いざ，発進！！　～介護の魅力を発信する

そもそも，なぜ自分が介護福祉コースを選んだのか。その理由を思い起こしてみると，入学間もない時期に説明会で聞いた「介護の現場を知らないと，福祉の現場では働けない」という言葉があったからだと気づかされます。この言葉は介護福祉コースの田中先生の言葉です。本学の介護福祉コースでは，介護福祉だけではなく，同時にソーシャルワークについても学び，将来的には介護福祉士と社会福祉士の２つの国家試験受験資格を取得できるのが特徴です。当時から田中先生は鹿児島県介護福祉士会の会長を務めていらっしゃいましたが，その先生の「介護福祉を理解した上で，社会福祉士として活躍してほしい」という考えに共感し，介護福祉を学び始めました。

しかし実際の介護福祉の授業は思うほど簡単ではなく，非常に専門性にあふれているものだと気付かされました。ひとつひとつの介助方法は理論付けられた技術であり，またその技術を駆使する相手はパワーレスな状況にある人ですから，心理状況にも気を配りながら接しなければならない。この難しさを痛感したのは実際の施設での介護実習でした。高齢者や障害者の方々を目の前にして，いかに自分が無力な存在であるかを嫌という程思い知らされます。ただ，私たち介護福祉コース生は，介護福祉を学びながら，同時にソーシャルワークについても勉強していました。支援者としての言葉かけや態度，相手と同じ目線に立ち，相手の想いを傾聴する。そういった相談援助の技術も駆使しながら，介護者として利用者と接することは非常に興味深く，実習も苦ではありませんでした。

そして大学を卒業後，私は現在病院のソーシャルワーカーとして働いています。入院している患者様は，病気やケガによって「治療で良くなるのか…」「どこまで回復できるだろうか…」などの不安を抱えている方がほとんどです。そのような方々の「困ったこと」を詳しく聞き，どうすればうまくいくかを一緒に考え，解決への糸口を探るのがソーシャルワーカーの仕事です。現在私が所属しているのは回復期リハビリテーション病棟といい，主に骨折や脳卒中により後遺症や障害を負った患者様に対してリハビリを提供する病院です。その中で，ソーシャルワーカーは患者様の退院援助の役割を担っています。自宅に帰れるように，福祉サービスの手配をする，自宅に帰ることが難しい場合には施設や転院できる病院を一緒に探す，時には患者さんの利益の為に行政機関へ働きかけを行うこともあります。入院している患者様が抱える様々な悩みや問題に対し，ソーシャルワーカーとしてどう応えられるのか悩み続ける毎日で，決して簡単な仕事ではないと思っています。

そんなときに，時々患者様やご家族から「ありがとう」や「あなたのおかげで」という言葉をかけてもらえることがあります。何気ないひと言ですが，それは私を元気付け，エネルギーを補充してくれます。そして，自分が患者様に何かをしているのではなく，自分自身も患者様やご家族から何かを与えてもらっているんだと気付かせてくれます。私はこの仕事をする上で，支援者として相手の立場に立って物事を考えられる存在でありたいと願い，心がけながら向き合うようにしています。それが，私が本学の介護福祉コースで学んできたことであり，自分なりに考える「介護福祉やソーシャルワークの魅力」だと思うからです。

５．おわりに

今回，シンポジストという貴重な機会を与えていただいたことで，自分の過去を振り返りながら，現在のソーシャルワーカーとしての仕事の魅力も再発見することができました。貴重な機会を与えてくださった本学の関係スタッフの皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。

研究ノート

ソーシャルワーク・リサーチを学ぶ意味
社会調査実習を履修して

社会福祉学研究科博士前期課程１年　長　崎　徳　子

はじめに

私は2010年度に「社会調査実習」を履修した。履修したのには二つ理由がある。ひとつは，2009年４月からの社会福祉士養成のための新教育カリキュラムでは，今まで社会福祉援助技術の中に含まれていた「社会福祉調査法（ソーシャルワーク・リサーチ）」[注)]の一部が，「社会調査の基礎」という一つの科目として独立した。つまりソーシャルワークにおいて，社会調査の重要性が高まっていると思ったからだ。二つ目の理由は，４年になり時間に余裕ができたので，「社会調査士資格」と取得しようと思ったからだ。社会調査士資格取得には，社会調査実習を履修する必要がある。

本稿では，社会調査では，実際に何をどのように体験するのかについて紹介したい。体験を通じたソーシャルワーク・リサーチの重要性について，アウトリーチ，訪問面接，社会調査，そして自己覚知とは何かの視点から若干の考察を行いたい。

社会調査士資格取得に要する科目

社会調査とは，各種の統計調査，マーケティング・リサーチや基礎資料作成などが該当する。

「社会調査士資格」は，社会調査の企画，設計ら実施にわたる必要な理論と技法を修得し，社会調査に携わる専門的能力を有することを認定する一般社団法人・社会調査協会による専門資格である。本学では，現代社会学科に設けられた資格課程科目を履修することで取得でき，これまでは現代社会学科の学生しか申請できなかったが，2010年度から，私たち社会福祉学科の学生も　必要な科目を履修すれば「社会調査士資格」を取得できるようになった。

現代社会学科で，「社会調査士」の資格取得ができるようになったのは2006年度からで，2009年度は16名が取得している。社会調査士資格取得に要する科目は表１の通りである。Ｇの社会調査実習は，本学では，1982年の社会学部創設以来行われており，歴史がある科目でもある。2010年度は，６名の教員で，約40名が，履修した。私たち社会福祉学科では，３名が「社会調査実習」を履修した。

表１　社会調査士資格取得に要する科目

一般社団法人・社会調査協会による標準カリキュラム	本学における授業科目	単位
A　社会調査の基本的事項に関する科目	社会調査論Ⅰ	2
B　調査設計と実施方法に関する科目	社会調査論Ⅱ	2
C　基本的な資料とデータの分析に関する科目	社会統計学Ⅰ	2
D　社会調査に必要な統計学に関する科目	社会統計学Ⅱ	2
E　量的データ解析の方法に関する科目	量的データ解析法	2
F　質的な分析の方法に関する科目	質的データ分析法	2
G　社会調査の実習を中心とする科目	社会調査実習	4

注）必要単位（ABCDGは必修，EFから１つ選択）を修得し，書類・手数料と共に(社)社会調査士協会に申請する必要がある

2010年度の社会調査実習

2010年度の社会福祉学科の社会福祉調査実習は，「地域の一人暮らし高齢者の生活と福祉サービスの利用」というテーマで行った。ここでは私が関わった部分を中心に紹介したい。

１）研究目的

地域生活を続けている一人暮らし高齢者の生活

実態と社会福祉ニーズを知り，地域包括支援センターや社会福祉協議会が中心になって行っている地域福祉ネットワークづくりに役立てること。

２）研究の背景

介護保険導入後，サービスの基本は，「家族同居か，独居か」といった社会的境遇よりは，高齢者の体の状態によって要援護性を図るようになった。しかし，結果として，要介護度が出ない高齢者に対するサービスは，極端に減っていき，元気であった方が，急に体をこわして亡くなるというケース発見が遅れて死に至るケースも増加してきている問題もあり，一人暮らし高齢者をいつでも見守れる地域福祉のネットワーク活動が注目されてきている。

３）研究の意義

一人暮らし高齢者のライフスタイルも多岐にわたっており，これらの人達の社会的ニーズや置かれている境遇について，今ひとつ実態が　把握できていない現状がある。福祉サービスの見直しが行われ，「地域の高齢者ニーズがどのように変化してきているのか」を知ることは，今後の福祉施策や活動を考える上で重要であると考える。

４）研究方法

個別面接で，高齢者の置かれた状況，社会的ニーズの把握を行い，訪問面接によるアンケート調査を実施。この調査の事前学習では，調査プロセスについての　基礎理解，質的研究方法や量的研究方法を学習したり，今回は枕崎市の高齢者が対象だったので，枕崎市社会福祉協議会の方から枕崎市の社会資源や問題点を伺い，対象地域やそこに暮らす高齢者の課題点の把握に努めた。

また，調査内容を深めるため，一人暮らしの高齢者と高齢者夫婦世帯に，それぞれで個別インタビューを行った。その後，それぞれが逐語録の作成し，それをみんなで分析し，高齢者の置かれた状況，社会的ニーズの把握を行い，その結果から導き出した課題や問題点を考慮し，調査項目をピックアップして行った。

調査項目は，基本的属性を除き全体として９項目（①健康，②食事と栄養，③買い物，④日常生活，⑤家族，近隣とのつきあい・相互扶助，⑥社会活動，⑦福祉サービス利用，⑧孤立と信頼，⑨枕崎市への意見）あり，内容は多岐にわたった。

アンケート調査は，平成22年６月12日から14日及び30日で，枕崎市社会福祉協議会との共催で，枕崎市在住の高齢者ひとり暮らし世帯及び高齢者夫婦世帯（4347人）から，無作為に289名を選び，個別訪問のよる面接調査を行った。回収数は155，回収率は53.6％。

調査結果のうち，私は，「健康と栄養」について担当した。他の２人は「買い物と日常生活」，「地域のつながりと相互扶助」について報告書にまとめた。本稿では，統計的検定などの詳細を除いた結果の概要とそれに基づく考察を紹介する。

５）結果と考察

①健康面について

介護保険の介護度の問いでは，「自立認定」が９割以上を占めたが，「現在，医療機関にかかっているか」という問いでは，「通院している」が８割以上であった。枕崎市のひとり暮らしの方は，なにかしらの疾病をかかえ，８割以上の方が通院しながらも，介護保険サービスを利用することなく，自立した生活をおくっていた。介護に関しては，本調査では，ひとり暮らしの方も　夫婦世帯の方も重度（介護度４，５）の要介護者はいなかった。これは，介護が必要になると，「ひとり」はもちろんのこと，高齢者夫婦世帯でも地域で暮らすことが困難であるということ考えられる。逆に言えば，自立又は軽度の介護度でなければ，すなわち，「ある適度の元気な高齢者でなければ，住みなれた地域で生活することが不可能である」ということではないだろうか。

②栄養面について

食事を自分で作ったかという質問に対して「ほぼ毎日」が，ひとり暮らし女性では８割以上であるのに対し，男性は５割であった。自分で作らない人が３割以上いた。家事が苦手な男性の姿が見えるが，こうした人たちは，別居家族が作ったり，総菜ですませたりしているようだった。食事の回数は，１日３食が全体では，９割以上であったが，ひとり暮らし男性になると，約５割にまで落ち込んだ。また，栄養状態についても有意にひとり暮

らし高齢者の男性は，夫婦の男性に比べて，食事のバランスが悪かった。

今回の調査では，高齢者ひとり暮らし世帯と高齢者夫婦世帯の生活状況を比べることで，「ひとり暮らし」の暮らし辛さを明らかにするつもりであったが，性別的役割分担の問題が浮き彫りにされ，まさにジェンダーの視点からの検討が求められよう。高齢者男性の社会的特徴として，家事能力が低く，一般的に女性に比べ地域社会との交流が気薄であることもあげられる。

これらの結果から，介護を必要とする高齢者が住みなれた地域で　自立した生活が送れるようにするためには，介護，医療のみならず，介護保険制度の給付対象になっていない新しいサービスの開発が課題となると思った。それは，栄養バランスの整った配食サービス，独居の男性を対象とした栄養指導や調理教室など，高齢者男性の社会参加の促進も考えていかなければならず，日常的ネットワークによる地域生活支援サービスや地域包括ケアシステムが求められると考える。

６）着手すべき課題

先述した結果と考察から，着手すべき課題として何が指摘されたかについて担当教員・高橋教授がまとめたものから該当する部分を引用したい（枕崎高齢調査「ひとり暮らし・夫婦世帯を中心とした生活実態調査」報告書より）。

①買い物と食の支援（食の砂漠化への対策）

枕崎市には，多くの地域で食の砂漠が進行していると予想される。これらに対しては，一方で，コミュニティバス等を走らせること，移動販売車等によって買い物の利便性を高めること，また給食サービスを充実させる等の対策が考えられる。外国の例では，町づくり委員会が案を練り，対応策を打ち出したりしている。ことに給食サービスは，過去において鹿児島では，充実したサービスが展開されてきたが，国の補助のあり方が見直され，現在，国のサービスとしては終焉を迎えたとまで語る学者がいるほどに衰退化している。

ここでもう一度，給食サービスのあり方を食の砂漠化対策という視点から新たに見直すべきだろう。自由記述の中でも，「交通の便」に言及した意見が最も多かった。食の支援を含む交通網の整備に取りかかり，隅々まで血の通う地域社会づくりをめざすべきであろう。

②ひとり暮らし男性高齢者の課題と支援

今回の調査で，明らかになったもう一つの点は，ひとり暮らし高齢者の生活課題である。ひとり暮らし高齢者は，食事の回数や栄養バランスにおいて，問題を含んでいるように見えるが，それだけにとどまらず，会話の状態，友人，頼れる人の状況からみても，社会的孤立の程度が高く，そうした点からも支援をする対象と考えられる。「コミュニケーションの目的としても給食をとっているが，配達の人とのコミュニケーションがない。声かけすらない（誕生日の声かけが以前はあった）」というのは，男性ひとり暮らし高齢者の声である。ひとり暮らし高齢者への支援は，男女にかかわらず，考えねばならないが，ことに男性高齢者においては，深刻であるように思う。

地域福祉活動としては，以前から社会福祉協議会が中心になって行ってきた小地域ネットワーク活動，ひとり暮らし高齢者の見守り活動を在宅福祉アドバイザーが行ったり，いきいきサロン活動などがあるが，男性高齢者の参加が少ないなどの問題も以前から指摘されている。ひとり暮らし高齢者がふらっと立ち寄れるコミュニティカフェのような場所も必要だろう。

ソーシャルワーク・リサーチの重要性

2000年４月に施行された介護保険制度は，老後の最大不安である介護を社会全体で支える仕組みとして創設された。つまり，『介護の社会化』である。また介護保険制度は，措置から契約へ，施設から在宅支援へと高齢者福祉を大きく方向転換し，高齢者は住み慣れた地域で，社会的介護を受けながら，自立した生活が送れることができるようになったはずある。しかし，誰にも看取られず亡くなる「孤独死」，「高齢者虐待」など，高齢者を取り巻く環境が良くなっているとは言いがたい。

ところで，アウトリーチとは，直訳すると「出向く，手を伸ばす」という意味であり，福祉領域では元来，「援助者の元に出向いていくこと」，即ち「家庭訪問」である。クライアントの表明され

ないニーズの把握の手法である。クライアント本人，またはクライアントに関係する周りの人々から，クライアントの表明し得ない潜在的ニーズを把握することになる。

TV や新聞で報道されている事件や，図書やテキストの中の出来事は，現実としてなかなか実感できない。しかし，その現場に足を運び，自分の目で，耳で，肌で感じれば，「そこでは，起こっている」こととして実感できるのではないだろうか。ソーシャルワーク・リサーチとは，社会福祉にかかわる社会事象を明らかにすることを目的に，そのデータ（事実・数値）を収集し，整理・分析する過程および方法であり，その方法や技術は一般的な社会調査と同様である。特に社会福祉の実際，つまり現状やニーズを把握し，対応するサービスや方策の問題を明らかにして，問題解決や実践活動の改善のための資料を提供することになる。

今回の社会調査実習では，訪問面接を何件も行うなど，福祉施設の現場実習でもなかなか学べない，貴重な体験でき，自己覚知の機会にもなった。ソーシャルワーク演習で，ロールプレイとして面接を行うことがあったが，講義で行ったように上手くできないことがわかった。初めてのお宅にお邪魔して，お話を伺うことの難しさの中で不得意なこと，上手くできることなど，自分を知る機会になった。ボランティアで参加してくれた大学院生が「インテーク面接のようだった」と語っていた。また個別訪問面接法を使った今回の調査は，アンケート用紙を使った構造化面接法の一種であるが，そこで語られる内容は，しばしば，調査項目以上のものを含み，場合によっては１時間を超える面接が何件もあった。

またソーシャルワーカーは調査結果をもとに最善の援助サービスを選択し，提供しなければならい。今回の調査結果は，昨年４月に枕崎市で行った「枕崎市高齢者調査報告と高齢者支援シンポジウム」の中で報告をした。参加者から「ひとり暮らしの高齢者，特に男性が，社会的孤立の傾向にあるのは驚いた」や「男の料理教室は３クラスもあり，好評なのだが」など意見や感想があり，課題やこれからの支援の在り方，連携の在り方を考えるための「気づき」や問題提起ができたと感じた。地域住民にその結果を報告することもソーシャルワーク・リサーチでは重要な意味を持つと再認識した。

おわりに

今回の社会調査実習を通して，ソーシャルワーク・リサーチは，生活実態と社会ニーズを知ること，それは地域福祉ネットワークづくりに役立てることを目的とするものであること，また，地域福祉を行うためには，社会調査の知識や技法が，ソーシャルワーカーには不可欠であり，ソーシャルワーカーが，社会的事実を認識するための方法として，社会調査に関する知識と技能を有し，それを活用することが求められていると痛感した。

また，報告書にまとめていくうちに，地域福祉について考えるようになり，当初の卒論のテーマから大幅に変わり，「地域包括ケアシステムの実現に向けて―介護保険制度下の高齢者支援―」というテーマで，書き上げることができた。そして，今，その「気づき」は，修士論文で，「社会的孤立」や「インボランタリー・クライエント」，「地域包括ケア」，「見守り」をキーワードに，その問題や課題の介入，地域で展開する援助技術について研究していきたいと考えている。

最後に，私がこのような貴重な経験をできたのは，調査実習担当教員の高橋教授のおかげであり，ご協力いただいた枕崎市社会福祉協議会，雨降る暑いあの日一緒に汗をかいて下さった高橋ゼミの学生や OG の方々，また，アンケートに答えてくださった枕崎市民の方々おかげである。感謝申し上げる。ありがとうございました。

注）社会福祉援助技術は，直接，間接，関連の３つの援助技術に分けられ，社会福祉調査法（ソーシャルワーク・リサーチ）は，間接援助技術の一つとされている。本稿では，経済的，政治的マーケティング調査や世論調査の社会調査と区別する場合，ソーシャルワーク・リサーチとした。

※　本稿は平成22年度文部科学省・大学生のための就業力育成支援事業『自分の言葉で表現できる』学生の育成にて事例報告した「社会調査実習」に大幅な加筆修正をしたものである。

レポート

ソーシャルワーク演習Ⅲ
雑談：実習で見えてきたことと課題

３年　富山　円　久保愛美　福留詩織　社会福祉学科　崎原秀樹

１．はじめに

昨年は，社会福祉入門Ⅱの課題・施設見学記録を取り上げた。２回目の今回はソーシャルワーク演習Ⅲを取り上げたい。本年度の本演習は，夏にソーシャルワーク実習を行った学生を対象に一クラス12名前後の６クラスで行った。ここでは社会福祉法改正とソーシャルワーク演習Ⅲに触れてから，本学のソーシャルワーク演習Ⅲで求められるものについて言及した後，筆者が担当したクラスの方針と方法，結果の一部として学生の作品とレポートを紹介したい（崎原）。

２．社会福祉法とソーシャルワーク演習Ⅲ

2007年の「社会福祉法及び介護福祉法」改正に伴い社会福祉士受験資格に必要なカリキュラムも新しくなった。その演習教育のシラバスによれば，本学のソーシャルワーク演習Ⅲに相当する「相談援助実習後に行うこと」として「相談援助に関わる知識と技術について個別的な体験を一般化し，実践的な知識と技術として習得できるように，相談援助実習における学生の個別的な体験も視野に入れつつ，集団指導並びに個別指導による実技指導を行うこと」とある。

３．ソーシャルワーク演習Ⅲで求められるもの

本学のシラバスによれば，ソーシャルワーク演習Ⅲのテーマは，「ソーシャルワーク実習で体験し習得した知識と技術を確認し，専門職に対する理解を深めると共に自らに定着させるきっかけとする」とある。概要には「ソーシャルワーク演習Ⅰ・Ⅱの内容の連続線上にある科目である。ソーシャルワーク実習体験は，教室での講義や演習による社会福祉実践の理解がどの程度であったかを，自らの表現行動，知識内容，対人技術力を客観視する機会になったと考えられる。実習先スーパーバイザーによる評価を視野に入れながら，分野を超えて，ソーシャルワーク実践に関する基本的な知識をさらに広げ，技術を深める」とある。授業の到達目標として実習体験を活かして１）会話による自己表現力，２）文章による自己表現力，３）コミュニケーション力，４）アセスメント力，５）マネジメント力の５つの項目の強化が挙げられている。

４．担当者のソーシャルワーク演習Ⅲの方針

人は家族，遊びや仕事仲間あるいは学校や仕事組織における関係の中を生きている。これらの関係という「世間」「社会」を生きる上でぶつかる課題や悩みに，手持ちの力で向き合い「共に生きるかたち」を描けるように援助するのがソーシャルワークと実感してきた。担当者自身，障害者福祉や教育の現場で働く中で，壁にぶつかり「共に生きるかたち」を模索する中で，「世間」「社会」を生きる人として援助され，成長する過程であったし，これからも変わらないであろう。

ソーシャルワーク演習ⅠⅡとの関連で，本演習Ⅲを「異なる分野で実習した者で編成するクラスで，ソーシャルワークについて実習を互いに振り返る中で，個別性を十分視野に入れながら互いに話し合える共通の文脈や土俵をどのように作ったらよいか実感させる場にしたい。そのためには自分の実習を他者に伝える中でさらに掘り下げて検討する。他分野の実習の話を聞き，自分の実習との比較を通じて，どのように質疑応答してその内容や方法の理解を深めたらよいかを検討できる場に」したいと位置付けてきた（崎原，2011）。

５．担当者のソーシャルワーク演習Ⅲの内容

初回は実習で印象に残っていることを一人ずつ話してもらい，適宜担当者が質問をして内容を明

確にした。２回目は，他のメンバーに聞きたい事を書いた紙を裏返して中央の机の上に置き，順番にめくりに行き，その質問に答えた。３回，４回を通して全員に話してもらい担当者が質問した。４回目の残り時間に各自の話したことを書く機会を与えた。５回目～９回目までは毎回数人ずつ話してもらい，聞いている学生が質問してそれに答えてもらった。10回，11回では，今までの成果を基に授業内で文章化させた。終わらない分は宿題。12回，13回では作成した文章を順番に報告して質問をもらい修正を加えた。14回では，作成した文章を作品集としてまとめる際の最終調整と題名を考えてもらった。また「ソーシャルワーク演習Ⅲを振り返って」を書いてもらった。最終回は，図書館４ＦのGaya Caféで，お茶会形式で行った。前日までに配布した作品集「雑談：実習と向き合ってみえてきたことと課題」を読んできてもらい，その感想を言った後はフリートークにした。

雑談：実習と向き合って見えてきたことと課題

１．木下音子　百聞は一見に如かず～２つのギャップと私の盲点～
２．久保愛美　利用者さんの休日について
３．下園歩　会話をするまでは･･･～ある一人の男性との出会い～
４．枝元翔平　訪問介護実習で知ったコミュニケーション～表情や目線，体の動きから読み取る相手の思い～
５．西園翔平　家出の本当の理由
６．西山美幸　食べることにこだわって
７．江口希望　30分で変わるイメージ
８．富山円　おとなとこどものあいだ～ふたりの時間ができるまで～
９．福留詩織　実習最大のピンチ～傷だらけの戦い！！～
10．川崎夢望　気づいて調べて知りました。そして･････
11．浜田武　疲れるけど楽しい会議同行記～買い物に付き合い寿司食ってそして･･･
12．麻生陽平　利用者とのコミュニケーションで体験したこと～何のために質問するのか～

課題：ソーシャルワーク演習Ⅲを振り返って

資料（前述２．３．のこと）を参考にして本演習Ⅲでは，何をどのように取り組んで来たかについて貴方なりに振り返って下さい。どのような内容をどのような方法で取り組み，その中で何についてどのように考えさせられたか書いて下さい（最低600字以上）。それに基づき，本演習Ⅲを通して改めて，ソーシャルワーク実習におけるアセスメント力とは何か，マネジメント力とは何かついて貴方のことばで書いて下さい（各最低200字以上）。

６．担当者のソーシャルワーク演習Ⅲの方法

人の営みを，社会福祉がどのように捉え，どのように関わるのかを検討する際の原点は，体験したことを朝起きてから夜寝るまでの出来事として，聞く人や読む人もその場に参加しているかのように感じられるように話せること，書けることだと考えて現場で働いてきた。したがって社会福祉現場での日常，そこで出会う人の他の場面での生活の積み重ねも含めてどのように表現するかについて，まず本人が印象に残っていることから話させ，次に担当者が学生の話を聞き，必要と思われる視点から突っ込みを入れる中で話の輪郭や筋道を見える作業を行った。一人の学生が話したことを，聞いていた学生が質問して担当者と同じ作業を行わせた。その後，原稿に書かせ報告させ質疑応答を繰り返す中で作品としてまとめさせた。

この作業自体が面接，つまりコミュニケーションを通して，体験したことや聞きたいことをどのように自己表現し，文章で書く作業を行うことになったと思う。実際，他者の体験も聞くことも含めて体験をどのように振り返り，次に何をしたらよいかを発見する作業につながったようである。課題としてその作業とそこで考えさせられたことを学生に書かせることも方法の対象化につながり，実習体験，本演習を通じてのアセスメント力やマネジメント力とは何かを書かせる中で，座学のそれとをつなげて考えさせることになろう。

以下に紹介する３名の成果が，担当者の意図とどのように重なり，あるいはずれるかの視点から読んで頂けるとありがたい。

文献　崎原　日本社会福祉学会九州部会第52回研究大会報告要旨集54～55　2011

おとなとこどものあいだ
～ふたりの時間ができるまで～

３年　富山　円

はじめに

このソーシャルワーク演習の時間Ⅲに，みんなそれぞれ実習中にあった何らかのエピソードを話した。しかしいざ自分の番となると，わたしはその時の状況や感情をうまく話せないことが多かった。これから記すＡちゃんとの関わりも，ふと思い出した実習最終日の記録場面を話したのがきっかけだった。先生やみんなの質問にそってＡちゃんとの関わりについて時間をさかのぼって思い出したり，ある場面の細かい状況を少しずつ話したりしていった。そこから実習の最中には見えていなかったことに気づくなかで広がっていった。

実習中の毎日のちょっとした時間の共有から生まれた何かが，Ａちゃんが私に心を向けてくれる結果に繋がったのだと，今日まで振り返りを繰り返すなかで実感できた。少しだけ「おとな」な部分を持つＡちゃんと少しだけ「こども」な部分のある私が近づき，これから記す以下のやり取りを経て，最後の会話へと導かれたのではないだろうか。

実習の始まり，Ａちゃんとの出会い

実習中は，中学生や高校生とはあまり関わりを持つことを重要視しなくて良いと職員の先生方からオリエンテーション時・実習中に言われていた。実習期間では，自分が指導や支援するという立場よりも，先生方と子どもの関わりを見て，関わり方や言葉かけの方法を見たり聞いたりして学ぶ事を重視された。私はそこに，少し疑問を感じていた。実際にやってみて分かることもあると考えていたし，子どもの実態把握の上では関わっていくことが必要だと考えていたからである。

実際に実習が始まると幼児さん・小学生との関わりが１日の大半で，毎日そのことに追われ，疑問については考える暇もなかった。そんな中でも，ひとりの高校生とのエピソードがある。そのＡちゃんは高校３年生で，今年度から自立支援棟で生活している。食事や入浴，掃除の場面はみんなと共に行動するが，それ以外は自分の部屋で時間を過ごす。Ａちゃんは園内の女子の中心的な存在で，低学年だけでなく園の子ども達みんなの面倒見が良い。食事や入浴の際には，率先してリーダーシップを取り，職員からの信頼も厚い。

自立支援棟と職員寮が同じ場所にあり，実習生も職員寮で生活させて頂くので，Ａちゃんとは実習時間以外でも顔を会わせたり，挨拶をすることが多かった。むしろ実習で私が幼児さんや小学生と外で遊んでいる時，Ａちゃんは自分の部屋で過ごしていたので，Ａちゃんとは時間外での関わりのほうが目立っていたように思う。

わずかな時間の共有

実習も終盤に差し掛かったころ，高校の体育祭が行われる日のことだった。その日私は早番だったため，朝起きて顔を洗いに洗面台に向かうと，もうすでに体操服に着替えたＡちゃんがいた。窓の外の雨を気にして，不安そうな表情を浮かべていた。今までに見たことのない表情だった。「小雨だったらあるんですよね…」とＡちゃんは心配そうな声で言うので，「あっちの空，晴れてるから大丈夫だよ」と私は答えていた。私はその時Ａちゃんが体育祭をとても楽しみにしていたのだと感じ，Ａちゃんの素直な感情に触れた気がした。その後別れてからも，私は天気をずっと気にしていたように思う。夕方，体育祭が無事に終わり，「ただいま」の挨拶をしにきたＡちゃんが，私に対しても挨拶してくれ，にっこりと笑顔を見せてくれた。私が「どうだった？」と聞くと，「優勝した‼」と，とても輝いた表情で報告してくれた。他の高校生たちの表情をみても，とても晴れやかだった。

立ち止まる，心と心のスタート

次の日，私は実習終了の日を迎える。体育祭の振替えで，休みだったため，ほとんどの高校生たちが園内にいた。私は実習のまとめをしていて，最後に実習を振り返る記述作業をしていた。そこへＡちゃんがそっと寄ってきた。

Ａ：「先生なにしてるの」
私：「宿題（笑）」
Ａ：「大変だね」

文章を書く手を止め，Ａちゃんと会話を始めていた。彼女は来月に就職試験を控え，試験会場のある場所まで無事にたどり着けるかも含めて不安であること，でも誕生日が近くて楽しみだということ，就職することを決めた理由などを話してくれた。今まで挨拶を交わすことと最低限の会話くらいでしか関われなかった。だがこの時，初めて，目を見て，対面してゆっくりと話すことができ，彼女の表情・仕草などを直に感じることができた。さらに，話を聞きながら，今まで知らなかった新しい表情も見ることができた。ほんの少しの短い時間ではあったが，ふたりだけの時間を共有できた瞬間であった。

「信頼関係」と呼べるにはまだまだ足りない。しかし今までの何気ない挨拶や会話から，私にすこしでも心を開いてくれたことがとてもうれしかった。そして何よりも，Ａちゃん自ら私に話しかけてくれたということが一番嬉しかった。心を開くということが，関係を築く上での第一歩であると，Ａちゃんは私に教えてくれた。

ソーシャルワーク演習Ⅲを振り返って

毎時間，それぞれの実習先での印象的なエピソードを話していき，それを聞いたみんなで感想をコメントして，疑問に思ったことを発表者に質問し，さらに深めるという作業を何度も行った。はじめはただ何となく話していただけだったが，何度も話していくうちに，具体的なものになり，その時の状況・情景が体験していない他の人にも伝わるような話ができるようになった。また，それぞれ他の分野の実習のことやそこでの実習生の立場，ソーシャルワーカーの立場，利用者の実態についても触れることができた。逆に，自分が発表すると，その時の自分の状況や相手との関わりについても改めてふり返ることができ，くり返し発表するごとに，より具体的な内容として見出せるようにもなっていた。さらに今回，１つのストーリーとして文章にまとめた。最初の発表に苦しんだのが，うそのように，スラスラと言葉を紡ぐことができた。さらに人に伝わるわかりやすい文章とはどんなものかについて改めて考え，自分の中で内省し，先生の力も借りながら，読む人に情景が伝わる文章にすることができたと感じている。

ソーシャルワークにおけるアセスメント力とは，相手をアセスメントする力を養うということではなく，自分が今どんな力を持っていて，どんな部分が不足であるのかを知ること，さらにその相手に対してどこまで責任を持てるかを実感することである。情報収集すると感じた。

また，マネジメント力とは，前述のアセスメント力に加えてインテーク面接から相手にとって適切な資源に結びつけていくまで支援者として責任を持ち，様々な社会資源と連携を図り，結びつける力を持つことが求められる。また，資源と結びついた後も，相談者が快適な生活を送れるよう，資源や過程の見直しを行うことや，地域との関わりを大切にすることも求められる。

初回の感想

一人ひとり観点が違って，質問のやりとりを聴いて勉強になった部分もありました。相手が出してくる表現に対応することができるのもやはり自分自身だと思いました。それがコミュニケーションの第一歩であると改めて感じました。

最終回の感想

何気ない話がどんどん広がっていき，文章化され，今日ついに１つの文集になってみんなの名前と題名の載った表紙を見て，「がんばったな」と思いました。実習していたときは思いつかなかったことや気づかなかったことを改めてふり返ることができた時間でした。

言葉で表すのがとても難しかったが，少しずつ出せるようになって成長したかな･･･とちょっと思います。文章化するときも，発表の場があったからこそ，紡ぐことができたんだと感じました。文章のうまい人の文章を読んでいきたいです。パフェおいしかったです。ありがとうございました。

利用者さんの休日について

３年　久保愛美

実習中の勤務体制

私は，Ａ学園で実習させていただきました。

Ａ学園の利用者の方々は，入所しておられる方々，施設が設立したケアホームで暮らしておられる方々，在宅の方々などとそれぞれでした。

実習は入所，デイサービス，就労Ｂの方々との作業など均等に実習させていただきました。実習中の勤務体制は，月曜日から金曜日まで出勤，土曜日・日曜日は休みという形でした。利用者の方々も土日はほとんどの方々が私と同じく，休日でした。したがって月曜日から金曜日の間のしか関わることが出来ず，利用者の方々の「休日」に関われずにいました。

土日の利用者さんとの遭遇

実習中の土日に施設内にあるレストランに遊びに行った時，就労Ｂの利用者の方の数名が，ケアホームの世話人さんと一緒にレストランに食事に来ていらっしゃいました。私が「こんにちは」と挨拶すると，利用者さんは「あんたも食べに来たんね。僕も食べに来たの。」とおっしゃっていました。その時あまり話が出来ず，疑問ばかりふくらんだので翌週，職員の方にケアホームについて尋ねました。

ケアホームって？

「ケアホーム」は何らかの理由により自宅で暮らせない方，またご家族・ご本人の意思でケアホームを望まれる方で，ケアホームで暮らすことが適していると施設側が判断された方が暮らしているところです。ケアホームに入っておられる方々のほとんどが月曜日から金曜日までの日中はＡ学園で作業されていたり，企業で働いておられます。その為，ケアホームで働く職員は，「世話人さん」と呼ばれていて，利用者さんが朝起きてからＡ学園に行くまでと，利用者さんがケアホームに帰ってきてから寝る前まで利用者さんにご飯を作ったりなどのお世話をします。その他に，利用者さんが休みの土日のお世話をするということでした。ケアホームの定員は４～５名でその中に世話人さんが１人であり，世話人さんが帰ったあとも何かあった時のために各ホームに施設に電話が出来る利用者の方を配置しておられるということでした。また，それだけでなくいつでも駆けつけられるようにケアホームの近くに住む職員がいたり，入所の夜勤の職員さんがケアホームに電話をかけたりもするということでした。

ケアホームの土日

ケアホームでの土日はどのように過ごすのかという点では，世話人さんと一緒に庭の草取りをしたり，自分で外出することが可能な方には世話人さんが行先を把握したうえで外出をしたりすることがあります。それが難しいと判断された利用者さんは世話人さんが一緒に出かけたり，行先や希望が異なった場合にはホームヘルプサービスを利用したりしているということでした。しかし，どうしても様々な都合で利用者さんの希望が叶えられない時もあります。その中で職員，世話人さんは出来るだけ利用者さんの希望に応えられるよう努めています。

私が土日にレストランで会った利用者さんの場合，一人で外出が困難なため世話人さんとレストランに来ていたということがわかりました。

利用者さんの休日

入所の方の休日については，たまたま行事が重なり月曜日が休日日課になった日があったため知ることが出来ました。入所の方の休日は，休日として映画を見たりカラオケをしたりなど利用者さんが楽しめるような予定が組まれていました。しかし，あくまでも休日なので，自由参加型であり居室でゆっくり過ごされる方もいらっしゃいました。

在宅の方の休日は，利用者の方に「土日は何をしたんですか」と聞くことで理解しました。「お母さんとダイエーに洋服を買いに行きました。」という方，「氷川きよしのコンサートに行きました。」という方などそれぞれでした。

様々な人の支えがあって

どの利用者さんも楽しそうに話していらっしゃる様子から楽しく，充実した土日になっているの

だと感じました。そして利用者の方々が望む願いや目標，それに伴い楽しめるような休日を考える職員の方々や世話人さん・ホームヘルプ，ご家族の方々などさまざまな人が支えているということがわかりました。

ソーシャルワーク演習Ⅲを振り返って

私はこのソーシャルワーク演習Ⅲでは，夏休み期間に行われたソーシャルワーク実習での出来事をまとめてきました。最初は演習のクラスの人の名前を覚えることから始まりました。ある程度仲良くなってから匿名で書いた実習中の質問に順番に答えていくことから実習中の皆の様子を知ることが出来ました。自分が，質問に対して話した答えを紙にまとめていき，まとめた内容を次の時間に発表し，発表してクラスの皆が気づいたことを質問し，感想を発表するという作業を繰り返していきました。自分が実習中に経験したことを思い出し，話すことは意外と難しいと思いました。

私は最初の質問で「利用者さんの休日は何をして過ごしているのか」に当たり，自分が実習中に知ることができた利用者さんの休日の様子についてまとめていきました。私は知的障害者施設での実習でしたが，演習のクラスの人たちは，老人福祉施設，社会福祉協議会，福祉事務所，児童養護施設，病院など他分野の様々な経験をしてきていました。私も皆の話を聞いて自分がその場にいるかのように話の中に入っていくことができるようになっていました。私も皆もまとめて，話してを何度も繰り返し，最終的に出来上がったものが，一番良いものになっていたと思いました。私はこの授業で実習中にはわからなかったり，気がつかなかったりしたあれもこれもについて聞いておくべきだったと何度も気づかされました。そんな中，ソーシャルワーク実習指導で実習中指導してくださった職員さんが来てくださった事後報告会があり，解決できたことがいくつもありました。この授業があったから，実習を終えた今も，いつもあと少し踏みこんで考えることができ，みんなの話を聞いて学ぶことができたと思っています。

このソーシャルワーク演習で実習におけるアセスメント力とは，相手の話を受容，傾聴，共感することであると思います。そしてそれに加えて相手のことをわかりたい，知りたいと思う気持ちが一番援助につながってゆくことだと感じました。マネジメント力は，多くの利用者（高齢者施設，障害者施設等）ができる限り長く住み慣れた地域や社会のなかで生活を続けていけるよう，利用者，家族，職員とともに深くこれからについて考えてゆくことだと思います。そのためにはやはり，コミュニケーション能力，信頼関係は欠かせないものであると思います。また，援助させてもらう側の施設を含む地域社会に対する理解も必要であり，施設が地域に開放する行事（福祉フェスタ，夏祭り等）も地域参加型なものが大切であると思います。利用者のニーズに合わせた支援ができることにつながってゆく力であると思います。

初回の感想

今日はみんなの実習体験談を聞いて色々なエピソードがあり，話がうまいなぁと思った。そこに行った気になるような話の魅力も感じた。勉強になった。

最終回の感想

今日は，皆の出来上がったもの（文章）を見て比べものにならないほど良い文章が出来上がったなぁと思いました。質問して，まとめて，書いてみて，発表するという繰り返しの作業こそ良いものができた過程だと思いました。皆の題名を読んで，読んでみたいと思うような気を引く題がついていて題名をつけるのに苦戦していただけあるなぁと思いました。

パフェまで食べることができてすごく嬉しかったです。お疲れさまでした。

実習最大のピンチ～傷だらけの戦い

３年　福留詩織

緊張の日中一時支援

私は，今年の夏，１カ月間，Ｂ学園で実習をさせていただきました。

Ｂ学園では，入所の利用者さんへの支援の他に，在宅の日中一時支援で来ている子どもたちの支援もさせていただきました。在宅の日中一時支援には，二つのクラスがあり，それぞれのクラスで一日を過ごしていました。私は実習期間中にどちらのクラスにも入らせてもらい，子どもたちと一日を過ごすことができました。普段，サークルのボランティア活動等で，知的障害児と関わる機会が多いため，知的障害児のクラスではスムーズに関係も築くことができ，子どもたちと積極的に遊ぶことができたのですが，肢体不自由児との関わりが今まであまりなかった私にとって，日中一時支援部門で過ごした一日は，緊張と不安のなかでの活動でした。

子ども達は，車いすを利用している子や，寝たきりの子など，自分で動くということが難しい子が多く，一日お部屋の中でDVDを見たり，簡単なお菓子づくりをしたり，園庭で水遊びをしたりというような，ゆっくりした時間を過ごしていました。

初めてのお出かけ

私が入らせてもらったその日は「おでかけ」の日で，お弁当を持ってみんなで車に乗り，Ａ地域にあるＤ館のカラオケルームに行き，カラオケをした後，ドライブをして帰ってくるという計画の日でした。

この日は，子どもとスタッフの人数が同じだったため，子どもとペアをつくり，一対一で活動を行いました。私がペアになった子は小学生で，自分で歩くことはできず，発語もないＣちゃんでした。朝の打ち合わせの時間に，「気持ちの切り替えがなかなかできず，自分の思う通りにいかないと怒って，人をつまんだり，ひっかいたりするから気をつけてね」と職員の方から注意をされていました。どんな子なのか不安に思っていましたが，Ｃちゃんは，朝の会のときからずっと私の膝の上に座り，にこにこしていました。

すごく小さい子だったため，普通に座ってシートベルトをすると首にひっかかり危ないということで，後ろの座席に座り，私がその子を膝に抱いて車に乗りました。お出かけがすごく嬉しかったみたいで，バスやトラックが通るたびに声をあげて笑い，また，カラオケに行くということで気持ち作りのために，車の中で職員の先生と童謡や指遊びを歌うと，嬉しそうに体を揺らして楽しそうにしていました。

カラオケについてからも，職員の方が子供たちの知っていそうな曲を次々に入れてくださり，どの曲が流れても声をあげて笑って楽しそうに過ごしていました。歌が歌える子が一人しかいなかったのですが，順番にマイクを回して，歌ってる雰囲気を感じてもらったり，その子の歌に合わせて体を動かしたりと，それぞれで楽しんでいるようでした。Ｃちゃんも，マイクが回ってくると嬉しそうに握り，体を動かしていて，隣で一緒に歌いカラオケを楽しむことができました。

Ｃちゃんの攻撃

時間になり，カラオケルームを出る時に少しぐずりましたが，トイレへ行き，気持ちをリセットできたのか，何事もなく昼食も終え，学園にもどる車へ乗ることができ，私は少し安心していました。しかし，車に乗り，学園に帰るということがわかってから，Ｃちゃんの態度が一変し，機嫌が悪いスイッチが入ってしまいました。

Ｄ館を出るまでは，あんなににこにこしていた子が，急に私の腕を噛んだり，つまんだり，髪を引っ張ったり‥‥‥ということが始まりました。行きと同じ姿勢で，私の膝の上にＣちゃんは座っていたため，攻撃の対象は私で，最初はいたずら程度だったものが，次第に本気モードになっていきました。腕も指も細いのですが，力はすごく強く，あっという間に私の腕や顔は傷だらけで赤くなっていきました。最初は，優しく「やめようね」と注意していましたが，私も我慢できなくなり少し強めに「痛いからやめて」と注意をしました。しかし，Ｃちゃんは，注意をするとすごく喜び，さらにその行動が激しくなってきました。気分転換に外の景色に目を向けてみたり，職員の方の助

言で指遊びなどを行いましたが，逆にテンションをあげてしまい，その行動が終わることはなく，私が痛がるのを喜び，怒ることに喜び‥‥‥と，帰りの車の中ではずっとＣちゃんに攻撃をされ続け，それに対して私が怒り，怒ったことに喜び，また攻撃するといった悪循環が続きました。

反省会で気づいたこと

Ｃちゃんは，学園につくと落ち着き，家族が迎えに来る時間まで大好きなDVDを見て，家族が来ると嬉しそうに帰っていきました。

その日の反省会で，その日一緒に活動した職員の方に活動での出来事について話をすると，「Ｃちゃんは，普段あんなに人と関わらないから，きっとあなたが好きで，あなたにもっとかまってほしかったんじゃないか，その行動を問題行動ととらえるのか，あなたがどうとらえるかで関わりが変わるのではないか」ということを話されました。私は，サークルのボランティア活動で，子どもたちには良いこと・悪いことをしっかり伝える，自分がされて嫌なことは嫌だったと伝えるように心掛けていて，その中で子どもたちとの関係づくりをしてきた為，今回もそのようにＣちゃんと関わっていました。しかし，職員の方は，もっとＣちゃんのその時の様子や表情などを見て，どうしてそのような行動をとっているのか，Ｃちゃんはどのような気持ちなのかというところを考えてほしかった，というようなことをおっしゃっており，実習記録の所見欄にもそのようなことが書かれていました。

振り返ってみると，ひっかかれた際，「痛いからやめて」「たたくのはいけないことなんだよ」など，自分の気持ちばっかり子どもに言っていました。しかし，子どもの立場からしてみれば，「なんでこの人は自分の気持ちを分かってくれないんだろう」と思っていたのかもしれません。また，ボランティア先の子どもたちとは，長く付き合ってきたため，表情や行動でその子が今何をしたいのかというようなことを理解することができますが，今回ペアだったＣちゃんは，初めて会う子だったため，そのようなちょっとした変化にも気付くことができなかったんだと思います。

もう一度チャンスがあれば…

後日，職員の先生から伺ったのですが，Ｃちゃんは，おでかけの前日，テンションが高くなかなか寝付けなかったみたいで，寝不足のまま，おでかけの活動に参加したそうです。そこで，大好きな歌を歌い，疲れや眠たさが今回のひっかき行動に出たのではないかということでした。

そういう前日の様子などを事前に知っていたら，もう少し関わり方に工夫ができたのではないか，もう一度，Ｃちゃんとペアを組んだら，もっと楽しい時間を長く過ごすことができるのではないか，という反省や気持ちがありましたが，今回のお出かけ以降，私は入所の支援のほうに戻ったため，Ｃちゃんと会うことはありませんでした。

たった１回の活動で，すごく痛い思いはしましたが，Ｃちゃんからはいろんなことを学ばせてもらいました。初めて会う子との活動は，お互いが知らないもの同士で，手探り状態ですが，だからこそ，相手が今どんな表情をしているか，どんな気持ちでいるかということを考えながら，声をかけ，関わっていけるようにならなければいけないということに気づかせてもらいました。また，その中で，していいこと，してはいけないことに気付かせたり，私の気持ちを伝えたりして，関係を作っていくことも大切だということがわかりました。

あの日は，大変な一日でしたが，今ではいい思い出となっています。もう一度，Ｃちゃんと一緒に活動できる機会があれば，その子の気持ちに寄り添いながら，二人でもっと長い時間，楽しく過ごすことができるような関係になりたいと思います。

ソーシャルワーク演習Ⅲを振り返って

ソーシャルワーク演習Ⅲの授業を通して，実習におこった１つの出来事について深めてきた。最初は，一番に心に残っている出来事をメモ程度に書き出し，それを発表だったが，授業が進む中で先生や学生同士の質問の受け答えの中でそのことについてみつめなおし，文章にしていくことができた。私の出来事は，職員の先生と意見の対立があったり，痛い思いをしたりとあまりいい思い出ではなかった。しかし，冷静に振り返ると，こう

いうことを言いたかったのかな？とか，自分の考えを改める部分もあり，もう一度実習記録をみかえす中で実習の場面を思い出すこともできた。自分のその時の様子を他の人にもわかりやすく書くという作業が大変だった。だれもが読んでわかる文章は，その時の様子がパッと浮かんだり，想像できたりして，伝わりやすいというだけでなく自分も振り返りをする時に整理されていてわかりやすかった。こうやって１つの出来事について深く考えることがなかったので，自分にとってすごくいい時間だった。

また，他分野の人の発表を聞き，同じ時期の実習でこんなことをしていたのか！と新鮮だった。面接を行ったり訪問へ行ったり私が体験していないことをしていてすごいなと思いながら聞いていた。分野によって実習内容が全然違うが，大変だったこと，悩んだことなど共通点もあり，質問などを通して考えることもあった。

この授業を通してアセスメント力とは，情報収集力だと思う。事前に伝えられている情報でも，実際，自分の目で確かめると違うというような話もあった。自分の力でどれだけ情報を得られるかということが大切なのだと思う。また，その得た情報をどう活用し活かせるかということも大切になってくる。マネジメント力とはその得た情報をどのようにして，活かすかということだと思う。支援計画などを作る際に，クライエントの想いをどれだけくみこめるか，どれだけ考えられるかということを大切にして，それらも実行できるかどうかだと思う。

初回の感想

ソーシャルワーク演習Ⅲのグループは実習分野が違う人たちの集まったグループで貴重な話が聞けた。体験したことは違うけど，感じたこと，嬉しかったことは似ていて，色んな話が聞けてよかった。

最終回の感想

今日は軽く感想を言ってから自由だった。文章にしてまとめるのは大変だったが，実際に形になると題名や見出しがついてまとまっていてこういう風に残せてよかったなと思う。ふりかえってみて，自分もこういう実習をしてきたのだなと実感できた。

［第６回］

合格体験記

やるっきゃない―私の福祉への道―

特別養護老人ホーム　以和貴苑
堀　田　真　紀
2011（平成23）年３月卒業

１．はじめに－将来の夢は，老人ホームで働く

合格体験記と言う事で何を書いたらいいのか分からなかったので，まず私が福祉を目指したきっかけから書こうと思います。それは，小学校の職場体験で地元の老人ホームに行ったことだと思います。私は高齢者が多い田舎に住んでおり，高齢者は当たり前の存在でした。同時に祖父母がとても好きでした。老人ホームの光景を見て，私も高齢者施設で働きたい，祖父母が老いた時，面倒をみたいと思いました。

その頃は介護士という言葉を知るわけもなく，将来の夢は何ですか？と聞かれた時「老人ホームで働く」と言っていました。周りの友人は看護士さんやスポーツ選手とか言っている中，今思い出してもじいちゃん，ばあちゃんが本当に好きだったんだなと思うと同時に，自分の置かれた環境にとても感謝しています。

２．大学に進学した理由

その夢はずっと変わらず，高校で福祉を学び，無事国家試験に合格して介護福祉士の資格を取得し，夢が現実に近づきました。高校３年の時，進学か就職かと聞かれ，初めは夢である老人ホームに就職しようと思っていました。しかし，担任の先生に国際大学の社会福祉学科を教えてもらいました。福祉をもう少し学ぶのもいいのかなと思いましたが，センター入試も受けたことがない私が大学の授業についていけるなんて想像もつかない。ましてや，社会福祉士の国家試験合格率３割ほどなのに，私なんかが行って，勉強についていけるのだろうかなど，頭に浮かぶのは不安ばかりでした。しかし，両親に「興味があるんだったら行ってみれば」と言われ，とり合えず頑張ってみようと思い，大学への進学を決めました。

３．大学生活３年間を振り返って

大学入学当初，「私は他の人以上に勉強しないとついていけない。頑張らなきゃ！」と思っていましたが，その決意はいつの間にか隅っこにしまっていました。しかし大学生活はとても充実したものでした。親に甘えてばかりではだめだと思い，アルバイトをはじめました。せっかくだから役に立つアルバイトをしたいと思い，近くにある特別養護老人ホームで働きました。朝６時から働き，すぐに学校，そして夕方もアルバイトという日がほとんど。老人ホームと掛け持ちでイオンでも働いていた時期もあり，バイト三昧の毎日。その上，サークルや学友会も加わると，自ずと自分の時間は少なくなっていました。

そんな多忙な毎日でしたが，とても充実していました。たくさん働いて，たくさん遊んで，たくさんの人に出会い，多くのものを得ました。もちろん授業は欠かさず行っていましたが，テストが近くなるといつも焦っていました。大学３年までの勉強は定期試験で単位をとる為の勉強だったと思います。

４．あっという間に４年生－両立という壁

４年生になり，私は医療福祉コースに進みました。社会福祉士を基礎として精神保健福祉士が必要になるので受ける国家試験が２つ。精神保健福祉士の国家試験合格率は８割ほど。不安とプレッ

シャーでいっぱいでした。４年生はたくさん勉強しないといけない。

さすがにアルバイトと学友会を辞めるべきか悩みました。本当は辞めて勉強に専念すべきだろうが，特に学友会は途中で引退したら迷惑かけるし，４年になれば，部長職が待っている。もし国家試験に落ちたら，きっと後悔するし，ましてやせっかく大学に進学させてくれた親に一番申し訳ない。両立という選択肢は無謀だと自分で分かっていました。他人以上に努力しないと合格なんて出来ない。悩んだまま学友会は代替わりの時期になっていました。私は結局そのまま学友会に残っていました。不安でいっぱいでしたが，迷っているのであったらやってみようと思いました。学術文化会福祉系企画部長として務めることになりました。

４年生は今思い出しても本当に大変でした。学友会に入っていなかったらと，正直めげた時期もあり，学友会の先輩や同期に何度も弱音を吐いたと思います。しかし，投げ出すことはしませんでした。弱音を吐きつつ，頑張らなきゃと自分に言い聞かせていました。頑張っていると認めてくれる，励ましてくれる学友会や精神コースの皆がいたから，頑張れたと思います。また，生活費を稼ぐ必要もあるからアルバイトは続けていました。老人ホームで高齢者と関わりながら，今まで目指してきたんだから大丈夫と原点に戻り，人と関わる中で自分を振り返り，仕事だけど息抜きになっていたと思います。

５．国家試験まであと少し

11月下旬の学祭が無事終わり，ようやく学友会の仕事は落ち着きました。アルバイトは生活費を稼ぐ必要があるので続けていましたが，それからは，国家試験の勉強に必死で励みました。その頃，自分の時間がある事がとても嬉しかったです。「大丈夫」と自分にいい聞かせ勉強に励み，しかし，今まで充分に勉強出来ていなかったので怖くてたまりませんでした。時に学文室（学術文化会部室）で勉強して皆に頑張れと励ましてもらったり，少し休憩がてら皆と話してリフレッシュ。

もっと早く勉強出来てたらと思うこともありましたが，学友会に入った事を後悔はしませんでした。確かに時間はなく，心に余裕のない毎日でしたが，学友会で得たこともたくさんあります。たくさんの仲間に出会い，たくさんの経験，そして充実した毎日が送れたのは学友会があったからだと思います。その頃の私は，もちろん自分の為にでもありましたが，学友会に入ったことを後悔したくないと言う思いもあり勉強していました。

６．私の勉強法として

勉強法ということになると，話は少し遡ります。４年までは，課題やテスト勉強はしっかりしましたが，それ以外はアルバイトや学友会に明け暮れていました。４年の夏休み，さすがに勉強をしないといけないと思い，社会福祉士と精神保健福祉士両方の中央法規の過去問題とワークブックを買いました。しかし，精神保健福祉士の実習や課題をやる中での勉強は進ます，最初は，ワークブックをただ読んでいるだけでした。

あっという間に夏休みも終わり，後期前半は，学友会の仕事，精神の実習事後課題に追われました。10月，11月と月日だけがあっという間に流れ，学祭が終わった11月下旬から①ワークブックから一分野を読む，②その分野の過去問題の問題を読み，次に解説を読むを繰り返し，解けるかもと思ったら過去問題を実際に解いてみました。初めから１問ずつ解いていきたかったのですが，私にはそんな余裕がありませんでした。難しいところや分からないところも，とにかく読んで，意味が分からなくてもノートにとりあえず書きました。すると，この用語は見たことある，同じような文章があったようななど，後からそういうことかと，分かるようになりました。たまには難しそうな問題も解きましたが，やはり分かるわけがなく，分かりそうな所だけ解きました。また，今日は何ページ書く，何ページやるなど目標を決めると集中力が無くなりそうになったとき，がんばれました。国家試験は幅広く出題されるのですが，正しい内容を選べばよいので，問題を見たときにこれ見たことあるでよいのです。ワークブックに載っているような事柄を一つ一つ確実に覚えていく事が大切だと私は思いました。

自分に負けないぞと猛勉強しましたが，模擬テストの点数は80点（150点満点中）の壁がなかな

か越えられず，とても悔しい思いをしました。しかし，本番に点数を取れたらいいんだと勉強方法は特に変えませんでした。集中力が続かない時は場所を変えたり，自分に負けそうな時は，図書館に行き，みんなが勉強している姿や，「これなんだっけ」などの話し声を聞きながら，「やばい。みんなに追いつかなきゃ」と心で思いながら勉強しました。実は，最後の模擬試験まで80点の壁を越えられませんでした。自信がない状態で本番を迎えましたが，なぜか出来ると信じていました。

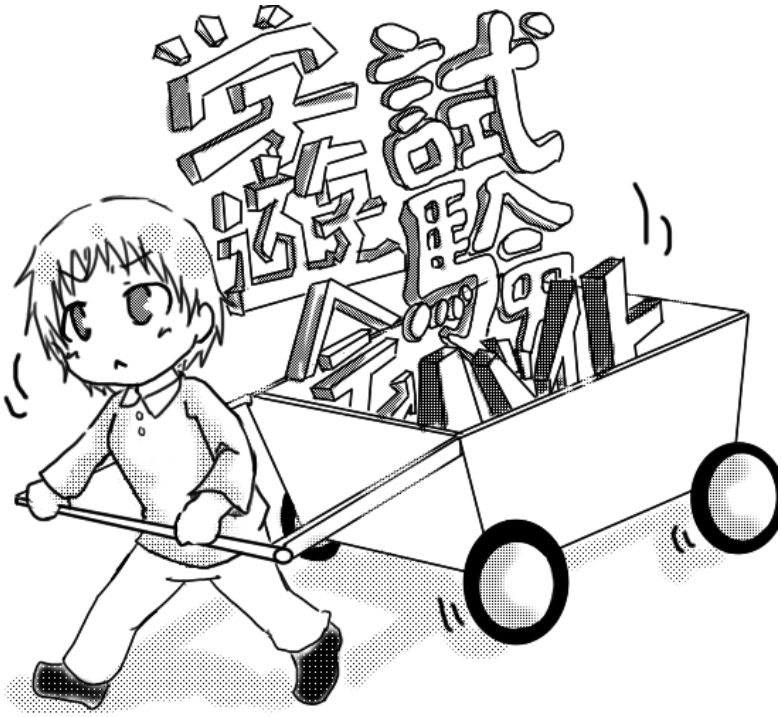
７．無事，国家試験が終わり

試験が終わりほっとしましたが，合否が分かるまで不安でした。合格発表の日，合否をみる為に気付いたら図書館のパソコンの前に１時間前から座っていました。自己採点はしていましたが，正直とても怖かったです。結果は杜会福祉士と精神保健福祉士どちらとも合格していました。２度確かめてようやく合格したんだと確信し，すぐに親に報告。とても嬉しかったです。

自分で選んだ大学生活を後悔する時期もありましたが，たくさんの仲間がいたから私は頑張れたと思いますし，合格できたと思います。多忙で苦しい毎日でありましたが，今は学友会もアルバイトもサークルもやってきて本当に良かったと思っています。国試が終わり，私が学んだ事は，やれば出来る。とりあえず頑張ってみるということです。無理だと思い，諦めるのではなく，無理でもいいからとりあえず「かたち」からやってみることが大切だと思います。勉強方法ややる気のスイッチなど人それぞれですが，自分のやり方がきっとあるはずです。頑張ってください。

８．おわりに

ここまで書きながら自分を振り返り，このような機会をもらったことに感謝しています。現在，社会人となり，ようやく仕事にも慣れてきましたが毎日が大変です。しかし，楽しく仕事をさせてもらっています。学生のみなさんへ。大学生活は一度しかありません。また，たくさん遊べて，そして，勉強できる時間をつくれるのも今だけだと思います。充実した学生生活になることを願っています。そして，１人でも多くの人の夢が叶いますように。ありがとうございました。



合格体験記

見えない者の挑戦

福祉社会学研究科　博士前期課程
南　明　志
2011（平成23）年３月修了

1. はじめに

私は2011年１月30日（日）に行われた第23回社会福祉士国家試験に合格しました。大学卒業の年に初めて受験し，３度目にして合格することができました。決して，すばらしい学生とは言えませんが，目標の一つであった社会福祉士を取得することができました。

私が，社会福祉士に合格できたのは，多くの方々の支えがあったからです。この場をお借りして感謝いたします。今後は，社会福祉士として，障害当事者の立場から相談支援ができればと考えています。ここでは，社会福祉士国家試験に受かるまでを振り返りながら，障害についての私の思いを述べさせて下さい。

2. 障害とは何かー見えないということ

障害とは何か？見えないとはどういうことなのか？皆さんは，想像したことがありますか？皆さんは，見えない人のサポートや支援をしたことがありますか？晴眼者であれば，書店に行って読みたい本を見つけ，すぐに読むことができますよね。皆さんは，当たり前のこととして感じていませんか？見えないと言うことは，見えている人が普段当たり前にしていることが，すぐにはできないと言うことなのです。

見えない者にとって苦手なことに，外出時一人で歩くこと，活字の文書を読み書きをしたりすることなどがあります。あくまでも，苦手ではあって決してできないわけではありません。スクリーンリーダーというソフトをパソコンに入れれば，音声で操作できますし，OCR を活用して，活字の文書を読んだり，音声で確認しながら活字の文書を書くこともできます。また，電子書籍のようにいつでも，どこでも点訳・音訳された書籍をダウンロードして読むこともできます。晴眼者よりも，時間はかかりますが，工夫しながら皆さんと同じように日常生活を楽しんでいるのです。

講演会などをさせてもらう中で受ける質問に，見えなくてよかったことはありますか？と問いかけられることがあります。言い換えると，障害者で良かったことはありますか？と言うことですよね。常識的に考えても，あるはずありません。世の中に，障害者として生活したいと思っている人などいません。それと同じことです。外を自由に走り回りたい，読みたい本をすぐに読みたい，学生の時はアルバイトをしてお金を稼ぎたいなど，皆さんが普段当たり前にしていることが見えない者にとっての一番の願いなのです。

中途で失明した私は，少し見えていた時期に，見えないことについて深く考えたことがありませんでした。見えなくなったら〈怖い・不安・何もできなくなるのではないか〉という恐怖心を抱いていました。実際に，見えなくなって最初に感じたことは，恐怖心よりも，生きる喜びを失ったような気がしました。見えていた景色が見えなくなった。人と会話をしていても相手の表情が読みとれなくなった等々。挙げれば，きりがありません。いくら悩み続けても，時間は何も解決してくれないのです。自分自身で，しっかりと見えなくなった事実を受け止めなければ，前には進めないのです。

しかし，私には見えていたころの記憶があります。生まれつき見えない者にとっては，見ると言うことがどういうことなのか知りようがないのです。晴眼者にとって当たり前な色の概念自体がありません。逆に言えば，晴眼者にも，見えない世界は体験しようがないのです。そのなかで見えないことを補えるのが晴眼者の目なのです。

3. 障害者として健常者に伝えたいこと

福祉教育のなかで，よく疑似体験をして障害者の立場に立って物事を考えてみようと言う学習があります。見えない者として，晴眼者に伝えたいことは，点字や白杖歩行等の体験をすることによって，障害者の立場に立って物事を考えることよりも，晴眼者として，障害者に対してどのようなサポートができるかということを考えてほしいのです。何も難しいことはありません。道で迷っている人を見かけたら声をかけてあげる等の身近なサポートで見えない者も自由に社会に参加し，自立した生活をおくることができるのです。

また，私は，障害者であるからこそ，感じることができるものがあると思っています。それは，多くの人との繋がりです。普段一人で外出すると，皆さんは，外出した際，限られた人（知人・友人等）としか会話を交わさないと思います。しかし，盲導犬と歩く私の姿を見ている周囲の人々は，気軽に声をかけてきてくれます。小さい子どもから，ご高齢の方々まで様々な年齢層の人々と会話を交わします。障害者のなかには，障害を周囲の人に知られたくなく，引きこもりがちになる人もいます。それでは周囲の人の支援や協力を得ることはできず，障害ではなく孤独な存在に陥ってしまいます。

健常者に障害について理解してもらうためには，障害者自身も，積極的に社会参加していくことが大切なのです。お互いが普通に会話を交わすことによって，自然と障害と言う言葉はなくなっていきます。障害者が特別な存在として見られている現代社会において，障害者と健常者がお互いに歩み寄ることで，障害者も健常者同等の生活をおくることができるのではないでしょうか。日常生活において，障害者が身近な存在であり，障害者にとってバリアを感じさせないようなそんな社会になってほしいです。

4.　大学進学の動機と，社会福祉士受験に向けて

「なぜ，見えないあなたが大学に行って社会福祉学を学ぶの？」

これは大学進学を決めた私に，盲学校時代の教員が言った言葉です。視覚障害者の現状を知らない健常者であれば，違和感を持たれる方もいるでしょう。現在，視覚障害者の職業で最も多いのが，アハキ師(注) の資格を取得し，理療業を目指す者です。ここでは，詳しい話は省きますが，アハキ師の資格を取得したほうが，視覚障害者の就労には有利なのです。しかし，私は視覚障害という理由だけでアハキ師の資格を目指すのは，一生懸命資格取得に向けて努力している人に失礼だと思い，自分の幼少期からの夢であった大学に進学し，社会福祉学を学ぶことを決意しました。

大学入学後，晴眼の友人もでき，サークル活動や，コンパなどにも積極的に参加し，楽しいキャンパスライフをおくることができました。大学の講義等については，先生方のご配慮もあり，黒板の文字を読んでいただいたり，テキストや，授業中に配布されるプリント等については，大学の点訳職員をはじめ，鹿児島県内の点訳ボランティアの方々によって不自由なく学習することができました。また，大学で社会福祉学を学ぶに連れ，社会福祉士資格を取得したいと言う気持が強まっていきました。しかし，県内で見えない者が社会福祉士を取得した例がこれまでなく，社会福祉学科の先生方に勉強の方法等を質問しながら学習を進めていきました。

具体的には，社会福祉士に関する参考書や，問題集は，多くの出版社からだされているため，どのような本が点字を使用する私に適しているのかを先生方と検討していきました。模擬問題集や，参考書をお忙しいなか，音読をしてくださる先生方もおられました。また，社会福祉学科の学生が，先生方の呼びかけによって，音読のサポートをしてくれました。見えない者にとって，図や表が多く含まれる本は，全てを認識するまでに，点字で読む場合，かなりの時間がかかってしまいます。なるべく，文章で解説や，用語の説明をしている本のほうが読みやすいのです。

また，本学では社会福祉士対策講座が設けられており，私も受講しました。講座を担当していただいた先生方には，事前にプリント等を点訳していただいたりと，授業も不自由なく受けることができました。情報障害とも言われる視覚障害者にとって，大学時代を統合教育，つまり健常者の学生と同等の立場で学習できるというのが，点字を使用している私の願望でした。しかし，先生方の

なかには，パワーポイントのみで進められ，見えない私は理解するのが難しく，できればパワーポイントの内容を事前に点訳していただければ嬉しかったです。

5. 絶対にあきらめない気持ち

「見えないからできないのではない。努力をしないからできないのだ。」

私は，いつもこの言葉をかみしめながら勉強してきました。私は，３度目の試験で合格しましたが，途中あきらめかけたこともありました。特に，私が受験した時は，旧カリから新カリへの移行の年でどのように勉強を進めればよいのか模索していた時でもあり，大学のカリキュラムになかった勉強をする際はかなり悩みました。

そんな時，ある先生から「絶対努力すれば，合格できる。今，あきらめたらこれまで協力してきた全ての人に失礼だ。」と言っていただき，それから私の気持が変わりました。見える者にとっては，一人でも勉強することができるが，見えない私にとっては，決して一人で勉強をしているのではなく，多くの方々の支援やサポートがあり勉強できるのだと言う感謝の気持ちが生まれてきました。社会福祉士の勉強をとおして，人との繋がりや，努力すれば絶対に夢はかなうと言うことを学びました。

6. おわりに

合格通知を手にしたとき私は，言葉に言い表せないほどの嬉しさと，今後社会福祉士として障害当事者の視点に立った相談支援をしたいと言う新たな目標も生まれてきました。障害者（特に視覚障害）の就労は依然として厳しい状況が続いています。しかしながら，障害当事者だからこそ新たな職域を開拓していくこともできるのです。今回，社会福祉士の受験勉強をするなかで，様々なことを学びました。このことを無駄にすることなく，これからの人生に活かしていきたいです。

注）アハキ師とは，あん摩マッサージ指圧師，はり師，きゅう師の略である。

［第７回］

先輩たちは，今・ここで

種子島で子どもたちと共に

鹿児島県立中種子養護学校
古　田　友　也
2009（平成21）年３月卒業

１．はじめに―　種子島と私

まずは自己紹介から。私は種子島出身です。種子島って知っていますか？種子島は九州の大隅半島の南海に浮かぶ島で，人口は約４万人。種子島と言えば，鉄砲伝来やロケット基地の島として有名ですが，他にも安納芋やマンゴーといった作物やサーフィン，シーカヤックなどのマリンスポーツの盛んな島としても有名です。

さて，私の実家は農家です。子どもの頃からさとうきびやじゃがいもの収穫，時には牛の出産にも立ち会ってきました。このような風土と農家の子どもという環境の中で育った私は，収穫する喜びや生命の神秘や素晴らしさを体験できたことに感謝しており，私の生きる力・源というものはここにあったと感じています。そんな私の感じた生きる力というものを特別支援学校の子ども達に伝えたいと考え教員を目指してきました。大学の４年間，種子島を離れ，再び種子島に戻り，そして現在，中種子養護学校に期限付き教諭として勤めて３年が経とうとしています。

２．マンツーマン指導の落とし穴

中種子養護学校で１・２年目に担任した児童Ａくん（当時１年生）を連れて居住地校交流ということで彼の地元の小学校に行ったことがあります。事前の打ち合わせで，Ａくんの実態やねらいなどを伝え，小学校の子ども達と一緒にできる授業を計画してきました。個別の指導計画では「集団参加が（積極的に）スムーズにできる」を目標に取り組んできているＡくんですので，にぎやかな雰囲気に圧倒されないかな？帰りたいって言わないかな？自己紹介できるかな？と考えれば考えるほど担任の私は，不安でいっぱいでした。Ａくんが活動に入れなかった時のためにＡくんの好きなお絵かきセットも準備しました。

実際行ってみて，子ども達のＡくんへの積極的なかかわりにとても驚きました。Ａくんも次から次に話しかけられるので最初はどうしていいか分からない様子でいましたが，「鞄はこっちに直すんだよ。」「着替えをするんだよ。」という子ども達の言葉掛けでＡくんはすんなり動くことができていました。図工の授業内容は，「海の世界を作ろう」というテーマで海の生き物を絵にしたり，紙粘土で立体に表したりして，大きな広幅用紙にみんなで海の世界を表現しようというものでした。Ａくんは，発想力がとても優れていて，描画や制作はとても得意にしていましたので，Ａくんが作る魚・うに・やどかり・たこに，みんなは「すごーい」と驚き，取り囲むようにＡくんの制作の様子を見ていました。Ａくんの作品をきっかけに作りはじめる子がいたり，真似て作る子もいたりするほどＡくんの作品は素晴らしいものでした。体育では「体を動かして遊ぼう」というテーマで，ぞうきんリレーやしっぽとりゲーム，ドッジボールなどをして一緒に体を動かす楽しさを喜んだり，達成感を共有したりしました。みんなの動きを見ながらＡくんも同じ動きをしたり，Ａくんの様子を見ながらみんなが言葉掛けをしたりしていました。図工も体育も私が入って指導する隙はほとんどなく，「念のため」と持って行っていたお絵かきセットを出すことは一度もありませんでした。自分で見て動き，友達に支えられながら１日

過ごすことができ，Ａくんの交流でのねらいは十分に達成することができました。

この交流で，周りのちょっとした言葉掛けでＡくんはこんなにも動けるのだとうれしく思う反面，私の今までの指導方法は適切だったのだろうかと考えさせられる部分が多くありました。着替え指導の時は，言葉掛けをせずにもう少し待てばよかった，ここは手順表があれば一人でできたのではないかなどと自分の余計な指導が次々に頭に浮かんできました。中種子養護学校は全校生徒が20名弱と少ないということもあり，子ども一人に教師が一人つける体制であるので，ついマンツーマンの指導になりがちでした。マンツーマン指導に偏りすぎたあまり，児童の持っている伸び，可能性を十分に引き出せていなかったように思います。マンツーマン指導の良さは，子どもとじっくり向き合って十分に児童の実態に合った指導ができることにあると思いますが，「集団参加」を目標にしている児童にとっては，マンツーマン指導だけでなく，グループ学習や交流など集団で子ども達同士によって動き，対応の仕方を身に付けていくという機会が必要であると思います。

Ａくんの居住地校交流のように一緒に授業や会話をする機会を作ってあげることで，子ども達は意外と早く慣れ，お互いの様子を知り，認め合い，一緒に楽しく遊ぶことができます。また，教師に言われるよりも同世代の子に言われた方が納得したり，重みが違ったりもするものです。この交流後，自立活動や教科の授業はマンツーマン指導の良さを生かし，朝の会や生活単元学習は隣接学年と合同学習をするなど，指導体制を変え，また，自分自身も言葉掛けのタイミングを工夫したり，減らしたり，「認め，励まし，価値付ける」指導を心掛けたりするなど，指導観も変わったように思います。マンツーマン指導の落とし穴に気付かされた居住地校交流でした。

３．私が思う熊毛（種子島・屋久島）の現状

中種子養護学校には，屋久島の児童生徒が６名在籍しています。そのうち４名は小学部１年生から養護学校に隣接する学園に入園し，親元を離れて学校に通ってきています。屋久島には特別支援学校がないので親元を離れなければなりません。先ほど述べたＡくんの同級生に屋久島出身のＢちゃんがいました。Ｂちゃんはとても笑顔が素敵でムードメーカー的な存在です。そんな明るいＢちゃんですが，電話で母親の声を聞いただけで涙を流し，「先生に注射された」「先生に叩かれた」と嘘を言って，母親に迎えに来てもらおうと必死に訴えかけます。また，２週間に一度の母親のお迎えの日には，母親の顔を見るとすぐに涙を浮かべ「ママ～」と駆け寄って行きます。そんな姿を見ると，とても心が痛みました。普段は明るく元気に頑張っているＢちゃんですが，内心はぐっと我慢している部分があったのです。それを表に出さず，明るく振る舞うＢちゃんは私なんかよりもずっとすごいと感じます。６歳の子が親元を離れて頑張っているという現状がここにあります。

また，ある日，特別支援教育コーディネーターの先生からこんな話を聞いたことがありました。中種子養護学校の近辺には，老人ホーム，知的障害者施設，社会福祉協議会などの施設があり，そこ一帯を地域の人は「福祉の里」と呼んでいます。国道から１本入った筋が「福祉の里」となっているのですが，地域の人の中には，「その１本入った筋には入りたくない」と毛嫌いする人がいます。その筋に入ったことで親戚や地域の人から白い目で見られるのではないかと思い込んでいるのです。地域における障害者の理解や特別支援教育の啓発がどれだけ大変か，どれだけ大切さかは，いろいろな講演会でもよく聞きますが，種子島でも地域理解が課題な部分があることが現状です。近年，国の調査で通常学級に特別な教育的ニーズのある児童・生徒が約６％の割合で在籍しているといわれており，理解と支援が不十分で，児童生徒も教師も，そして保護者も苦悩しているという現状が日本にはあります。種子島でも，中種子養護学校の特別支援教育におけるセンター機能としての役割は大きく，その中でも特別支援教育コーディネーターの先生は，各組織の中心となり，地域の学校へ巡回相談を行い，求めに応じて教材教具を貸し出したり，協力して個別の指導計画を作ったり，あるいは保護者や指導上悩んでいる教師の助言指導をするなど，特別支援教育の専門性を生かした支援が喜ばれています。地域の学校を卒業した発達障害の生徒だけでなく，中種子養護

学校の卒業生の大半も高等部を卒業してから地域に帰ってくる人が多く，子どもたちの社会参加と自立を考えた時に，地域理解は欠かせないものとなっています。また，中種子養護学校には地域の強い要望で高等部ができましたが，今後は卒業後の受け皿づくりが課題となってくると思います。

４．おわりに－種子島へおじゃりもうせ

種子島から私が思うままに書いてみました。これを書きながら今までの教師生活を振り返ることができ，これから自分で教師として新たに考えていく課題などを明らかにすることができました。「教師っていいな」と思います。教師には，「一期一会」という言葉がぴったりです。かけがえのない出会いがたくさんあり，いろいろな考えを学び，本当にやりがいのある仕事です。ここ中種子養護学校にも尊敬できる先生がたくさんいて，毎日いろいろなことを吸収しています。そして，今，種子島という環境で仕事できる喜びをひしひしと感じています。ぜひ，みなさんも種子島へおじゃりもうせ（いらっしゃいませ）！！

先輩たちは，今・ここで

原点に立ち戻り，今を生きる

社会福祉法人　たちばな会　福山学園
サービス管理責任者兼主任　中　馬　吉　美
1993（平成５）年３月卒業

１．原稿依頼

平成11年も暮れにさしかかる12月，いつものように仕事を終え帰宅する途中に大学時代からの友人である山本君から久しぶりの電話があり，懐かしさに近況報告の後，学会誌に載せる原稿の依頼がありました。当初多少の戸惑いがありましたが，大切な友人からの依頼であり，また今の自分の仕事に対して今一度見つめ直すいい機会だと考え，引き受けることにしました。

２．在学中は……

入学当初，機械科出身の私は将来福祉機器の企業に就職に就きたいと漠然と考えていた私にとって福祉の専門分野の授業はとても新鮮で，貴重な経験でした。それまでの学びはどちらかというと『やらされていた』感が強かったのですが，大学では『自らもっと福祉について学びたい』と積極的な自分に出会った瞬間でもありました。

また，今の私があるのは紛れもなくボランティアサークルで得た大切な仲間と他大学との連携で得た仲間との出会いであり，そこで福祉やボランティアに対して朝まで語り合い，その成果を実践へと繋げていった幾多のボランティアの貴重な経験が礎になっているかと思います。

当初漠然とした福祉観しか持ち合わせていなかった私にとって，ボランティア活動を通して真正面から障がいを持たれた方々やその保護者・兄弟の皆さんとの出会いがさらに私の将来の方向性を決定付ける原動力になったことは間違いありません。

３．社会へ

大学を卒業し，養護学校の教師と夢を抱き約３年間県立牧之原養護学校に期限付き教諭として勤務させて頂き，また採用に向けてのチャンスを頂きました。教師を目指す私を約３年間も後押ししてくださったその当時の教員の皆さんには今でもとても感謝しています。

教員採用試験の壁の厚さを痛感しながらの数年ではありましたが，その中で卒業していく生徒の行く末も深く考えるようになりました。ちょうどその頃，訪問教育部で重度心身障害児施設『オレンジ学園』へ訪問教育部教師として授業に行っていた折，隣接している今の福山学園が職員の募集をしている事を知りました。養護学校を卒業された後の方々の支援を将来にわたってさせていただけるのであればと３月末に思い切って面接を受けた事をつい先日のように思い出されます。

４．今の仕事

入社当初は，これからの将来と自分の仕事に強く誇りを持ち，若さと情熱だけでただただがむしゃらに施設を利用されている方々と向き合っていたように思います。その結果，障害程度の重い方々との意思疎通がうまくいかずに悩み苦しむ事も増えました。そんな私を職場の先輩職員は温かく受け止めて下さり，しかもさりげないサポートで幾度となく助けて頂きました。次第に自分の持つ『自分本意の支援』であった考えから『利用される方の望む支援』へと気持ちの変化と客観性が身に付いていったように思います。

早いもので，福山学園に勤務して約15年の月日がたちました。私も現在サービス管理責任者兼主任を任され，仕事に於いて『責任』が問われる立場になりました。施設を利用される方々の思いを汲み取り，安心して生活して頂けるようにとこれからも日々職員一丸となって心のこもった支援を提供していきたいと思っています。

５．最後に

現在，混迷を深める社会・政治同様，また福祉情勢もその間紆余曲折しながら現在に至っています。そんな中，大学関係の方々とも話す機会がありますが，福祉を学ぶ学生が私たちの時代と比べると少なくなってきている事や何より情熱を持った学生が少なくなったとよく耳にします。それぞれの世代でそれぞれの考えがあるように，私たちの時代やその頃の熱い思いがすべて良かったというつもりはありません。ただ，『今』この瞬間が大切であって，それを知り『いかに生きるか』が大切だと私は思います。

最後に，思いつくままに自分の思いを書かせて頂きましたが最後まで読んで頂きありがとうございました。卒業生の一人として福祉の現場で働く者としてこれからも福祉に携わっていこうと思います。

いつの日かどこかでお会いするのを楽しみにしています。

先輩たちは，今・ここで

だからどういう考えなの？－思いつくまま筆を走らせて－

就労継続支援Ｂ型事業所　ピア錦江湾
内木場　　学
1996（平成８）年３月卒業

はじめに

私は，本学を1996（平成８）年３月に卒業して丸15年になる。そして，本学福祉社会学部社会福祉学科は，1982（昭和57）年４月開設から三十周年を迎えるとのこと。その節目にあたり，「OBとして何か書いてみませんか？」と仕事を通じてのご縁でお世話になっているＳ先生からの原稿の依頼。文章を書くことは嫌いではないが，果たして何について書こうかと思案した。

大学三年次，私は本学が初めて実施した「小論文コンテスト」に応募したことがある。テーマは，「大学での自分捜し」で，ここで書いた内容は，本学で四年間所属していたサークルでの活動を通して，自分自身ってなんだろうということを見つけていくものだった。書いた中身は，思いつくままの駄文であったのだが，審査の結果，優秀賞をいただくことになり，故平田清明学長先生より，直接賞状の授与の機会を得た。それならば，そのことをもとにしながら，さらに学生時代を振り返る意味で肉付けしてみたらいいのかなと考え，ただ思いつくままに筆を走らせてみることにした。

大学入学のきっかけと入学時の自分

本学を選択したきっかけは，高校時代の恩師が本学出身，しかも社会福祉学科卒業であったことである。その恩師から，「君はもっと勉強したほうがいいから大学に進んでみないか？」と受験を勧められ，私自身ももっと社会福祉について深く学んで行きたいという思いとがかみ合い，推薦入試を受験，合格して入学することになったのである。

1992（平成４）年４月，入学式を終え，オリエンテーションで現在の「新入生ゼミナール」に相当する「基礎演習」で私はクラスのリーダーを務めることになった。また，同時期に，体育系・文化系サークル勧誘が行われていて，右も左も分からず学内を歩き回っていたときに勧誘されたのが男声合唱団「グリークラブ」だった。とある先輩から「時間割はもう決めた？よかったら相談に乗るよ。」と半ば強引な感じで，先輩たちに連れていかれ，勧誘場所に待機していた他の先輩たちも交じり，口説きに口説かれて入部したのである。さらに，私は高校時代に生徒会役員の経験を生かすことができればという思いから，逆に自らの手で学友会総務委員会に出向き，メンバーとして入ることを申し出たのである。本学入学時，学業をはじめとして，サークル活動，学友会活動という三つの活動の「両立」ならぬ「三立」がここからスタートしたのである。

学生生活が始まって

（１）学業

まず，本業の学業では，先述したように，基礎演習（佐藤暁先生，現在岡山大学教授）クラスのリーダーに選ばれることになった。約二十名の同期生がいて，発表や社会体験をさせていただいた。クラス担任の佐藤先生（当時）は，研究発表の時，自分たちには思いつかないような鋭い指摘をされ，一つ一つの事柄について，「だからどういう考えなの？」と私たちに問いかけるのである。かなりの時間をかけてまとめてきた内容であったのだが，緊張でうまく答えられなかった。後で，先生は，大学の学びは，一つの分野について，深く洞察して学び究めることだと教えてくださった。このときはじめて，高校での学び方の違いを知ることとなり，その大切さを教えられた。

基礎演習の思い出としては，社会体験として，視覚に障がいのある方々の「目」のかわりとなる図書づくり（カセットテープによる本の音声訳）体験である。確かクラスメート三～四名での活動

だったと思うが，鹿児島市小野にある県点字図書館（現県視聴覚障害者情報センター）に行きスタッフの方のご指導をいただきながら，鹿児島エリアの季節の話題から音楽，エンタメ情報など幅広い年齢層に読まれている雑誌「TJ かごしま」の音声訳（カセットテープへの録音）を体験させていただいた。音声訳は，ただ棒読みで読んではいけないそうで，明瞭かつ柔らかさをも伴うなど細やかな配慮も要求される，視覚に障がいを持つ方々にとって大切な情報源なのである。

事前に，クラスメートで役割分担などを決め，それぞれ下読みを行い，現地で本番というわけなのだが，初回はかなりの緊張で発する声もいつもに比べ，上擦り気味になってしまった。スタッフの方々はそんな自分たちを温かく見守り，時に熱心にご指導くださった。何回訪問したか記憶が薄れてしまい，忘れてしまったが，回を重ねるごとに緊張も解れ，毎回の体験が楽しくなった。一般社会人のボランティアの方が多数を占めるというこの音声訳活動，忘れることができない貴重な体験であったと思う。

そして，二年次後期から卒業までの二年半はコミュニケーション心理学というテーマのもと，蓑毛良助先生のゼミを受講した。内容としては，文献輪読や研究発表，福祉施設見学などで，課外では，定期的にコンパ（飲み会）や旅行などもあった。特に，印象に残ったのが卒業旅行である。以前北海道にて教職経験のある高橋信行先生と先生のゼミ生と合同での旅行だった。このとき，初めて北海道に行ったが，まさに「北の大地」だけあって，視野に広がる風景全てに感動，また，両先生の普段見せない一面（お二人の歌唱力に脱帽…）も見ることができ，学生の時にしか味わえない思い出深い出来事であった。

福祉社会学部のほとんどの先生方には，講義，社会福祉援助技術現場実習指導等々でアツいご指導をいただいた。本年12月に開かれた，「社会福祉学科創設三十周年記念シンポジウム」では，久しぶりに先生方と再会でき，夜の懇親会では，酒を酌み交わし，旧交を温めあい，近況報告するなど楽しく過ごさせていただいた（田畑洋一先生，大変お世話になりました）。このように，学業では，多種多様な形で先生方，地域社会の方々と関わりを持たせていただいた。今でも感謝の気持ちで一杯である。わずかな期間での体験であったが，自分にとって大きな糧となったことは確かである。

（２）サークル活動

次に，サークル活動について，先に述べたとおり，私は，男声合唱団というまさしくむさ苦しい男どもだけが集う合唱団に入学から卒業時まで所属していた。活動場所はフィールドハウス横の三号館（現在は使用されていないとのこと…）で，空調設備は全くなく，夏は蒸し暑く，冬は凍えるくらい寒いという悪条件のもと，約二十～三十名近い部員で練習の日々であった。

合唱団とはいえ，雰囲気はいたって体育会系。先輩たちは大変威厳があり，上下関係も厳しく，そんな環境でうまくやっていけるのか，内心不安であった。そんな不安を取り払うかのように，先輩たちは，曲の音取り，合わせなど，歌うこと自体苦手で，しかも音感も全くない私を親身になって教えてくださった。また，練習後の帰りには必ずといっていいほど坂の上の矢車食堂に立ち寄り，夕食をごちそうになり，食事しながらいろいろな苦労話を聞かせてくれた。

ある先輩は，当時主将を務めていた頃の話をされ，大所帯でしかも一人ひとりが多種多様な個性を秘めている部員たちを仕切り，まとめていくことの大変さ，難しさを説々と語られた。話を聞いていくうちに，先輩たちは，並々ならぬ努力を重ねながら，サークルを支えていたのだということ，私は，頭の下がる思いであった。そして普段の練習の成果を発表する機会として，学内では，入学式・卒業式・保護者懇談会など式典時における参列演奏，学友会が主催する学術文化発表週間（学芸祭），大学祭におけるイベントでの演奏，学外では，県内の大学，短期大学の合唱サークルが一同に集う県大学合唱連盟定期演奏会，県教育委員会から県合唱連盟を通じて依頼され，県内の文化施設での巡回公演，夏期休暇を利用して，合宿しながら，小・中学校や社会福祉施設を訪問した演奏旅行，そして，我が合唱団の定期演奏会（主に，宝山ホールや市民文化ホールで開催），さらに，九州合唱コンクールに二度出場する機会をい

ただいた。

印象深いのは，指導者との出会いである。指導者の名は，住吉三滋先生（元県合唱連盟理事長，本学名誉教授）である。先生は，長く公立学校での音楽教職の経験者で，学生時代は，合唱団にも所属していたという，文字どおり，「合唱漬け」で人生を歩んでこられた方である。我が合唱団の技術顧問として，数十年以上の関係である。先生は，ご多忙にもかかわらず，私達の練習に顔を出された。全体の指導はもちろんだが，声域ごとの指導にも力を入れておられ，偶然にも，先生の得意の声域と私の声域が同じであったので，練習にも一層力が入り，時には「バカヤロー」という声が飛び出すほど，情熱あふれる指導をされた。入部して間もないころは，その指導に圧倒されることが多々あったが，先生の合唱に対する思いの深さを受容，共感することが少しずつできていったのである。卒業時の最後の定期演奏会は，県内最大の収容人数のホールをもつ，鹿児島市民文化ホール（第一ホール）で開いた。住吉先生は，客演指揮者として，得意の合唱組曲のタクトを振られた。私達は，緊張しながらも精一杯歌うことに集中した。演奏を終え，先生は，ホール会場の観客に気づかれないように，小さく拍手をし，笑みを浮かべておられた。住吉先生は，時に厳しく指導されたが，その裏で，私達素人がほとんどの合唱団を温かく見守っていたのだと感じた。ただただ感謝するのみである。

そして，サークル運営面で部長としてご指導いただいた方がいる。一人は，土井紀夫先生（本学経済学部教授），もう一人は，山下友司さん（本学進路支援センター課長補佐）である。土井先生は，本学赴任間もなく，合唱団の部長を引き受けてくださった。先生は温厚な人柄で，コンパに必ず顔を出され，私達学生との交流に熱心であった。また，私達合唱団の定期演奏会にも欠かさず見に来てくださるなど，陰になり日なたになり，私達を支えてくださった。

山下さんは，私達合唱団のOBである。土井先生の後任として，部長を引き受けられた。とても優しく，フランクに接してくださり，よき兄貴分として，私達を支えてくださったのである（現在もお世話に為っています…）。

こうした先生方や先輩方の支えがあってこそ，私は，何かしら成長することができたのではないだろうか。

（３）学友会活動

三つ目に，学友会活動についてである。学友会とは，学内のサークル活動の取りまとめ役の揃う組織で，単体のサークルとは一味も二味も異なり，濃い体育会系のオーラを醸し出す存在であった。その中で，私は，その中枢にある「総務委員会」に四年間所属し，卒業アルバム作成に関わる，アルバム担当補佐，広報次長，会計次長，卒業時は，学友会全体の予算にも深く関わることになる，会計部長をさせていただいた。

印象深い出来事としては，同じ学友会機関で，体育系サークルを束ねる「体育会」におられ，自身も体育系サークルに所属されていたＭ先輩との出会いである。偶然にも，私と同じ社会福祉学科に所属していたので，何となく親しみを感じていた。先ほども述べたが，このＭ先輩は私が一年次のときの四年生。この当時，四年生を「神様」と言っていた（神々しい存在，適切かどうかは分からないが…）。そういう中で，簡単に気安く会話することはできなかった。学友会は，12月から翌11月までが任期なので，ちょうど大学祭終了から数日後に四年生の先輩方が引退となるのである。そんな中，ある日，そのＭ先輩から私に直接声をかけてくださった。学科の専門科目についての質問をしてきたのである。私が，福祉系高等学校出身と聞き，話しかけてこられた。初めは私も緊張していたのだが，先輩は，「分からんから，簡単に教えてくれんけ～？」と鹿児島弁交じりに会話した。質問の答えというか，疑問が解決してホッとしたＭ先輩。「ありがとね～。わいがおったで卒論書くの助かったど～。」とニコニコしながら嬉しそうにしていた。そんな姿をみて，私は，先輩が，ひよっ子の一年生の私に，何らかの助けを求めてきたこと，それに分かりやすく答えられたことに対し，心から感謝の気持ちを素直に伝えてきたこと，このＭ先輩の意外な一面を，知ることができた。学友会機関には，他にも同じ学科に所属された先輩，同期，後輩もたくさんいて，悩みごとや困りごとなどをときには飲みにケーショ

ンしながら語り明かしたことを思い出すのである。

このような学友会での出会いも，多くの先輩方，同期，後輩たちとの出会いがあり，助け，助けられながら，がんばってこれたことは，私にとって大きな自信にも為っているのではないだろうか。

（４）卒業後の自分

卒業を迎え，大学在学中の諸活動を陰になり日なたになり応援してくださった上野紀久さん（当時学生課長，現在大学事務局長）から，大学同窓会幹事を引き受けてくれないかとの要請を受けた。上野さんとは，サークル活動や学友会活動において，並々ならぬご指導，助言をいただいてきて，お世話になった方である。上野さんも大学のOBで，私の大先輩であり，ご縁のある方であったので，私みたいな者でよければとお引き受けし，現在まで継続している。毎年６月に行われる総会，懇親会には欠かさず出席してきた。

そして，数年前の話である。県外に在住している同期生から連絡があり，鹿児島に来るとの話が出た。私が幹事をしていたということで，「なら，せっかくだから皆で集まったらどう？」と提案し，鹿児島市内のホテルで社会福祉学科の同期会を企画することになったのである。同期生といっても，すべての人間を知っているわけではなく，中には中途退学などした者もいるので，それぞれのネットワークを利用して，参加の呼びかけをしていった。そして，同期会当日，どのくらい集まるんだろうと期待と不安が入り混じった中で迎えた。フタを開けてみると同期生の半数近くの約四十名が，県内外からこの日のためにと駆けつけてくれた。会では，出席した一人ひとりに近況報告とともに，学生時代の思い出を語ってもらった。出席してくれたほとんどは，学生時代に何らかの学内イベント（もちろん学業でも…）で目立ちたがりな仲間たちで，この日は，時が経つのも忘れ，語り明かし，楽しんだひとときであった。定期的に行うのはなかなか難しいが，今度は，お世話になった先生方もゲストとして迎え，盛り上がりたいなと考えている。

おわりに

思いつくまま筆を走らせてきた。これまでを振り返ってみると，私が過ごしてきた足跡は，いろいろと回り道もしたかもしれないが，それは，決して無駄なものではなかったと自信をもっていえる。在学中，多くの関係者や地域社会の方々から多くのことを学ばせていただき，自分の存在を見出すことができたこと，社会人として，今，絆を深くさせてくださったすべての人たちに，心から感謝の念を禁じ得ない。（これまでも，そして，これからも引きつづきご指導を…）

最後に，在学中の皆さんに一言。私自身，大学で何をしたいかと言われた時，明確な目的は当初なかったのだが，多種多様な人たちとの出会いを重ねるにしたがい，「自分はこうなりたい」という一筋の光の如く目的が見え，気がつけば，あっと言う間に卒業を迎えたように感じる。しかし，それは同時に濃厚な体験をした時期でもあって決して無駄ではなかったと，自信を持って言える。皆さんも４年間の学生生活をどんな風に過ごしたいか，それぞれ考えていると思う。卒業するときに，自分はこんな体験をしたんだということを胸を張って言うことのできる，そんな学生生活を送ってほしいと心から願ってやまない。

先輩たちは，今・ここで

入学して初めて，将来のことを真剣に考えた

鹿児島国際大学総合企画室
大　里　和　博
1993年（平成５）年３月卒業

１．はじめに―興ざめした瞬間

この学会誌にエッセイを寄せるきっかけになったのは，社会福祉学科のＳ先生が，私が所属する部局にフラ～っと来室されたことにはじまる。Ｓ先生は何をしに来室されたのかなぁ～？と思いつつも，世間話に興じ，盛り上がっていたところで「社会福祉学会誌『ゆうかり』に何か書いてもらえませんか～？」との執筆依頼。それまでの座談が一挙に興ざめした瞬間でした。

同僚も寄稿していたことを知っていたので，ここで遂に私に回ってきたか～と正直そう思ったが，ここで自分を振り返ってみるのもいいのではないかと思い，お受けした次第である。

２．深く考えていなかった私

高校３年生のころの私は進路について，自分は将来何になりたいのか，何をしたいのか，何に興味があるのか…，真剣に考えていませんでした。「どこかの一般企業に勤められればいいわけだから，とにかく大学に進学さえしておけば，何とかなるだろう」という漠然とした気持ちで将来のことを描いていました。いわゆる自己アイデンティティを持たない生徒だったのです。

だから大学を選ぶ理由として，①企業関係の学問が学べればいい ②学費が安い ③九州圏内の大学に進学する ④中学時代から続けてきた陸上競技ができればいい というものでした。この条件から，希望に合致する大学が鹿児島にあるということを鹿児島の大学に進学していた兄から教えてもらいました。そして鹿児島経済大学（現 鹿国大）を知り，また当時の陸上競技部の幹部の方々とお会いし，熱心な勧誘を受け，社会福祉学科ではない学科に進学しました。

３．チームメイトから助けられたこと

無事に入学することができたものの，県外出身者ということもあって，入学当時はなかなか友達ができず，とても不安な時期を過ごしていたことを思い出します。しかし，陸上競技部に所属していたことで，その心配も次第に無くなっていきました。

なぜなら，陸上競技部の皆が家族と思えるような温かい環境があったからです。そこでは，ともに苦しみ，ともに喜び合い，そして語らい，そして支え合ったりすることで，人への思いやり，人のいたわり，優しさ，温かさといった人として生きる大切な心を育ませていただいたと思います。特に諸先輩方には厳しさの中にも愛情あふれるご指導をいただいたお陰で，私自身も切磋琢磨を重ねることができたと感謝しております。そういう環境であったからこそ，競技面においても国民体育大会といった全国レベルの大会に出場できるほどのレベルに成長ができたのだと確信しています。

４．入学してからの自分探し

大学生活１年が経過した頃，自分の将来のことについて考えるようになりました。そのきっかけは，陸上競技部の先輩・同級生の多くが社会福祉学科に所属していたため，社会福祉関係の話題を聞く機会が増えたことによります。もう一つ理由があります。それは，今は亡き，父の仕事に関係している。

父は役所勤めで，長いこと福祉に係る業務に携わっていました。小学生の私は父の仕事について回ることが好きで，一緒に一人暮らしの高齢者の方々に年金等を届けたりしていました。父は時間がないのに，当たり前のようにご老人たちの世間話や身の上話を聞いていたことを覚えています。

そのほか，クリスマスや正月の時期には，知的障害児施設の子どもたちを家に招き，ともに一晩を過ごしたりしていたことを思い出します。この体験によって，私の中での障害者やお年寄りは，より身近な存在となりました。

このような記憶が心の奥底にあったため，福祉に携わる仕事に就きたいという思いはさらに大きくなりました。そして社会福祉学科へ転学科することを決意しました。このことを父に打ち明けたところ，とても喜んでくれました。今考えれば，私は父の背中を見て育ったことが強く影響し，働く父の姿に憧れを抱いていたのだと思います。そして転学科試験を受け，望みを叶えることができました。このとき，自分は一体誰なのか，自分は一体何がしたいのかが分かった瞬間であったと思います。

５．社会福祉学科へ転学科してから

３年次から転学科した私は，特に関心をもった特別支援学校教員養成課程を専攻しました。そして４年次のとき養護学校（現 特別支援学校）の教育実習に行き，大学では学ぶことが出来ない実践的な体験をさせていただきました。中学部の生徒たちは，とても素直で，こちら側からの働きかけに対しての反応が良くても悪くてもストレートに気持ちに表れるので，毎日「今日はどういうふうに言葉を交わしていこうか。」と考えをめぐらせたりすることは良い経験になりました。また保護者の方と連絡帳を通じ，その日一日の生活の出来事を連絡させていただく機会をいただきました。そこには子どもに対する親の思いが書かれてあり，ちょっとした成長（変化）だけでも，ことのほか楽しみにされていることが理解できました。私自身も生徒たちの小さな成長に感動させられ，ますます養護学校教諭になりたいという意志が強くなりました。

実習で学んだことは，大学で学んだ理論どおりに事柄を運ぶことはできない，現場とのはざまで隔たりが生じる，その隔たった部分をどう熟考するかが求められるということであったと思います。これは，どのような仕事においても言えることだと思います。

６．おわりに－自分を振り返り，今言えること

人生，山あり谷あり。この歳になっても，私の身辺で様々なことが起こっています。事情によっては，恥ずかしながら涙を流すことさえあります。人間ですから，仕方がないです（笑）。悩みながらも，前向きに一歩ずつ進んでいく，この繰り返しが，自分の人生を大きく変える原動力であると信じています。

大学生活は，あっという間に過ぎてしまいます。だからこそ大学生活を充実させて欲しいです。大学生活を充実させるには，自分から動くしかありません。私の経験から言えば，それは，大学での学びや，出会いではなかったかと感じています。何よりも講義の中で学ぶだけではなく，読書や友人との語らい，サークル活動，アルバイト，旅などをして，多くの人に出会うこと，多くのものを見ること，そして多くのことを経験していくこと，これが大切ではないかと思います。そして，学ぶことから学びあう心へと変化していって欲しいと思います。学びあう環境の中で，それまで知る由もなかった様々なことに気づく，そしてそこから知識を得，社会人となるための準備を急ぎすぎず，無理をせず，一歩ずつ，確実に進んでいってもらいたいと思います。

また，１つでも２つでも「大学時代，これをやってきた」と自信を持って言えるくらい何かに打ち込んでもらいたいと思います。

最後に，学生のみなさん！自分の個性を大切にして，等身大のありのままの自分で様々なことに臨んでください！私は希望どおりの職に就くことはできませんでしたが，教育関連の仕事として，現在，本学の大学職員として勤務をさせていただいています。微力ではありますが，大学活性化のため，皆さんの可能性のために精一杯努力していきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。S先生！このような機会をお与えくださり，本当にありがとうございました。

[第４回]

鹿児島からの福祉・最前線

視点が変われば…

社会福祉法人常緑会　都城地域活動支援センター　オリオン
所長　山　元　克　也
1987（昭和62）年３月卒業

１．はじめに

私は，現在都城市にあります地域活動支援センター（施設名はオリオンです）に勤務しております。早いもので卒業して既に四半世紀。鹿児島経済大学（当時）社会福祉学科の２期生になります。元々福祉の現場に携わろうという強い意志があったわけでもなく，高校時代に高齢者福祉の場で働けたらという漠然とした思いがあった事が入学のきっかけでした。しかしながら社会福祉に関する知識は皆無の上に，大学での講義も福祉系の内容は難解な印象が強く，当初の思いはどこへやらで，徐々に興味はサークル活動（山岳部）等に移り，４年間怠惰な生活を送っておりました。

私の周りの同級生・友人には，福祉系のサークルに入り，将来の福祉・教育分野での仕事を目指す熱い人物もいましたが，私といえば具体的な将来像も浮かべられず，どこか就職できればいいやぐらいの甘い考えでした。この年になって勉強しておけば良かった，時間を有効に使えば良かったと後悔しております。医療・福祉分野にも世代交代の波が徐々に押寄せ，若いスタッフが増えてきておりますが，その姿を見るにつけ専門的な内容に精通しており，業務に対する意識もしっかりしているなと感心させられるこの頃です。さて，今回縁あって１期先輩より原稿の依頼を受ける事になりましたが，語彙の乏しい私には何とも難題で，これまで寄稿された先輩方諸氏の文面と比較すると甚だ拙い内容ではありますが，私がこれまで仕事として医療・福祉の分野に携わった経過を簡単に綴らせていただきます。

２．医療機関でのソーシャルワーク業務・資格化へ

卒業後，縁あって都城市内にあります藤元病院へソーシャルワーカーとして採用されました。都城市の人口は17万人弱ですが，そこに300～400床規模の精神科病院が３件あります。藤元病院は，その中でも精神病床が最も多い病院で当時は，精神科の他，脳外科・外科・整形外科・神経内科等の診療科がありました。私の業務は精神科でのソーシャルワーク業務が中心でしたが，当時の精神科病棟は，窓に鉄の格子，中央の長い廊下を挟み両側にベッドや畳の大部屋があるという作りで，食堂ホールは煙草による煙が充満しているという環境でした。その中を患者さん方が虚ろな表情で歩き回っている姿が今でも強烈な印象として残っております。

病棟には統合失調症やうつ病，精神発達遅滞等の患者さんが混在し，年齢も幅広いものでした。そんな中，医療機関でのソーシャルワーク業務に関して全くの不勉強であった私は，当時の上司や事務長に毎日のように指導と説教を受けながらの日々を過ごしていました。上司に言われるまま，病棟に入り多くの患者さんと接する中で，新人ワーカーの私にも少しずつ見えてきたのが，入院患者さんが抱える家族との問題，地域での偏見，社会や家庭での生活のしづらさといった様々な問題でした。当時既に長期入院と言われる方が多数存在し，その方々の退院相談にも，家族の感情的なしこりが残っている中，遅々として進展しない状況に強いジレンマを抱える事も多々ありました。

私が入職する数年前に有名な宇都宮病院事件があり，それをきっかけに精神科医療に関する法律

や患者への処遇が大きな転換期を迎える時にあたり，それまで，一部の開放的な病院を除き閉鎖病棟での入院処遇が多い時代でしたが，昭和63年，旧精神衛生法から精神保健法，その後精神保健福祉法へと，より人権を尊重した法律へと変わり，医療機関の治療環境や処遇が変化していく流れを実体験として感じる事ができました。法律が変わる中，これまでの諸先輩方の努力もあり，社会福祉士・精神保健福祉士といた国家資格が誕生したのも大きな変化の一つです。

今でこそ，社会福祉士，精神保健福祉士，介護福祉士，介護支援専門員など，医療福祉分野の資格が整備され，それぞれの専門領域で生かされていますが，私が入職した当時は事務職や看護職の方がケースワーカーの役割を兼務されている事も珍しくなく，病院のケースワーカーといっても「何？」と反応される事が多く，仕事上の本題に入る前に，ワーカーとはという説明を入れていたのを覚えています。学生の皆さんは，将来の目標に向けて勉学に励んでいらっしゃる真っ最中かと思いますが，在学中に様々な資格を取得する（あるいは受験資格が得られる）機会があれば，将来の為にも積極的に受ける事をお勧めします。時間に余裕のある今こそが自分を高めるチャンスでもありますので，是非チャレンジして下さい。

３．介護老人保健施設での２年，そしてその後

平成14年，同法人内にある認知症専門の介護老人保健施設（名称はグリーンホーム）へ事務長職として異動する事となりました。職務内容の違い等から，介護保険を一から勉強しなおしたものの，業務と環境の変化に対する不安が当時強かったのを覚えています。その施設は60床足らずの小さな老健施設で，職員も40人程とこじんまりした環境でした。認知症が専門の為に放尿や徘徊も日常茶飯事で，色々なエピソードもありましたが，アットホームな雰囲気の中，高齢者介護の難しさも経験させられました。また当時，県の老健協会で試験的に始まったばかりのサービス評価委員に推薦いただいた事もあり，宮崎県内の老健施設を見学する機会に恵まれ，各施設の特徴的な取り組み等を学べる貴重な経験ができたのもこの時期です。

老健施設での業務にやりがいと楽しさを感じ始め，およそ２年が経過した平成16年，前職場の藤元病院へ事務長職として異動となりました。精神医療の充実と採算性という経営面の難しさに改めて直面し，悩みの日々は続きました。日々業務に追われ，振り返る余裕もないまま数年が過ぎ，この度新たな勤務先（地域活動支援センター）に着任する事となりました。

４．地域活動支援センターについて

ここで私の現在の勤務先である地域活動支援センターについて少し触れさせていただきます。

地域活動支援センターは，障がいを持ちながら，住み慣れた地域で生活している方々へ，憩い・交流・活動・相談の場などを提供し，日常生活への相談を行ったり，自主的な活動のお手伝いや，地域との交流を深める活動を行います。社会参加への機会や催しの提供，ボランティア活動への参加やボランティアの育成も進めていきます。

主な業務としては，都城市より委託を受けた相談支援事業，地域活動支援事業と宮崎県より委託を受けた精神障がい者地域移行支援事業の３点になります。

相談支援事業は，利用者やその家族が抱えている日常生活での悩みや問題について共に考え，在宅福祉サービス等の利用についての援助及び調整や，ニーズに応じた専門機関の紹介を行います。また，地域生活及び在宅療育におけるニーズに応じた援助プログラムの作成を行ったり，ボランティアの育成，地域への啓発活動などを行います。

地域活動支援事業では，当センターを憩い・活動の場所として提供します。センターが提案する活動内容（プログラム）を行うとともに，ここに集う利用者仲間で活動を作り上げていきます。また，それぞれに自由なことをして過ごす事もできます。自由な活動やふれあいを通じて，自主的な交流や仲間作りを支援し，社会交流の促進を図ります。

自立した日常生活及び社会生活を営むために必要な医療・福祉・地域の社会基盤との連携強化の調整や，地域資源の開発。地域住民ボランティアの育成，障がいに対する理解促進を図る普及啓発などの支援も行います。

精神障がい者地域移行支援事業は，県の委託を

受け都城北諸県福祉圏域の精神科病院に入院している精神障がい者のうち，症状が安定しており，退院後に日常生活を営むための環境が整えば退院可能である者に対し，退院のための支援及び退院後に自立生活を営むための支援を行う事により，精神障がい者の社会的自立を支援し，地域生活への移行を促進することを目的としています。以上が，主な役割となります。当センターが開設されて，およそ1年が経過しましたが，障害者自立支援法は24年度に改正を控え，相談支援の充実や障害時支援の強化，地域における自立した生活のための支援の充実等，地域生活支援の為の整備がされようとしており，当センターの業務も非常に慌ただしくなるものと推察されます。

５．おわりに

卒業後，新米のソーシャルワーカーとして業務に携わった当時からすると，資格の確立，各種法改正等，この20年程で医療・福祉の分野も大きな変化が見られました。同じ分野で働く方々が専門性を発揮し活躍されている姿を見るにつけ，自分もまだまだ頑張らなければという思いになります。多種多様な問題を抱えた方々が多数存在し，日々多くのスタッフが頭を抱え，関係機関との調整に奔走しておりますが，私も支援する立場の者として日々研鑽を積んでいきたいと思っております。

最後に，医療・福祉の分野に従事してきた体験から学んだ事をお伝えします。

既に御存じの方もいらっしゃるでしょうが，それは，リフレーミングの技術です。リフレーミングとは視点のフレームを変える事で，困難と思えた状況に課題解決の為のヒントや活路を見出せたり，欠点や弱点と思われていたものが，その人にとってストレングス（強み）であったりする事を再発見する事です。

医療や福祉以外の社会生活全般でも言える事ですが，固定観念を持たず柔軟な考えと視点を持つ事が非常に大事になります。学生の皆様方も将来の自分の進路に不安を持たれている方が多数いらっしゃるかとおもいますが，時間が自由に使えるのは学生時代の特権でもあります。４年間を有意義に使い，広い視野から多くのものを吸収し将来の目標に向かい専門性の追求をしていっていただきたいと思います。

エッセイ

矛盾した不思議な感覚に魅了されて

１年　松木田　智　美

１．「体力あるね」「よく頑張った」と声かけられ

私は今，大学まで自転車で通学している。駐輪場の入口にちょっとした上り坂があるのだが，そこを自転車で登り切ると，駐輪場のおじさんがいつも「体力があるね」「よく頑張った」などと声をかけてくれる。それが，私の大学での一日のスタートであり，日常における楽しみの一つとなっている。高校に入学した頃から通学を共にしてきたこの自転車には私なりの思い入れがある。

２．心の中で走り疲れて

高校生活で最後の体育祭が終わった次の週のことだった。私の気持ちは自分でも驚くほど滅入っていた。一，二年生のときは良い思い出となった体育祭。しかし，三年生の体育祭では，競技の部でも応援の部でも全力を出し切ることができず，結果は優勝だったが，私には無理やりの優勝に思えて納得がいかなかった。役員の仕事も上手くいかず，しまいには他人の責任を押し付けられ，体育祭が終わってから私は弓道場で泣いていた。泣いているときでさえ友人にうんざりする話を聞かされ，それを端から見ていた部活仲間だけが，私の気持ちを理解している気がした。

その後も，友人との会話がどこかぎこちなかったり，体調が悪い日が続いたり，色々と上手くいかないことが多くなった。家に帰ると，母といつも喧嘩をしていた。学校にも家にも，私の居場所はないと思った。弓道部を引退するまでは，多少の悩みはほとんど部活仲間と笑いあったり，弓を引いたりすることで解消していたのだが，それができなくなってから，私の心には少しずつ苛立ちや不安が募っていったように感じる。今あのときを振り返ってみると，周りの友人はみな専門学校の受験直前で，必死だったのだ。母だって，祖父が亡くなり行き詰まっていた時期だった。

３．一心不乱に走るということ

そのような状況の中で私は遂に耐えられなくなり，ある日の朝，自転車で学校に行く途中に通学路を外れた。近くにあった大きな公園のベンチに座り，一息ついた。義務教育だったときを含めて，初めて学校をさぼったなあと思った。気を紛らわせるために，とにかく頭の中で考えを巡らせた。勉強も部活動も習い事もひたすら突っ走ってきた中で，得たものは何だったのだろうか。考えもなしに走ったことに意味はあったのだろうか。そしてこれから，走り続けることに意味はあるのだろうか。

私は再び自転車に乗り，ペダルをこぎ始めた。何時間こいだのだろう。海沿いを走っている途中，雨が降り始めた。私は近くにあった小さな公園の木の下に入り，雨が止むのを待った。しかし，雨は次第に強くなっていった。よく考えると私は昔から何かある度に走っていた。辛いことがあったとき，例え疲れていても脚を使って一心不乱に走ると気持ちがスカッとした。母に，「あんたの考えていることが分からない」と，罵声を浴びせられたこともあるぐらいだった。周りの友人や先輩からも，「頑張りすぎ」といつも言われた。しかし，自分自身が「頑張れた」と思うことは決してなかった。ふと，だからこそ走るのかな，と私は思った。長距離を走ることは目に見える「頑張っている」行動である。心の中で躓いたとき，実際に走ることで頑張っている証を見出したかったのかもしれない。

４．溢れ出したもの！それは！

学校をサボりずぶ濡れになって何をしているのだろう，と自分に呆れた。どこにも居場所がない，そう考えていたが，突然，ある場所が頭に浮かんだ。ふれあい教室。ふれあい教室とは，町立公民館に在る不登校の小・中学生が通う一室である。高校生の私は，平日が休みになったとき，そこの

先生や生徒と会話をしたり遊んだりして楽しんでいた。ふれあい教室の先生に電話をかけることを最初はためらった。学校をサボっているのだから，先生も良くは思わないだろう。しかし，私はまるで思考の糸が切れたかのように，通話ボタンを押した。先生は事情を聞くと，「今，公民館にいるからおいで。」と優しく言ってくれた。そのとき，心の器から水が溢れ出した気がした。

５．今日も大学までの上り坂を走り続ける

ずぶ濡れになった自転車を立ちこぎして公民館に着くと，先生は駐輪場で私を抱きしめてくれた。冷えきった身体が温かくなって，また動き出そうとしているようだった。その二時間後，自分でも驚いたのだが，私は清々しい気持ちで教室にいたのである。一回，立ち止まって深く考えたことで，気持ちの整理がついたのかもしれない。この日から，私は何かに行き詰まったとき，ひたすら走ったり，自転車をこいだりして気持ちをスカッとさせた。走ることが，今まで以上に大好きになった。

その気持ちは，大学生になった今でも変わらない。大学に入ってから友人は沢山出来たものの，未だに自分の居場所を見失うときがある。しかし，私には，交通機関を使うとすぐに会いに行ける親しい高校時代の友人がいる。地元の仲間がいる。ふれあい教室だってある。少し立ち止まると，自然と向かうべき場所も見えてくるのだ。心の中では走るのをやめたのに，体はただひたすら走っている。その矛盾した不思議な感覚に，私は今でも魅了され続けている。そして，私は今日も，大学までの上り坂を走り続ける。

エッセイ

単位が足りない！！

１年　安　楽　　暢

１．私の心が晴れるわけではない

単位が足りない。その事実に思わず笑ってしまった。それは高校２年生の冬のこと。進級するためにはあと３単位が必要だった。それでも進級するために教科担当の先生のもとへ向かう。「進級したいので，進級するための課題を教えてください。」なんというか，屈辱的だった。

私の高校生活はこんなはずではなかったのだ。自分への怒りとか不満とか，もっといえば虚しさとか情けなさとか馬鹿馬鹿しさとか憤りとか‥‥‥。そういった気持ちを思う存分，課題にぶつけてやった。しかし期限までにそれを提出できたからと言って私の心が晴れるわけではなかった。その私の心だが，実はこの時治療中だった。

２．授業にはろくに顔を出さなかった

朝は起きられない。教室に入るのが恐い。授業には集中できない。藁にもすがる思いで進級したのはいいものの，とても進学校で受験生をやれる状態ではなかった。意地やプライドなんかじゃごまかせないほど疲れきった私の心。当時その思いの丈を私はブログという形で残していた。叫びたいけど叫べない。ただただそれを文字にしていた。

その中にはどうしても消せない２つの思いがあった。部活動を最後までやり遂げたい。そしてこの学校を，友達や仲間とともに卒業したい。その思いだけが私を奮い立たせた。「あと１年間だけ，頑張れ。」と。つらい空虚感，死にたくなる絶望感。永遠に続くかのようにそれが繰り返されるなかで私は高校３年生になった。もうほとんど部活動のために学校に行っているようなもので，ろくに授業には顔を出さなかった。

吹奏楽コンクールまであと３ヶ月。新１年生を迎え入れて部員は90人越え，私はその90人をまとめる部長だった。自分なら出来る，自分しか出来ない。プレッシャーにも似た声援を自分に送り続けた。それでも苦だと思わなかったのは，自分の心と引き換えにできるほど大好きだったからだ。その部活動の雰囲気も，仲間も，一体感も，チームワークも。自分が部長に選ばれたことを誇りに思っていた。だから最後までやり遂げないわけにはいかなかった。

３．通信制に対する抵抗と不安

吹奏楽コンクールまであと２ヶ月。その頃だ，初めて転学を勧められたのは。当時の担任の先生が言うには，部活動を引退した夏に通信制のある公立高等学校へ転学しないかということだった。私ははじめ，それを２つの理由で拒否した。ひとつは，いまの学校を卒業したいということ。そしてもうひとつは，通信制に対する抵抗と不安だ。病気になっていなければこうはなっていなかった。本当の私はこんなものじゃない。高校生らしい子どもじみたプライドと希望がそれを強く拒んだ。とはいえ私もわかってはいたのだ。この状態で卒業の見込みがあると判断されることも，受験一色に染まっていく中で治療と平行して学校に通っていくことも，とうてい無理な話だということを。

そんな私に先生は一筋の光を与えてくれた。「たとえ同じ高校を卒業できなくとも，せめて同じ時に卒業できれば，みんなで一緒に卒業できる。どこを卒業したかなんて関係ない。私たちは同じ時を過ごした仲間なのだから。」先生は１ヶ月もかけて私に言い聞かせてくれた。こんな私を一人の生徒としてみてくれたこと，仲間だと教えてくれたこと，それがただ嬉しかった。

４．転学が決まり，部活動に集中して

吹奏楽コンクールまであと１ヶ月。そうして正式に転学の話が決定した。親も交えて先生と話を進める。それからは部活動に集中して力をいれた。心なしか心に余裕も出てくるようになり，私

はある思いを抱くようになっていた。「私はひとりじゃない。」たくさんの人が私を支えてくれている。なにより両親は私の気持ちをすべて受け入れてくれる。治療もそっちのけで自分のしたいことだけをする私。わがままし か言わない私をそれでも支えて，応援してくれる。私は，幸せだ。このとき初めてそう思えた。

吹奏楽コンクール当日。両親はそろって会場に足を運んでくれた。この日の演奏が私の部長としての集大成。私の仲間と作り上げたものを堂々と披露する。私は思わず涙した。感動だけじゃない，さまざまな気持ちがこみ上げて溢れる。これほどみんなに感謝した日はなかった。

５．今の笑顔がある理由

部活動最後の日を終えると，私の高校生活は一変する。夏休み中は入院治療を行うことになった。入院は３ヶ月に及び，秋からはついに通信制教育が始まる。週１回のスクーリングと１科目につき月２枚ペースの課題提出。最初は戸惑うことも多く，卒業に必要な単位を確実に取らなければと焦ってしまうこともあった。

しかし担任の先生からのアドバイスやその高校の吹奏楽部の顧問との話を通してだんだんと自分のペースで課題に取り組むことができるようになった。通信制教育は病気と二人三脚で学習を進めるには非常に適した環境だった。症状の回復と高校卒業という目標への前進は失いかけた自信を取り戻す大きなきっかけとなり，一度はあきらめた受験にだって挑戦できたのだ。気付けば私は高校卒業という念願の日を迎えていた。家族や先生，仲間は笑顔で祝ってくれた。

どうしてこんなことになってしまったのだろう。決してまっすぐではない高校生活，その途中で何度もそんな疑問を自分にぶつけた。でも，そんな道のりだったからこそ今の笑顔があるのだ。「私はひとりじゃない。」私は支えられて生きてきた。いまそう思えることを幸せに思う。こんなところでしか言えないような私だけど，心の底から思っている。ありがとう。

エッセイ

無限の可能性を秘めた皆さんへ！
今，働いているものからの一言

１年　新　田　博　之

１．ソーシャルという価値観に触れて

何十年ぶりに学生を経験して，早いもので１年が経ち，この間に異なる価値観に触れる機会を得ました。生活を支える為に稼ぐという概念を除きますと，多様な物の見方もあり得るものだと感じました。また私，並びに私を取り巻く環境にソーシャルという意識が欠如していた点を認識出来たことは大きなプラスでしたし，認識すらしていませんでした。さらに効率・時間軸を外して考えますとソーシャルという概念が大きく変化することにも驚き，ここに大きな可能性を感じました。

最初に私の自己紹介を簡単にさせて頂きます。現在，私は資本金6000万円の中小企業を平成２年より営んでおり，今年から当校で学び始めました１年生48歳です。事業内容は，車関係・産業機械関係の部門を，技術力を背景に事業展開しております。この２部門を２拠点で20名のスタッフで運営しています。最近の出来事としましては，何と申しましても，姉歯・リーマンショックがあります。姉歯ショックでは建築基準法改正により担当部を抱えます産業機械部で17％もの大幅な売上減を経験し，傷も癒えない翌年に，リーマンショックによる影響に見舞われ，これまた同じく産業機械部を直撃，売上を30％減少させました。姉歯ショック時では幸運にも車両部が好調に推移し，何とか全社では18％の売上増と健闘しましたが，翌年のリーマンショックには，ほんとに参りました。17％減少しましたベースからさらに30％の売上減ですから，従来売上の半分位までダメージを受け，全社でも4％の売上減となりました。なんとか赤字決算は回避しましたが，今振り返ってみましても，スタッフが一丸となって努力して頂いたことと，大きな幸運に恵まれたことに因ると深く感謝しています。これらの運に助けられ，何とか直近まで５年以上に渡り黒字経営で頑張って来ることが出来ました。振り返ってみれば，この時期は毎年のように変化を求められ，創業から何回となく遭遇しました大きな危機の一つに数えられます。

２．私の仕事観と社会観

次に私の社会環境への認識をお話します。ここではあくまで私個人的な意見で，偏った解釈・見識があると思われますことを冒頭申し上げます。現在の日本では，生きるだけでも驚くほどお金を必要としているように感じます。逆に言いますと，ご自分の生活レベルを設定しその維持に必要な糧は，絶対的に調達する必要があるという事になります。これを調達する為に多くの方々が日夜凄まじく努力をしており，一般的な家庭では，涙ぐましく精一杯の努力でやっと成り立つレベルに思えます。ここから以上のフロー部分がお金では変えられないもの，お金以外の価値観へと成り得るエリアだと認識しております。物に溢れ，必要なものが少なくなった現在でも資金を流動させる必要があります。しかし欲しいもの・サービスへの欲求が薄れた今日では，多少努力した位では資金が流動しません。この為提供サイドから，より便利に，より安価に，要望の先取りを競い，便利感・お手頃感をアプローチし続け，少しでも興味を持って頂く努力をし続け資金の流動を図り続けています。これが社会の発展の一部を構成しているとも言えますが無理を強いているのは事実です。このアプローチを常に競い続けてしまう為に，常に過剰供給状態となり，圧倒的優位な商品・サービスで無い限り，さらなる一歩を求められますが，残念ながら一歩先へ到達出来る程の差は創り出せない状況で，半歩先への努力が問われ続けます。この過剰供給が技術・サービスの発展を捻り出し，日々の便利と安価を提供しているよ

うに見えます。競争に勝った，いわゆる勝ち組と負け組との差は小さく，昨今言われます微差力が問われることになります。この微差に勝ち残る為に，私を含め人々が恐ろしく切磋琢磨している訳です。これには，折れない強い精神力が必要となり，また求められているように思われます。

私の個人的解釈ですが，買って頂く・評価して頂く為には，人々の価値観の変化以上に，日々業界ルールとでも言います任意基準をすばやく解釈変更し，結果何が正しいのかではなく，だれを必要とし，選択するのか，またその人から評価される為にはどうしたら良いのか？また，その判断を求め続けているように感じます。これが営業クレームという名のもとでの過剰サービスへと絶妙にリンクし合い，さらなる微差への挑戦となっています。しかしこの土壌が経済の進化への原動力となっているとも感じます。不思議なことに，能力一杯の仕事をしていては大きな進歩が得られることが少なく，これは無理だろうと思える目標値に，さらに20％加えた，一見自分でも不可能に思える目標値に挑み，この限界点を消化した際に次のステップが，風景が，見えるように感じます。目標点いわゆるノルマが常に不可能に思えるのは，この為のように考えていました。これを達成させる為には，また生き残るには強靭な精神力が必要とされます。そのような極度な緊張とストレスの中で日夜暮らしている状況ですから，消費者となった場合には，高い次元の洗練された要求になりがちと思っていました。

３．サービスとしてのクレーム対応

私の顧客獲得の一つで管理ユーザーからのクレームのケースを挙げます。まず，クレームの一報を受けましたら，即座に訪問しお詫びをします。もちろん電話での対応は極力避けます。余計に興奮され怒られ過ぎてしまう傾向があり，後々の対応を複雑にする可能性を生じます。ここまでは当然ですが，ポイントはお許しを頂いた後のアプローチです。お許しを頂いた後にそれに要した倍の時間を費やし通い詰めます。２日要したら４日間といった具合です。要するに，ここまでしなくても，とおっしゃられても通い詰め，もう来ないで下さい，と言われる位クレーム対応をすることを心がけます。諸問題・価値観の違いから生じるクレームの為に，即時対応可能な十分な準備をしておきます。このクレーム時に初めて，お客様のお世辞抜きの本心に触れることが出来ます。しかし，実際このクレームの殆どがいわゆる不手際から来るクレームではなく，ご説明した事項への価値観の違い，もしくは要望的要素です。このことを間接的にでもお伝えしますと大抵逆鱗に触れます。プロなら私の怒りも織り込みなさいという内容が殆どです。この価値観はお一人お一人大きく異なり，手探りで模索する必要があり，一回本心で怒られたお客様の価値観は財産となり，次回からクレーム発生を避けるツールが揃い良い関係が構築出来ます。このことからクレームで得た問題点を解決し，お客様へ改善過程も画像付で報告するなどで深い信頼を獲得，熱狂ファンの獲得へ繋げることが可能になります。事実，ご紹介頂ける上お得意様は，このクレームから発展した方々が多いです。その意味でもクレーム対応をサービスの一環と考えるようにしています。

この感動を得るツールとしてのクレームがサービスとなっています状況は，一方では要求していないものへの過剰アプローチとも考えられますし，いわゆる過剰サービスともいえます。このことから，細かなところ迄，また提供される人すら気付かない細部までサービスが行き届いているように感じ認識していました。私は，むしろ逆に多少不便な方が新しいのではないか？とも考えてしまう程行き届いているように勘違いをしていました。

４．ソーシャルと応援型消費

提供原価割れになりえる経済的に恵まれない方々への歪をフォーカスしたことは恥ずかしながらありませんでした。それどころか，自分の数字のことで精一杯だったように思えます。昨今，企業でも有料ボランティア精神(注１)での対応などとボランティアを全面に打ち出して来ています。前期の講義で，これはあくまで持つ者へのさらなる一歩のボランティアとの意味合いが強いように思えて来ました。勝ち組がそのマーケットを独占する仕組みの上では，社会的に十分貢献出来得ます人々でも，負け組に属した途端ゼロ査定されてしまいます。この微差による勝敗は経済的不利益が

大きく，バランスを考える必要性を感じます。

効率からかけ離れた立ち位置を経験出来ることで，結果に対して原価との価値観を外して考えることが重要なことがある，との視点も勉強になりました。原価としての人件費を社会全体で担い，時間の許す方々が原価としての人件費をソーシャルとの考え方でボランティアする。このことで経済的に負担出来うる範囲で，各企業が応援型消費を構築する可能性があることを発見出来ました。価格面でも多少高くても社会に貢献出来る，応援型消費の可能性は大きく，これは徐々に表れつつありますが，規模があまりに小さく試みる企業も小さなベンチャーが殆どです。マーケットの小さなこの分野を大きくアナウンスすることで，ソーシャルから派生する消費行動の変化を応援型消費の発展として臨める可能性があることに答えの一つがあるように感じています。

現在の家庭を取り巻く環境を考えてみますと，ご主人の単身赴任・長時間労働など家庭を犠牲にせざる得ない状況で溢れています。これにも消費者の消費傾向の変化が有効だと感じています。消費者が消費する，その瞬間が企業を選択しているという力を最大限生かして，供給過剰になりにくく，心ある企業文化を後押しする消費行動を目指す応援型消費を推進することが家庭の幸せをもたらす答えの一つだと考えます。

５．人並みの生活の捉え方

よくよく考えますと，人々の目標とする人並みの生活そのものが，今の時世では高い目標になっているのでは？とさえ思えます。私たちが，車がほしい・家がほしい・多くの給料がほしい等々の物質的な欲求を持つ限り，どうしても競い合ってしまいます。競争はお一人お一人が幸せになろうとする正しい行動ですが，全体を見渡せば，競争によりむしろ逆の効果が大きく現れてしまい，結果 社会全体としては不幸になってしまいます。生活の糧がこのような競争の中で構成されることは，決して評価される事ではありません。心を豊かにする余裕が残っているような状態で仕事を終えられ，生活の糧が得られる状態，言い換えますと能力を超えない負荷でも生活出来うるバランスを考える必要があります。少なくとも，その状態でも負けない社会にすべきかもしれません。異常なほどの労力でやっと安定したささやかな人並みの生活を営める環境は，そもそも無理があります。しかし別の見方をすれば，その中で何処かに居場所を見出し，頑張らなければならないのも事実で，その為の準備を，考えることからでも在学中に試みてみては如何か，と感じます。

NPO など社会的に高い目的を見つけ出し貢献を深め，充実したすばらしい人生を送られておられる方々も多くいらっしゃいます。この点への知識は地域創生などの講義で得る事が出来大変感謝しています。その意味では学生は可能性の宝庫に思えてなりません。自分の信じるものが早いうちに見出せ，成し遂げる折れない志が得られれば，これは私たちの時代にない新しい生き方を模索出来る可能性が大いにあります。グループで戦わず自身の能力の向上を自身でチャレンジする新しいタイプの日本人でしょうか？グループで戦うスタイルの弊害は現れ始め久しく，管理・効率だけでは通用し難くなり新しい発想が求められているのも事実です。パワフルな日本人がこれ程にもいらっしゃるとは，ほんとに驚きました。これには無限の可能性を感じます。

６．実社会では時は金なりです

企業一般に就職される方々の場合では，社会に出た途端に突然違う価値観にギャップを覚えることでしょう。この為に即戦力的なことを習得する必要性を感じます。まず挨拶から始まり接遇，デジタルの多い現代ですが，直筆の手紙も重要視されており字のきれいな人は確かに重宝されます。企業が社員教育で要している部分の一部を在学中に行ってみては，と強く思います。時間は今なら十分にあります。社会に出ますと，時間イコールコストですから時間に追われます。担当する部署に必要な基礎事項の勉強しか出来難い状態が多いと思えます。仕事を離れても担当部署で必要な事案を考え続けなければ所定の会議などで報告書などの提出すら出来難くなってきます。当然プライベートの時間でもテーマへの掘り下げを考える方を企業は求めています。結果の一部はこの発想・アイディアから始まり，結果の見えない，アイディアなどに時間を割くことが就業中に捻出出来

る筈もなく，勤務時間内は結果が出ることを中心に行うことになります。これらにより，プライベートでも残務に追われ，またアイディアに追われる傾向があるように感じます。

本学で感じることですが，私のように仕事と並行して学ぶ者にはとても勉強になり，物事の基礎を再発見出来，楽しく学ばして頂いております。就職を控える，また必要な方々へは，どうしても実社会で問われる事などへ思考が及んでしまい，フォローの少なさを感じてしまいます。夢を持って臨むことも確かに重要ですが，実際は，好きな仕事を担当出来る機会は非常に少ないことも説明する必要があるでしょうし，運よく会社は選べても上司は選べないこと，直属の上司でその後の運命が大きく変化することなど，お伝えする必要性も感じてしまいます。実際はむしろ与えられた仕事を好きになる能力が問われていますし，よほどのことが無い限り嫌いにならない能力，この能力の長けた方が結果を残しているようにも感じます。担当した業務に精一杯努力出来るかが問われ，与えられた業務に誰より早く，誰より多く情熱を注ぐか？ また出来るか？ にかかっているように感じています。些細なところに好きを見出し，自分を騙し好きになる能力が問われているように思えてなりません。また，慣れと少しの鈍感力で，ほんとうに好きになってくるから不思議です。

モチベーション向上について，社内でも講習などはありますが，基本，自己責任です。スタッフのモチベーションをマネージャーが考え，マネージャーなど管理職のモチベーションを執行部が求めることが重要と言われていますが，これは高次元の事案で自己能力を超えるアプローチをしているにも関わらず，結果が出せない方々への解決法を探ることだと思います。この解決法を探る過程でマーケットと深く向き合う必要に迫られ，高いモチベーションの維持が図られてくるように感じます。上場企業に就職すれば20歳代前半から転勤や配置転換に合うことも多く，モチベーションの維持も容易ではありませんが，残念ながら，革命的な事でもない限り，精一杯努力することしか他に出来る余地が殆ど無く，些細なことに目的を見出し精一杯努力し続け，取り巻きの方々に可愛がられる能力を問われているように思えます。

７．おわりに…今の立ち位置は特別です

私がお伝えしたいことは，今しか時間がなく，後は全力あるのみだという事です。時間が無限で無料であるかの如くの贅沢さに，羨ましさともったいなさを感じます。私も目の前に競う相手が現れ戦う必要に追い込まれるまでは，全く気が付きませんでした。負けたくない一心で必死に必要な知識・技能を貪欲に詰め込み，なんとか生き残ってきたように感じます。私にもう少し時間があれば，逆に学生時代に，こんなことまで必要になることに気付いていれば，深読みしていれば，と残念でなりません。色々背負い込んで初めて分かったような思を強くします。

私の場合，産業機械系の国家資格十数種類を専門学校通信教育などで５年ほど要して取得し，車両系の国家資格取得二種類でも，仕事の合間に専門学校に２度通い６年程要し取得しました。実務関係の資格取得だけでもこの無駄さ加減です。この他に，接遇(注２)・CS(注３)・SCR(注４)でもかなり時間を要しました。しかもこれらは要点のみを掻い摘んで学習していますので，必要最小限程度です。しっかり学んだ方々とは深さが違い，遠く及びません。時間が許せば接遇など深く学んでみたいのですが，日々の事すら出来難い現状では，どうしても優先順位が低くなりがちで，結果 未達の状況になっています。ほんとうに残念です。

実際の商談などのケースでは（もちろん商品が魅力的なことがベースになります）取引相手を選別する際に人々が行う事は，まず担当スタッフの人柄や人間性を試して信用に足る人間かを目利きします。その上でメガネに叶った人だけで次の商談へと移り，価格や条件等々の詳細へとなります。要するに商品ありき，ではなく，まず人ありきだということです。その為には人間を磨き続けること，また経験が浅い方の場合は，情熱・人の良さを分かって頂く為に試行錯誤することが中心となります。この時，接遇などが物申してきます。これらは出来うれば時間がおありの時にじっくり深く学んでみるのも一つの選択肢だと思います。電話対応などは業界資格などあるようですから，これらも検討して頂くことも面白いかもしれませ

ん。ロールプレイングを通じて即実践でも耐えうるレベルに磨き込んでみられると，実社会ですぐに役に立つでしょうし，第一印象の構築から挨拶，また接遇など実社会で必要なマナー習得などは時代が変化しても強い武器になり続けそうです。結果的に，他の新卒の方々に対して優位性が図れるかもしれません。学問だけに囚われない選択肢も一考して頂ければ幸いです。

以上，１年を振り返って感じましたことを簡単にお話しさせて頂きました。あくまでも全ての内容が私の実体験に因るもので，見当違いや偏った見識などが多くあると思われますことを最後に申し添えさせて頂き，終わりたいと思います。

注：

１）有料ボランティア精神とはビジネスを通じてお客様のお役に立ちたいとの意味です。お客様のお困り事に対して出来る事を，それに見合う対価で奉仕することを模索することです。

２）接遇とはお客様に対しての接客技能のことで，売上確保に重要な要素です。

３）CS（Customer Satisfaction）とは，顧客満足度のことです。お客様が提供側に抱く満足度合いのことになります。

４）CSR（Corporate Social Responsibility）とは企業の社会的責任のことです。利害関係者に対して問われる責任のことです。

エッセイ

濃く鮮やかに

２年　弓　場　ち　ほ

はじめに

「人生の先輩」そんな風に昔は思わなかったけど，今なら言える気がする。ただただ怖かった先生，先生だけど友達みたいな先生。２人の恩師の言葉は，忘れられない。出会いの中でのその言葉は，味気のない日常に彩りを添え深くしてくれた。

私の相手になってくれてありがとう

私に剣道の基礎と心を教えてくれた先生との出会いから始めたい。先生は小学校２年生の春，剣道がしたいと言って入った学校のスポーツ少年団の監督であった。先生はすでに70代後半だったと思う。そんな先生は普段とても言葉数が少ない。しかし，剣道のことになると突然スイッチが入ったように，大きな声を出して，私たちを怒鳴る。まだまだ小さかった私にとっては恐怖であった。だから，毎週稽古の日の朝は親に隠れて泣いていた。親はそんなことなんて知らないので私を稽古に連れていく，いやだと毎回思う日々だった。

でも先生は怒鳴るところはいつも同じで本当に基礎の基礎，竹刀の持ち方や足の運び方ばかりだった。技の指導なんて全然教えてもらったことはなかった。試合に出て，試合に負けたとき，私は絶対怒られると思っていた。しかし先生は怒らなかった。「試合には必ず相手がいる。相手がいるのだから勝ち負けが必ずある。負けたら自分の悪いところが出たから勝てなかった。教えてくれてありがとう。勝ったらあなたがいたから勝てた。私の相手になってくれてありがとう。」この言葉は私のそれから10年以上続けることになる剣道生活で忘れたことはない。この感謝への気持ちを忘れてしまえば絶対に結果はついては来ない。私はこの先生がいなければきっとこのように考え方を持つことはできなかったと思う。

夜遅くなっても，昼食時間が削られても

次は高校の時に国語を教えてくれた先生である。先生は一度定年したのちにもう一度戻ってきた先生である。いわゆるおじいちゃん先生だった。笑うとしわのせいで目が見えない。そんな先生が好きで，私はすごく慕っていた。先生には他の先生の愚痴をこぼし，友達や恋のことをいっぱい話した。もしかしたら，友達よりも先生は当時の私の心情を知っているかもしれない。なぜ，先生にそこまで話すことができたのか今でもわからない。ただ一つ言えるのは，先生はずっとずっと私が話すのを文句も言わず聞いてくれた。夜遅くなっても，昼食時間が削られても。そんな先生が卒業式に私へ送ってくれた言葉がある。「前向きに」先生の達筆な字で書かれていた。

「卒業おめでとう。もうあなたとこうしてお話することもなくなるのでしょう。これから進学したり，社会に出たり人生いろいろなことがあります。そのたびに不満や愚痴が出てくる。でも人間だからしょうがない。でも人間は生きていかなければいけない。そんなときに下を見てしまうでしょう。たまにはきれいな落し物も落ちている時があるかもしれない，絶対だめではないけど下ばかり見ていると疲れる。前や上も見よう。そうすれば視界も広がり，さまざまな変化に気づく。素敵な未来が待っている。あなたは下も上も前も見ることできっとこれからの可能性は無限です。世の中には「前向きに」というなんともまあ便利な言葉があるものだ。よし，これを送るとしよう。」

おわりに

前向きにという言葉にこんなにも意味があると思わなかった。広い視野を持つことやモチベーションの違いが全然違うと思った。大学で社会福祉を学んで知ったのは傾聴すること受容すること。先生は私の話をずっと傾聴して，受容してくれたのだと今になって思う。先生がいたから高校生活が楽しい時間であったのだと思った。先生は否定をすることなく，すべて受け入れ，その中で一番あった言葉をかけてくれた。先生は大きな心で私という人間を受け止めてくれた。

エッセイ

ただいま息抜き模索中！

２年　古　賀　ひかり

はじめに

時の流れは早いもので，大学生活も２年が過ぎようとしている。大学に入学したころは，４年間を長いものだと感じていた。しかし，この２年間さまざまなことを経験することができ，充実した毎日を送っているせいか，時間が経つのをとても早く感じる。

私は高校に引き続き，書道部に所属している。１回生の頃は，高校の頃のように先生の指示に従って動くというより，主体的に自分たちが立てた計画を基に活動することや，そして何より，大人の世界とも言える飲み会に参加することに新鮮さを感じていた。そんな日々を過ごしていた11月下旬，鹿児島学生書道連盟という鹿児島の６大学の書道部で構成される団体の長の選挙に，同学年のみんなの投票により立候補することになった。選挙は12月であった。私は，これまでみんなをまとめる役職に就いた経験はあるが，自分が考えていた程のことはできなかったため，正直少し不安だった。心に余裕がなくなると，何事も中途半端にしてしまう自分の弱さを知っていたからだ。だから，不安というより弱くなる自分が怖かったのだと思う。反面で「連盟長になったら，自分は変われるかも。時間の使い方がうまくなるかも。」という期待もあった。そんな相反する２つの感情と葛藤しながら，決心するまで多く時間がかかったが，私は自分なりに頑張ってみようと決心した。

連盟長になって

12月に行われた第２回連盟総会で，連盟長選挙は行われた。選挙では，所信表明に始まり，各大学の顧問の先生の名前や好きな書体とその理由の他に，趣味や好きな歌手など書道以外にもさまざまな質問をされた。投票の結果，私が連盟長を務めることになった。今回，私が就いた鹿児島学生書道連盟長とは，自分の大学はもちろんのこと，他大学のことも把握しなければならず，幅広い視野と柔軟性が必要とされる。また連盟では各大学が協力し合い，書道展を開催することが一番の大きな取り組みである。連盟の活動は１回生で１度経験はしていたが，いざ自分が主催者側になってみると，まだまだ分からないことだらけだった。そんな中で実際に仕事をすると，様々な困難にぶち当たった。もちろん，決して簡単な役職ではないと思ってはいたものの，実際やってみると，他大学と連絡がうまくとれず，仕事が一時中断してしまうことがあった。中には誤作動で着信拒否設定にしていた人もいて，何度連絡しても連絡がつかない状態が何日も続いたことで，私は苛立ちと不安でいっぱいになった。役員間で連絡が取れないことで，各大学の部員に指示を出すことが遅くなっていった。そしていくら連絡をしても「伝わらない」ことは，書道展の作品搬入日の役員の参加率の低さとして判明したのである。

搬入日の悪循環

本来，６大学全員が主体となるべき，鹿児島学生書道連盟の書道展の搬入日では，他大学の協力はほとんど得られず，国際大学のみが頑張ってしまうという結果になってしまった。何の為に６大学で「連盟」というチームを作って頑張ろうと考えていたのか，自分自身分からなくなっていた。もちろん事前に連絡はしていた。講義に出たい気持ちも，公欠にならないため学校を休みたくないということも，全部みんなが同じ条件なのに，なぜ自分たちだけ書道展の準備に来ないのか，腹が立って仕方がなかった。同時に，他大学に対する信頼が薄れていった。怒りの渦中にいた私は，話し合うこともしたくなかった。だが，４年生の先輩がこのままではいけないと感じ，先輩の立ち会いのもと，他大学の副連盟長と話し合いをした。私は副連盟長に改善してほしいことを伝えたが，副連盟長からの要望はなかった。話し合いをして

少し落ち着きを取り戻したが，来年からは国際大学は連盟から脱退してやるということだけが，ずっと頭の中にあった。それは，来年も今年と同じように国際大学だけが頑張るものにしたくないと思ったからだ。しかし一方で，この一時的な感情で連盟を脱退していいのかという気持ちもあった。ここで再び葛藤が始まる。もちろん脱退については，後日国際大学の部員内でも話し合いがもたれた。話し合いの中では，先輩方が作り上げてきた伝統だから脱退はしない方がいい，来年がちゃんと協力がもらえるとは言い切れないから脱退してもいいのではないか，という２つの意見に分かれた。この意見を聞いて，正直伝統を受け継ぐことは，抽象的で理想論だと思った。何を思って，具体的に頑張っていくのかが見えてこないからである。じゃあどうすればいいの？という状態だった。だから，伝統よりも，本当に目を向けるべきところがほかにあるのではないかと考えるようになった。そうして考えるうちに，何よりも書道展の搬入日の他大学の参加率について，全ての大学に伝える必要があると感じた。

臨時総会の開催

連盟の規約通り，連盟長の権限を使い，８月に臨時総会を開催することを決め，各大学の部員を招集した。あらかじめ連絡をしてみんなの都合のいい日を聞き出したにも関わらず，１つの大学においては誰も出席していない状態であった。

臨時総会では，書道展の来場者数やアンケート集計結果などの報告を行い，私たちが一番伝えたかった，書道展の搬入の参加率についての話も行った。一方的に意見を述べるのはよくないと思い，みんなに意見を求めたが，誰も意見を言う者はいなかった。伝わったのか，伝わっていないのか，モヤモヤとした心境のまま，総会は終了してしまった。だが総会終了後に，ある短大の方が話をされた。

「短大は必修単位を２年間で取らなければならず，手伝いたい気持ちは十分あるのだが，時間的に厳しい」ということだった。私はその発言を聞いた時，なぜそのことを臨時総会の場で言わないのだろうと思った。また，搬入とは全く関係のない書道展開催期間中の国際大の学生の控室での行動について言われ，「ゲームをしている人たちを手伝う気にはなれない。」と言われた。これもなぜ臨時総会で言わないのかという内容である。私は，「できない理由」を自分に都合よくつけているだけだと思った。でもこれはもちろん自分自身にも言えることだと思った。だからこそ，ちゃんと素直に短大の人の気持ちを聞くことができたのかもしれない。しかし，しっかりと聞くことはできたものの，やはり心のどこかで納得できていないこともあり，気を遣っていた。本音で語り合えるまでの信頼関係ではなかったのかもしれない。

１つ目の気づき

一つの集団の長として立つ中で気づいた点が２つあった。１つ目は，精神的に安定している必要があるということだ。実際，頭では理解していても，心が頑張れない時があった。そんな時，同じ書道部の先輩から「上に立つ者は，いつも言葉に責任がある。そして，上に立つ自分は何があってもしっかりしておかなければいけない。そうでないと，自分に従ってくれる後輩たちが不安になるから。」というアドバイスをいただいた。そのアドバイスを受けて，「言葉に責任を持つ」ということがどれだけ深い意味を持つか感覚として理解できた。

しかし，いくら言葉で理解して実行しようとしても，「頑張れないとき」は必ずやってきた。ひたすら仕事をこなす中で起きた，「何もしたくない」現象である。そんな時，私は自分の好きなことをするようにした。景色や食べもの，大好きな喫茶店に行くなど，時間は作るものだと思った。いくら仕事がたまっていても，その瞬間だけは何にもしない。以前の私には，こんなことするなんて考えられなかった。しなければいけないこと以外のことを「余計なもの」と捉えていたし，自分で自分を束縛していた。良く言えば「頑張り屋さん」，悪く言えば「自縛霊」である。でも私は今回を通して，自分にご褒美を与える大切さを知ったため，ご褒美を与えて気持ちを変えた私は，また頑張れるようになっていった。

何か指示を出すときは，１つの事柄に関して自分の中でしっかり噛み砕いてから，説明をするように心がけた。自分でしっかり理解した上でみん

なに説明をしなければ，説得力に欠けると同時に，うまく伝わらないことを実感した。その結果，「伝えることを諦めないこと」が次第に私の教訓となった。人はみんな１人１人顔が違うように，考え方も違うというのは頭では理解しているつもりでも，自分の中に余裕がなくなると，心のどこかで，なんでこんなに自分のことを分かってくれないのかという気持ちになり，しまいには伝えようともせずに，相手には自分の考えていることなど分からないと思い込んで伝えることを諦めてしまうことがある。しかし，それは面倒くさがっているだけに過ぎない。相手に伝わるか伝わらないか，話してみなければ，伝えてみなければわからない。このことに気づいてから，実践してみたが意外に根気のいることであると実感した。自分の「怒り」を，「伝える努力」に変えることの難しさを知った。

２つ目の気づき

２つ目は，みんなに指示を出し，まとめていくのはとても難しいことであるということ。集団で何かをするとなった時，自分１人でやった方が早いのでは？と思うことはいくつもある。でも，１人だけですべてをこなそうとすると，自分だけが疲れてしまう。自ら，１人で仕事をすることを選んだのに，１人でやってみて疲れて，なんでみんなが手伝わないのかということに考えが広がっていってしまう。これが，大学に入学するまでの私だった。しかし，今は違う。まず，周囲の仲間を信じる。集団の中の長がうまくみんなにそれぞれ仕事を与え，任せてみるということ。もしかしたら，長以外のメンバーが自分の仕事として初めて与えられた役割かもしれない。長ばかり頑張っても，長以外のメンバーは頑張れないのである。任せられたと思えば頑張れるし，自分が必要とされていることを感じられるのではないだろうか。仕事を任せる意味での「伝える」というのは，長である自分が指示をしてきちんとこなしてくれる人に対する，「信頼」そして「感謝」の気持ちである。

一方で，仕事に関する指示以外に，集団の人間関係においても「伝える」ことが大事になる。なぜなら，集団の中でお互いに不満が溜まり，なんだか気まずい状況になってしまった場合，お互いが理解しようという気持ちよりも，腹立たしさの方が上回ってしまい，歩み寄ることを避けがちになるからである。「面倒くさいから」，「話しても分かってもらえないから」そんな理由で片づけたくなる時は多くあるからだ。私も鹿児島学生書道連盟で連盟長を務めていた間にこのような人間関係の壁にぶつかったことがあった。最初は，相手を理解するよりも腹立たしさの方が上回っていた。しかし，今任期を終えて当時のことを振り返ると，心に余裕のない自分がいて，その時の自分では精一杯だったと感じた。伝えることで不満も少しは改善されただろう。でも正直，不満が一番相手に伝えにくいと感じる。どう言えば，相手も自分も納得できるのか，それが私の今後の課題であると思っている。人間関係を諦め，逃げ出すのはとても簡単だ。しんどいことを今やるからこそ意味があると思う。

おわりに

現在，私は鹿児島学生書道連盟の連盟長の任期を終え，国際大学書道部の主将をしている。他大学との連絡・調整をすることは無くなったものの，今度は自分たちで書道展の運営やサークルの各行事についての計画や準備，作品展への出品など，することはたくさんある。幸い同じ幹部を務める仲間の多くの協力があり，とても助けられている。時には泣かせるようなことを言ってくれる仲間がいる。仕事は多くても，頑張っているのは自分だけではないこと，自分のこなす仕事でみんなが助かるということを，部員全員で感じていきたい。まだまだ未熟な点はいくつもあり，主将としてちゃんと仕事がこなせているのか，時々不安になることもある。しかし，疲れたら自分にご褒美を与えつつ，「伝えることを諦めない」ということだけはしっかり守っていきたいと思っている。

エッセイ

そんなのを勉強して仕事につける？
学那种东西能找到工作吗？

２年　周　静

１．夢にも思わなかった来日

なぜここにいるのか？日本に来るなんて夢にも思わなかった。私が日本に来たのは，平成22年９月。日本に来る前の私は，社会人として中国で働いていた。

私は，中国の大学で４年間英語を主に勉強し，卒業後は，初めて故郷を出て一人で中国の広東省の深セン市で仕事を始めた。仕事は，英語を生かせる貿易関係の仕事に就いた。仕事内容は，会社の製品をインターネットにより英語で宣伝し，書類の翻訳などをした。毎日のように深夜まで残業があるにも関わらず，残業手当はない。また，体調も悪くなってきたため３ヶ月で仕事を辞めた。

会社を辞めてからは何の目標もなく過ごしていた。父はそんな私を見て放っておけなくなったのだろう。父の友人である日本人のＡさんが家を訪ねて来て，私に会わせてくれた。その知人は私に「まだ，若いんだからもっと勉強すればいい」と言った。私は次の目標を，『日本留学』とした。

１．做梦也没想到回来日本

我为什么会在这里？做梦也没想到会来日本。我来日本是在平成22年９月。来日本之前作为一名普通的社会一员在中国工作。

我在中国的大学学了４年专业英语，毕业后独自一人第一次离开湖南老家去了广东深圳开始工作。工作是能用上英语的国际贸易。工作的主要内容是在网上用英语宣传自己公司的产品以及文件的翻译之类的。每天都要加班，有时会到半夜，而且没有加班补贴，身体很快就要撑不下去的第３个月，我把工作辞了。

辞职后每天漫无目标地度过了一阵子。爸爸看到我那样子也不忍心不管。不久，爸爸的日本朋友来我家，见了我后说：反正还年轻，应该多学点。就是那句话，我的下一个目标有着落了，那就是去日本留学。

２．日本語の特訓と福祉という言葉

同年７月から２ヶ月間，福建省の厦門の学校で日本語を勉強し，アパートでも毎日１時間かけて宿題をした。友人のＡさんは私が日本語を一生懸命勉強していることを知っていたため，日本とつながりのある大連の大学を教えてくれた。その大学に９月～１月と，３月～６月末まで計９ヶ月近く通った。７時半～19時30分まで日本語特訓として合宿トレーニングをした。日本に留学するまで１年２ヶ月かかった。

日本語を学び，日本を知り，父の影響もあり私は福祉という言葉を知った。中国では福祉という言葉について認識が少ない。友人たちは「そんなのを勉強して仕事につける？」と言って笑ったり，周囲からは心配された。しかし，中国は1980

２．日语培训和福祉

同年的７月在福建厦门开始了２个月的日语学习。回到在厦门租的房子后做１个小时左右的作业。爸爸的日本朋友知道我在努力学习日语后，告诉了我在大连有所和日本的大学有往来的大学。之后我去了大连。同年的９月到第２年的１月，３月到６月，一共学了９个月。每天早上７点半到晚上７点半的强化培训。从计划来日本留学到来日本花了１年２个月。

通过学习日语让我了解了日本，其中也有爸爸的影响，我知道了福祉这个词。在中国很少有人知道福祉是什么。就连朋友也笑道：学那种东西能找到工作吗？也许那也是对我的担心吧。但是，中国从80年代开始的独生子女政策会导致将来的子女再怎么样也照顾不了自己和自己的另一半的父母。所以

年代から人口増加に伴って一人っ子政策を打ち出した。そのため，子どもは将来，自分の両親と相手の両親をどうしても，見きれなくなる。福祉など関係ないとは言えないのだ。だから私は，鹿児島国際大学福祉社会学部に入学した。

那绝对不能说与福祉没关系。抱着那种想法就进了鹿儿岛国际大学福祉社会学部。

３．日本語で授業を受ける中で

大学に入学してから，チューターと知り合った。彼女は勉強上のことを色々と教えてくれるため私はわからないことをすぐに質問した。そのため勉強にして不安が少なくなり助かった。それでも大学では，先生の話をメモ取ることに必死で一つひとつの講義があっという間に感じられた。

去年履修した講義で一番苦労したのが，「日本国憲法」。担当の先生はとても厳しく，話も日本人学生向けのスピードだったため，まだ日本語に慣れていない私には聞き取ることが難しかった。このままでは単位が取れないと心配したが毎回の講義に出席するうちに，先生の話し方に慣れ始め，日本語の勉強にもなった。また日本という国を福祉や生活の視点からではなく，制度や法律の視点から見て知ることができた。今考えれば，苦しんだ講義ではあったが，受講してよかったと思う。

３．在全日语教学的课堂

进大学后，我认识了我的辅导同学。学习上的东西她告诉了我很多，我一有不知道的地方就问她。所以学习方面担心的地方少了很多。尽管那样，要把老师讲的东西全部用笔记下来也是很难的，所以，一节课很快就完了。

去年上过的课中最让我感到吃力的是日本国宪法。讲课的老师非常严厉，说话方式也是面向日本学生的，而且讲地特别快。对于才来日本还没有习惯那么快的日语的我来说，光听就很吃力了。有时还担心这课的学分肯定拿不到。但是每次都出席这堂课的过程中，渐渐习惯了老师的说话速度，对日语也有了提高。不光是从福祉以及生活的角度来了解日本这个国家，从制度与法律方面更能很好地了解日本。现在想起来，宪法这课确实让我累过，但从中受益匪浅。

４．鹿児島で暮らしてみて

食生活も，今では大きく変わった。日本語学校時代に私は，納豆についてあまり良い印象を持っていなかった。しかし，私のチューターをしてくれた学生が毎日食べていると聞き，そんなにおいしいのかと半信半疑で購入した。食べてみると話に聞いていたものとは全く違い，今ではチューターよりも多く食べるようになった。

中国では，魚・野菜は必ず火を通して食べることが当然であった。日本料理店でも寿司は巻寿司しか出されていなかった。少なくとも私の周りでは巻寿司が寿司だと考えていると思う。そのため，日本に来て初めて寿司とはシャリの上に生魚がのっているのだと知った。日本では新鮮な魚を刺身や寿司として，野菜をサラダとして食べていたことに驚いた。しかし，後日，今，上海や北京では日本人が運営している本格的な寿司屋さんが，人気を呼んでいることを，日本のテレビで見

４．在鹿儿岛的生活

吃的方面也和以前有了很大的变化。在日语学校的时候对与纳豆就没什么好印象。但是听我的辅导同学说她每天都吃纳豆之后，我就想有那么好吃吗，半信半疑的买了。吃后的感觉与传说中的纳豆完全不一样，现在我每天都吃纳豆，比我的那位辅导同学还吃的多。

在中国，鱼和蔬菜是必须得加热后才吃的。日本料理店的寿司也只有寿司卷，至少我所见到的就只有寿司卷。但来日本后我才知道真正的寿司是把小饭团的上面放上生鱼片。当我知道在日本，新鲜的鱼一般都做成生鱼片和寿司食用，而新鲜蔬菜会用来做成沙拉的时候确实很惊讶。但前一阵子有人告诉我说电视上报道了现在北京上海有了正宗的寿司店，是日本人开的，而且很受欢迎。

在日本我还体验了很多在中国看不到的物与事。在商场购物时，因为找不到想买的东西就向店员打听，结果她微笑着并耐心地把我带到了我想买的商

たと教えてくれる人がいた。

他にも中国の地元では見かけなかったことを，私は日本で体験した。買い物に行ったとき探し物が見つからず店員に尋ねると笑顔でその商品が並ぶ棚まで案内してくれた。こんなに親切な店員に会ったのは初めてだった。また，友人の車に乗ってトンネルを通っているとき，後ろから救急車が来た。すると，私の乗っていた車も，周りの車もすべてトンネルの端に寄せて止まった。救急車を先に行かせたのだ。そんな光景を初めて見た私は涙が出るくらい感動した。人を助けるためにみんながルールを守る自然さを知った。温泉にも挑戦した。初めての体験のため何も分からず下着をつけたまま入ろうとしたら，一人のおばあちゃんが丁寧に入り方を教えてくださった。知らなかったこととはいえ恥ずかしく思った。

このような日本だからこそ，道路や公園がきれいに保てるのかもしれないと思った。今まで中国，それも地元の姿しか見てこなかった私は，こんなにきれいな町を見て感動した。

品的摆放地方。那是我第一次遇到那么亲切的店员。还有一次坐朋友的车经过隧道的时候，从后面传来救护车的声音。就在那时，朋友的车以及周围的车都靠向路的两边停了下来，原来那是为了让救护车先过去。第一次见到那种情景的我感动地眼泪都要掉下来了。由此也知道了挽救一个人的生命需要大家来遵守共通的规则是理所当然的。还记得第一次去洗温泉的情景。因为是第一次什么也不知道，直接穿着内裤准备去洗的时候，一同进去的一位老奶奶告诉了我应该怎么洗。虽说是第一次什么也不知道，当时也觉的特别脸红。

正因为是这样的日本，不管是马路还是公园都是那么的干净。来日本之前见惯了自己的国家的我，看到这样一尘不染的城市环境后确实感动了。

５．福祉を勉強して中国をもっと知りたい‥‥

日本で学べることが，たくさんあると毎日の生活を通して感じる。日本にいる限り，日々を充実したものとしたい。一番学びたいことは日本人の行き届いた優しさとお客さんへのホスピタリティサービスである。

社会福祉学科に入ったからといって，将来必ず福祉に関わる仕事をしないといけないことはないだろう。しかし，よく知らなかった福祉について学ぶことで人と人とのつながり，人に対する愛情を知ることができた。「日本人はなぜいつも笑顔で優しく人と接することができるのか？」という疑問を持った。福祉の勉強を通して人は皆「生・老・病・死」を避けられないということを改めて認識した。その段階を受け入れ，理解し合える，仲よくする人間関係を持つことができるのだ。

鹿児島で福祉の勉強をして１年間の学生生活を送っているうちに，中国にいた時には気づかなかった希望の光が見えた。中国では社会福祉はこれから発展していく。私が中国に戻るときは，多分希望を見つけるときだろう。

５．通过福祉希望能更了解自己的祖国

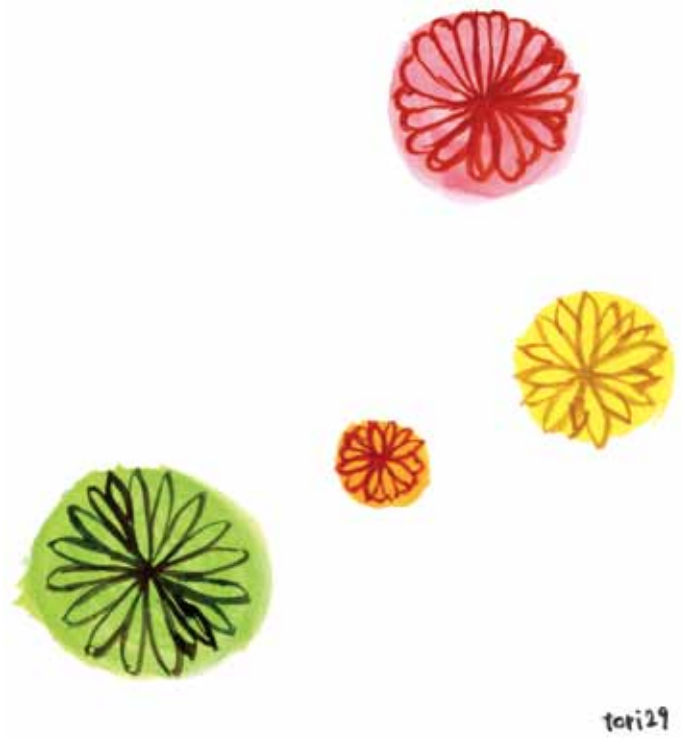
从每天的生活中让我更体会到了需要学习的还有很多很多。只要还在日本就想充实地度过每一天。最想学的是日本人的细心周到和对待客人的服务方式。

虽说进入了社会福祉这门学科，那并不意味着将来就必须从事这方面的工作。但是，通过学习自己并不了解的福祉，让我懂得了人与人之间的纽带和对待他人的温情。有时经常抱着这样的疑问：日本人为什么能总是面带笑容地去接触每个人呢？学了福祉后使我重新认识到人都是必须得经过生老病死的。正因为如此，人们自然而然地去接受生命必须经过的阶段，从而创造出相互理解和谐共处的人与人之间的关系。

在这所大学１年的福祉学习和鹿儿岛的生活中，我看到了在中国时没看到过的希望之光。在福祉这方面中国才刚刚起步，所以回到中国的时候应该也是能寻找希望的时候吧。

注）本稿は，社会福祉学科出身で現在（2012年１月），国際交流センター職員の深道涼子さんと留学生に関わって社会福祉学科と共同して何かできないかという雑談から始まりました。まず周静さんのチューターであった蓑田彩紀さんに協力して頂くことになりました。その後，ソーシャルワーク演習Ⅱで周さんの担当になった崎原が演習内で「何でここにいるか」について語ってもらう機会を作りました。周さんには，崎原がインタビューし，彼女が話す内容をクラスの学生に記録を取ってもらいました。その記録を基に周さんは蓑田さんと話し合い，日本語原稿を作りました。崎原がいくつかコメントと加筆をさせて頂いた日本語原稿の中国語への翻訳は周さん自身にお願いしました。日本語と中国語の対応については学生課留学生係の王霞さんにお願いしました。そこで出てきた気になる点については王さんと崎原で相談して日本語，中国語原稿を確定しました。その上で周さんにも確認してもらいました。

最後に本稿が完成するに当たってそれぞれの過程で関わって下さった皆さんに改めて深謝します。



エッセイ

過去が変わった日，そして始まった大学生活

２年　向　井　周　一

１．それなりに楽しかったけど，無駄な時間

専門学校を半年で中退し，そのまま神戸に残り，正社員やアルバイトを割と転々とする生活をしていました。かなり控えめに言っても，ろくな社会人生活ではありませんでした。このままでは何も変わらないし，先も見えないので，仕切りなおす気持ちで実家のある奄美に帰りました。「それなりに楽しかったけど，無駄な時間を過ごしたな。」と，そのときは思っていました。

２．実家に帰って，施設で働きながら

奄美に帰って，自分は親の勧めで知的障害者の施設で働き始めました。自分は彼らを見かける事は多々ありましたが，実際接した事はほとんどありませんでした。しかし，自分は彼らに対して，不思議と自然に接することができました。それはなぜかと考えた時に社会で生活したなかで，様々な人を見たからだと思います。その人の知識や経験，個性などにより，表面に出てくるものが大なり小なり違っていて，みんな同じじゃない事を見てきたからであり，なにより，自分もその一人だという事に気が付いていたからです。人は縦割りで区別できる存在ではなく，無限と思えるような広がりの中に色んな状況で存在しているものだと感覚が知っていました。これは社会に出た時に気づかされた事でした。今思えばこのとき，過去に対する評価が変わり始めていました。

その施設ではパンやクッキー，ケーキ，生姜のつくだ煮などを製造，販売したり，清掃やアルミ缶仕分けや，厨房業務などを委託されていたり，他にも農業など，就労メニューをほぼ全員の利用者が分担してこなしていました。彼らと過ごす中で何を感じ，どうしたらよいかを考える時，ろくな社会人ではなかった時代に体験した事が，役に立っていました。

３．役に立っていることを

例えば，自分が役に立っていると思える事は良い循環を生みます。いい気分で仕事やプライベートを過ごす事ができ，もっと役に立ちたいと思い仕事に取り組むので，技術も向上し，もっと役に立つ事ができます。これは誇りであり，社会性の始まりだと自分は考えます。彼らはそのことに気付きにくかったり，知らなかったりするので，「こんな風に役に立ったよ」とか，元気よく「ありがとう」とその人に応じて伝わりやすいように，なるべく具体的に役に立った事を伝えるのです。

全員が全員ではありませんが，それに対して，本当に素直に良い循環に入っていきます。そのなかに，盛り上げるとか，ミッション性を持たせるなどの要素を加えると，さらに張り切って作業に取り組みます。人によっては時間制限を加えてもいいかもしれません。それぞれが自尊心を持って取り組むことによって良い雰囲気で仕事ができます。

４．ゴールを決めること

ゴールというのは人のモチベーションを保ちます。しかし，「ここまで頑張ったらもっとがんばれ。もっとできたらさらに頑張れ」となったら，「いつまで頑張ればいいんだよ」という風になります。要約すると，「どこまで頑張れば，自分は認められるのだろうか」という気持ちになると思います。それでは最初の高いモチベーションも下がってしまいます。ちょっとした言葉の違いですが，その場合は一度，「今日はここまで出来ればOK」というラインを予め決めておき，そこまでやったら，とりあえず，「よくがんばった」という風に，一旦切り，できた事をフィードバックすることによって，モチベーションを保つことができます。作業前に予告しておいてもよいかもしれません。

とにかく，彼らは，ゴール設定が苦手なので，こちらから提案する必要があります。ゴールは近すぎても退屈だし，遠すぎるといつまでも達成できずに諦めてしまいます。本人が少し頑張れば出来る位置に設定することは難しいのですが，それに近づけられれば日々ステップアップすることができます。ステップアップする事によってまたモチベーションは維持されます。

５．区別をつけること

メリハリは仕事の集中力と効率を上げます。休憩時間があったりなかったり，いつあるか分からなかったりすると，少なからず，集中力が維持出来なかったり，仕事と休憩が若干混じったような空気になります。極端な人は勝手に休憩を取ります。結局休憩を取らないより，作業が進まなかったりします。彼らも自分が頑張ったという風に思いにくくなります。だから，予めこの時間に休憩を取って，この時間に作業終了という風に見通しを持たせることによって作業と休憩の区別ができます。すると，効率的に作業が進み，頑張ったという実感を得る事が出来る事でしょう。

６．とにかくやってみること

決めつけはとてももったいないと思います。「これができないから，あれもできないだろう」と決めつけていて，ふと他の場面で見たときに問題なくこなしていたなんて話はよくあることです。しばらく挑戦して諦めていた事が，期間をあけてある日出来るようになるなんてこともよくある話です。「あの人にこれは出来るだろうか」と思っても，とりあえず危険がなければ，少なくとも一回は挑戦してもらわないと，できるかできないか，また，反省点すらわかりません。自分はこんなもったいない話はないと思います。とにかくやらないことには，何も始まらないし，終わらないのです。

７．互いに埋め合う中でできること

自分は毎日，昼間に車で利用者を連れて，施設から作ったものを売る店舗のほうに移動していたのですが，そのときに店舗のほうから，買い物を頼まれることがありました。しかし，自分は物忘れがひどく，予定や課題をよく忘れるため，言われたことを忘れて，買い物をせずにそのまま店舗に到着することが少なからずありました。その様子を見ていた彼らは，ある日から車の中で自分に「今日は買い物に行かなくていいの？」と聞くようになりました。彼らの長所で，自分の短所を埋めてもらう場面が発生していました。

そのとき，彼らの短所を，自分達の長所で一方的に埋めているのではなく，お互いが短所と長所を埋め合っているのになぜ彼らは障害者と呼ばれ，自分は健常者と呼ばれているのだろうかと，一つの疑問が浮かびました。それは，社会という枠組みの中で，支障をきたすことが大きく，その生活を維持するのが困難になることが障害で，社会の中で，役に立ったり，それほどは支障をきたさないことであれば，長所や短所や個性と呼ばれる。だから，自分たちは彼らの障害が，短所や長所，個性と呼ばれるように，障害に対しての視点を変えて見たり，本人の能力向上の手伝いをしたり，場や環境を変えるようにしています。彼らにも似たようなことをされてカバーされていることを考えるとお互い様かもしれません。彼らも，色んな人がいるなかの一人なのです。

８．過去が変わった日，そして大学生活

「それなりに楽しかったけど，無駄な時間を過ごしたな。」と思い実家に帰りました。施設で彼らに接するなかで，自分の社会人生活で体験した事の違う側面に気づかされたのです。彼らとの付き合いが自分の過去の体験に対する視点を変えてくれたのです。自分にとっての無駄な時間が，今を作るためのプロセスに変わったのです。そう感じた時に確かに自分の中で過去に対する見方が変わりました。その時，自分の視野に入ってきたのは，もっといい支援はないのだろうか，もっと広い範囲で支援を行うためにはどうしたらいいのか，という自分の知識や経験の外にあるものの存在でした。

そのタイミングで両親から，「大学に行ってしっかり学んできたら」との提案がありました。実家に帰った直後のように過去を無駄な時間と感じている状態では，このチャンスもきっとキャッチできませんでした。そして今自分は大学にいま

す。大学生活では，年が離れた人達に囲まれています。これもなかなか体験できることではありません。現在や未来が過去になり，自分を作っていくのです。また社会や施設で彼らと接した時に，どんなことが生まれるか楽しみでなりません。

エッセイ

通りがけに家を見たとき

２年　穂　満　千　草

孫のように可愛がってもらった

私の暮らす家の近くに「おじちゃん」と「おばちゃん」が，２人で住んでいます。母方の遠い親戚で，私たち兄妹は自分たちの孫のように可愛がってもらいました。

２人は，70歳を過ぎてから自分たちの老後を考えるようになりました。「こんな田舎で暮らしていてもし，２人とも倒れてしまったら・・・」と，不安を抱えるようになったのです。私たちの暮らす地域のそばに病院はありません。おじちゃん達の子どもは，それぞれ家庭を持ち，すぐに駆け付けられる距離には住んでいません。介護サービスの利用も考えたそうですが，県外に暮らす息子さんの家の近くに引っ越すことを決めました。

引っ越しが決まるまで

おじちゃん達が引っ越しを決断するまでに様々な葛藤がありました。おじちゃんは，先祖の土地を守る役目がありました。土いじりが好きで，退職後も自分の畑でイモやムギ，ソバ，季節に合わせて多くの野菜を育てていました。また，大震災の後だったので，不安もありました。

親戚は，引っ越しについて反対でした。新しい土地で新しく人付き合いを始めなければならないので心配をしていました。「なぜ，今になって住み慣れた土地を離れて県外へ行くのか。その必要はあるのか。」といった，意見があったそうです。

私も私の家族も，長い間，たくさんの場面で支えてもらったので素直に「行ってらっしゃい」とは言えませんでした。しかし，おじちゃん達の人生です。おじちゃん達と私の家族とで話をした２，３ヶ月後，おじちゃんとおばちゃんは，「残りの20年を考えて」県外へ引っ越すことを決めました。いつの間にか決まっていたので，驚きました。

引っ越しの手伝いと見送り

11月の半ばに，おじちゃんとおばちゃんは引っ越しました。引っ越しの日，私は手伝いに行きました。私以外にもおじちゃん達の親戚が来ていましたが，母方からは，私とお母さんだけでした。もともと家に沢山の物がある事は知っていましたが，思っていた以上に物で溢れていました。引越しのトラックも来ていて「今日一日で本当に終わるのか」正直，不安でした。その日は，自分のできる事をして，午前中に家へ帰りました。

翌日，おじちゃんの姉である私の母方の祖母を連れて，私と両親の計４人で空港まで見送りに行きました。空港には，昨日手伝いに来ていた人の他にも初めて会うおじちゃん達の親戚が見送りに来ていました。おじちゃんは，私と一緒にいた私の祖母を見つけた途端，涙をこぼしました。泣いている姿や，おじちゃんとおばちゃんを見送りに来てくれた人たちと話をしている姿を，私はただボーっと見ていました。最後に集合写真を撮って，おじちゃんとおばちゃんは旅立ちました。

ああ，いないんだ

だいぶ日が過ぎてから，「ああ，いないんだ」と，思うようになりました。私の兄が，離れた土地で暮らしてから長いので，「いなくなる」感覚が薄くなったのかもしれません。学校行事に来てくれたり，一族で何かをするときも来てくれました。自家製の野菜や沢山の物をもらいました。家に遊びに行ってはお茶を飲み，自分の気持ちを聞いてもらい支えてもらいました。通りがけに家を見たとき，「あの家にだれも住んでいない」と考えると，不思議な気持ちです。今生の別れではないのに，少し寂しいです。最近，「元気にやっている」と，ハガキをもらいました。

エッセイ

同窓会で私の心の中に感じたもの！！

３年　浜　田　　武

１．何故，福祉学科に入学したか

私が社会福祉の勉強を始めたのは自分自身のためだ。身近な人や知らない誰かのためになりたいからと福祉を学ぼうと思ったわけではなかった。

私は思春期を迎えた頃から人と接することに苦痛や戸惑いを覚えることが多くなった。それは，はっきりとした将来の夢もないまま浪人生となってしまった私にとって，大きな不安だった。親許にいる間は何とか生きていけたとしても，自分自身が老いる頃がどうなっているか自問自答することが怖かった。

散々な結果だったセンター試験後，風呂の中で「生活保護」という言葉が頭に浮かんだ。新聞やテレビのニュースなどで覚えたのだろう。「死ぬ気が起きるまでは生活保護で生きよう。そのために制度くらいは勉強しておいたほうが良いだろうか。」そんなことを考えた。「もし上手くいけば，福祉の知識と経験で人との接し方に苦労しなくなり，仕事にもありつけるかもしれない。おまけに人助けができるなら，いいこと尽くめではないか。」

今思えば福祉の道に進む理由としては不純極まりないものだったと思う。

２．福祉を学ぶはずが・・・

極端な性格や馴染みのない土地での一人暮らしというという境遇は，私を不安に駆りたてた。それは真面目に講義を受けるという点では，プラスに働いた。だが，人間関係の面ではマイナスでしかなかった。友達と呼べる人を作れなかったのだ。ひたすら前の席に座り続けることしかできなかった。入学時にできた友人は，４年間付き合うことが多いものと聞く。逆に言えば，この時期に友人ができなければ，その先は作ることが難しくなると言っていいかもしれない。

そんな私は，経験がないにも関わらず吹奏楽サークルに入ってしまった。中学生時代に仲の良い吹奏楽部の人達に憧れたこと。そして，その人たちに教えてもらい，購入した玩具のような安物のトランペットをいつまでも箪笥にしまっていたくなかった。ただそれだけだった。当然苦労の連続だった。金管楽器なので，独特の演奏法から習得しないと，音すら出なかったからだ。周りは経験者ばかりで，当時は講義以上に孤独を感じていたと思う。経験者でも諸事情から４年間続けられないことも珍しくなかった。サークルの人達は恐らく，私はすぐに辞めると思っていただろう。それでも続けられたのは私の中に，自分を変えたいという思いがあったからだろう。そして多少トランペットの音が出るようになっただけで大した変化もなく春休みになってしまった。貴重な大学生活の４分の１が終わってしまったのだ。

私は不安になった。一番の不安は３年の夏休みにある福祉事務所実習だった。失敗することに怖さはなかった。失敗することには慣れていたからだ。怖かったのは，してもいい失敗ができない程に実習先で出会う人と向き合うことができないのではないかという不安だった。

３．動き出した春休み

このままではどうしようもないと感じた私は単身，外へ飛び出すことにした。１年生対象に行われた，外部講師による講義をした人の中から繋がりを持つことのできる人がいないか調べることにしたのだ。いくつかの候補を決めてアポイントを取り，春休みになると同時に私は動き出した。講演会に参加したり，事務所を訪ねるなどして繋がりの持てる個人・団体を探したが，思うようにはいかなかった。

いよいよ最後の候補に私は電話を掛けた。「活動しているからおいで」とだけ言われ，私は天文館にある中央公園を訪れた。西郷像近くの東屋の

人だかりが確かに目印になった。そこでは，所謂ホームレスと呼ばれる人へおにぎりや味噌汁などの食事の提供を行っていた。これほど多くのホームレスの人を目にするのは初めてで私は緊張してしまった。だが，これが最後の候補であることを思い出して，人だかりの中へ足を運んだ。

それまでの苦労と落胆が馬鹿らしくなった。私が訪れた日は，このホームレス支援をするNPOの理事会の日で，初端なから多くの理事の方と会うことができた。理事会には外部講師をした福祉学科OBの精神保健福祉士さんの他に，司法書士や市議会議員の方など様々な分野の専門家がおり，本格的な活動を行っていることを知った。私はしばらく中央公園の炊き出しに参加することにした。また丁度，NPO設立５周年のイベントを行うということで，そちらのお手伝いもすることになった。

４．ＮＰＯでは

ホームレスを経験した人の中には，良くも悪くも個性的な人が多い。社交的な人も多い半面，意志の疎通が難しい人やあまり話しをしたがらない人も少なくないと感じる。私は話し上手ではないので，今でもお辞儀しかできない人もいてなんとも歯痒い思いをしている。そんな私は，とにかく周りの人の声に耳を傾けることにした。まずは精神保健福祉士さんがどういう声をかけているかをそれとなく観察し始めた。何と言って話し始めるのか，どのような表情や仕草をしているのか，相手はどのような反応を返すかなどできる限り気づいたことを自分の中に吸収させる気で眺めた。

ホームレス支援に参加するようになって，１年が過ぎた。都合のつく日曜の炊き出し，月１回の理事会や夜回りなどにできるだけ参加した。時には全国や九州の他団体との交流会にも連れて行っていただいた。そのように何かあるごとに活動に参加していた私に，また一つ転機が訪れた。ひょんなきっかけから，私が現・元ホームレスの人の就労支援の活動に取り組むことになった。簡単に言えば，現・元ホームレスの人が路上で雑誌「THE BIG ISSUE（ビックイシュー）」を販売するためのサポートをすることになった。始めは今までのようにミーティングやイベントでの販売の手伝いへの参加に留まっていた。

５．思わぬ再会

ある時，新しく販売をしたいというＡさんが現れた。まずは面接するということで，私も同行させてもらった。Ａさんを目にして，私は一度会っていることを思い出した。生活保護申請手続き中で，NPOの所有する一時宿泊施設にいた人だった。その後に生活保護は無事に出たそうだが，程なくして職を見つけ，本人の希望もあり早々に保護を切ってしまったとのことだった。

私が再会した時点では，再び失業したため所持金が底をつき，生活保護の再申請も住宅等があることから，以前のようにすぐには一時金を含めて，保護費が下りないとのことだった。Ａさんがビッグイシューを販売したいというのはそのような事情からだった。面接はすんなりと終わり，数日後には販売を始めることになった。私は不安を感じつつも，Ａさんと別れた。土曜日になり，Ａさんの携帯電話は着信だけはできていたので，私は日曜日に炊き出しがあることを電話で伝えた。妙に不安を感じ，日曜の炊き出しの後にＡさんに電話をかけた。不安は的中した。Ａさんは炊き出しには行っておらず，数日何も口にしていないらしい。電話越しでも元気がないことが分かった。他のビッグイシューサポーターが動けないため，私１人でＡさん宅に向かうことにした。既に日が暮れかかり，Ａさん宅は馴染みのない場所にあったので不安は大きかった。

車を持っていない私は，Ａさん宅近くまで公共交通機関で行った。駅の近くにあった食料品店で，日持ちしそうな食べ物を一つ一つ選び，数日分の食料を購入した。食料の購入は私のお金で行った。食料を選びながら，これでいいのか分からなくなった。何故なら，大学の講義の中では，Ａさんのような事態への対応については教えてはくれなかった。しかし，理想や理念ではＡさんの空腹が収まるわけではないと思い，両手いっぱいに買い物袋を抱え，店を出た。私の予想に反し，Ａさん宅はずっと遠かった。重たい買い物袋を抱え，ひたすら歩いた。携帯の地図とにらめっこを繰り返した。ここだと思って呼び鈴を鳴らしたら別人が出てきた。何度もＡさんに電話をして，

Ａさんに迎えに来てもらった。自転車に乗ってきたＡさんは思ったより元気で私は一安心できた。電気が止まって薄暗いだけの部屋に上がり，買ってきた食料を手渡した。好物のカツがあったことにとても喜んでいたことが印象的だった。保護費が出たら食料代等を返済する約束をして，Ａさんに駅まで送ってもらい，私は家路に着いた。

Ａさんは無事ビッグイシューの販売を始めた。保護費の支給が遅れたため，Ａさんはなかなか安心することができなかったようだ。鹿児島では知名度の低さもあり，雑誌がなかなか売れないこともＡさんを不安にさせてたらしい。私には電話を掛けたり，Ａさんに会いに行ったりすることできなかった。

６．その後

しばらくして，ようやく保護費が下りたとの知らせを受けた。溜まっていた家賃等の支払いもあったので，もうしばらくは厳しい生活が続いた。その中でもＡさんは販売をきちんと続けていた。真面目な方であった。少し頑固すぎるところもあったが。私は都合の良い日には，販売中のＡさんを訪ねて，客として自分用のビックイシューを買った。Ａさんは売上向上のための工夫や常連客の人について話してくれた。

Ａさんの就職が決まったと朗報が飛び込んできた。Ａさんは元々職人で，その腕と経験を買われ再就職に繋がった。販売はあと数日続け，数日後に新しい仕事を始めることになる。こんなに人を心配し，人のために働いたのは初めてだった。講義を受ける時，サークル活動に取り組む時も自分自身が何か以前とは違っている気がするようになった。年末から大学が休みだったので，現・元ホームレスの人や生活保護受給者の人達などと31日に年越しそば，１日にはお雑煮を食べた後に実家の宮崎に帰った。

正月には地元の小学校の野球チームの同窓会がある。毎年それが近づくと親からはどうするのかと聞かれる。同窓会には中学生の頃に１回だけ参加したが，その後は何かと理由をつけて参加することはなかった。参加しなかった本当の理由は，当時の私から見れば一方的に絶交された友人が毎年のように参加していたことだった。また，同じ野球チームの関係者とはいえ，知らない年代の人ばかり集まることも私を同窓会から遠ざける理由になっていた。

実家に帰ると，今年も同窓会があることを母から聞いた。私は参加することに決めた。絶交していた友人とは仲直りできたという事実も大きかったが，何よりも私の心の中で，地元の同級生や自分と関わりのある人を大事にしたいという気持ちが強くなっていた。私にそうさせたのは，ホームレス支援活動のなかで実感した，身寄りがなく故郷に帰ることもできない現・元ホームレスの人が少なくないという現実があったからだと思う。

７．久しぶりの再会，そして予定は狂う

同級生とは成人式以来なので２年ぶりに再会となった。後輩達もすっかり大きくなっており，かつての近所の赤ちゃんが，私も着ていたユニホーム姿で野球をしているのを見ると，10年という歳月が流れたことを感じずにはいられなかった。昼は皆で野球，夜は宴会となっていた。多少老けた監督やコーチと当時のことや最近のチームについて語った。保護者の人達とは，それなりに大人対大人の会話ができたように思う。

私はこの同窓会が終われば，そのまま鹿児島に戻るつもりでいた。しかし，チームの同級生が中学の同窓会を企画してくれたため，急遽予定を変更することになった。私が鹿児島に戻ったのは大学が始まる日の朝だった。結局２日間，朝まで同級生とお酒を飲んだ。ただ楽しいだけではなく，成人式から２年経ち，社会人４年目や大学４年生ともなれば，それぞれが選んだ進路がそれぞれの人生をいかに大きく変えたかを実感する場にもなった。私は同窓会を通じて２つのことを思った。ひとつは来年も参加したいということ。もうひとつは同窓会で私の心の中に感じたものを鹿児島でも感じたいということだ。

エッセイ

事件は試験を受けている最中に起こった

３年　吉　岡　正　浩

１．はじめに

まずは，自己紹介からなので，名前は吉岡正浩，現年齢は21歳。大隅半島の鹿屋出身だ。高校は野球の特待で入り，介護系の学科に進んだ。小さい時からお年寄りと話したり，遊んだりして楽しい思い出があった。そのせいか介護に興味が湧きお年寄りと接する仕事がしてみたいと思い介護系の学科に決めた。まぁ，頭も人並みに良いほうでもなく，この科だったら俺の頭でもいけると思ったのも本音だ。

２．赤点とらないようにゆるく頑張っとけば

高校に入って，勉強と野球の両立をしようと思っていた。しかし，やはり無理だよな。生半可な気持ちで両立なんか出来る訳ないでしょ。そのことに高校１年の１学期に気づき，野球が終わるまで勉強は赤点を取らないようにゆるく頑張っとけばいいやという事にした。

野球はめちゃくちゃきつかった。高校に入学して２ヶ月ぐらいで先輩方の足を引っ張らないようにしないといけないというストレスや練習そのもののきつさで胃痙攣を起こしてしまった。しかし，一緒にきつい練習も楽しい練習もやってきた仲間がいたから，なんとか３年間の野球をやって来れたんだと思う。野球で学んだ事は，切磋琢磨しながら向上していく事も大事だが，時には悩んでいるときに話を聞いたり，アドバイスをしたりされたりしながら精神的な部分にも目を配り，支えになったり支えてもらったりする事が本当に大事に思った。

３．達成感が半端じゃない程にあり ‥‥

野球が終わり，いざ介護福祉士の勉強をする事にした。しかし，模試の結果を見て愕然としてしまった。学科のみんなとかなりの大きな勉強の差がでているのを痛感してしまった。「親に大好きな野球をさせてもらった」と思ったら，高校生活での恩返しになるんじゃないかと思えるようになり，授業が全部終わってから教室で居残りをすることにした。ひたすら過去問を繰り返しして，分らないところは先生に聞きに行ったり出来ることは全部した。そして，国家試験当日。前日は緊張のせいであまり眠れなかった。野球の試合の緊張とは違い，今までに経験した事のない緊張だった。試験会場の異様な空気に戸惑いながら問題を解いていった。試験が終わったときは達成感が半端じゃない程にあり試験会場から家に帰り着くまでの記憶がしっかりと思い出せない。そして，月日が経ち試験の結果が自宅に届いた。不合格だった。すごく悔しかった。しかし，どうしても受からなきゃ親に申し訳ないと思い，再度受けなおそうと大学１年でも試験を受けることにした。

大学の勉強と介護福祉士国家試験の勉強とするのは，やはり難しいものがあった。さらに，国家試験の試験日と大学の後期の試験日が重なり頭の中がパンクしそうにもなった。国家試験当日，車で試験会場まで行ったのだが，すごい大雨で前もよく見えない状態だった。なんとか試験会場について試験を受けた。結果は，また不合格。２回目の不合格は精神的にきつかった。ネガティブになり３回目を受けようか迷っていた。しかし，国家試験の２次試験である実技試験の免除が３回目まで有効であったため，これがラストチャンスと思い，３回目の国家試験に挑もうと決心した。

４．三度目の正直，試験の最中に事件が起こった

国家試験の勉強をしようと思ったのだが，大学２年になり大学の勉強も１年に比べて難しくなって国家試験の勉強が思うようにできなくなった。今更ながら高校で国家試験合格していればよかったと思った。あまり国家試験の勉強ができないまま試験当日になってしまった。しかし，小さな自

分の脳みそを使いできることは，精一杯しようと思いひたすら問題を解いた。午前の部が終わり，昼食を終え午後の部に入った。そして，試験を受けている最中に事件が起こった。

Zzz ･････。Zzz ･････。

寝てしまったのである。前日まで夜中勉強して，おまけに昼食もお腹いっぱい食べたので，睡魔が襲ったのだと思った。焦りまくっていた。ただひたすらに・・・。だから，あまり午後の部を覚えていない。

試験が終わり，帰り道の途中で母に電話をかけた。

母：「試験はできた？。」
自分：「まぁまぁできたかな。」
母：「まぁまぁって。」
母：「でも頑張ったんでしょ？。」
自分：「できることはしたよ。」
母：「そっか。まぁ後は神頼みだね。お疲れ様。」
自分：「そうだね。お疲れ。んじゃね。」

言えなかった・・・。試験の時に寝てしまったとか絶対に言えなかった。あとは，本当に神頼みしかないとおもって結果が届くのを待った。

試験結果は坂之上の自分のアパートに届くようになっていた。結果を知ることになった時は，ちょうど弟の入学式の日で母親も自分のアパートに来ていた。最初に気づいたのは母親だった。

「ポストに介護福祉の封筒が来てるよ」

と，母親に言われ，「封筒？」と自分は思った。不合格の通知ははがきで来ていたのだが，その日は封筒で来ていた。ポストから部屋に母が持ってきて興味津津でこっちを見ていた。恐る恐る封を開けると ･････　合格証明書が出てきた。

５．おわりに－いろいろ思い出が詰まった資格

母親と一緒に飛んで喜んだ。恥ずかしながら自分は少し目が潤んでしまった。だって，試験中に居眠りしてしまったのだから。そして，すぐに父親にも連絡をした。父も電話の向こうで喜んでくれた。３年目でやっと取った介護福祉士の資格，いろいろ思い出が詰まった資格になった気がする。

自分の中では，「やっと高校に行かせてもらった恩返しが出来た。」と思った。

次は，大学に行かせてもらった親への恩返しもあるが，少しでも条件のよい仕事に就くために，社会福祉士を現役合格したいのが本音だが ････。

エッセイ

ゼミで書かされたもんだから
―大学生になってみて思うこと

３年　西牟田　直　人

１．はじめに―なんで入学したんだろ

そもそも，なぜ私がここにいるのか。なぜ鹿児島国際大学のそれも福祉の学科にいるのか。

なんで国際大学に入学したか，ただ単純に志望校に落ちただけ。落ちた後のことを考えなかったがためにこの大学に来た。福祉の学科を選んだのは当時福祉のことが問題になっているなぁって思ったから。いままでふれたことのない福祉の世界をふれてみたいと思っていたから福祉の学科に決めた。

さぁ入学したぞっと，あたりを見渡しても知ってる人はほとんどいない。入学式後の歓迎会も見知った人とかたまるようにし，見知らぬ人と関わるのをさけた。こんなんで大学生活大丈夫だろうか‥‥。いま思えばそのときかたまった見知った人が友人になり新しい友達をつくるきっかけを与えてくれたのかもしれない。その友人がいたから大学生活を楽しく３年も過ごせているのかと実感。友に感謝！！

２．やっぱサークルっしょ！

大学といえばサークル。サークルに入れば楽しい出会いが待っている（笑）。しかしどこに入れば楽しい出会いに出会えるのだろうか。スポーツ関係のサークルだろうか，それとも福祉の学科にきたのだからボランティア関係だろうか。どれにしようか考えた結果，そのどちらとも関わりのないような放送部だった。きっかけはある友人に「あの部，練習とかきつくなさそうだし，楽っぽいよ」と聞かされたから。私はせっかく大学にきたんだから気楽にやっていきたいとかんがえていたため，半ば軽いノリで放送部に入った。

放送部は簡単に言えば，学内外からのイベントなどの協力を依頼されアナウンス・音響・照明の技術提供をする部，学祭とかの大きなイベントも依頼を受けて‘仕事’をする。依頼されたからといってその依頼の正当報酬がもらえるかといったらそんなわけでもない。学生がすることなんだから，ほぼボランティア。だけどもその仕事にプライドを持ってこなしていく，そこがいいんだと先輩から教わった。私は，前期に行われる遊音祭では舞台進行を担当し，後期にある学祭では音響を担当した。どれも本番の一ヶ月近く前から準備をし，練習やリハーサルを重ね，来る本番に備える。本番までの一か月は正直つらくしんどい。でもその期間をサークルの仲間といっしょに乗り越え，迎えた本番だからこそ楽しめる。放送部というサークルに入って学んだことは“アマなんだけどプロ意識”，“忍耐”，そして“達成感”だった。

３．おっとわすれてた

さて，学生の本分は学業。福祉の道に進もうかなぁと思っている私は資格をとるため，実習に行かなければならない。どの分野に実習に行こうかはもうきまっていた。私は実習の第一希望に福祉事務所を選んだ。福祉事務所は行政が行う福祉であり，福祉といえばその時は病院や民間の運営してる施設だろうと思っていた自分にとって行政の行っている福祉ってなんだろうと感じて希望した。福祉事務所の受け入れは少ないと聞き，自分は定員に入れるのかと不安になったりした。でも不安がってたって仕方がない。とりあえず面接を受けてからそのあとのことは考えようと思い，いざ面接。面接では福祉事務所でどんなことがしたいかを聞かれ，前もって調べてきた福祉事務所のことについてを織り交ぜながら自分の考えを話した。なんとか福祉事務所にきまりひと安心。これで行政が行っている福祉を学べる。

実習先が決まったら次はゼミ！... とは言ってみたもののどこにしようか悩む悩む。まじめに福

祉について学ぶし，なにより社会保障をより学べる田畑ゼミにしようか，それとも友達と一緒のゼミにしようかなんていろいろ考えた結果.... 崎原ゼミに決めた。理由は簡単，ソーシャルワーク演習で話を聞いてなんとなく，といったかんじ。決めたあとはあっという間に面接を受け，ゼミが決まった。崎原ゼミでは雑談をもとに話をひろげていく..... なんかそんなかんじのゼミ（笑)。

さてさて，３年生の夏休みは待ってなかったようで待ってたような社会福祉士の実習！！鹿児島市福祉事務所で実習させていただいた。鹿児島市福祉事務所は鹿児島市役所内にあり，支援課や保護課からなっており，生活保護や市民の福祉に関する相談を受けている。私は，さまざまな分野に施設で実習させていただきそこの利用者がなにを考え，何を想っているのか，施設職員の仕事にはどんなことがあるか，そしていまの福祉についてどう思っているのか知り，改めて福祉をしっかりと学ぶことができた。

４．終わりに―社会人としてどう生きるか

楽な仕事なんてない。仕事は人と人の関わり合いで成り立っていて，福祉は人とのつながりをとても大切にし，密接に人と関わることで大変なことはたくさんあると思う。だけどうれしいことだって同じくらいあってそれを見つけられるんじゃないかと実習で感じることができた。実習で学んだことは，‘社会人としてどう生きるか’だった。

入学してからいままで，入りたくて入学した学校ではなかったけれど特に嫌という気持ちもやめたいとも思わずここまできた。それも入学してからずっとつるんできた友達やサークルのおかげかなと思う。自分がこれまでしてきたことは必ずしも良かったことばかりではない。「あの時あぁしてればよかったなぁ」なんて思うことはよくある。でも‘過去’にやってきたことがあるからこそ‘今’の自分がある。大事のことはその今の自分を受け入れることなんじゃないかなぁと思う。

そう考えれば大学生になってみて，いろいろと勉強できたんだなぁとふりかえることができた。こんなことを書いてる今日は，多分平和な一日。きっと，明日も，平和でしょう。

エッセイ

ゼミは個性の集合体！！

３年　秦　明香音

はじめに－安達ゼミを選んだ動機

私は，「安達ゼミ」に所属しています。ゼミを選択する際，岡田先生のゼミとどちらにしようか迷いが生じた為，ゼミについての説明会や，先生方，先輩方のお話を参考にさせて頂くことにしました。その中で，安達先生は医療ソーシャルワーカー（MSW）の経歴がおありだということで，一般病院でのMSWを目指している者として，現場経験者の生の声を伺えることに魅力を感じました。そして，そこから医療全般に関する知識や，患者を中心としたソーシャルワークについて具体的にどのような形で行われているのかという部分にまで深く掘り下げて学びたいと思いました。加えて，飲み会やキャンプなど，イベントを開催して，仲間同士での親睦を深める機会が多くあることを知り，素敵だなと感じたので，このゼミに決めました。

ゼミの雰囲気から

今年度の安達ゼミは，男子学生２名，女子学生５名の計７名で，他のゼミよりも比較的少人数編成です。メンバーのほとんどが，医療分野の実習でしたが，児童分野や福祉事務所であった人もいます。少人数ですが，一人一人の個性が強く，明るい人が多いので，和気あいあいとしていて，非常に賑やかな雰囲気です。毎回の講義は世間話から始まります。誰か一人が話し出すと，そこから話題が展開してゆき，止まらなくなってしまうことがしばしばあります。

初めてのゼミは，まだお互いの名前を把握しきれていなかったので，名前の漢字当てゲームをしました。どのような漢字を書くのか，その名前にどのような意味が込められているのかを知ることで，メンバーのことを理解していくきっかけになりました。

システム論からみえてきたこと

ゼミの内容としては，前期は主に，人の心をブラックボックスに置き換えて，人は，外部環境からの影響をどのように取り入れ，処理しているのか，そこからいかにして他者との関係が成立しているのか，ということを深く追求して学びました。ソーシャルワークの原点となる人間関係の構築や，情報処理機能について理解することができました。後期は主に，システム論について学びました。先生が用意してくださった専用の冊子を手分けして分析し，自身が担当した箇所を資料にまとめ，プレゼンを行いました。初めて「ブラックボックス」や「システム論」という言葉を耳にしたときは，一体，ソーシャルワークと何の関係があるのか，見当もつきませんでした。

特に，システム論については，冊子を読んでいても，一度で内容を理解するのが難しく，多くの時間を費やしました。しかし，学んでいくうちに，我々が一つの生命体としてこの地球に存在することも，個々の属性が，ある集合体となり，集合体と集合体が合体し，より大きなまとまりとなることも，全てがシステムと呼べる現象なのであるということを知りました。言い換えると，我々は唯一無二の存在ではありますが，生まれたときから，家族であり，学校，会社，地域社会などありとあらゆるシステムという名の環境の中で共存しています。これらのシステムの調整を行い，人々が快適な生活を営めるようにサポートすることがソーシャルワークであるということなのだということを伝えているのだと思います。ソーシャルワークは，私が想像していたよりも，はるかにダイナミックな世界を対象として展開しているのだということに気付かされました。また，これらを学んでいくうちに，目には見えない人の心や他者との繋がりを図式化したり，定義や仮説の中に投じて考察したりしてみることに面白さを感じるようになりました。そして，学んだことを実生活の

中に取り入れてみることで，１つの事象に対して，広い視野から客観的な判断をつけることができるようになったような気がします。

先輩との交流会をはじめとしたイベント

その他の活動としても多くの体験をしています。春に先輩方に開いて頂いた交流会では，緊張しましたが，気さくな先輩方が多く，実習のことや，国家試験に関するアドバイス等を頂き，これからの大学生活をどのように過ごしていくか考え直す機会となりました。夏休みには，大河原橋にキャンプへ行き，川で遊んだり，花火やバーベキューをしたりして思いっきり楽しみました。日頃の大学生活では見受けられなかった皆の一面も知ることができ，教授と学生，学生同士の距離がより一層縮まりました。秋には，霧島に紅葉狩へ行き，霧島神宮や高千穂牧場へ行きました。皆，紅葉はそっちのけで，ヤギや牛と戯れたり，お昼ごはんに夢中だったりと，私たちらしさが発揮されたイベントでした。年末は，忘年会をし，たいして今年の反省をすることもなく，くだらない冗談を言い合いながら，ひたすらしゃぶしゃぶを食べました。このように，我々のゼミは，イベント好きな人が多いため，頻繁に活動しています。学生が主体となり，計画を立てるところから協力し合うので，思い出が増えるごとに仲間との絆が深まっていくのを感じています。

おわりに－私にとってゼミとは

ゼミは，通常の講義とは異なり，1つのテーマについて突き詰めて研究していきます。その為，ゼミの数だけテーマがあり，それぞれの雰囲気や特色を兼ね備えています。また，教授との距離が近いため，何気ない会話を通して，物事の考え方やアドバイスを頂くこともできます。加えて，小さな集団の中で活動していることで，一人一人を見つめる時間を持つことができます。そしてそこから人間関係が成立していくのを体験できるということは，社会福祉を学んでいる私達にとって，とても貴重で有意義なことであると思います。

４年のゼミは，ほとんど卒業論文についてになってくると思いますが，引き続き協力しあいながら，楽しんで活動できればと思います。

エッセイ

市役所行くから，準備して！

３年　松　永　拓　也

１．はじめに

夏休みに一カ月，高齢者分野の特別養護老人ホームで実習させていただいた。実習が始まる前は，上手く利用者とコミュニケーションが取れるか，また，どのような実習内容なのか心配だったが，実習初日に，予想外の試練にぶち当たった。

２．この本無いの？

実習初日にある職員に何か教科書を持ってきなさいといわれ，とりあえず次の日に，介護に関する教科書を持っていった。その職員が教科書を少し見た後，違うと言った。自分には何が違うのか分らなかった。その教科書がなぜ違うのか説明もなく，私は少しうろたえた。その後，教科書について職員が色々と話すのだが，私には言っている意味が分らなかった，ずっと話を聞いていると，少し分ってきた。だが職員の言っている教科書は無いという事に気づき，そのことを伝えるが，職員には分かってもらえなかった。その後，どのようにして，探してきたのか分らないが，一つの本のタイトルを紙に書いてみせてきた，この本は無いの？と強めの口調で聞いてきた。だが，その本も無いと伝えた。けれど，絶対あると言う職員。私は，これはまずいと思い他の職員に助けを求めるように周りを見渡した。

３．市役所行くから準備して

違う職員が「市役所に行くから，準備して」と話しかけてきた。人に話しかけられて，こんなに嬉しかった事がないくらい嬉しかった。私のＳＯＳに気付き声をかけてきたのだと感じた。しかも，ちゃんと理由をつけて連れ出してくれたので，私も楽にその場を離れることが出来た。そして，その職員が運転する車で一緒に市役所に向かった。しばらくしてから車中で職員が「さっきの事は気にしなくていいよ」と言って下さった。

その職員は私を一旦外に連れ出すことで，気分転換を含め色々と考える時間をくれたのだと思う。他にも「信頼関係というものは簡単に築けるものではない，いつも相手に対してまっすぐな気持ちを持って向き合うことが信頼へと繋がると信じている」とも言っていた。この職員と話すことで自分なりに気持ちの整理のようなものができ，くじけそうだったがもう少し頑張ってみようと考えることが出来た。

４．なぜこのような事が起きてしまったのか・・・・

「市役所に行くから，準備して」という一言がなければ，あの場面をどのように切り抜けたのだろうか？今考えても冷汗ものである。その後の実習も無事続けられたのだろうか？

なぜ，このような事が起きたのか考えてみた。世の中には自分と違った様々な価値観や考えの人がいるのは当然なので，その様々な考えの人たちに自分の考えを伝える事が大切になってくる，そのためには自分の伝えたいことがしっかり相手に伝わっているのか確認しながら話さなければならないと感じた。今回の場合，確認ができないまま話が進んだので自分と職員との間で話や考えのズレが大きくなってしまったのではないかと思った。

５．おわりに

講義でも相手の事を理解する事は大切だと学んではいたが，本１冊やそれに関わることでも，相手の意図を理解するのは改めて難しいものだと感じる事が出来た。相手と自分には必ず価値観や考え方の違いというものはあるので，相手のすべてを理解することは出来ないと思う。確かにいつも相手に対してまっすぐな気持ちで向き合い，相手の気持ちを考えた対応というものを心掛けることが大切である。しかし，ただひたすらに相手と向き合うだけではなく，切り替えを含めて息抜きも必要だし，時間もかかると思う。別の場所で別の人と，人の気持や価値観について考える事の必要性を感じさせられた実習だった。

エッセイ

日本年金機構での学外研修を通して

３年　前　迫　美　紀

１．はじめに

今回，私たち田畑ゼミは，学外研修として日本年金機構の鹿児島北年金事務所での研修をさせていただき，職員の方々から貴重なお話を伺うことができました。年金機構は，国（厚生労働大臣）から委任・委託を受け，公的年金制度の運営に関する業務を行っており，鹿児島県内には７ヶ所の年金機構が置かれています。私はこの学外研修を行うにあたり，年金制度についての多くの知識，年金機構の業務内容ついて学ぶという目的を持って参加しました。

２．公的年金の仕組み

公的年金の仕組みについての説明では，日本の公的年金制度は２階建て構造で，国内に居住する20歳以上60歳未満のすべての人が加入する国民年金（基礎年金）と，サラリーマンの方などが加入する厚生年金保険があることや，国民年金（基礎年金）には，平成22年度末で第１号被保険者（農業，自営業者，学生など）が1.938万人，第２号被保険者（サラリーマン，公務員など）が3.884万人，第３号被保険者（第２号被保険者に扶養されている配偶者の方）が1.005万人であることを知ることができました。そして，国民年金（基礎年金）のメリットとしては，老後を支える終身の年金であるだけでなく，事故や病気で障害が残った場合は障害基礎年金，死亡した場合は遺族基礎年金が支払われること，納めた保険料分の税負担が軽減されること，保険料の1.5倍以上の年金が支給されることなど，多くのメリットがあることが分かりました。また，国民皆年金制度の歴史については，昭和36年の国民皆保険体制のスタートから，現在までの流れを表で分かりやすく理解でき，歴史の背景には多くの変化があり，マクロ経済スライドの導入，国庫負担割合２分の１の実現など社会保障論の授業で学んだ内容も含まれていると感じることができました。

３．学生納付特例

次に，学生で本人の所得が一定額以下の場合，申請して承認されれば保険料の納付を後払いできる制度である学生納付特例についての説明では，私自身利用している制度でもあるため，興味深く話を聞くことができました。学生納付特例制度について，学生納付特例を受けた期間は，年金額には反映されないが，未納とは違い将来受ける年金の受給資格期間に算入されることや，申請は毎年行う必要があることなど初めて知った部分もあり勉強になりました。

４．年金受給者の事例から考えさせられたこと

事例として実際に年金を受給した方からの文章を拝見させていただきました。Ａさんの場合は，29歳の時に突然夫が亡くなり，当時妊娠中であったため働くことができなかったＡさんは，遺族年金をもらいながら生活をし，年金受給が支えとなったという内容でした。Ｂさんの場合は，就職をして厚生年金に加入したその３ヶ月後，下半身の障害を持つことになり車いすでの生活の中で，暮らしを支えたものが障害年金であり，就職するまで国民年金はろくに納めていなく，就職して会社の義務でもあるため厚生年金に加入し，年金受給により納付の大切さが身を持って感じられたという内容であり，どちらの文章にも年金に対する感謝や必要性が伝わってきました。

私自身このような文章を読むまでは，年金を納めることに対しての意識は低くい方でした。しかし，このような考えは自分勝手な考え方だったのではないかと見つめなおすことができたと思います。年金制度は，自分自身や家族，国民の支え合いのために大切な制度であると感じ，考え方が変わりました。また，若い世代の人たちの年金制度

に対しての正しい理解を深めることのできる機会を増やしていくことも必要だと考えることができました。

５．年金事務所の業務の様子

最後に正規職員の採用募集についての情報や，年金事務所の業務の様子を見学させていただきました。業務内容としては，年金記録の管理・提供業務，年金の相談，適用，給付等があり，それぞれ仕事を分担し，多くの情報を管理している様子をうかがうことができました。

６．おわりに

今回の北年金事務所での学外研修を通して，日頃の生活の中で，年金制度に関わる機会が少ないため，あまり意識していなかった年金制度について考える良い機会となり，短い時間ではありましたが，年金に対する意識を高め，より理解を深めることができたと感じます。実際に職員の方に年金についてお話を伺うことができたことは，とても貴重な体験であり大変勉強になりました。同時に，さまざまな専門的業務や作業を正確に行っていく上で，年金についての基本的制度内容だけでなく，福祉に関するさまざまな知識が必要であり，毎日の授業の大切さを改めて実感することができました。今回学んだことは将来にはもちろん，社会福祉士の国家試験問題の社会保障論の分野としても重要な部分であるため，試験に向けてもさらに視野を広げて，理解を深めていけるように努力していきたいです。

エッセイ

日本と韓国の歴史をもっと知り肌で感じた９泊10日

４年　加治佐悠衣

はじめに

私は，以前から海外に興味があり３年生の頃友達に誘われ，国際交流センターを通じて留学生の学生生活をサポートするチューターを始めた。日本と似ている様で違う生活や環境，その国の言葉などを教えてもらい，海外に行ってみたいと思う様になっていた。特に韓国はとても関心があった。高校の時初めて韓国語を学び文化に興味を持ち，儒教の教えや日本と韓国の歴史をもっと知り，肌で感じてみたいとずっと思っていた。そんな４年生の夏休み前に国際交流センター職員の深道さんから「これ，韓国に行けるみたいなんだけど，応募してみたらどうかな？」と財団法人日韓文化交流基金が主催（共催：日本国外務省，大韓民国外交通称部）する訪韓研修団大学生募集の用紙を頂き，応募自由記述文と自己 PR を記入して応募した。

全国からの大学生124名の応募があり，28名の大学生が選ばれた。鹿児島からは私１人の参加だった。有名な国立・私立大学，外語大学から選ばれた人が多く，11日間やっていけるのかとても不安だった。

2011年10月24日東京で事前研修会を受けてから，翌日の10月25日に羽田国際空港から KE2708 便に搭乗し金浦空港に到着した。

訪韓研修の概要

ソウルに６日間，済州島に２日間，釜山に１日の９泊10日の研修であった。研修内容は，ソウル市内見学，大学訪問，ホームステイ，板門店など軍事境界線周辺地域および地方見学であった。

ソウル３日目の外交通商部による日韓関係ブリーフィングでは，たくさんの質疑に答えていただいた。その中で「原爆を落とされた日本はアメリカ人を恨んでいないが，韓国人は日本に対する恨みを今でも持っているのか」との質問に「日本は加害者であり，被害者。韓国人は被害者のみという意識が今も残っている」という応答があった。確かに日本には戦争をし，植民地支配をしていたという加害者の立場とアメリカに原爆を落とされ，たくさんの人が命を落とし，今もなお後遺症で苦しんでいる人が大勢いるという被害者の立場がある。日本は，韓国との歴史について深く学習していない半面，韓国では深く学習している。歴史について互いに知る事は大事だが，そこではどのような歴史が語られているのだろうか。例えば教科書問題や竹島問題。デリケートな問題であるにも関わらず，そこは私達の領土だから私達が正しいと一方的又は感情的になって教育を行うと反日や反韓が生まれてしまうのではないだろうか。友好関係を築こうと努力しても過去の話をどのように取り出すかによっては，逆に溝を深めている様な気がする。そう考えると10年先，それ以上経っても友好関係は難しいと考える。

４日目はとても関心のある板門店[注1)]見学。板門店の周囲は南北両国の共同警備区域（JSA-Joint Security Area）となっており，韓国軍を中心とした国連軍と北朝鮮軍が境界線を隔てて顔を合わせている。目の前に北朝鮮があり，肉眼で境界線を見ることができた。北朝鮮の板門閣からは中国からの観光客が来ており，とても緊迫した雰囲気で少し緊張した。平和の家を出て，韓国兵士が運転するバスに乗り「帰らざる橋」と「ポプラ事件」があった場所に向かった。帰らざる橋では，４本の青い棒が立っておりその向こう側が北朝鮮だという。北朝鮮から逃れた自由主義者，北朝鮮の捕虜となった韓国軍兵士が北朝鮮に渡り二度と戻ることができないと言われる橋をどんな気持ちで渡ったのだろうか。

板門店を出て少し離れた所に「自由の橋」という所がある。自由の橋とは，1953年休戦協定が調停された後，韓国軍の戦争捕虜13,000余人が橋を

渡る時「自由万歳」と叫んだことから，「自由の橋」と呼び始めたそうだ。橋の所には「ここまで50年」「2000年１月１日」と文字が刻まれている。北朝鮮から韓国に戻るまで50年という長い間，どんな気持ちで過ごしていたのかと思うと歴史の重さを感じた。自由の橋の鉄条網には南北統一を願うリボンがフェンスいっぱいに付けられていた。韓国国民の半数が南北統一に賛成だそうだが日本は，経済や核ミサイル，拉致等などの問題があるのでどちらかというと反対だろう。また，南北統一は北朝鮮や韓国のみの問題だけではなく，諸外国の理解も必要になってくるだろう。帰りのバスでは北朝鮮亡命者の話を聞く事ができた。北朝鮮での環境や生活について，韓国に来て自由で文化的に進んでいることを知った事，北朝鮮に残る家族の心配などの話を聞かせてもらった。北朝鮮についてあまり知る機会がなかったのだが，少しだけ知る事ができてよかったと思う。

10日目の釜山外国語大学校では，食堂を利用して大学のご飯を食べたり，日本語を学んでいる学科の人達とグループで討論をしたり，大学内を案内してもらった。帰る時に韓国の学生から「ホテルに行くから一緒に遊ぼう」と誘ってくれた。こういった経験はなかったのでとても嬉しかった。

訪韓研修に参加して

私が一番影響を受けたのは人間関係である。韓国人全員ではないが，少なからず反日感情を持っている人はいると思う。韓国人は冷たく，日本人より親切ではないという先入観を持っていたが，この先入観を変化させてくれた。道に迷った時一緒に地図を見てくれたり，周りの人に聞いてくれたオンニ注2)。明洞から１人で帰る時タクシーがつかまるまで一緒に居てくれ，ホテルまでの道のりを運転手に説明してくれたガードマン。冷たいと思っていた人たちがとても温かく親切で，涙が出そうになった。

10日間日本を離れたことによって日本の生活の中で「当たり前」だと思っていたことが，そうではないということが分かった。例えばトイレに除菌ジェルが設置されていない，トイレットペーパーが流せない，歩行者優先ではない，水道水は飲めないなど当たり前と思っていた日本の生活がどんなに恵まれているのか身を持って体験できたと同時に，日本で生活できる事がすごく幸せなことだと改めて思った。

参加動機の「日本と韓国の歴史をもっと知り肌で感じる」をこの10日間で経験できたように思う。今後は，この研修から得られた知識を色んな人に伝えていきたい。この経験が自分の将来への考え，その他の事を何かに貢献できたらと考える。

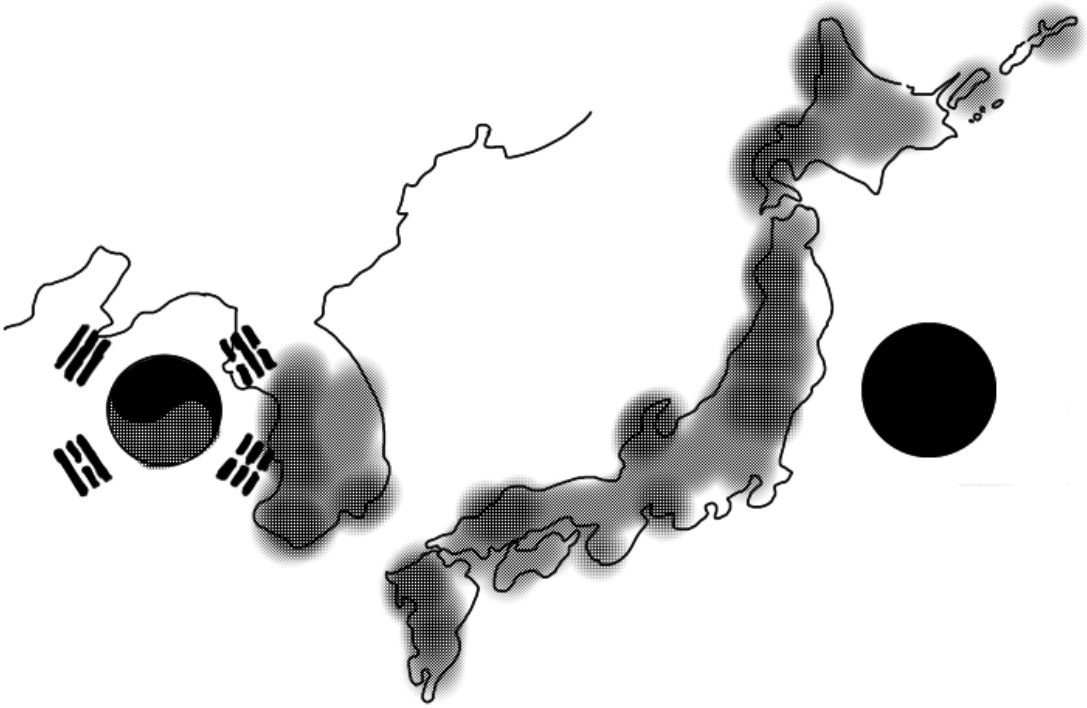
団員の中で韓国語はもちろん，英語や中国語を話せる人や留学経験や海外経験の話を聞いてとても刺激を受けた。自分の意見をきちんと持っており，積極的に質疑応答に参加し，団員内で意見を交換している姿を見て同じ学生なのに経験があるかないかで全く違うんだと，とても感心した。私の学生生活は終わってしまうが，これから様々なことに挑戦し自分を高め成長していきたいと思う。

この研修では韓国の文化を学ぶのはもちろん，衣食住，歴史などたくさん知ることができ，また，かけがえのない仲間と友人と経験を得ることができた。この素晴らしい貴重な体験をさせていただいた，財団法人日韓文化交流基金，日本国外務省，大韓民国外交通商部の皆さま，国際交流センター職員の深道さん，今村さん，国際文化学部４年の鶴田君，韓国・慶熙大学校からの交換留学生・宋知那（ソン・ジナ）さんのサポートに感謝いたします。ありがとうございました。

注１）板門店は，韓国と北朝鮮の間に位置する停戦のための軍事境界線上にある村の名前。ここで朝鮮戦争における北側の朝鮮人民軍と南側の「国連軍」の停戦条約が1953年に調印され，「中立国監視委員会」と「軍事停戦委員会」本会議場が設置され，停戦協定遵守の監視を行っている。「軍事停戦委員会」本会議場は板門店の中心にあり，韓国，北朝鮮双方から訪れた見学者が会場内で境界線を越えることは認められている。軍事停戦委員会本会議場の周辺には，韓国側に「自由の家」と「平和の家」が北朝鮮側に「板門閣」が設置され，各種会談や事務業務，休憩施設として使用されている。

注２）オンニは，女性が自分より年上の親しい女

性に対して「お姉さん」と呼ぶときに使う言葉。
実の姉に対しても，先輩，職場の同僚であり年
上の女性に対しても同じ「オンニ」と呼ぶ。



国家試験旅行 体験記

社会福祉学科4年 川路美紗

こんにちは。前回のゆうかりでもマンガを描かせていただいた者です。今回は、社会福祉士&精神保健福祉士の国試旅行の体験記を描かせていただこうと思います。

今回は、PCで描いています。

フリーソフト ArtPainter2 使用。

試験旅行とは、

医療福祉コースのメンバーが、社福と精神の国試を同時受験するため、福岡まで行くこと。

ビジネスホテルに2泊します。

なぜ、わざわざ福岡なの？

だって？それはね…

ダーン

鹿児島から

目取寄りの精神の試験会場が福岡だからさ

社福だけなら県内で受けれるんだよー

ちなみに準備するもの。

- 受験表（とっても大切）
- 着替え（パジャマも含む）
- 化粧品（コンビニで売ってるお泊りセットが便利）
- ワークブック・過去問・ノート 等
- 念のための薬類
- 自尊心
- おやつ（笑）
- お金
- 保険証
- 筆記用具
- 時計

など!!

リュックとキャリーバックでOKです

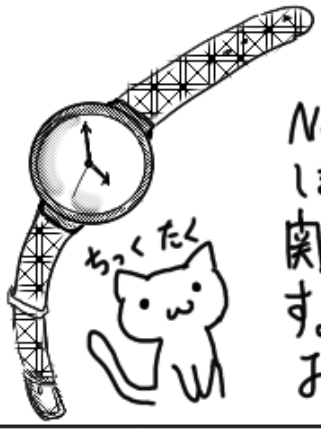
次のページでいくつか注意点をピックアップ→

受験票

命の次に大切です。
忘れたら試験が受けられません。

気い付けやー。

腕時計

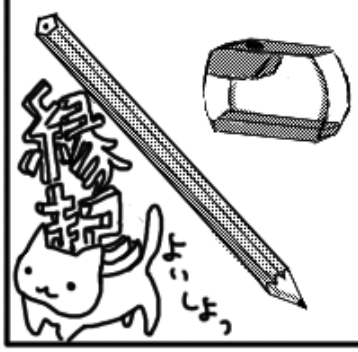


Not 置き時計。必ず腕にするタイプにしましょう。何故か、置き時計はサイズ等に関わらず、試験監督さんに注意されます。腕時計も、アナログタイプをおすすめします。

カイロ

女の子は特に持ってるといいです。
貼るタイプはお腹に貼りましょう。
試験中、お腹にさわるといい。
安心します。

五角鉛筆　&　鉛筆けずり



シャープペンシルもokですが、
縁起をかついでおきましょう。
あと、マークシートをぬりやすいです。

そしてやはり最大の準備は試験勉強!
…ですが、
・自殺対策
・ホームレス支援
・災害時の支援が何重要だ!!。
お
お
お
!!
と、私達はアドバイスを受け、そこを重点的に勉強。
ワーッ
Q.自殺率が高いのは男?女?
にゃ!!
男っ!!
A!
ホームレスの定義って何だっけ!?
誰か教えて!!
待って!!
ワークにのってたの見た!!
ハイッ
にゃー!!
災害時の対応、教科書にあったの読んだ!?
迎えた当日 1/28
ああっ
…そうか…
先生は、3つの大元にある地域支援が大切だとおっしゃっていたのか…。
そう私が気付いたのは、試験中のことだった。

ということがありながら、

無事に2間日の国試が終了しました。
試験中、あまりの問題の分からなさすぎて泣きたくなったり、「今何で自分は試験受けてるんだっけ?」と思ったりしました。
それでも終われば開放感でした。
まぁ、終わった次の日には自己採点とかいう苦業が待ってるわけですが…(笑)
ともかく、次に国試を受ける皆さん、持つべきものは友人、自尊心、平常心です。
さて、このためにならない体験記も最後となりました。最後くらいは役に立つことを書いておきます。
担当の先生方に、こまめに連絡しましょう。出発や到着などの報告は必要です。
それでは、グッドラック!! end.

2011年度演習論文テーマ

安達ゼミ

災害支援に対するソーシャルワーク実践　石　元　麻里子
世界の安楽死・尊厳死　西垂水　政　也
思春期の子どものメンタルヘルス問題と学校ソーシャルワーク　相　徳　未　来
統合失調症（精神分裂病）について―精神医学の歴史，精神分裂病の概念誕生まで―　大　脇　ちひろ
職場のメンタルヘルスと復職支援　東　知　里
依存症はなぜ起こるのか？　吉　満　咲　江

天羽ゼミ

児童養護施設に課せられた役割―ある事例と調査（アンケート）結果の分析をとおして　山　口　大　貴
堯一成のライフストーリー―自己のライフストーリーの記述をとおして現在の自己，そして今後の方向を探る―　堯　一　成
いじめ加害者・被害者の心理とその背景　森　園　菜々恵
ノーマライゼーションについて―互いに支え合うということ―　茶　園　香代子
生活習慣病（若年性糖尿病）について　幸　多　秀　憲
自殺について―自殺の具体的方法の研究をとおして自殺予防に繋げる―　上　村　淳　郎

岩崎ゼミ

お酒と健康について　境　光　政
自殺について　川　枝　和　生
認知症高齢者への回想法アプローチ―介護実習中の実践を通して　溝　口　修　平
難病（原発性免疫不全症候群）について―難病を取り巻く制度の現状と課題―　長　濱　啓　太

岡田ゼミ

生きづらさを感じる大人たち―自分と向き合う第一歩―アダルトチルドレンの視点から―　安留　綾乃・竹下恵理子
ホームレス―ホームレスの生活実態を知る―　太　夏　貴
学校におけるいじめの現状と課題　山　下　祥　子
ひきこもりについて　新　門　由　貴
神経性無食欲症と神経性大食症―症状の理解と回復に向けた支援―　磯　崎　紋　奈
死と向き合う患者について―よく生きることがよき死につながるのか―　前　山　由　佳
女性アルコール依存症と家族　川　原　香　織
うつ病とその支援　横　手　智　成

崎原ゼミ

聴導犬とは何か―聴導犬募金の行方から考える　幸　福　静　香
鹿実の柔道にはどうして寝技だけの練習があるのか　村　田　亮
私にとってのバスケットのセンターポジションとは　割　地　俊　至
三大生活習慣病と生活習慣病に関わる食の関係について　末　吉　紘　也
児童虐待は何故おこってしまうのか　川　添　沙津希
人とのつながりと歴史についての一考察―小説「トルコ狂乱」を基にして―　川　路　美　沙
教えられたこと―高校まで野球をしてしまったため―　瀬戸口　圭　佑
事例研究―施設に住む児童の学習面の改善―　前　田　大二朗

高木ゼミ

ダウン症の症状・障害と社会支援についての考察　前　野　友　希
不適切な養育環境に育った子どもたちに対する援助　大　迫　宏　貴
それでも，生きてゆく―社会的に排除されやすい人々の人生　大　山　桜　子
障害者自立支援法の制定・内容と今後の検討課題　中　村　勇　樹
福祉ボランティア活動（災害救済，犯罪・非行に関わ

る活動）の現状と考察　松尾隼人
認知症高齢者とのコミュニケーションについて　橋口謙龍
高齢者の人生と娯楽　松本恭介
ＤＶについて　山迫希
在宅生活におけるターミナルケアについて　馬場健久
障害者スポーツの歴史・発展過程の検討　秦江誠

高橋ゼミ

災害ボランティアについて　福山俊宏
音楽療法について　久野由紀子

田中（安）ゼミ

刑務所を出所した高齢者・障がい者への支援について　岩田正宏
高齢者虐待防止の一考察　西佑磨
ボランティアについての一考察　住田朋幸
脳の働きについての一考察　園田裕太
認知症における病態と理解についての一考察　久保英寛

田畑ゼミ

各国の医療保障制度―日本・ドイツ・イギリス―　井上知美
高齢者虐待―権利侵害と現状―　上野達宏
公的年金の仕組みと課題　迫田佳奈
現代的貧困と生活保護　衛藤和也
国民年金の給付内容と課題　分領春佳
貧困問題と生活保護制度―ホームレス・ワーキングプア・高齢者　山元延介
生活保護　中村愛
現代的貧困の諸相と生活保護　倉山紀彦
公的年金の給付水準と生活保護　山下愛理
生活保護とワーキングプア問題　千歳学
国民年金の空洞化と女性に対する年金問題　加治佐悠衣
介護保険制度の現状と課題　久留千佳
介護保険制度の仕組みと課題　安楽昭人
生活保護とDeprivation　加世田真理
私たちの生活を守る 医療保障　桑幡雅啓

蓑毛ゼミ

共生について―障がい者を取り巻く環境と我々の対策の一考察―　折田健
ダウン症の発達段階と一人ひとりに対する独自の支援方法　川畑あい
再決断療法より―幼児期の決断が及ぼす人生シナリオ―　坂本麗華
知的障害者の日による変化―自身の体験と専門的見地から考える専門職としての対処法の一考察―　弓場崇
「障害児学童保育」での事例研究―日常生活の支援を通して―　高木美里
施設と地域社会との連携と共生について―離島・徳之島の施設の取り組みから学ぶ―　南まゆみ
療育における視覚的手がかりの効果とは―TEACCH プログラムを使って　川添総一郎
利用者との関わり方　比嘉誠也
ダウン症を取り巻く環境と教育の考察　松山竜馬
聴覚障害児の幼児教育について　益満陽祐
解離性同一性障害になった人たち　福永千紘

社会福祉学会自主研究助成の募集

１．助成の目的

鹿児島国際大学社会福祉学会・学生会員の自主的な学習・研究活動の活性化を図る。

２．助成の対象

自主研究（ゼミを含む）や特色あるボランティア活動・実習活動報告等とする。

３．助成額

１件あたり５万円を上限として，総額30万円までとする。

４．申請受付期間

2011年６月１日(水)－７月１日(金)（2011年度の場合）

５．申請手続方法

・個人申請の場合……本人名で申請する。　　共同申請の場合……研究代表者名で申請する。
申請書に必要事項を記入のうえ，鱒淵研究室（５号館745研究室）に提出する。
予算内容も記入すること。
また，助成の対象は，研究活動に必要な文献の複写，資料の印刷，文具等の各種消耗品の購入および交通費等とする。(書籍および換金性の高いテレホンカード等は不可。)
交通費の支出は公共交通機関（１人あたり運賃と利用した人数を書いた明細でよい）に限り，ガソリン代は不可とする。(詳細については，自主研究助成担当教員・田中(顕）まで)
※申請者は，別紙申請書を提出後 masubuchi@soc.iuk.ac.jp まで，次の要領によりメールの送信をお願いします。(①件名・表題＝「2011年度自主研究助成申請の件で」・本文＝申請者の学籍番号・氏名および連絡先の電話番号)

６．採否の決定

申請順に申請内容を審査し，採否について随時，申請者に通知する。

７．活動成果発表

研究報告書と，年度末に発行する学会誌『ゆうかり』に掲載するための要旨を学会運営委員会に提出する。
(今年度は研究活動成果について，２～３月中に研究発表会を開催予定。開催日は後日通知。)
研究報告書　様式：Ａ４用紙にて作成。枚数・字数等，特に制限は設けないが，研究内容に関して可能な限り詳細な報告を記載すること。
要　　旨　様式：Ａ４用紙にて作成。研究報告書の要旨を3,000字～3,500字以内で作成。
※研究報告書および要旨ともにワープロ文書ファイルを必ず添付すること。

８．助成金の執行

採用通知を受けてから，立て替え払いをして領収書を保管しておき，指導教員の承認を得た上で，研究報告書および要旨とともに提出すること。

自主研究助成成果報告会・要項

鹿児島国際大学社会福祉学会

１．はじめに

昨今の社会情勢の分析を待たずとも，それぞれ厳しい条件の中，社会福祉学科に在籍し勉学やアルバイトに励みながら，自主研究に取り組んでいる皆さん，お疲れさま。

本学社会福祉学会では，会員の自主的な学習・研究活動の活性化を図るべく，自主研究（ゼミを含む）や特色あるボランティア活動・実習活動報告等を対象にして自主研究助成を行ってきました。成果の一部は，社会福祉学会機関紙「ゆうかり」に掲載し，公表してきました。

今回，成果の公表を通じてテーマの共有，さらにはそれを出発点として今後の課題や新たなテーマの検討を行う機会を設けた方がよいと考えました。具体的には自主研究助成成果報告会を行うことにしました。発表方法や形式において，様々な負担をかけることもあるかと思いますが，本学社会福祉学会活動の活性化によろしくご協力下さい。

２．開催日時と場所

2012年１月22日（土）　13時30分～14時30分　　510教室（2011年度の場合）

発表者は，13時30分までに所定の場所に，発表内容をまとめたポスターを掲示して下さい。当日は学会運営委員が会場に待機していますので，不明な点はお尋ね下さい。

３．発表方法

ポスター発表によります。４の要領で作成したポスターの前に1時間立ち，その内容を参加者とやりとりしながら，発表内容についての考え方を深めます。

具体的には，最初に一通りそれぞれのポスターについて発表者が簡単な紹介をしてから，一斉にそれぞれの持ち場で自由質疑応答に入ってもらいます。

口頭発表のような一方的な報告ではありません。参加者とのやりとりを通じて，他者と発表内容について話題をどのように共有したらよいか，さらには率直な意見を受けることが自分の気づかなかった視点から研究を見直す機会になり，今後の課題を検討する良い契機になります。

なお，共同研究の場合は，発表担当者をグループ内であらかじめ選出してください。ただし，発表担当者だけに一任するのではなく，グループ全員，報告会に出席し発表者のサポートをお願いします。

４．ポスターの作成要領

発表者は，提出したゆうかり掲載用の原稿をさらに分かりやすくまとめ，その内容を説明できるように準備するとよいです。

発表するためのポスター台紙として，横90㎝×縦120㎝の巻クラフト用紙1枚を配給しますので，その台紙に下記の⑴⑵を貼って下さい。

⑴　上から横80㎝×縦15㎝の幅のスペースに，タイトルと発表者氏名を別紙にワープロ印字して貼って下さい。タイトル文字サイズは80ポイント，発表者氏名（共同研究者がある場合は連名で）の文字サイズは48ポイントにして下さい。

⑵　その下に発表内容として，28ポイント以上の文字サイズでＡ４判用紙にワープロ印字したものを，例として，縦に４，５枚位つなげ，横に３列並べて貼ることができます。レイアウトはその並べ方に縛られるものではありません。図や表，箇条書きを→でつなぐなどの工夫が，発表内容に対する見直し

にもつながります。用紙はＡ４判以外でも構いませんが，なるべく台紙の横にははみ出さないようにして下さい。
レイアウトのイメージは，70－100㎝離れても，大まかな内容が見える位が目安です。

５．問合せ先

不明な点は，右記メールアドレスまで　　sakihide@soc.iuk.ac.jp

社会福祉学会誌『ゆうかり』への投稿のお願い

『ゆうかり』は，鹿児島国際大学福祉社会学部社会福祉学科並びに福祉社会学研究科に所属する学生と教員で構成される学内社会福祉学会の機関誌です。学生間，OB・OG を始めとする学科に関わった先輩達と学生間，学生と教員間の学問的および地域的交流を促進する企画を，誌面で展開したいと計画しています。具体的には以下の内容を予定しています（字数は応相談）。皆さんの執筆を通じた積極的な参加をお願いいたします。

合格体験記

社会福祉士，精神保健福祉士，介護福祉士の資格試験や教員採用試験合格体験記を募集します。内容は合格に向けた試験勉強スケジュール，工夫した方法，苦心談などを，後輩に向けてメッセージとしてまとめて下さい。

実習体験記

社会福祉士，精神保健福祉士，介護福祉士の実習や教育実習の体験記を募集します。実習報告書等を見るまでは見えてこない実習体験について，具体的な内容を，体験から得られた反省点や公開可能な裏話も含めて，後輩に向けてメッセージとしてまとめて下さい。

エッセイ・その他

上記のテーマ以外で，学生生活やサークル活動，そしてアルバイト等の体験やそれらを通じて考えさせられたことを書いたエッセイを募集します。また教員が推薦する授業関係のレポート等も募集します。

先輩達は，今・ここで

社会福祉学科に関わったことのある先輩達の学生時代，仕事の中で見つけてきたこと，そして現在についてなどを，後輩に向けてのメッセージとしてまとめて下さい。

（詳細は，投稿原稿担当教員・崎原 秀樹 <sakihide@soc.iuk.ac.jp>）

鹿児島国際大学社会福祉学会会則

［総　則］

第１条　本会は，鹿児島国際大学社会福祉学会と称し，本会の事務所を鹿児島国際大学福祉社会学部社会福祉学科に置く。

第２条　本会は，学術研究を推進し，会員相互の学問的交流を促進するとともに，地域社会の文化的発展に寄与することを目的とする。

第３条　本会は，前条の目的を達成するために次の事業を行う。
（ア）会報ならびに機関紙の編集・発行
（イ）研究会・講演会等の開催
（ウ）その他，本会の目的を達成するために必要と認められる事業

［組　織］

第４条　本会は，福祉社会学部社会福祉学科並びに大学院福祉社会学研究科に在籍する学生および両科の専任教員をもって会員とする。
２　準会員については，別に定める。

第５条　本会に次の機関を置く。
（１）会長
（２）総会
（３）運営委員会
（４）監査委員
２　会長は，社会福祉学科長とする。
３　運営委員（教員４名，学生８名以上）および監査委員（教員２名，学生２名）は，社会福祉学科で選出し，総会の承認を得るものとする。
４　前項の各位委員の任期は，教員については２年，学生委員については１年とする。
ただし，再任は妨げないものとする。

［機　関］

第６条　会長は，本会を代表する。
２　会長は，年１回の定期総会を招集しなければならない。
３　会長は，運営委員会の議決に基づいて臨時総会を招集することができる。

第７条　総会は，本会の最高議決機関である。

第８条　運営委員会は，総会の承認により，学会の運営にあたる。
２　運営委員会は，委員長（教員）と副委員長（学生）の各１名を互選する。
（１）運営委員長は，運営委員会を代表し，定期およびに臨時に運営委員会を招集する。
（２）運営委員会は，そのもとに必要に応じて委員会を置くことができる。

３　運営委員会は，教員委員および学生委員のそれぞれ過半数の出席をによって成立する。
４　運営委員会は，次の事項を審議決定しなければならない。
（１）年間事業計画
（２）予算案および決算書
（３）会則の改正ならびに諸規定承認・改廃
（４）その他必要な事項
５　運営委員会の議決は，出席した教員委員および学生委員のそれぞれの過半数の賛成で決する

［財　政］
第９条　教員会員の会費は，年額2,500円とし，年度初めに納入する。学生会員の会費は，年額2,500円とし，入学時に一括納入する。

第10条　本会の経費は，会費・補助金・寄付金でまかなう。
２　会計年度は，４月１日から翌年３月31日までとする。

第11条　会費の徴収，保管および支払いについては，大学事務局に委任するものとする。

第12条　運営委員会は，毎年会計年度終了後２ヶ月以内に決算を行い，監査委員の監査を受けたうえで総会に報告し，その承認を得なければならない。

［改廃手続］
第13条　本会則の改廃は，運営委員が発議し，総会の決議を経なければならない。

附　則
１．この会則は，昭和57年４月１日から施行する。
２．この会則は，平成13年７月27日に改正し，施行する。
３．この会則は，平成15年７月４日に改正し，施行する。
４．この会則は，平成18年４月１日に改正し，施行する。
５．この会則は，平成20年４月１日に改正し，施行する。

2010（平成22）年度鹿児島国際大学社会福祉学会・決算報告

収入の部

項　　目	予　　算	決　　算
前年度繰越金	6,402,337	6,402,337
会　費		
2010年度学部新入生分（@10,000）	1,110,000	1,130,000
2010年度大学院新入生分（@5,000 @7,500）	27,500	32,500
留年生分（学部・大学院 @2,500 @1,250）	15,000	32,500
２・３年次編入（@10,000 @5,000 @6,250）	15,000	15,000
転学科（@7,500）	0	7,500
復学生（@2,500 @1,250）	0	7,500
教員分（@2,500 @1,250）	50,000	50,000
収入小計		7,619,837
雑収入	0	0
普通預金利息	0	1,728
合　　計	7,619,837	7,679,065

支出の部

項　　目	予　　算	決　　算
会議費	100,000	33,017
事務費	30,000	0
通信費	10,000	77,225
交通費	10,000	0
コピー費	10,000	0
事業費	2,030,000	1,537,507
１）『ゆうかり』発行費	500,000	516,195
２）自主研究助成費	300,000	217,530
３）「演習論文要旨集」印刷費	300,000	264,600
４）講演会・シンポジウム開催費	450,000	116,420
５）新入生歓迎行事他	120,000	100,000
６）卒業パーティー費	360,000	212,520
予備費（入学辞退・編入・転学科学生等への一部返金）	50,000	0
支出小計		1,537,507
次年度繰越金		6,141,558
合　　計	2,240,000	7,679,065

編 集 後 記

卒業生の皆さん，ご卒業おめでとうございます。社会福祉学科を或いは福祉社会学研究科を巣立ち，それぞれの分野で，ご活躍されることをお祈りいたします。

さてご覧のように「ゆうかり第11号―社会福祉学科創設30周年記念シンポジウム特集号」は大変充実したものとなりました。原稿を寄せて下さった学生，大学院生，先輩の皆さん，自主研究助成に応募して研究された学生，大学院生の皆さんのおかげです。ありがとうございました。

社会福祉学科という疑似コミュニティを機能させる一端として，「ゆうかり」編集の方向から何かできないか，つまり同僚や学生と取り組めるソーシャルワークとは何か？が初志でした。連絡を取り，全員が集まれない状況で，本作りのアイデアを出し合い，内容と作業をある程度，共有する。具体的な作業を特定の個人に抱え込ませず，コミュニティの色んな人に分担してもらう難しさを痛感しています。生きる営みとやりとりすることばの間にある，奥歯に何かが挟まったようなズレに翻弄され，「ゆうかり」編集自体が自己中心的な利他主義に陥っていないか問い直しています。その中で編集にかかわった皆さんに一言ずつ頂き，編集後記としたいと思います。

色々な作品にふれることができて面白かったです（安楽暢）。頑張って寝ます（川路隆太）。先輩の手書き原稿をパソコン入力することで，その人の考え方などを知る，よい機会になりました（穂満美紀）。図書館の雑誌コーナーで泣かされました（松木田智美）。第10号に引き続き，挿絵とマンガを載せていただきました。すでに読んでいただいた方から「面白かったよ」との感想をいただいているので，嬉しい限りです。そしていつか国家試験を受ける方の役に少しでも立てたらと思います（川路美紗）。今年も参加できて嬉しく思います。ギリギリになってしまったので，来年こそは早く仕上げます（栄田麻衣子）。原稿を受けての撮影は楽しかったです。このような機会を与えてくださりありがとうございました！（中村知見）。携わらせていただきだして三回目となりました！今回は目の癒しをテーマに色彩に取り組んでみました♪絵で一休みしながら読んでいただけるとイイなと思います（*^□^*）（三樟（鳥丸）みなみ）。

学科に関わった者の Tight and Loose なつながりを，雑誌を通じて表現する裏方を７年間してきました。他者の振り返りと付き合う中で，出直す時と場所は選べない以上，思い立ったが吉日を繰り返すしかない。体の底から楽しかった時間をゆっくりと過ごせる人や仲間との関係が何よりの宝物。自分でやることはやり，率先して人にお願いし，任せていこう 。ことばからものを考えることを始めない，どぶねずみみたいに美しくなりたいと思います（SH）。

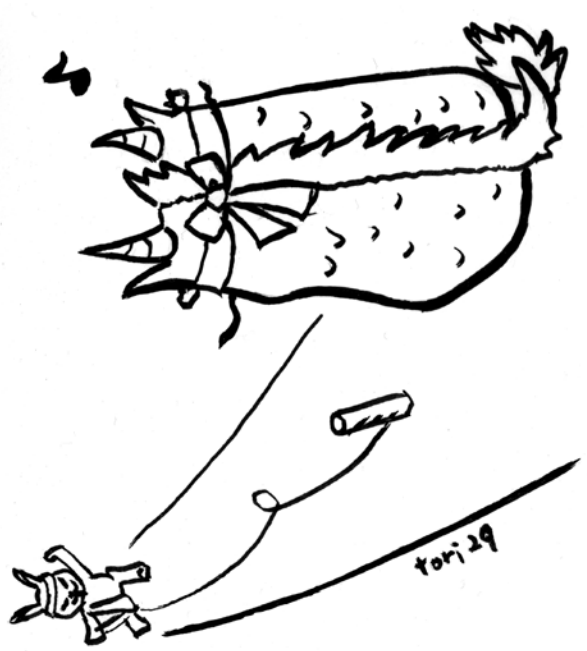
2011（平成23）年度 鹿児島国際大学社会福祉学会 運営委員

田畑　洋一　　鱒渕　祐一　　田中　顕悟　　崎原　秀樹

１年生　大坪綾佳　川路隆太　松木田智美　外西真由　岡元翔洋　堀之内亜弓　白石優維　葭岡優菜
田上知恵　山之口晴香　中釜美紀　永山愛　穂満美紀

３年生　蓑田彩紀　隈江静香　枝元翔平　坂下裕剛　中川恵利香　有馬未悠　西村美穂　西井紗織
二之宮有華　下園歩　内山勇吾　町屋敷優子　江口希望　八郷勇輝　大當剛史　麻生陽平
樋高未由　里山衣純

４年生　相星孝明　　大学院生　陳琨

鹿児島国際大学社会福祉学会誌
ゆうかり 第11号
発　行　2012年３月17日
編　集　鹿児島国際大学社会福祉学会
住　所　鹿児島市坂之上８－34－１
〒891-0197 ☎099(261)3211㈹
印　刷　斯文堂株式会社 ☎099(268)8211㈹

ゆうかり　第11号　　2012年３月17日鹿児島国際大学社会福祉学会編集